古代山城に関する研究会

築城技術と遺物から見た古代山城

―発表資料集―

2016 年 2 月 13, 14 日

熊本県教育委員会

古代山城に関する研究会の開催にあたって

熊本県教育委員会では、平成23年度に鞠智城跡の総合報告書『鞠智城跡Ⅱ』を刊行し、それを基礎として若手研究者を対象とする研究育成事業やシンポジウムの開催などで、鞠智城跡の調査・研究を進めてきました。これにより、鞠智城跡の調査・研究は飛躍的に進展し、その研究成果が多く蓄積されることとなりました。

これからさらに鞠智城跡の研究を深化させるためには、鞠智城跡と他の古代山城との比較・検討を継続して実施していくことで、新たな研究視点が見えてくるものと考えられます。

そのため、平成27年度から、古代山城の調査・研究に従事する研究者の方々と連携し、古代山城全体について検討する研究会を開催することとしました。今回は、古代山城を構成する重要な要素である城門、石塁・土塁、そして遺物から各城跡を比較研究します。そこから、何か新しい知見、今後の研究における課題が抽出できればと考えています。

この研究会が、今後の古代山城研究の進展に寄与するものになることを願っています。

平成28年2月13日

熊本県教育委員会

例　言

1．本書は、平成 28 年 2 月 13、14 日（土、日）にかけて、熊本県教育委員会が開催した古代山城に関する研究会「築城技術と遺物から見た古代山城」の発表資料集である。
2．本書の編集は、歴史公園鞠智城　温故創生館が行った。

目　次

古代山城の城門研究の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
山口裕平（行橋市教育委員会）

古代山城城門出土の軸摺金具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
小澤佳憲（九州歴史資料館）

石材・石積・石垣からみた古代山城の築造工程と選地論・・・・・・・・・・・・・47
平尾和久（糸島市教育委員会）

古代山城における土塁構造の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
渡邊芳貴（西条市教育委員会）

石積遺構から見た古代山城の築城技術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
南健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）

兵器の様相から見た古代山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
小嶋　篤（九州国立博物館）

瓦の様相から見た古代山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
中山　圭（天草市観光文化部）

土器の様相からみた古代山城・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
木村龍生（熊本県教育委員会）

古代山城に関する研究会開催プログラム

1．テーマ：「築城技術と遺物から見た古代山城」
2．日時：平成 28 年 2 月 13、14 日（土、日）
3．会場：熊本県民交流館パレア　パレアホール
　　熊本市中央区手取本町 8－9
4．主催：熊本県教育委員会
　後援：水城・大野城・基肄城築造１３５０年実行委員会
5．日程

《2 月 13 日（土）》

12:00　開場・受付開始
13:00　開会・挨拶・趣旨説明
13:10　第 1 部　城門の構築技術から見た古代山城
　「古代山城の城門研究の現状と課題」
　　山口裕平氏（行橋市教育委員会）
13:50　「古代山城城門出土の軸摺金具」
　　小澤佳憲氏（九州歴史資料館）
14:30　休憩（20 分）
14:50　第 2 部　石積・土塁の構築技術から見た古代山城
　「石材・石積・石垣からみた古代山城の築造工程と選地論」
　　平尾和久氏（糸島市教育委員会）
15:30　「古代山城における土塁構造の検討」
　　渡邊芳貴氏（西条市教育委員会）
16:10　「石積遺構から見た古代山城の築城技術」
　　南健太郎氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
16:50　事務連絡

《2 月 14 日（日）》

9:00　開場・受付開始
9:30　第 3 部　遺物から見た古代山城
　「兵器の様相から見た古代山城」
　　小嶋　篤氏（九州国立博物館）
10:10　「瓦の様相から見た古代山城」
　　中山　圭氏（天草市観光文化部）
10:50　「土器の様相からみた古代山城」
　　木村龍生氏（熊本県教育委員会）
11:30　昼食（90 分）
13:00　ディスカッション（110 分）
14:50　講評
15:00　閉会

古代山城の城門研究の現状と課題

山口裕平（行橋市教育委員会）

はじめに

わが国の古代山城研究は近年新しい展開を迎えている。それは古代山城遺跡の史跡指定や整備、災害復旧などに起因する発掘調査事例が増加し、その調査報告書も相次いで刊行され、古代山城を対象とした調査研究は右肩上がりに伸びているといえる。特に熊本県では県を挙げて鞠智城の特別史跡指定を目指した推進事業が各種行われており、本研究会を始めとして、東京や大阪でのシンポジウム、各種講座、若手研究者を対象とした「特別研究」、あるいは「フォトコンテスト」や「子どもスケッチ大会」など枚挙にいとまがない[註1]。福岡県大野城市や太宰府市、佐賀県基山町などで一昨年、昨年と盛大に催された「水城・大野城・基肄城 1350 年事業」でも、やはり同様に市民参加型の各種イベントが行われ、たくさんの人々が古代山城を媒介として多くの時間を共有した[註2]。また古代山城が所在する自治体間で組織された「古代山城サミット」でも古代山城をまちづくりに活用する方策などが議論され、筆者も業務で古代山城に係ることが多い中、集客力など古代山城がもつポテンシャルの高さは決して低いものではないと、つとに感じていたことである。

冒頭で述べたように古代山城を対象とした調査研究は増加傾向にあり、その論点も多岐にわたっている。その中でも本論では古代山城の城門遺構について、近年の研究の動向と課題について論じたい。

1．研究史

古代山城研究は明治期に起こった、いわゆる「神籠石論争」以来 100 年余りの研究蓄

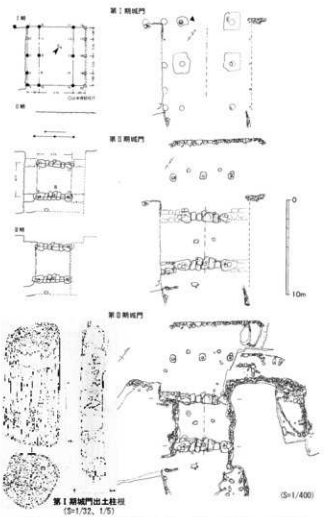
第１図　日本の古代山城の分布

積を持つが、本格的な発掘調査が行われる以前は、文献、遺跡の立地、残っていた遺構などからアプローチし、遺跡の性格付け（山城 or 神域）、分類や分布論、つくられた契機や時期などに言及したものが多数であった。1963 年のおつぼ山神籠石、石城山神籠石の発掘調査で、「神籠石論争」は決着し、1990 年代頃からは史跡指定や整備に伴う調査が徐々に増え、現在は個々の遺跡の様相も徐々に解明されつつある。

山城は広大な面積をもつことから、その範囲を確定させるため城壁ラインの調査は調査初期に及ぶことが多くあり、併せて城門も調査対象とされてきた。上述の発掘黎明期にもおつぼ山神籠石東門〔1963 年〕、同南門〔1963 年〕、石城山神籠石北門〔1963 年〕、同東門〔1964 年〕、帯隈山神籠石北門〔1964 年〕の調査が行われている（佐賀県教委 1965・1967、文化財保護委員会 1963・1964）。

本格的な研究の端緒となったのは葛原克人氏の研究である。1981 年、葛原氏は城門構造の変遷について「掘立柱建物→虎口状石積構造→軸受門礎→円柱座付門礎」という流れを想定した（葛原 1981）。その後、論を発展させ八段階の変遷案を提示した（葛原 1994）。しかしながら以上の変遷案はほとんど表面観察によって示されたものであり、発掘調査など考古学的成果から個々の遺構を吟味し検討したものではなかった。なお葛原氏は、2002 年に後述する鬼ノ城の調査成果を受け、尺度論からの検討も行っている（葛原 2002）。

665 年に築城記事がみられる大野城では、長沼賢海氏や鏡山猛氏らの調査により太宰府口、坂本口、水城口、宇美口の 4 箇所の城門が古くから知られていた（長沼 1931、鏡山 1968）。そのうち 1985 ～ 88 年にかけて行われた太宰府口城門の発掘調査では、城門建物の立替（掘立柱城門→礎石立城門）が明らかにされた（第 2 図）（福岡県教育委員会 1991、横田 1993 ほか）。同様の変遷は水城西門〔1994 ～ 99 年〕（九歴 2009）や金田城ビングシ門〔1993 年〕（美津島町教育委員会 2000）でも確認されている。なお太宰府口城門の調査では創建期の掘立柱城門の柱穴の 1 つよりコウヤマキ（高野槙）の柱根が出土しており、年輪年代測定から木材の伐採年代は「648 年＋α」という結果が示されている（奈文研 1990）。近年実施された X 線 CT スキャンを用いた再調査でも、「650 年」とほぼ同様の測定結果が出ている（赤司・光谷 2012）。



第 2 図　大野城太宰府口城門（杉原 2006）より作成

1991 年、向井一雄氏は朝鮮式山城と

神籠石系山城について外郭構造と選地形態を検討し、五類型の分類試案を示した。その中で城門についていくつか重要な点を指摘している。まず立地について、「水門部の横に設けられる場合と尾根の鞍部、突出部など外郭線上の地形変異部に設ける場合にわけらえる」とする。また唐居敷の検討から九州では円柱を、瀬戸内沿岸では角柱を使用するという地域性について言及した（向井 1991）。

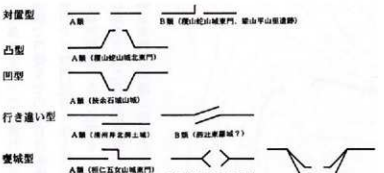
1993 年、成周鐸、車勇杰の両氏は、大野城など朝鮮式山城の城門は、５～６世紀の朝鮮古代山城の城門（三年山城西門、平壌城城門）の型式に基礎をおき、朝鮮の７世紀代の城門の変形（蛇山城東門）とともに日本でも一度変形した様式が流入したと考えた。日本の古代山城の原形は朝鮮半島にあるが、はじめて具体的に城門構造を比較し系譜関係を明らかにしようとした点は、その後の研究に示唆するところが大きい（成・車 1993）。

1999 年には向井氏が、古代山城に限らず、寺院や官衙遺跡の唐居敷（門礎）を集成（計 105 例）し、①軸摺穴、②方立、③刳り形・柱座、④蹴放の諸属性の検討からその変遷を検討した。石製唐居敷が古代山城で多くみられる理由として「扉部の防御、防火という側面もあるが、７世紀という建築技術における日本化が進展する直前の時代様式による」と考え、古代山城で石製唐居敷が確認されていない遺跡については木製唐居敷（礎板）を使用した可能性を示唆された（向井 1999）。向井氏はその後も古代山城全体の研究をリードし続け、城門遺構についても、城門とそれに付随する土塁や石塁などの防御施設を一体的に捉える、中世城館の調査でよく用いられる「縄張」の概念を古代山城研究に採り入れて研究を深化させている（向井 2001・2004・2009 など）。

先述したようにこの頃は史跡指定や整備に伴う調査が盛んになり始めた頃である。城門遺構の調査で特筆すべき事例は岡山県の鬼ノ城で東西南北の４箇所の城門が発掘調査〔1994 ～ 2001・06 年〕されたことで、そのすべてが唐居敷を添えた掘立柱城門で石敷きの門道が確認されている（総社市教委 2005・2006、村上 2010 など）。この他にも鞠智城深迫門〔1994・2006 ～ 08 年〕、同堀切門〔1998 ～ 2002 年〕、金田城二ノ城戸城門〔1999・2004 ～ 07 年〕、御所ヶ谷神籠石第二東門〔1998 ～ 2001・2013 年〕がある（熊本県教委 2012、対馬市教委 2011、美津島町教委 2003、行橋市教委 2006・2014 など）。

2002 年、亀田修一氏は朝鮮の古代山城の城門を、①城壁との関係、②門自体の構造、③位置の３つの視点で検討し、①に関して平面形を第３図に示すよう、対置型、凸型、凹型、行き違い型、甕城型の５つに分類した（亀田 2002）。

翌年、筆者は城門建物が掘立柱構造または礎石立構造かという点に着目し、八類型に分類し、その変遷案を提示した。ここで示した変遷案には、個々の類型の上限、下限を検討した上で、一定の暦年代を付与した点に意義があると考える（山口 2003）。



第３図　亀田修一氏による城門の平面形分類
（亀田 2002）より作成

大野城では 2003 年７月 19 日の豪雨災害の復旧工事

に伴う発掘調査が多数行われ、新たに観世音口、原口、北石垣、小石垣の4箇所の城門が発見された。このような状況の中、1806年（文化三）に大野城を描いた絵図「太宰府旧蹟全図北図」（太宰府市指定文化財）が再注目され、水城口や坂本口、小石垣城門などの位置に「門ノ石スエ」と記されていることが分かった[注3]。一方で、城門を確認していなかった北西側にも「クロカ子岩門ノ石スエ」の記述を確認し、現地の踏査で石製唐居敷を発見した。この城門は絵図や近世地誌類の記録から「クロガネ岩城門」と名付けられ、大野城の城門遺構は計9箇所が知られることとなった。個々の調査概要は後述するが、この一連の調査で最も特筆すべきなのは、小石垣城門で発見された石製唐居敷に門扉の鉄製軸摺金具が軸摺穴にはまった状態で出土したことである。軸摺金具は重さ約12.8kgで、理化学的分析より砂鉄由来と鉄鉱石由来の2種の鉄鉄を原料とする鋳造品で、国内で作られた可能性が指摘されている（九歴2008）。これについては後述する調査担当者である小澤佳憲氏の一連の研究（小澤2008など）があるほか、山田隆文氏がその構造を詳細に観察し、朝鮮半島や大陸の出土例との比較検討を行って研究を深化させている（山田2011）[注4]。

2006年、杉原敏之氏は大野城太宰府口城門の第Ⅰ期城門から出土したコウヤマキ材の柱根に「学石部」と刻書があることを指摘し、大野城築造に参画した部姓氏族と解釈した（図2）（杉原2006）。これに対して八木充氏は「部」を「都」（津）と読み、用材を積み出した海港を記したものと推測し、具体的には和歌山県有田郡湯浅町（古代の紀伊国安提郡温笠郷）にある浮石を比定地とした（八木2014）。先述のX線CTスキャンによる年輪年代は、平城宮出土のコウヤマキの暦年標準パターンを用いて示されたもので、この太宰府口城門出土のコウヤマキとパターンが一致することは平城宮建造に用いたものと同じ原産地で伐採された可能性が高いとする（赤司・光谷2012）。この赤司氏らの研究成果は八木氏の見解と近似するものといえよう。

2009年には第13回の古代官衙・集落研究会が「官衙と門」をテーマに行われた。この中で宮田浩之氏が西海道の官衙の門に言及する中で古代山城の城門にも触れている（宮田2010）。

2012年、稲田孝司氏は古代山城の総論を著した。論述する中で核としたのは鬼ノ城の一連の調査成果である。東西南北の4箇所の城門が構成する各属性を多角的に分析し、その類似や相違から「西門→南門→北門→東門」の順で営造されたことを示した。この検討等を軸とし、西日本古代山城の全体を俯瞰し、分類及び編年試案を提示した。この中でも「城門石製親柱例込唐居敷の由来」など城門研究にとって重要な視点にも言及する。そして古代山城が機能した7世紀後半の技術、軍事、政治について論述した（稲田2012）。

2014年には小澤佳憲氏が、「はじめに」で触れた熊本県主催の鞠智城の推進事業の1つである「特別研究」で、石製唐居敷について考察を行っている。氏は唐居敷の最も基本的な属性である軸摺穴の形状に着目し、主題となる鞠智城の石製唐居敷を詳細に観察し、その使用方法に言及する。また同様に他の古代山城や都城等出土の唐居敷も検討を行い、軸摺穴の形状に主眼を置いて唐居敷の類型化を行い、基本型式として「半円形の主柱例込と方立穴、平面円形の軸摺穴を持つタイプ」の「大野城Ⅰ型」と「主柱例込が半円形」で、「方立穴を伴い」、「軸摺穴が平面方形のタイプ」の「大野城Ⅱ型」を設定した。そしてⅠ型とⅡ型の関係を、「大野城Ⅰ型は、七世紀中葉に出現して七世紀第三四半期にかけて使用されるとともに、派生類型を多く生み出している。七世紀第四四半期の類例は見られな

いが八世紀初頭には主柱用加工が礎石建物に適合するよう改変されている。一方大野城Ⅱ型は、派生形式である太宰府口Ⅱ期例が築城時に採用されたⅠ期例の後続形式として採用されていることから、Ⅰ型に後出する形式である可能性がある」とし、時期差とみている。そして「八世紀初頭以降は急速に大野城Ⅱ型系統の唐居敷は使用されなくなり、大野城Ⅰ型の後継形式が様々に変化しながら用いられる」とした(小澤 2014a)。また小澤氏は同年、佐賀県基肄城の東北門に残る石製唐居敷の詳細な観察を行い、使用されていた軸受金具の構造について検討を行っている（小澤 2014b)。また近年は大野城の城門を中心に、上記の成果を理解しやすく簡潔にまとめている（小澤 2015)。

今世紀に入り、発掘調査された城門遺構については次章で述べたい。

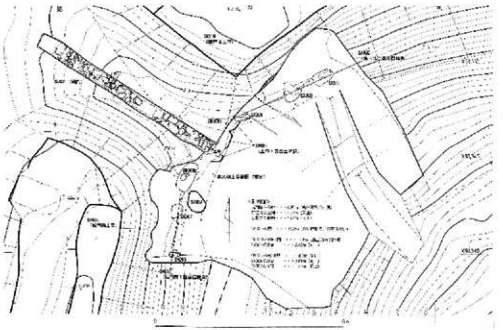
2．近年発掘調査された城門遺構

大野城では先述のように 2003 年の豪雨災害の復旧工事等に伴って新たに観世音口、原口、北石垣、小石垣、クロガネ岩の 5 箇所の城門が発見されるに至り、小石垣城門を除く 4 箇所の城門の発掘調査が行われている。

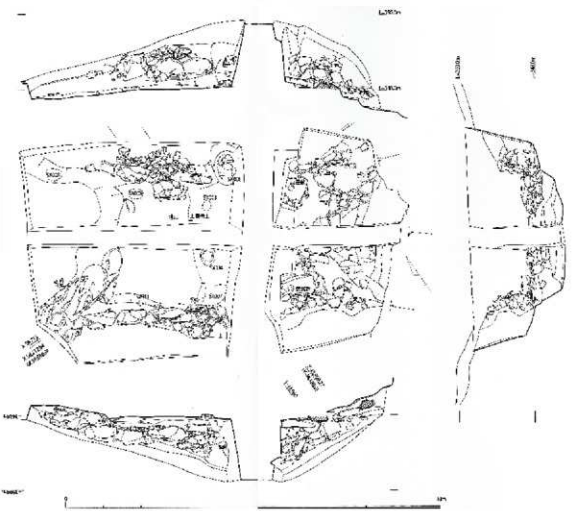
観世音口城門は南側の複郭土塁の外郭南側に位置する（第 4 図)。災害復旧に伴い太宰府市教育委員会が 2007 ～ 08 年にかけて調査を行った。調査は崩落部法面での土層断面観察、門道中央部に設定した長細いトレンチで行った。結果、城門は少なくとも二時期の差があることが分かった。新しい時期の城門（SB001 新）は石敷きの門道を持ち、壁面は石垣となる。城内から城門へと下る箇所に 10 段の石階段（比高差 1.4m）を設ける。門道部は石階段を含めて長さ 9.55m 以上、幅約 4.5m に復元できる。また崩落部法面の南壁に沿った位置で、直径 1.6m 前後の掘方を持つ柱穴を確認した。柱痕は径 30 ～ 40cm 程度である。古い時期の城門（SB001 古）は、城門築造の掘り込みを崩落部法面で土層確認したほか、新しい時期の城門の石敷下部より柱穴を確認し、芯々間は約 3.6m に復元できる。必要最小限の調査であったため、構造はやや不明確であるが、現状の地形より懸門であったと想定される（太宰府市教委 2015、福岡県教委 2010)。

原口城門は城壁ラインの南東部に位置する（第 4 図)。災害復旧に伴い太宰府市教育委員会が 2004 ～ 05 年にかけて調査を行った。その結果、掘立柱城門から瓦葺きの礎石立城門への立替えが明らかになった。現状で切り通しの幅は約 3.3m で、これが新しい時期の城門の門道幅となる。大野城の他の城門と比べ最も小型である。壁面は比較的簡易な石積み（長さ約 8.0m、高さ 1.15m）をし、その石積みに接して一対の縁に円弧をもつ石製唐居敷を城門建物の礎石として用いている。この唐居敷には鉄錆痕を残す軸摺穴があり、芯々間は 2.7m を測る。埋土中に縄目瓦片を含むため城門建物は瓦葺きであったと考えられる。また門道部には部分的に石敷きが残っていた。古い時期の城門は主柱穴 1 対を検出した。南側の柱穴には直上に石積みが乗っているため検出のみに留まったが、芯々間で約 3.6m を測り、新しい時期の城門より門道幅はわずかに広くなる。主柱穴には先述の石製唐居敷を伴うものと考えられる。城外側はやや急峻な斜面となっており、懸門構造であったであろう。なお「太宰府旧蹟全図北図」には原口城門の位置に「大人足形」と記されており、大きく窪んだ地形が江戸時代後期にも見られたことが推測される（太宰府市教委 2015、福岡県教委 2010)。

北石垣城門は北側の複郭土塁の内郭中央に位置する（第 5 図)。「北石垣」として 2 箇所

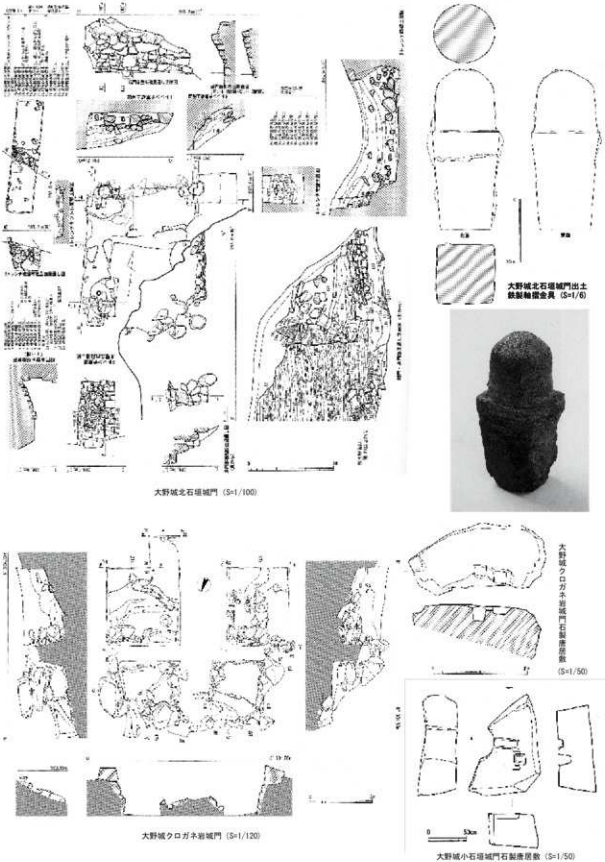


大野城観世音口城門（S=1/200）



大野城原口城門（S=1/200）

第４図　大野城観世音口城門・原口城門
（太宰府市教委 2015）より作成



第５図　大野城北石垣城門・クロガネ岩城門・小石垣城門　（九歴 2008・2014、福岡県教委 2010）より作成

の石垣が知られていたが、城門はその石垣の東側約 50m にある。災害復旧に伴い九州歴史資料館が 2006 年に発掘調査を行った。調査前は土塁上の平坦面に凹みがあり、そこに石垣のような構造物が認められたため、トレンチ調査を行った結果、城門の側壁の石積み（高さ約 1.5m）であることが分かり、最下面より原位置を留めた石製唐居敷を検出した。唐居敷には円形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴をもつ。前章の研究史でもすでに触れたが、南側の石製唐居敷の軸摺穴では門扉の鉄製軸摺金具がはまった状態で出土した。門道幅は約 4.7m で、主柱穴は径約 50cm、芯々間で約 4.1m を測る。軸摺穴の芯々間は約 3.1m である。登城路と門道との間には高さ約 1.4m の石垣が築かれており、明確な懸門構造といえる。なお前面石垣の脇から一対の柱痕を検出している。芯々間は約 4.7m で主柱の芯々間と約 0.6m の開きがあるが、城門建物の前面柱穴と想定されている。なお出土遺物は鉄製軸摺金具のほかに、扉に使用されたと考えられる鋲留金具や瓦の小片がわずかにある（九歴 2008、福岡県教委 2010）。

クロガネ岩城門は外郭線の北西部に位置する（第 5 図）。前述のように「太宰府旧蹟全図北図」に基づく踏査により 2011 年に発見され、2012 ～ 13 年に九州歴史資料館が調査を行った。トレンチ調査の結果、門道は崩落によって前面が流出するが、長さ約 4 m を残すことが分かった。左右壁面は石積みで現状高約 1.5m を測る。門道幅は約 4.2m である。床面は石敷きと考えられている。後述の唐居敷の原位置など城門建物の痕跡は検出できなかった。城門発見の契機となった石製唐居敷は東側のもので、6 m 程下方にずり落ちている。主柱が沿う面を欠くためその形状は分からないが、方立穴、軸摺穴を加工してある。軸摺穴には鉄錆が付着する。城門の構造は現状の高低差を考えると懸門構造であったと推定される。特筆すべき遺物に百済系単弁軒丸瓦がある。主城原地区や八ツ波地区から出土例と同笵（020A 型式）で、城門の築造が 7 世紀後半代に遡るものと考えられる。廃絶時期は出土した土器より 9 ～ 10 世紀にかかる頃と推定される（赤司 2012、小澤 2010、九歴 2014a、下原 2014）。

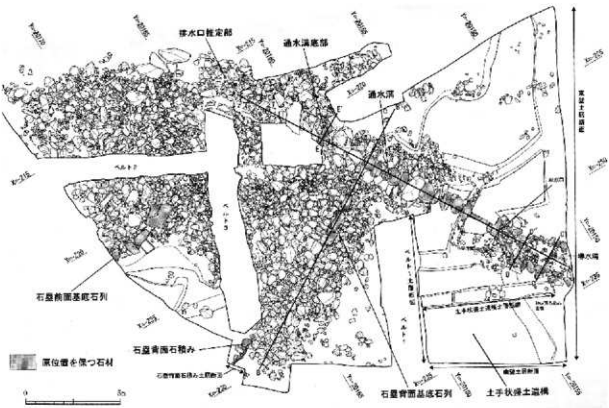
小石垣城門は北側の複郭土塁の内郭東寄りにある。「太宰府旧蹟全図北図」に「門ノ石スエ」と記述があることから城門の存在が想定されていたが、2007 年に石製唐居敷が発見され周知されるに至った。石製唐居敷（第 5 図）には円形刳り込み（主柱の復元径は約 45cm）があり、方立穴、軸摺穴をもつ。現在まで考古学的発掘調査は行われていない。開口部の幅は約 8 m で、現況を窺う限り渓流の氾濫で門道部分はほぼ完全に失われてしまった可能性が高い。水量から比較的大規模な石組み暗渠構造の水門を付随していたものと想定できる（福岡県教委 2010）。

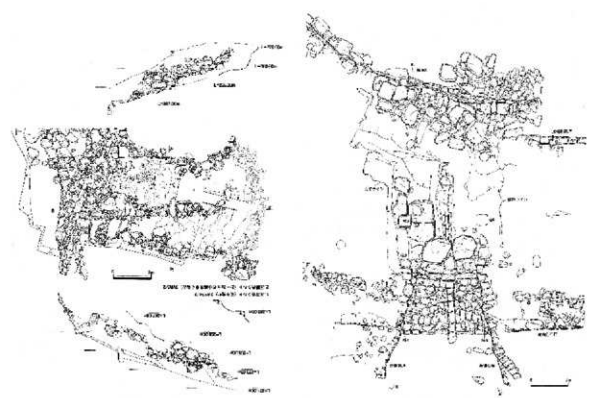
第 6 図　金田城南門
（対馬市教委 2008）より作成

対馬の金田城では以前より城門遺構とされる「城戸」と呼ばれる切通しが3ヶ所知られており、1993年より始まった史跡整備に伴う発掘調査で新たにビングシ門が発見されるなど遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある（東亜考古学会 1953、美津島町教委 2000など）。2003年には新たに外郭線南側の近世絵図に「カラメテ」の記述がある地点で礎石立城門が発見され、発掘調査が行われた。「南門」と名付けられたこの遺構の残りは良好で、検出された8つの門礎石はすべて原位置を保っている（第6図）。城門建物は間口1間、奥行3間で、城外側から2つ目の一対の門礎石に扉の軸摺穴を穿つ。軸摺穴には水抜きの溝が加工されている。主柱の芯々間は約3.2mで、軸摺穴の芯々間は約2.4mである。奥行きは手前の1間が約2.0m、奥の2間は約1.75mずつを測る。側壁は石積みで、残りの良い箇所は約2.1mである。床面はすべて石敷きで、前面には西側壁に沿って最大幅0.9mの階段が残っている。特質すべきことは城門建物の部分も門道が階段状に築かれていることである。したがって、城門建物の屋根が水平になることを考えると、門柱の長さはそれぞれ異なっていたと推測される。また調査では堰板と考えられる炭化材を検出している。樹種はクスノキで、放射性炭素年代測定で「650年（交点）」という測定値を得ている。なお石敷きの下は未調査で礎石立城門に先行する建物があったかどうかは分かっていない。（対馬市 2008）。

鞠智城でも史跡整備に伴い深迫門、堀切門が発掘調査され、近年は1968年の第1次調査で礎石が発見された池ノ尾門が広く面的に調査されている〔1968・2004～06・2010～11年〕。池ノ尾門は鞠智城の南西域、北西方向に開く浅い谷に位置する（第7図）。西側土塁線と南側土塁線に挟まれた幅20mの狭い谷で、城内の最低所（標高90m）にあたる。調査前は谷部が完全に開けており、谷部に設けられたであろう城壁と城門の位置は判然としなかったが、谷部に設定した調査区で崩壊した石塁を検出した。後世の開削や事前崩落によりそのほとんどは崩壊した状況にあるが、一部は基底石が残存し、背面の南西側では4～6段分の石積みを検出した。基底石より石塁幅は約9.6mと推定されている。総延長も現状の地形から約12mはあったと考えられる。石塁のやや東寄りでは石塁に直交する暗渠式の通水溝及び取水口を検出した。全長は16mと推定される。その手前では導水溝を約4.3m分確認し、その延長は未調査区へと続く。城門は現在の市道や塩井川にあったと考えられるが、その痕跡は確認できていない（熊本県教委 2012、向井 2014）。

屋嶋城では屋島北嶺と南嶺の間にある浦生石塁が唯一の遺構であり、山頂部は天然の要害として城壁は築かれなかったと考えられていたが、1998年に屋島南嶺の南西側斜面で石塁が新発見された（平岡 1999）。その北端部に幅4mの落ち込みがあり、2001～02年に発掘調査を行った結果、新たに城門遺構が発見された（第7図）。門道の幅は約5.4mで奥行は約8.0mになる。床面は石敷きで階段状になる。後述の排水溝の状況から城外側の石敷きは流出したと考えられる。両側壁の石積みは緩みや崩落が著しいが、1.2～1.6mの高さで残存する。門道の中央部には排水溝があり、床面に合わせ3段に段差をつけて造られている。全長7.0m前後、幅約0.5mで、底石はなく板石を立てて側壁とする。一部に蓋石が残存するため、本来は暗渠式であったと考えられる。排水口は検出したが、集水桝を含む取水口は残っていなかった。城門建物は南側壁に沿って一辺50cmの隅丸方形を呈す柱穴を2基検出した。対応する北壁側でも近年の整備に伴う発掘調査で確認されている(註5)。以上より掘立柱城門であったと考えられるが、城外側の床面が流出しており、そ





第７図　鞠智城池ノ尾門、屋嶋城城門、鬼ノ城北門
（熊本県教委 2012・高松市教委 2008・総社市 2008）より作成

の規模や上屋構造は明確でない。城門の前面は崩落するが、南側では基底部から約 1.2m 垂直に積み上げられた石積みを確認した。復元高は 2 m以上ある。発掘調査事例としては国内初の明確な懸門構造の確認となった。また奥は擂り擂鉢状に岩盤がせり立ち、その上部に列石を用いた土塁を築く内褒城の構造を採り、城門防御を堅固にする（高松市教委 2003・2008、高松市歴史資料館 2013、山元 2009）。

御所ヶ谷神籠石では 1993 年から現在に至るまで、史跡の追加指定や整備を目的とした発掘調査が継続的に行われている。突出する暗渠式の水門を備えた中門は日本の古代山城を代表する遺構として大変著名であるが、この他に東門、第二東門、西門、第二西門、南門、第二南門の 6 箇所の城門遺構が知られている（山口 2006）。2013 年には継続して発掘調査を行っていた第二東門をほぼ完掘したが、以前の調査でも明確でなかった城門建物の痕跡は確認できなかった。以前の調査で 7 世紀第 3 四半期の所産と考えられる須恵器長頸壺が出土していたが、新たに 7 世紀前後の土師器や須恵器の小片が出土している。この他に 2011 ～ 12 年に西門の石塁背面に沿ってトレンチ調査を行っている（行橋市教委 2014）。

鬼ノ城は 1994 年の東門を皮切りに東西南北の 4 箇所の城門が調査されているが、北門は 2001 年にほぼ全面の発掘調査をし、2006 年に整備に伴う補足調査を行った。北門は城壁線の北部、城内 2 番目の標高（374m）をもつ峰の南斜面裾（第 91･92 塁状区間）に位置する（第 7 図）。正面には深い谷が面しており、背後の谷筋を下っていけば第 4 水門にたどり着く。門道は幅 4.0m、奥行約 9.65 mで、一部、扉部の唐居敷が動き床面の敷石を欠くが、 1 間× 3 間の掘立柱城門を検出した。特異なのは石製唐居敷を据える主柱は角柱を用い、残り 3 対 6 本の控柱は円柱であることで、城外より控柱 1 対、主柱 1 対、控柱 1 対、控柱 1 対の配置をとる。唐居敷には一辺 50 ～ 55cm の方形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴、蹴放をもつ。控柱は径 30 ～ 40cm の円柱である。主柱の芯々間は約 4.0m で、軸摺穴の芯々間は約 2.95m と推定される。扉は内開きである。床面の石敷きで、手前の 2 間分は大型の花崗岩を敷くが、奥の 1 間分は小型のアプライトを敷石とする。門道部中央には延長 11m 余りを測る一部暗渠式の排水溝が付設されている。側壁は現状では版築土塁だが、板塀の痕跡を確認している。城内側の控柱から奥は石垣となる。多くの石材が転落していたが、南北石垣ともに高さ 1.9m 程を残す。門道は城外側とは約 1.7 ～ 2.3m の段差があり、懸門構造であったと考えられる。またその外側斜面にも 3 段 3 列の石垣を築いており、北門は城の背面にあるにも関わらず、他の城門と比較しても堅固な構造であることが明らかになった（総社市教委 2005・2008）。

愛媛県の永納山城も 2002 年から史跡指定を目指した発掘調査が開始され、2005 年に国史跡に指定された。指定後の 2006 ～ 08 年にかけて行った調査では 3 箇所の城門推定地を発掘したが、いずれも確認には至らなかった。一方、外郭線北側の現在 JR 予讃線が通過する谷部の水門推定地の調査では、谷に並行する列石とそれを据えるための造成土、そこに掘り込まれた柱穴を確認し、遺構の位置関係や他の古代山城の例から、水門に付随する城門の痕跡である可能性が高いと報告がなされている（西条市教委 2009）。

3．整備された城門遺構

古代山城の城門遺構の整備で先駆的事例として大野城太宰府口城門を挙げられる。研究史でも触れたように、1985 ～ 88 年の発掘調査で城門建物の立替（掘立柱城門→礎石立

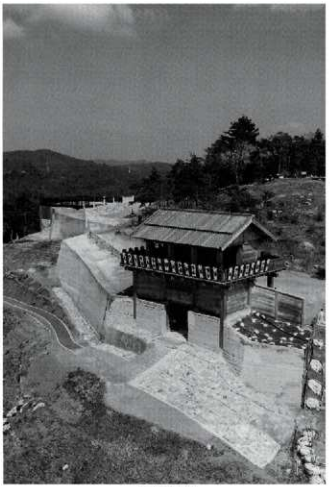
城門）が明らかにされ、1994～98年にかけて行った環境整備により、第Ⅲ期の状態に復された（城門建物は未復元）（福岡県教委2006）。なお2003年の豪雨で東側の石垣が崩落したが、再整備が行われ現在は復旧している（福岡県教委2010）。

城門の整備が最も進んでいるのは岡山県の鬼ノ城である。同じく研究史で触れたが、東西南北の4箇所の城門の主要部分が1994～2001年にかけて発掘調査され、そのすべてで石敷きの門道をもつ掘立柱城門が確認されている。史跡整備は2000年からの10箇年を第Ⅰ期の環境整備事業とし、角楼から西門、高石垣を経て、第0水門に至る約140mの区間を「遺構復元地区」に指定し、重点的に復元整備を行った。その結果、西門の整備では城門建物も復元されるに至った（第8図）。現在、麓からもその威容を望むことができ、鬼ノ城のランドマークの役割を果たしている。以下では西門の整備状況について詳しく触れたい。

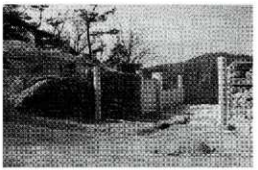
西門は1996年と98年の2次にわたり発掘調査が行われた。鬼城山山頂（標高397m）より南西方向に60m程緩く下った地点にあたり、尾根が小さく南へ張り出した地形に選地する。城門建物は3間×4間の八脚門で、間口12.3m、奥行8.25mを測る。掘立柱構造ですべて角柱を用いる。門道は真ん中の1間分（幅4.1m）で、外側の6本の柱は版築土塁中に埋め込まれる。門道は石敷きで奥行は約7.0mあり、その中間に石製唐居敷が据えられる。唐居敷には一辺60cmの方形刳り込みがあり、方立穴、軸摺穴、蹴放をもつ。主柱の芯々間は約4.1mで、軸摺穴の芯々間は約3.0mを測る。門扉は内開きである。それより奥は城内と約1mの高低差があるため、奥行4.5m、4段の上り階段が築かれている。両側壁は現状では版築土塁であるが、板塀であったと考えられる。城内側の控柱から粗い石積みの壁面に変わり、そのまま内側列石に接続する。門道は城外側へは緩やかにスロープで下っており、他の城門が懸門構造を採るのに対し異なっている。また階段を上り城内へ入ったところで3m間隔の4本の柱穴列を検出しており、目隠し塀と解釈されている。なお調査所見より、城門建物の建て替えは無いと考えられる。出土遺物は土師器や須恵器があり、時代は7世紀末から8世紀初頭のものが中心である（総社市教委1997・1998・1999）。

さて西門の発掘調査の概略を述べたが、調査後は遺構の保護処置をした後に仮設の門柱を建て、門道の側壁には板塀を設置するなど城門の規模が視覚的に理解しやすいように仮整備を行っていた。2003年には復元整備に伴う詰めの調査として、城門建物の復元に伴い計12本の門柱を新規に立てる必要があったため各柱痕を完掘した。最も柱痕の残存が良好な柱では、柱の埋め代が深さ3.7～4.0mを測り地山に達していた。また西門の築造を示す大きな掘方を面的に検出した。掘方は上面幅20.5m、底部幅16.0mで、高さは北側で2.7～3.2mを測る。土層の切り合い関係から、版築土塁が先行して築かれ、城門の建築工事が本格化したことが判明した（総社市教委2005）。

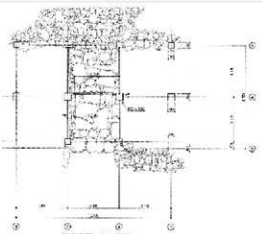
城門建物の復元にあたっては、もちろん上述の発掘成果に基づいて行われることになるが、2002年度に策定された「環境整備基本計画」では西門は上屋を含めた実物大復元を行うことが示された。城門建物については、すでに調査時点で払田柵の整備事例等を参考に1/50の立体模型を完成させていたが、1999年に建築を専門とする瀧島正士氏が整備委員会に加わることでより具体的な復元案が示された。その内容は以下の4点に集約される。



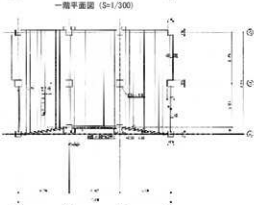
復元された西門



復元された北門



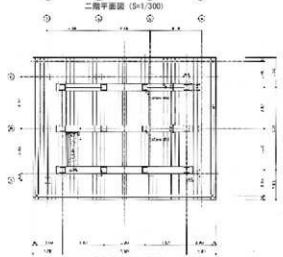
一階平面図（S=1/300）



二階平面図（S=1/300）

正面図（S=1/300）

側面図（S=1/300）



三階平面図（S=1/300）

第８図　鬼ノ城西門・北門の整備状況（総社市教委 2011）より作成

・大きな城壁に構えられた門で、左右の城壁上を繋ぐ機能もあったと考えられることから、重層構造の二重門、楼門、櫓門の形式が想定される。このうち櫓門は近世の遺例しかなく、二重門では一階部分の屋根の収まりが悪いため、楼門とするのが妥当である。
・大規模で、正門と推定されるため屋根は当然あったと考えられる。瓦がないため板葺であるが、防火面を考慮すると厚板の縦板葺が想定される。屋根の形式は厚板でも納まりに無理がない切妻造が妥当である。
・山城の門は堅固な建築であり、都城の門とは異なり組物などは用いない形式であったと考えられる。柱が方柱であることはその傍証となる。
・日本の重層建築は、遺例をみる限り柱を管柱とした積み重ね式が一般的である。しかし、柱の根入れの深さより、一階の柱を管柱にすることはできない。一方、二階までの通し柱では、一階部分は構造上問題ないが、二階両脇間装置の納まりなど、構造上無理がある。

この復元案を叩き台にし、整備委員会で協議を重ねた結果、以下の結論を得た。

・柱が太く、根入れが2m以上あることから三層構造の楼門とする。
・一階は出入口、二階は城壁上の連絡口、三階は見張り及び攻撃の場である。
・屋根は厚板の縦板葺きで切妻造の形式を採る。
・一、二階は通し柱、三階は管柱とする。
・二階は吹き放し、三階は回廊を付け高欄をめぐらし全面吹き放しとする。

協議での最大の争点は屋根の有無であった。これについては最後まで確証の無いままであったが、管理上の問題もあり、屋根をもつ城門建物を復元することとなった。ただ、これまでの協議の経緯もあることから、ガイダンス施設では両案の城門模型を展示している。なお三階には盾を設置する。鬼ノ城での出土例は無いが、山城という防御施設であることを考えると、盾の設置は当然想定できることである。復元に当たっては平城京出土の「隼人の盾」を参考とし、アレンジを加え3種作製した。盾は本来的には高欄の内側に置くべきものだが、折角の文様が隠れてしまうので、意図的に外側に設置した。復元工事は2003年3月から着手し、11月に竣工した（総社市教委 2011、濵島 2011）。

この他、鬼ノ城では「環境整備基本計画」の中で東門、南門、北門は「遺構表示地区」に設定され、遺跡の保全と活用を図りながら、豊かな自然の中で歴史を身近に感じ学べる空間として、城門遺構の状態を最大限に活かした整備の指針が示されている。第Ⅰ期事業として2010年までに整備を終えている北門を例に採ると、2003年の調査後に仮整備を行い、2006年に表示整備を行った（第8図）。主な整備内容は次の通りである（総社市教委 2011）。

・動いていた石製唐居敷を原位置に戻し、欠失した敷石等を補い、門道を旧状に復元した。
・城外側の壁面は版築土塁で復元し、懸門構造とした。
・門柱は8本の柱穴位置に表示柱を設置し、長さを床面から2.2mの同じ高さで揃えた。
・側壁は版築土塁が露出していたが、本来あったと考えられる板塀を復元した。
・門道奥の石垣は解体し、欠失部を補い復元修理した。
・門道から城外への園路として木製スロープを設置した。
・説明板を設置した。

この他、金田城では二ノ城戸城門の整備を2004～07年にかけて行っている。門道床面は土嚢で養生し、蛇籠で覆って保護しており見学はできないが、木製デッキや階段で見

学路を整備し、説明板を設置している（対馬市 2011）[註6]。また、屋嶋城では 2007 年より城門周辺の整備事業を継続的に行っている。城門建物の復元は行っていないが、城門の北側奥にある甕城や遊歩道を整備し、2016 年の春より一般公開を開始する予定である[註7][註8]。

4．城門研究の現状と課題

述べてきたように、古代山城の城門については一昔前と比較し、発掘調査事例が増え、近年では整備を終えた事例も出てきている。それに併行して研究も深化してきた。最後に筆者が古代山城の城門について日頃考えていることを項目立てし、まとめとしたい。

城門とは何か

城門と門の違いは何か。門は古代の都城や寺院では、平城宮の朱雀門のように巨大な建造物で、権威を象徴するモニュメントとしての役割を担っていたと考えられる事例もあるが、その基本的な機能は単に施設への「出入り口」である。よって城門とは軍事的構造物である城郭の出入り口であることから、防御的側面を備えた門と考えられる。基本的には出入り口は狭く造られ、一間一戸の構造であったと考えられる（坂井 2010）。

分布・選地

城門は城の中にどれくらい造られたのか。外郭線が明確な鬼ノ城では 4 箇所が知られ、未調査ではあるが基肄城でも 4 箇所、鞠智城は城壁線の南側に 3 箇所あり、北側に 1 箇所の想定地がある。城門がもつ防御的側面を考えると 3 ～ 4 箇所が適当であろう。しかしながら、御所ヶ谷神籠石では約 3 km の城壁線に 7 箇所の城門がある。大野城では再三述べてきたように現在 9 箇所の城門が知られるようになったが、小澤佳憲氏はそのすべてが築城当初（665 年）よりあったものではなく、対外的緊張が緩和し城としての機能が薄れていった 7 世紀後半に、城内（倉庫群）を行き来するためのルートとして新たに築いたもの（北石垣城門・クロガネ岩城門・小石垣城門）もあると考えている（小澤 2015）。

城門が築かれた場所は、以前より向井一雄氏が指摘するように大きく 2 つのパターンがある（向井 1991）。まず 1 つは谷部を塞ぐ位置に水門とセットで築かれる城門で、御所ヶ谷神籠石中門や基肄城南門がその代表格である。包谷式山城では正面の登城口に造られることが多く、その場合は正門と考えられる。もう 1 つのパターンは尾根の鞍部、突出部など外郭線上の地形変異部に設ける場合である。

発掘調査から何が分かるか

城門建物に関しては柱の形状、寸法、配置（平面プラン）など下部の構造が分かる。遺構の切り合いからは建物立替の有無を判断することもできる。また地業の有無など築造方法にも言及できることもある。鬼ノ城西門では築造を示す大きな掘方を面的に検出した。土層より版築土塁が先行して築かれ、城門の建築工事が本格化したことが判明している（総社市教委 2005）。土師器や須恵器などの出土遺物からは城門の機能した時間を考えることができる（山口 2003）。また炭化材が出土すれば、樹種同定や放射性炭素測定年代など理化学的分析を行うことができ、用材の樹種や年代などが分かることもある。

唐居敷について

門にはたいてい扉がつく。引き戸の場合もあるが、通常は扉が回転運動により開閉される構造をもつ。その回転運動の基礎部分を固定する特徴的な部材に「唐居敷（からいしき・

からいじき)」がある。岡田英男氏は「扉口の柱足元にそわせて置いた盤上の厚板で、これに扉の下方の軸穴をほる」もので、「ほとんど木造で、一枚の厚い盤状の材で作られるが、切石で作られることもある」と定義する（岡田 1984）。筆者は「柱足元にそわせ」とあることから、掘立柱建物に伴うものだけを唐居敷と考えていたが（山口 2003）、岡田氏の概説には「東福寺六波羅門のように親柱の礎石に直接方立の枘穴と扉の軸穴をほる珍しい例」も挙げられていることより、現在は礎石型のものも唐居敷と考えている。唐居敷は「門礎」や「門礎石」など報告者によって様々な呼び方がされており、きちんと用語の統一が図られることが望ましい。なお、鬼ノ城西門や讃岐城山城などでは蹴放段のみを加工した石材があるがこれをどう呼称すればいいのかは検討を要する。

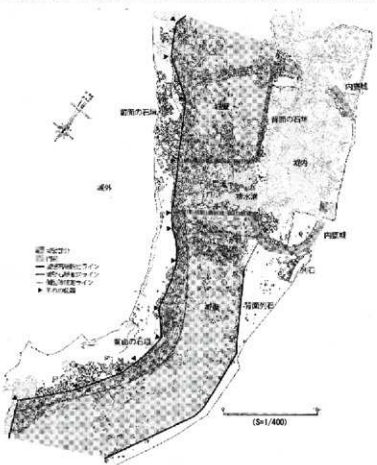
構造・縄張

城門建物の平面プランは様々であるが、間口は基本一間一戸である。柱には円柱と方柱があり、唐居敷の形状から九州＝円柱、瀬戸内＝方柱という地域性はよく指摘される。

門道は通常は高低差がなくほぼ平らであるが、階段状をなす事例（金田城南門、屋嶋城城門）もある。床面は地山成形し整地したもの、石敷きのものと大きく２つの形態に分けられる。暗渠式の排水溝を敷設する事例（屋嶋城城門、鬼ノ城北門）も知られる。

城壁は石塁、土塁を覆う石積、板塀などの調査事例があり、城門部は他の箇所より幅広く造られることが多い。その頂部に板塀を築く事例（大野城太宰府口城門、鬼ノ城西門など）もある。城壁は比高差をもち、ハの字状に城外側に張り出すことが多く、その場合、防御側が攻撃側に対して有利な「見方折れ」の構造となる。また城外と段差を設けた懸門（大野城北石垣城門、屋嶋城城門、鬼ノ城北門など）も調査事例が増えている。

城内側に視点を向けるとやはり防御を意識したと思われる構造が多くある。目隠し塀をもつ事例（大野城太宰府口城門、鬼ノ城西門）、自然地形を遮断装置として利用した事例（鬼ノ城南門）、岩盤を削り残す事例（御所ヶ谷神籠石第二東門、鬼ノ城東門）、土塁を築く事例（御所ヶ谷神籠石東門）などである。門道は直進せずに屈折させるのが一般的で、近接する城壁に雉城などを設けたり、屋嶋城城門にみられる内甕城（第９図）など、虎口防御を堅固にした縄張を採る事例が近年注目されている。城門を単独で考えるのではなく、それに付随する城壁や自



第９図　屋島城城門の縄張　（高松市歴史資料館 2013）より作成

然地形など広く面的に捉え、城門が備え持つ防御機能を考えて調査を行うことは重要な視点である。

城門として機能した時間

城門は造られてからどれくらいの時間機能したのか。建物の維持という観点から考えると、大野城の太宰府口城門では掘立柱城門（665年）から礎石立城門（700年前後）へと約40年で立替が行われており、掘立柱建物は数十年が限度であったと考えられる。鬼ノ城の城門はすべて掘立柱城門で、立替は無いとされる。出土土器より7世紀後半の築城で、8世紀前半には山城としての役割を終えていたことから、城門として機能したのもその範囲であろう。ただ建物が朽ちた後も、しばらくは通路として利用されていた。

一方、城門が備え持つ本質的機能である防御的側面はどう変化するのか。よく引き合いに出されるのは、大野城や基肄城と連動して大宰府防衛を担った水城の西門の調査成果である。大堤が築かれた当初（664年）は、掘立柱構造で間口は4.2mと狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門であったが、700年前後には礎石立の八脚門に立替られ、屋根に瓦を葺き、間口も約10mと広くなる。つまりこの城門は筑紫館（鴻臚館）から大宰府へと至る官道にあるが、唐など外国の使者を始めとする人々の往来を意識した大宰府の表玄関に相応しい壮麗な「見せる門」へと変化したと考えられる。対外的緊張の緩和とともに城門の機能が変質することは、先の「分布・選地」で触れた小澤氏の論にも通じる。

建物がない城門

城門は建物やそれに連なる城壁等が築かれ、お互いに作用しながら防御性を高めることで完成を迎える。しかしながら発掘調査で建物の痕跡が無く、城門が未完成であったと考えられる場合がある。いわゆる「建物がない城門」である。その事例として帯隈山神籠石北門と御所ヶ谷神籠石第二東門があり、筆者も過去に言及した（山口2006）。

まず未完成であったという考え方である。未完成でも城壁等のあり方から工事初期段階、工事のある段階での意図的中止など色々な場合を想定することができる（亀田2014）。

一方、完成していたとする考え方もできる。まず単に出入り口で建物は要らなかったとする場合である。つまり城門の位置が城壁ラインの裏手で城門防御を重視しなくても良かったとする考えで、帯隈山神籠石北門を調査した鏡山猛氏はそのように推定した（佐賀県教委1967）。また完成していたとする場合、城門建物があったことも想定できる。つまり城門建物が礎石立構造で、柱を置いたのが石製唐居敷ではなく木製であり、残らず腐食した可能性である。ただ木製唐居敷の認定条件として地山加工、整地層、玉石など根石の有無などを検証する必要がある。礎石立城門では屋根に瓦を葺くことがあり、城門建物の痕跡が無くても、瓦が出たらその場合を考えなければならない。また遺構面が削平を受けていることも想定でき、「建物がない城門」でも色々な可能性を探る必要がある。

上部（上屋）構造

発掘調査から城門建物の上部構造をうかがうことはなかなか難しい。ただ接する城壁の高さから重層門の可能性を指摘できたり、瓦がある程度出土すれば屋根を持っていたと考えることもできる。しかし、鬼ノ城西門の復元時にも議論になったように、屋根の有無ひとつとっても結論を出せないくらい非常に難しい問題である。上屋を含む上部構造について積極的に取り組んだ研究は向井氏や小澤氏、鬼ノ城西門の復元にあたって主導的役割を

果たした瀬島正士氏らの考察がある（小澤 2010、瀬島 2011、向井 1999）。都城や官衙の門については、古建築や絵巻物などの絵画資料などを援用しながら、発掘遺構から上部構造を復元する上での考え方が示されている（清水 2010）。いずれにしても、平面だけでなく、常に上部構造の復元を考えながら調査に臨む姿勢が重要である。

城門遺構の整備

最後に城門遺構の整備について考える。再三述べるよう、鬼ノ城西門では城門建物の実物大復元が行われているが、整備の手法として城門建物まで復元することは今後も少数派であると思われる。主流となるのは、建物の柱穴位置を木柱で示したり、崩落した壁面の石垣を補いながら積みなおしたり、説明板を設置したりする、いわゆる表示整備であろう。この事例として鬼ノ城北門の整備状況を詳しく紹介した。なお整備は盛土や土嚢などで遺構の保護措置を行った上で行われることが多いが、鬼ノ城では遺構同士の整合が取れないため、遺構上に盛土などをせず、直接復元整備を行っている（総社市教委 2011）。

整備後の問題はその後の維持管理である。城門に限ったことではないが、日常的管理として、年間を通じて快適に見学できるよう草刈等を行う必要がある。山城は広大な面積をもつためどこの遺跡も十分な人材や予算の確保ができていないのが実情で、ボランティアの育成等も思案していると思われる。また建物の表示柱を木柱で行えば、防腐処理を施したり、朽ち果てた場合は差替えなければならない。あるいは調査で新知見を得られれば、説明板の内容を更新しなければならない。このように維持管理には問題が尽きない。

表示整備に関連して、近年、遺跡の活用において、遺跡現地での理解促進を補助するAR（Augmented Reality[拡張現実]）・VR（Virtual Reality[仮想現実]）などデジタルコンテンツの導入事例をよく見かけるようになってきた。スマートフォンやタブレットなどスマートデバイスの普及が進んだ今日、インターネットを通じて誰でもダウンロード可能なアプリケーションの開発が徐々に進んでおり、九州では福岡城や鴻臚館、肥前名護屋城、昨年世界遺産に登録された三重津海軍所跡などで導入されている。デジタルコンテンツを用いれば、遺跡に復元建物などハードの整備を行っていない場合でも、遺跡のかつての景観や人々の様子を再現し、来訪者の追体験を可能とする。また、遺跡現地でのガイダンスやナビゲーションとして、関連情報を文字や音声、画像や映像などで提供することもできる。一方、導入後のデジタルコンテンツの維持管理やハード面での遺跡整備との関係をどうするかなど、検討課題も多い。さらに、絶えず進歩する技術革新の中、今後これらの技術やその利用が、どのような方向性を持つのかを見据えておくことも必要である。

おわりに

以上、表題に沿って論述してきた。一読して分かるように、本論は日本の古代山城研究に限定した内容であり、わが国の古代山城の祖形となり、かつ併行して存在した朝鮮三国や統一新羅の古代山城等の調査事例、研究を反映することはかなわなかった。これは筆者の怠慢で、語学力の無さを痛感している次第である。また研究史の遺漏、あるいは論旨を一部読み違えている箇所もあるかもしれないがご寛容願いたい。本小論が今後の古代山城研究の一助となれば幸いである。

註

（1）熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館 HP
http://www.kofunkan.pref.kumamoto.jp/kikuchijo/

（2）水城・大野城・基肄城 1350 年事業 HP
http://www.mok1350.org/

（3）絵図が確認された当時にも検討が行われている（高倉 1983）

（4）韓国では「確金（ファクセ）」と呼ばれている。国内では古代山城以外に古代寺院例（奈良県山田寺跡）が 1 例知られる。朝鮮半島、大陸からの出土例は以下の通りである（山田 2011）。
【韓国】報恩三年山城南門例 1、清州父母山城北門例 1、忠州忠州山城北門例 1、聞慶姑母山城西門例 2、楊州大母山城東門例 3、同西門例 1
【北朝鮮】平壌長安城（平壌城）城門例 2
【中国】瀋陽石台子山城東門例 2？、同南門例 2？、同西北門例 3

（5）調査担当者である渡邊誠氏（高松市）より御教示いただいた。

（6）金田城の近年の整備状況については、調査担当者の田中淳也氏（対馬市教育委員会）より御教示いただいた。

（7）屋嶋城の近年の整備状況については、渡邊氏より御教示いただいた。

（8）古代山城ではないが、東北の城柵（志波城、払田柵等）で門の復元例がある（村田 2010）。

参考文献

赤司善彦 2012「古代山城と GIS」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会

赤司善彦・光谷拓美 2012「大野城の築城年代再考―太宰府口城門出土木柱の年輪年代の測定から―」『東風西声』第 7 号　九州国立博物館

稲田孝司 2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第 34 号　日本考古学協会

岡田英男 1984『門』（『日本の美術』第 212 号）至文堂

小澤佳憲 2008「北石垣城門と鋳鉄製軸受金具について」（九州国立博物館『大野城と四王寺』）

小澤佳憲 2010「新発見城門について」（福岡県教育委員会『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』（福岡県文化財調査報告書第 225 集））

小澤佳憲 2014a「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第 2 号　熊本県教育委員会

小澤佳憲 2014b「基肄城跡東北門の唐居敷軸摺穴中に残された軸摺金具について」『九州考古学』第 89 号　九州考古学会

小澤佳憲 2015「大野城の城門」（九州歴史資料館『四王寺山の 1350 年―大野城から祈りの山へ―』）

小田富士雄 2012「鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ』（熊本県文化財調査報告第 276 集））

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』風間書房

亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第 42 巻第 3 号　考古学研究会

亀田修一 2002「朝鮮半島古代山城の見方」（西谷正編『韓半島考古学論叢』すずさわ書店）

亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ―論考編 1 ―』熊本県教育委員会

城戸康利 2007「大野城・新発見の城門」『講濠』第 13 号　古代山城研究会

九州国立博物館 2015『古代日本と百済の交流―大宰府・飛鳥そして公州・扶餘―』

九州歴史資料館 2008『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅴ平成 18・19 年度』
九州歴史資料館 2009『水城跡』
九州歴史資料館 2014a『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ平成 24・25 年度』
九州歴史資料館 2014b『大宰府史跡ガイドブック 1 特別史跡水城跡』
九州歴史資料館 2015a『四王寺山の 1350 年―大野城から祈りの山へ―』
九州歴史資料館 2015b『大宰府史跡ガイドブック 2 特別史跡大野城跡』
葛原克人 1981「古代山城の特色」(児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系別巻Ⅰ城郭研究入門』新人物往来社)
葛原克人 1994「朝鮮式山城」(佐藤宗諄編『日本の古代国家と城』新人物往来社)
葛原克人 2002「備中鬼ノ城の創築期をめぐって」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ』(熊本県文化財調査報告第 276 集)
西条市教育委員会 2009『史跡永納山城跡Ⅰ』(西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集)
坂井秀弥 2010「地方官衙と門」(奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』(奈良文化財研究所研究報告第 4 冊))
佐賀県教育委員会 1965『おつぼ山神籠石』(佐賀県文化財調査報告書第 14 集)
佐賀県教育委員会 1967『帯隈山神籠石とその周辺』(佐賀県文化財調査報告書第 16 集)
清水重敦 2010「都城・官衙における門の建築」(奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』(奈良文化財研究所研究報告第 4 冊))
下原幸裕 2013「大野城跡と発掘調査成果」『シンポジウム阿志岐山城を語る』筑紫野市歴史博物館
下原幸裕 2014「大野城クロガネ岩城門出土の軒丸瓦」『都府楼』第 46 号　古都大宰府保存協会
杉原敏之 2006「大野城出土柱根の刻書」『九州歴史資料館研究論集』31
総社市教育委員会 1997『総社市埋蔵文化財調査年報 7 (平成 8 年度)』
総社市教育委員会 1998『総社市埋蔵文化財調査年報 8 (平成 9 年度)』
総社市教育委員会 1999『総社市埋蔵文化財調査年報 9 (平成 10 年度)』
総社市教育委員会 2005『古代山城鬼ノ城』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18)
総社市教育委員会 2006『古代山城鬼ノ城 2』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19)
総社市教育委員会 2008『総社市埋蔵文化財調査年報 17 (平成 18 年度)』
総社市教育委員会 2011『鬼城山国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』
成周鐸・車勇杰 1993「韓日古代城門礎石初探」『古文化談叢』第 30 集 (中)　九州古文化研究会
高倉洋彰 1983「古図に現れた大宰府」『佛教藝術』146 号　毎日新聞社
高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋嶋』(高松市埋蔵文化財調査報告第 62 集)
高松市教育委員会 2008『屋嶋城跡Ⅱ』(高松市埋蔵文化財調査報告第 113 集)
高松市歴史資料館 2013『屋嶋城が築かれた時代』
太宰府市教育委員会 2015『大野城跡 1』(太宰府市の文化財第 125 集)
対馬市教育委員会 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ』(対馬市埋蔵文化財調査報告書第 5 集)
対馬市教育委員会 2011『古代山城特別史跡金田城跡Ⅳ』(対馬市埋蔵文化財調査報告書第 6 集)
東亜考古学会 1953『對馬』(東亜考古学叢刊乙種第 6 冊)
長沼賢海 1931「大野城及び四王寺遺蹟」『福岡県史跡名勝天然紀念物調査報告書』第 6 輯　福岡県
奈良国立文化財研究所 1990『年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―』(奈良国立文

化財研究所学報第 48 冊）
濵島正士 2011「西門ほかの復元について」（総社市教育委員会『鬼城山国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』）
平岡岩夫 1999「屋嶋城跡の新発見の石塁に関して」『講濠』第 8 号　古代山城研究会
福岡県教育委員会 1991『特別史跡大野城跡Ⅶ』
福岡県教育委員会 2006『特別史跡大野城跡整備事業』（福岡県文化財調査報告書第 210 集）
福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』（福岡県文化財調査報告書第 225 集）
文化財保護委員会 1963『石城山神籠石第一次調査概要』
文化財調査委員会 1964『石城山神籠石第二次調査概要』
美津島町教育委員会 2000『金田城跡』（美津島町文化財調査報告書第 9 集）
美津島町教育委員会 2003『金田城跡Ⅱ』（美津島町文化財調査報告書第 10 集）
宮田浩之 2010「西海道官衙の門―北部九州の事例を中心として―」（奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』（奈良文化財研究所研究報告第 4 冊））
向井一雄 1991「西日本の古代山城遺跡―類型化と編年についての試論―」『古代学研究』第 125 号　古代学研究会
向井一雄他 1996『讃岐城山城の研究』（『講濠』第 6 号）古代山城研究会
向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第 27 号　地域相研究会
向井一雄 2001「古代山城研究の動向と課題」『講濠』第 9・10 合併号　古代山城研究会
向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『講濠』第 14 号　古代山城研究会
向井一雄 2014「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ―論考編２―』熊本県教育委員会
村上幸雄 2010「鬼ノ城―城門遺構の調査と出土土器による年代―」『古代文化』第 61 巻第 4 号　古代学協会
村田晃一 2010「古代奥羽の城柵・官衙の門と囲繞施設」（奈良文化財研究所『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書官衙と門』（奈良文化財研究所研究報告第 4 冊））
八木充 2014「大野城の門柱刻書について」『日本史研究』第 624 号　日本史研究会
山口裕平 2003「西日本における古代山城の城門について―その類型化と変遷―」『古文化談叢』第 50 集（上）　九州古文化研究会
山口裕平 2006「御所ヶ谷神籠石の城門構造」（行橋市史編纂委員会編『行橋市史資料編原始・古代』行橋市）
山田隆文 2011「鉄製の門扉軸摺金具について」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会
山元敏裕 2009「香川県高松市屋嶋城跡」『講濠』第 14 号　古代山城研究会
行橋市教育委員会 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』（行橋市文化財調査報告書 33 集）
行橋市教育委員会 2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅱ』（行橋市文化財調査報告書 53 集）
横田賢次郎 1993「大野城の城門―大宰府口城門を中心として―」『考古学ジャーナル』369 号　ニュー・サイエンス社

~MEMO~

古代山城城門出土の軸摺金具

小澤 佳憲（九州歴史資料館）

1．はじめに

2003年夏に特別史跡「大野城跡」を襲った豪雨災害により、大野城跡の所在する四王寺山は、土石流や山腹崩壊などにより計400か所以上で被害が発生した。福岡県のほか関連3市町の教育委員会では協力し、2009年度までの計6年間にわたって、この被災個所の復旧事業を行った。復旧工事にあたっては、史跡の価値を損なうことがないよう、遺構の遺存状況を確認して工事の影響が及ぶ範囲を定めるとともに、できるだけ築城当時の工事方法を踏襲しつつ復旧工事を進めることとし、工事の設計に資するため事前にすべての工事個所の発掘調査を行うこととなった（小澤 2007）。筆者は、2004年度より5年間にわたり大野城跡の災害復旧工事に先立つ発掘調査に携わった。

発掘調査では、これまで知られていた4か所の城門跡のほかに新たに5か所で城門跡を確認し、あるいは北石垣地区で2段構造の石垣を確認するなど、新たな発見が相次いだ（福岡県教育委員会 2009、太宰府市教育委員会 2015）。中でも本稿にかかわる重要な発見として、北石垣城門における鉄製軸摺金具の出土がある。それまで韓国では5遺跡7例の出土が知られており、また国内でも古代の軸摺金具として山田寺跡北面回廊地覆石に掘り込まれた扉軸摺穴1つの中に遺存していた1例が知られていたが、国内の古代山城からは初めての確認であり、多くの注目を浴びた（小澤・入佐 2009、小澤 2010）。

その後筆者は、国内の古代山城における唐居敷軸摺穴（後述）の調査を進め、2014年に基肄城跡東北門で軸摺穴中に鉄製の軸摺金具が残されていることを指摘した。

本稿では、これら2例の軸摺金具の位置づけについて検討する。ただし、軸摺金具だけでは出土数がごく限られていて十分な検討を行うことができないため、本稿ではほかに、列島古代山城の祖型になったとされる韓国を中心とする東アジアの山城から出土した軸摺金具、また金具が嵌められていたであろう列島古代の石製唐居敷軸摺穴についても分析の対象とし、論を進めることとしたい。

2．扉回転軸と軸摺金具の構造と役割

本稿で検討する対象について整理しておく。

まず対象とする資料であるが、古代山城出土の軸摺金具が第一にあげられる。ただし点数が少ないため管見に触れた古代山城以外の軸摺金具も対象とする。

山城出土軸摺金具について行われた山田隆文氏による整理（山田 2011）を参照したい。軸摺金具は門の扉回転軸を摩耗から防ぐ目的で使用され、扉回転軸の上と下の2か所で使用されるという（図1）。上の金具は扉端部から上に突出する出枘を保護するためその周りを巻く鉄製の被いと、出枘をはめるために冠木に開けられた穴を保護するための円筒状の金具からなる。前者を外筒金具（外金具）、後者を内筒金具（内金具）と呼ぶ。中国遼寧省瀋陽市にある高句麗山城石台子山城の東門（遼寧省文物考古研究所・沈陽市文物考古工作隊 1998、沈陽市文物考古工作隊 2001）から内金具と外金具のセットが1例が

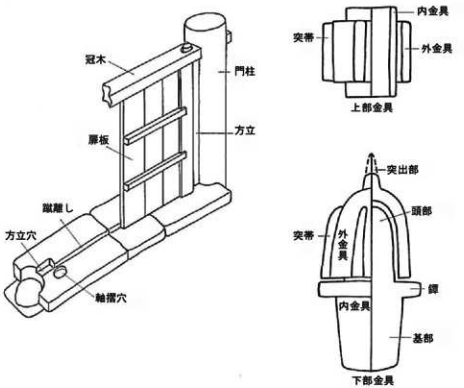


図１　扉軸摺部の構造と軸摺金具の部位（山田 2011 より改変）

出土している（図２）ほか、韓国・中国などで外金具が数例出土している（山田 2011）。ただし次に述べる下部金具が扉の重みを受けて摩耗しやすいのに対し、上部金具は扉の重みがかからないため軸の摩耗はそれほどでもなかった可能性があり、場合によっては省略されたかもしれない。列島では現在まで出土例はなく、以下の検討では除外したい。

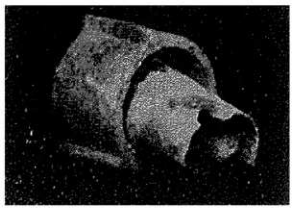


図2　石台子山城東門出土の上部金具
（報告書より抜粋）

下部金具であるが、現在までに日本・韓国・北朝鮮・中国で大別２種類が知られており、これらについても検討の対象とする。以下、大別２類について簡単に見ておく。一つは山田氏が整理したもので（図１右下）、扉の下端部に穴を穿ち突帯のついた帽子状の金具（外金具）[1]を挿入して扉側の摩耗を防ぎ、軸摺穴には頂部が丸い砲弾状の上半部を持つ金具（内金具）を唐居敷から突出させるように嵌め込んで、唐居敷側の摩耗を防ぐ構造を持つ。扉側に枘が入り込む構造から、以下これを「入り枘」構造と呼ぶ（図３右）。

もうひとつは扉の下端部から枘が突出するタイプで、この突出部を覆って摩耗から保護する金具（内金具）と、この金具の外側に位置していて軸摺穴の内面を保護するための外金具からなる。扉から枘が下に突き出すので、以下これを「出枘」構造と呼ぶ（図３左）。

入り枘構造と出枘構造では、外金具と下金具の上下関係が逆転し、入り枘構造では外金具が上にくるのに対し、出枘構造では外金具が下に位置することとなる。したがって、出

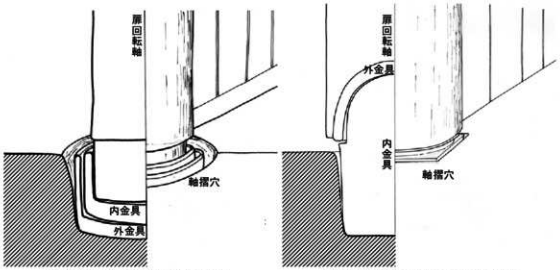


図３　城門扉軸摺金具の２種の軸摺部構造（小澤 2014c より改変）

枘構造では回転軸受け部が唐居敷に掘られた軸摺穴内部に形成されることとなり、軸摺穴の内部に円形構造をつくる必要があるのに対し、前者では回転軸受け部が唐居敷の上位に位置するため、軸摺穴内部に円形構造を作る必要がない。これは軸摺穴の平面形状に影響を与える要素と考えられ、軸摺穴の形状から、その軸摺穴に嵌められていた軸摺金具の種類が推測できる可能性が考えられる。軸摺金具の出土例が限られるため、重要な手がかりとなる（後述）。

３．軸摺金具の類例の検討

①列島出土例（表１－１～３）

列島出土例は３例ある。うち２例は古代山城、１例は寺院跡から発見されている。基肄城跡出土例と山田寺跡出土例が同様の構造を持ち、大野城跡出土例は構造が異なる。ここでは代表して古代山城出土の２例を見ておく。

基肄城跡東北門例　日本書紀天智３年（665）に築城記録の残る朝鮮式山城基肄城跡では２か所の城門が遺存する。うち、東側土塁線上に築かれた東北門の、城内に向かって左側の唐居敷軸摺穴底面に、軸摺金具が遺存していた（小澤 2014）。古く鏡山猛氏により「鉄錆」の付着として記録されていたもの（図４上、鏡山 1968）であるが、筆者らによる理化学的分析を交えた検討により軸摺金具の一部であることが確認された。

金具は出枘構造で、軸摺穴の内側に沿って外金具が、さらにその内側に内金具が銹着している（図４下左）。それぞれ一部が遺存しており、下に位置する外金具は軸摺穴底面に敷かれた円盤状の部分が完存するとともにその上に円筒状の部材が付けられていた痕跡がわずかに残る一方、上に位置する内金具は底部が半分弱遺存するのみである。構造から、山田寺跡北面回廊出土例（図４下右、奈良文化財研究所 2002）と同じものと考えられ、円形で浅い軸摺穴に適合する。これを、本稿ではⅠ―1 類とする。

大野城跡北石垣城門出土例　基肄城跡と同じ築城記事に見える朝鮮式山城大野城跡では南北に土塁線が二重にめぐらされた部分がある。このうち北側にある二重土塁の内側土塁線が大野城跡を南北に貫く尾根の先端部を越えようとする頂部付近、既知の石垣である北石

表 1　軸摺金具出土例一覧

遺跡名	所在	種別	城門名	上部金具		下部金具		備考
				外金具	内金具	外金具	内金具	
大野城跡	福岡県	山城	北石垣城門				Ⅱ－1類×1	現位置に遺存、取り上げ
基肄城跡	佐賀県	山城	東北門			Ⅰ－1類類×1	Ⅰ－1類×1	現位置に遺存、取り上げ不可
山田寺跡	奈良県	寺院	北面回廊東端扉			Ⅰ－2類類×1	Ⅰ－2類×1	現位置に遺存、処置不明
三年山城	忠州北道	山城	南門			Ⅱ類×1	Ⅱ－2a類×1	遊離
鎮母山城	慶州北道	山城	西門			Ⅱ類×2	Ⅱ－2a類×2	遊離
父母山城	忠州北道	山城	北門			Ⅱ類×1	Ⅱ－2b類×1	遊離
忠州山城	忠州北道	山城	北門			Ⅱ類×1	Ⅱ－2b類×1	遊離
大母山城	京幾道	山城	東門			Ⅱ類×1	Ⅱ－2b類×2	内金具は現位置に遺存、取り上げ不可
			西門	1				遊離
平壌城	平壌市	城郭	平壌神社前城門			Ⅰ－3類×1	不明	現位置に遺存、処置不明
石台子山城	遼寧省	山城	西北門	2		Ⅰ－3類×1		現位置に遺存、処置不明
			東門	1	1			遊離
			南門	1				遊離

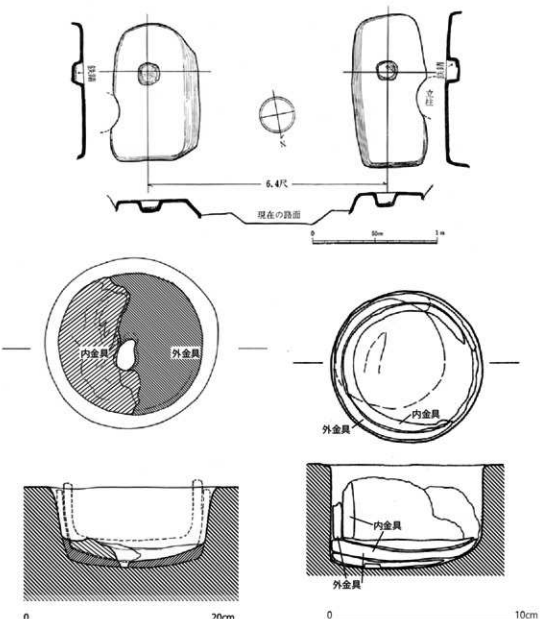


図 4　基肄城跡・山田寺跡出土軸摺金具（鏡山 1968、奈良文化財研究所 2002、小澤 2014c より抜粋、一部再トレース）

垣の東側に隣接する土塁線上に北石垣城門が発見された（福岡県教育委員会 2009）。背後の尾根には主城原礎石群が展開しており、主城原礎石群の建物に最も近い城門である。金具は城内に向かって左側の唐居敷軸摺穴に嵌った状態で出土した（図5上、小澤 2008、大澤・小澤 2008）。入り枘構造の内金具で、軸摺穴に嵌る下半部（基部）と回転部を形成する上半部（頭部）に区分でき、一体で鋳造される。頭部は砲弾状で頂部が丸い。基部は断面方形で長い。半島出土例と異なり中位の「鍔」がなく、方形で深い軸摺穴に適合する（図5下）。これを本稿ではⅡ—1類とする。ただしこの類型は現在までのところ本例しか類例がない。外金具は出土していないが韓国出土例を参考に帽子状のものが想定できよう。

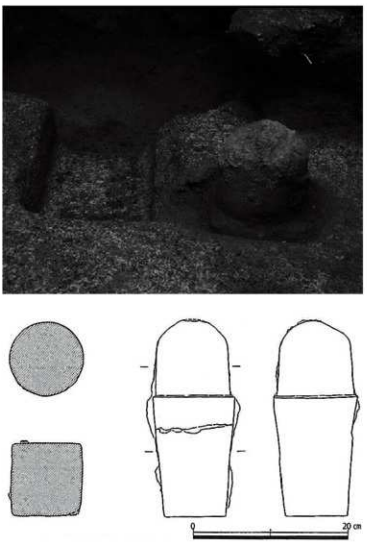


図5　大野城跡出土軸摺金具出土状況（上）、実測図（下）（福岡県教育委員会2009 より改変）

②韓国出土例（表1－4～8）

韓国ではこれまで管見に触れる限り5遺跡7例の軸受け金具（韓国ではファクスェ（「確金」か）と呼ぶ）が出土している。いずれも出枘構造のもので、扉側の穴を摩耗より保護するための半球状の金具（外金具）と、唐居敷に嵌め込む下側の金具（内金具）とがセットになって出土する例が多い。

外金具は、すべての例が基本的に同じ構造を持つ。すなわち、深いボウル状をひっくり返した形で、緑をやや太く補強する。外面に縦方向に数条の突帯を付す。突帯は、扉側に彫られた穴に埋め込む際に金具が動かないように固定するためであろう。頂部には突出部があるものと折り取られた痕跡があるものがあり、これを突帯と同様の機能を持つとする研究者もいるが、鋳造時の湯口の痕跡の可能性もあろう。

内金具は中ほどに刀の鍔のような円盤状の部分があり、それより上側は先端が丸い砲弾型を呈するのが基本的な形状で、唐居敷に嵌る部分である基部（下半部）の形状により2つのタイプに大別される。ひとつは下半部が上半部と同様の先端が丸い円柱形を呈するもので、下半部に突帯の突出部を数本有する。これをⅡ—2a類とする。もうひとつは下半部が小さな方柱状を呈するものである。これをⅡ—2b類とする。以下、類例を見ていくが、すでに山田氏により個別例の詳細が述べられており（山田 2011）、ここでは共通する形

状を持つ類型ごとにまとめて述べる。

Ⅱ—2a 類　本例に属する資料として忠清北道報恩郡三年山城南門跡から１例（図６－１、忠北大学校・中原文化財研究院 2003）、慶尚北道聞慶市姑母山城から２例（車勇杰氏教示）が出土している。いずれも外・内金具のセットで城門埋土中から出土しており原位置から

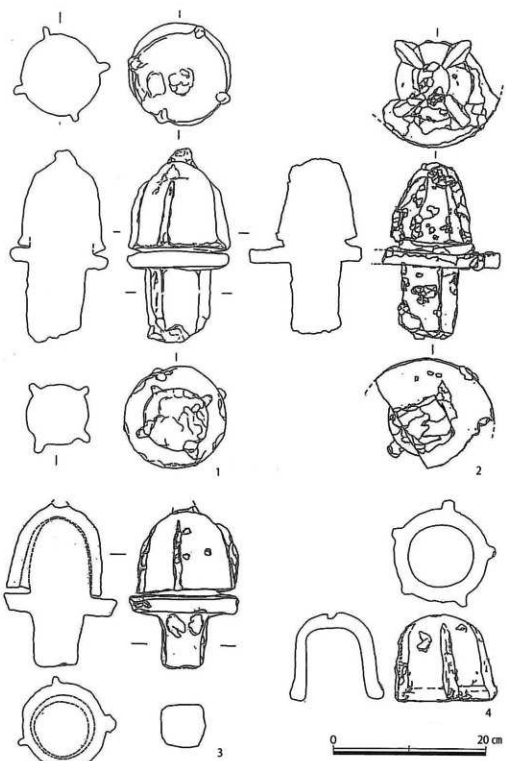


図６　韓国出土の軸摺金具（山田 2011 より改変）

は遊離していた。このタイプは、下半部にしばしば木質が付着していることや突帯状の突出部があることから、木製の唐居敷に嵌装するために作られたか、あるいは一回り大きな軸摺穴に木質を使って固定されるよう嵌装されたものと見られるが、出土遺構から石製の唐居敷は発見されておらずおそらく前者であろう。

Ⅱ—2b類　本例に属する資料として忠清北道清州市父母山城北門跡（図６－２、キム・ペク 2006）・忠清北道忠州市忠州山城北門跡（図６－３、ソ・チョ 2006a・b、中原文化財研究院 2008）からそれぞれ内・外金具のセットが１例ずつ出土している。また、京畿道州市大母山城東門跡からもおそらく同タイプと考えられる軸摺金具が２つ、城内側の軸摺穴に嵌装された状態で出土しており（図７）、併せて門道部から遊離した外金具が１例（図６－４）出土している（翰林大博物館 1990）。内金具はいずれも唐居敷に硬く固着して取り上げられずそのまま埋め戻されたようだが、同じ東門跡の城外側には方形の軸摺穴が見られることから、おそらくこの２例も方柱状の下半部を持つと見てよかろう。京畿道河南市二聖山城の東門や忠清北道報恩郡三年山城の西門などにみられる、円形の浅い掘り込みの中央部に方形の小さな掘り込みを持つ軸摺穴も、このタイプの軸摺金具のために掘られた軸摺穴と考えられる（後述）。

なお、韓国出土の軸摺金具は、旧新羅領域を中心に分布しており、特にⅡ—2b類のうち時期のわかるものはいずれも統一新羅期（７世紀後葉）以降とされる（後述）。

③北朝鮮・中国出土例（表１－９・10）

表１にまとめたように古代山城からはすくなくとも現在２遺跡で例が知られる。実測図に不備があったり写真が不鮮明であったりして詳細が不明であるが、石台子山城例の報告に示された図によれば、平面形方

図７　大母山城東門における金具出土状況（翰林大学校博物館編 1990 より抜粋）

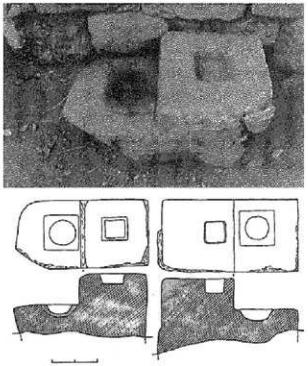


図８　石台子山城における金具出土状況（遼寧省文物考古研究所他 1998 より抜粋）

形の鉄板の中央に円形のお椀状を呈する掘り込みを施した金具が同じ形状の軸摺穴に嵌る構造を持つようである（図8、遼寧省文物考古研究所・沈陽市文物考古工作隊 1998）。掘り込み部の形状は列島基肄城跡例・山田寺跡例に類似するが、断面形状などが異なり、これをⅠ—3類とする。なおこれは外金具に該当し、内金具の有無や詳細は不明。

4．軸摺穴の検討

①軸摺穴と軸摺金具の対応関係

前述したように、出柄構造の軸摺金具の場合は扉の下端から回転軸が突き出ており、それが軸摺金具を介して軸摺穴に嵌め込まれて回転する。回転運動が軸摺穴内部で発生するため、軸摺穴内部に円形の構造が必要となる。もちろん、軸摺穴自体は方形など円形以外の形状であっても、軸摺金具の内部に円形構造があれば本来の役割を果たすわけであるが、外側が方形、内側が円形という複雑な形状よりは、内外ともに円形で作る方が簡易であり資源も節約できる。したがって、出柄構造の回転軸を持つ扉の場合、唐居敷に掘り込まれた軸摺穴の平面形状は円形を持つと推測される。実際、国内で出土したⅠ類はいずれも円形軸摺穴に嵌めこまれていた。

一方、入り柄構造の場合は回転運動が扉下端部に下から掘り込まれた穴の内部で起きることになる。この場合、扉内部に掘り込まれた穴の内部に円形構造が必要であるが、一方軸摺穴自体は回転運動とは関係がなく、その形状に制約はない。ただし、軸摺金具が回転運動に引きずられて動く可能性がある円形よりは、角で回転が阻害される多角形の基部形状を持つ方が金具自体の安定につながる。実際、大野城跡出土例も大母山城例も原位置で出土したものを見ると軸摺穴の平面形状が方形を呈する。

ただし、理屈でいえば軸摺穴が金具の下半部（軸摺穴に差し込まれる部分）より大きければ、円形の軸摺穴に方形の基部を持つ金具を挿入することは可能である。隙間には有機物等を詰め込んで固定するという方法も考えられないわけではないからである。そこで、軸摺穴の側壁に軸摺金具の装着痕跡が残っていないかどうか観察を行った。その結果、大野城跡クロガネ岩城門唐居敷の軸摺穴側面に厚みを持つ鉄錆が広く残るほか、大野城跡宇美口城門付近採集の唐居敷（県民の森センター前展示中）、鞠智城跡堀切門跡に残されていた唐居敷のそれぞれで、軸摺穴側壁に厚みの残る鉄錆の付着が認められた（図9）。これらの鉄錆

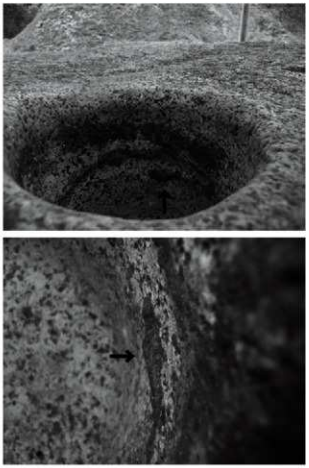
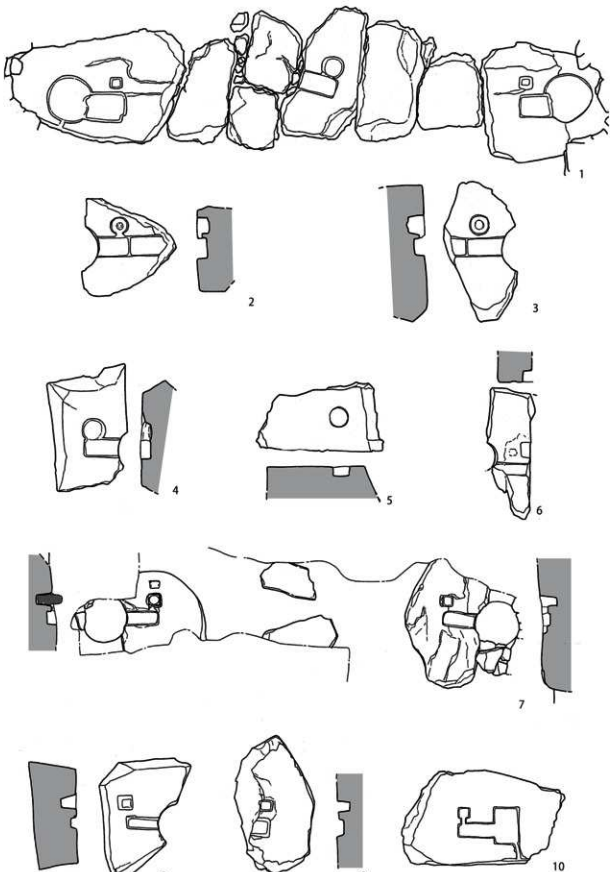


図9　鞠智城跡堀切門礎石軸摺穴に残る鉄錆状付着物（筆者撮影）

表2　国内出土の古代石製唐居敷

遺跡名	地点名	施設内に向かっての位置	軸摺穴									
			平面形態	I類			II類			サイズ※		
				1類	2類	3類	1類	2類	3類	幅(直径)	長さ	深さ
大野城跡	大宰府口城門 I期	左側	円形	●						20	―	8
	坂本口城門	左側	円形	●						21	―	8
	水城口城門	左側	円形	●						18	―	13
	水城口城門	右側	円形	●						18.5	―	14
	宇美口城門(資料館②)	不明	円形	●						19	―	10
	宇美口城門(資料館①)	左側	方形				●			14	不明	14
	宇美口城門(センター)	右側	方形				●			12	11.5	16
	北石垣城門	左側	方形				●			15	15	19
	北石垣城門	右側	方形				●			12	11	17.5
	小石垣城門	右側	方形				●			12	11.5	15
	クロガネ岩城門	左側	方形				●			12	12	18
	大宰府口城門 II期	左側	方形				●			15	15	17
	大宰府口城門 II期	右側	方形				●			14	13	16
	原口城門	左側	円形			?				不明	不明	不明
	原口城門	右側	円形			?				不明	不明	不明
金田城跡	二ノ城戸門跡	左側	円形	●						20	―	8.5
	二ノ城戸門跡	右側	円形	●						20	―	不明
	三ノ城戸門跡	左側	円形	●						19	―	11
	ビングシ門跡	左側	円形	?						13	―	8
	南門跡	左側	円形	?						不明	―	不明
	南門跡	右側	円形	?						不明	―	不明
基肄城跡	東北門跡	左側	円形	●						17	17	8
	東北門跡	右側	円形	●						17	16	8
鞠智城跡	堀切門(門跡)	左側	円形	●						16	―	15
	堀切門(木野神社)	右側	円形	●						10	―	14
	池ノ尾門	不明	円形	●						17	―	14
	深迫門	不明	円形	●						18	20	14
鬼城山	東門跡	左側	方形				●			18	18	14
	東門跡	右側	方形				●			18	18	14
	西門跡	左側	方形				●			18	18	15
	西門跡	右側	方形				●			18	18	16
	北門跡	左側	方形				●			19	25	17
	北門跡	右側	方形				●			18	23	16
	南門跡	左側	方形				●			18	18	14
	南門跡	右側	方形				●			18	18	14
水城跡	東門推定地	左側	円形	●						17	―	8
	児島氏宅	右側	円形	●						14	―	8
	新家氏宅	右側	円形	●						16	―	12
	西門東側	右側	円形	●						11	―	10
大宰府跡・周辺	政庁南門	右側	方形					●		7	7	7
	政庁北西丘陵上	不明	円形	●						38	―	26
	観世音寺北側	不明	円形	?						不明	不明	不明
藤原宮	西面中門	右側	不整円形	●						23	―	16
平城宮跡	内裏東方官衙東北門(SB2755)	不明	不明	不明						不明	不明	不明
	内裏東方官衙西門(SB5450)	左側	円形	?						9	―	不明
	東南隅溝SD4951①	左側	円形	?						12	―	5
	東南隅溝SD4951②	右側	円形	?						11.5	―	4.5
	東面大垣(推定東門)	左側	方形					●		5	5	7
平城京跡	羅城門①(川底出土)	右側	円形	●						10	―	10
	羅城門②(郡山城天守台転用)	右側	円形	●						16	―	3
川原寺跡	講堂前庭中か	左側	円形			●				11	―	7
	西脇回廊	右(南側)	円形			●				11	―	3
	西脇回廊	左(北側)	円形			●				不明	―	不明
山田寺跡	南門跡(SB001)	右端	円形			●				12	―	不明
	南門跡(SB001)	中央右側	円形			●				12	―	不明
	南門跡(SB001)	中央左側	円形			●				12	―	不明
	講堂跡(SB100)北側	中央右(西側)	円形			●				15	―	不明
	講堂跡(SB100)北側	中央左(東側)	円形			●				15	―	不明
	講堂跡(SB100)西側	右(南側)	円形			●				15	―	不明
	講堂跡(SB100)南側	左端(西側)	円形			●				15	―	不明
	講堂跡(SB100)南側	中央右(東側)	円形			●				15	―	不明
	東面回廊(SC060)東扉口(SX065)	左(北側)	円形			●				8	―	5
	東面回廊(SC060)東扉口(SX065)	右(南側)	円形			●				8	―	不明
	北面回廊(SC080)東端扉口(SX666)	左側	円形			●				9	―	4
	北面回廊(SC080)付近	不明	円形			●				15	―	4
西隆寺	東門(原位置)	右側	円形			?				6.8	―	不明
	東門(遊離)	不明	不明	不明						不明	不明	不明
古大内遺跡(賀古駅家跡)	大歳神社境内②	左側	長方形						●	12	14	不明
	大歳神社境内①	右側	長方形						●	12	13	不明
落地飯坂遺跡	西門(SB800)	左(北側)	方形						●	10	10	不明
	西門(SB800)	右(南側)	方形						●	10	10	不明

※ 穴の形態に歪みのあるものは平均的な数値を示している。

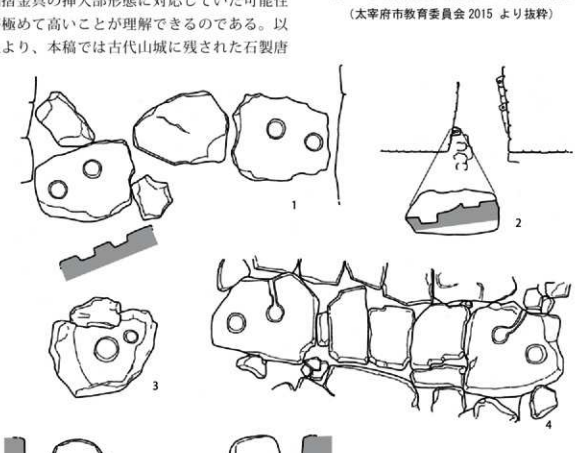


1：太宰府口城門例　2：水城口城門例　3：坂本口城門例　4：宇美口城門付近採集（宇美町歴史資料館展示例①）
5：宇美口城門付近採集（宇美町歴史資料館展示例②）　6：北石垣城門例　7：小石垣城門例　8：クロガネ岩城門例
9：宇美口城門付近採集（県民の森センター展示例）

図 10　大野城跡出土の石製唐居敷（福岡県教育委員会 2009 より転載、8 は筆者が実測）

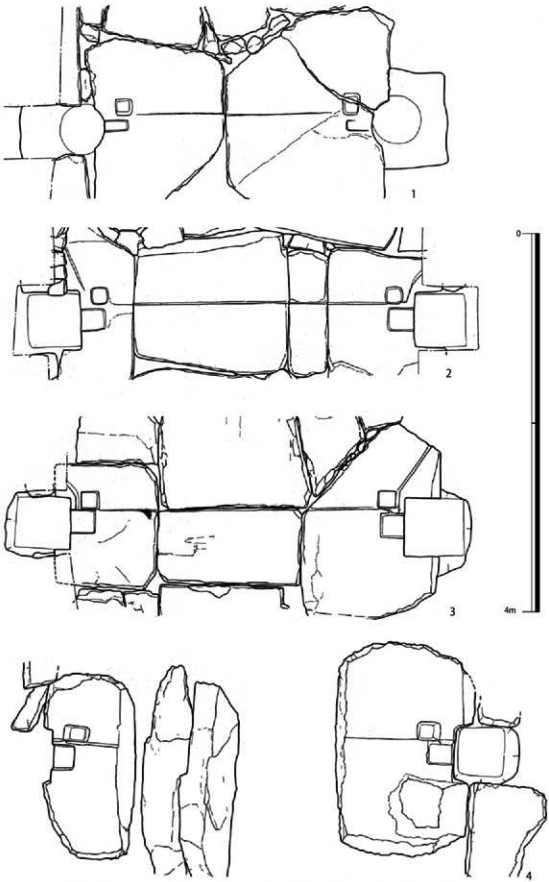
はいずれも磁性反応を示し、金具の装着痕跡である可能性が高い[2]。大野城跡クロガネ岩城門・宇美口城門採集（センター前展示例）の２例は軸摺穴が方形で、鞠智城跡堀切門例は円形である。鉄錆の付着は側壁中位の様々な場所にあり、軸摺穴の平面形態（円形か方形か）にかかわらず、軸摺金具の軸摺穴への挿入部分は軸摺穴側壁と密着していたと考えられる。このことより、軸摺穴の形状は軸摺金具の挿入部形態に対応していた可能性が極めて高いことが理解できるのである。以上より、本稿では古代山城に残された石製唐

図 11　大野城跡原口城門出土の石製唐居敷
（太宰府市教育委員会 2015 より抜粋）



1：金田城跡二ノ城戸門例　2：金田城跡三ノ城戸門例　3：金田城跡ビングシ門例　4：金田城跡南門例
5：基肄城跡東北門例

図 12　金田城跡・基肄城跡出土の石製唐居敷（東亜考古学会 1958、鏡山 1968、美津島町教育委員会 2002・2003、対馬市教育委員会 2008 より再トレース）



1：鬼ノ城跡東門例　2：鬼ノ城跡西門例　3：鬼ノ城跡北門例　4：鬼ノ城跡南門例

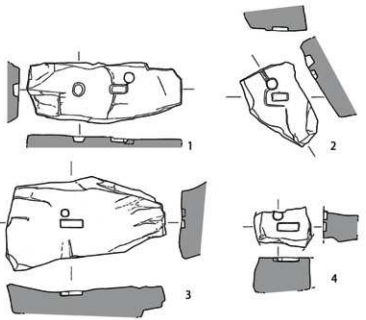
図 13　鬼ノ城跡出土の石製唐居敷（総社市教育委員会 2005・2006 より抜粋）

居敷の軸摺穴の形状についても検討対象として加えることとする。

古代山城出土の唐居敷はそれなりに資料数が存在する（成・車1993）。しかし、同様に古代に作られたことが明らかな、古代山城以外の遺跡から出土した石製唐居敷も存在する。こうした資料の中には暦年代を推定できるものが含まれており貴重である（向井1999）。本稿では、これらについても検討の俎上に載せることとしたい。

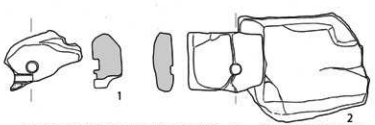
②軸摺穴の検討

表２に列島出土の古代の石製唐居敷を集成し、図 10 ～ 18 に示した。軸摺穴の可能性のある小ピットのみが残されている例も数点あるが、方立穴や主柱用加工がなくまた遺構から遊離している場合石に掘り込まれた小ピットのみではこれを軸摺穴としてよいか疑問が残る。また図面あるいは写真がなく詳細が不明なものも含めている。集成表では可能性があると指摘されたものをすべて含み、管見に触れる限り 71 例が集成できた。内訳は古代山城出土例が 35 例、水城跡で 4 例、寺院跡出土例が 17 例、残りは官衙・都城出土例である。



1：東門例　2 新家氏宅例　3：西門東側例　4：児玉氏宅例

図 14　水城跡出土の石製唐居敷（九州歴史資料館 2003 より抜粋）



1：川原寺講堂前堰中出土（推定川原宮跡）例　2：川原寺西脇回廊例

図 15　川原寺跡出土の石製唐居敷（奈良文化財研究所 1960 より抜粋）

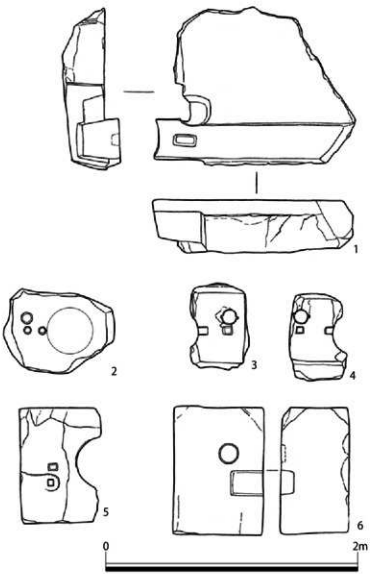
これらは、その形状からいくつかの類型に分けることができる。本稿ではまず、大別類型として平面形状が円形または方形で分類した。円形のものをⅠ類、方形のものをⅡ類とする。Ⅰ類より検討していく[3]。

Ⅰ類　平面形状が円形の軸摺穴である。断面形状はほとんどが壁が直立していて底部はわずかに丸みを帯びた平面、深さは直径よりも浅い。その中で、例外として壁から底部にかけて丸みを帯びたお椀状を呈するものとして大野城跡原口城門例の２例を挙げておく（太宰府市教育委員会 2015、図 11）。高句麗の古代山城に類似例があるが高句麗の事例は上に一回り小さなお椀状の鉄製軸摺金具が嵌っているものがある。原口城門例は出土時の筆者の観察では鉄錆の痕跡はなく、内面に回転擦痕が認められたことから、軸摺金具が用いられなかった可能性がある。門自体も大野城跡のほかの門跡と比べ規模が小さく構造が簡易的で、作られた時期や性格がほかの城門と異なる可能性がある。ここでは一応Ⅰ－３類とするが、例外的な事例として以下の分析からは除外したい[4]。

Ⅰ－３類を除くⅠ類の軸摺穴のうち、法量が判明するものについて直径と深さの相関を散布図に示した（図20）。やや分布にばらつきはあるが、大きくみて、直径が大きく深さも深い一群と、直径が小さく深さも浅い一群に分けられよう。前者には古代山城出土例の大半が含まれ、後者には寺院跡出土例の大半が含まれることから、おおよそこの分離は妥当性があるとみられる。大きい方をⅠ－１類、小さい方をⅠ－２類とする。古代山城に用いられ、攻撃に耐えるよう頑丈に作られたであろうⅠ－１類が大きく、防御機能をあまり想定する必要がない寺院跡に用いられたⅠ－２類が小型であるのは自然ではある。官衙・都城跡例が双方にまたがるのは、それぞれの施設により門・扉の頑強さをどこまで求めるのかが異なるためではなかろうか。

これら軸摺穴Ⅰ類の細分類型と軸摺金具との対応関係であるが、軸摺穴Ⅰ－１類が出土した２例のうち、基肄城跡例は軸摺穴Ⅰ－１類、山田寺跡例は同Ⅰ－２類に分類される。このことと軸摺穴・軸摺金具の形状から、軸摺穴Ⅰ類は軸摺金具Ⅰ類に対応する類型であり、施設の性格・門の規模等によって大きさが使い分けられた結果、細分類型として軸摺金具と軸摺穴の双方に１・２類が存在するとみてよいだろう。

Ⅱ類　次にⅡ類の検討を行う。大半は平面形状は正方形をベースとしてやや長方形気味になるものを含むが、いずれも平面一辺の長さ



1：藤原宮西面中門　2：平城宮内裏東方官衙西門
3・4：平城宮東南隅大溝　5：平城宮東面大垣
6：平城京羅城門（大和郡山城天守基壇石垣に転用）
7：平城京羅城門（川底出土）

図16　藤原・平城京出土の石製唐居敷（1 ～ 5 は筆者が実測、他は各報告書より転載）

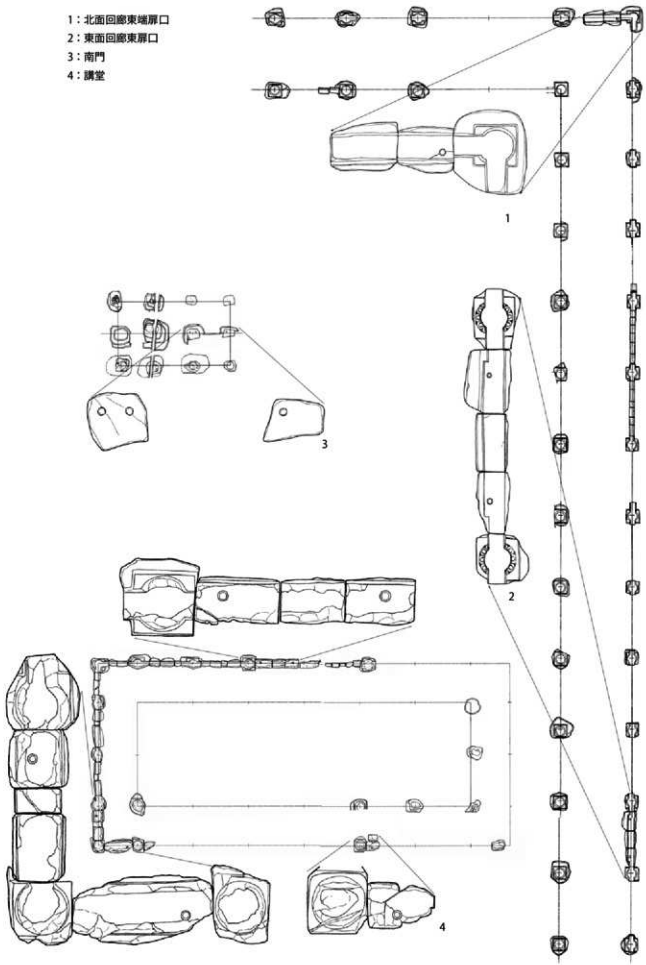


図 17　山田寺跡出土の石製唐居敷（奈良文化財研究所 2002 より転載）

よりも深さの方が大きい。この中で、いずれも兵庫県にあり山陽道の駅家跡に比定される加古川市古大内遺跡（加古駅家跡）出土例（兵庫県立考古博物館 2009）・赤穂郡上郡町落地飯坂遺跡（野磨駅家跡）出土例の各２例（上郡町教育委員会 2006）は、平面形状が長方形で深さが極めて浅い例として例外的な存在である（図 19）。これらをここではⅡ—3 類とし、例外的な事例として以下の分析からは除外したい[5]。

図 18　西隆寺跡出土の石製唐居敷
（西隆寺調査委員会 1976 より転載）

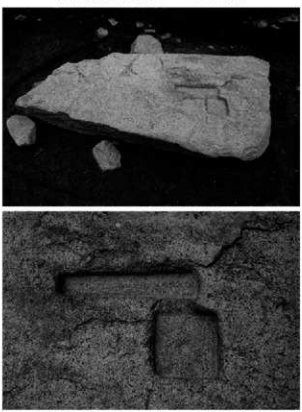


図 19　落地飯坂遺跡出土の石製唐居敷
（上郡町教育委員会 2006 より転載）

Ⅱ—3 類を除くⅡ類の軸摺穴のうち、法量が判明するものについて直径と深さの相関を散布図に示した（図 21）。Ⅰ類よりも遺跡ごとのまとまりが強く出るが、大きくみれば平面形状が大きくて深さのある古代山城出土例と、小さくて浅い官衙・都城跡出土例に二分できる。前者をⅡ－１類、後者をⅡ－２類とする。以下、それぞれの軸摺金具との対応関係について詳しくみていく。

軸摺穴Ⅱ－１類の特徴はその深さにある。開口部の平面形態は狭めの正方形から大きめの長方形気味のものまでばらつきがあるが、いずれも深さが 14㎝以上と、ほかの軸摺穴類型と比べて明らかに深い。前述のように、平面形態が円形ではないこの類型が入り枘構造の回転軸に対応する可能性は極めて高いが、その場合回転軸部分は唐居敷の上に突出する必要がある。とすれば、軸摺金具の長さは少なくとも基部の長さに突出する回転軸部分を加えたものとなる。基部の長さは基本的に軸摺穴の深さと対応関係にあるはずであり、軸摺穴Ⅱ－１類に対応する軸摺金具は基部が長い立方体であることになる。これはまさに、大野城跡北石垣城門で軸摺穴Ⅱ－１類に嵌装された状態で出土した軸摺金具Ⅱ－１類の特徴と合致する。したがって、軸摺穴Ⅱ－１類には軸摺金具Ⅱ－１類が対応することとなる。

軸摺穴Ⅱ—2 類の特徴については、該当する２例を詳しく見ながら検討したい。まず平城宮東面大垣出土（推定平城宮東門）例を見よう。本例については、概報に簡易な実測図が掲載されているだけであった（奈良文化財研究所 1992）ため、奈良文化財研究所の協力を得て実測調査を行った。図 16 － 5・図 22 をみると、小さな方形の軸摺穴の周囲に、一回り広く円形に段を削りだすとともに、その段につくように横方向に直線的に伸びる段も削り出されている。前者は、軸摺金具を嵌装する際の固定用の掘り込みとみられるが、同様の掘り込みを持つ軸摺穴は韓国の特に旧新羅領域の山城においてままみられるもので

あり（図 23）、形状から見て軸摺金具Ⅱ－２類を嵌装する際に鐏状部を収めるための加工であろう。なお、平城宮東面大垣例にみられる横方向の直線的な段は蹴放し部に施された扉止めとみられる。

もう一例の大宰府政庁南門例（九州歴史資料館 2002）については、鏡山猛氏による報文が参考となる。氏の報告を見ると、文中に特に言及はないが、掲載された実測図（図 24 右）には方形の軸摺穴の周囲に一回り大きな円形の線が認められる。氏が観察した当時、何らかの痕跡がここに残されていたものとみられる。氏による掲載写真（図 24 左）を見ると不明瞭ながら変色部があるようにも見える。現在この痕跡はすでに確認できなくなってしまっていることから、平城宮東面大垣例とは異なり、掘り込みのような加工ではなく、金具が接触していたことによる変色（あるいは非変色）の範囲を示したものではなかろうか。となれば、本例に嵌装された軸摺金具にも、基部の上に円形の鐏状部が存在した可

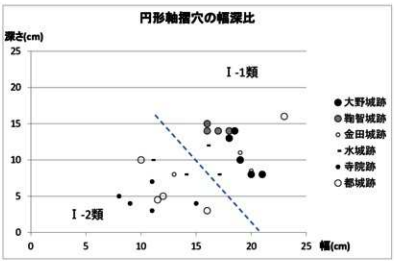


図 20　円形軸摺穴のサイズ・深さ分布

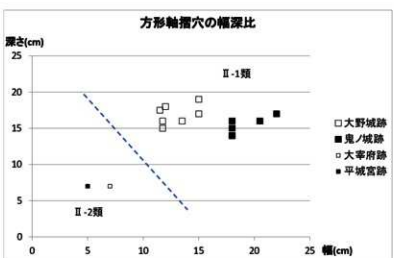


図 21　方形軸摺穴のサイズ・深さ分布

図22　平城宮東面大垣出土の石製唐居敷
（筆者撮影）

図23　三年山城西門の石製唐居敷
（筆者撮影）

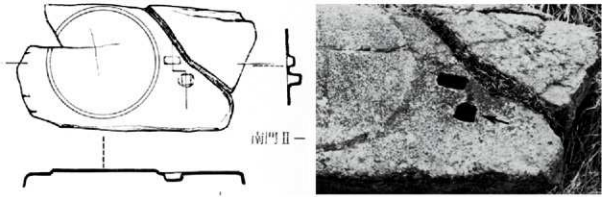


図24　鏡山氏調査時の太宰府政庁南門出土石製唐居敷

能性が高いことになる。こうした円形の鏡状部を持つ軸摺金具は半島出土の軸摺金具Ⅱ－2類が該当するものであり、基部形状も考慮に入れると、列島出土の軸摺穴Ⅱ－2類に適合する軸摺金具はⅡ－2b類とすることができるのである。

5．軸摺金具各類型相互の関係

最後に、軸摺金具相互の関係、特に時期と系譜について推測を交えつつ検討しておきたい。

まずⅠ類について検討する。Ⅰ類については出土例2例がともに製作年代が比較的はっきりしている資料である。

Ⅰ－1類、基肄城跡東北門出土例であるが、基肄城の築城記録は日本書紀に天智3年（665）と記されている。出土土器などからもこれに矛盾する資料はない。665年が築城の発議なのか完成年なのかは今後も検討が続くであろうが、いずれにせよ7世紀後葉の範疇から外れるものではなかろう。東北門が新設城門または改築されており軸摺金具が築城期より新しい可能性もあるが、同時期の築城である大野城跡では築城期と推測される太宰府口城門Ⅰ期で基肄城東北門唐居敷の軸摺穴と同じ類型（Ⅰ—1類）が用いられており、水城口・坂本口などで同じ類型の軸摺穴がみられること、やはり同時期の築城とされる鞠智城跡でも同じ類型の軸摺穴がみられることなどを総合的に考えれば、Ⅰ－1類軸摺穴・Ⅰ－1類軸摺金具は天智期の朝鮮式山城に広く用いられた類型とみて大過なかろう（小澤2014c）。その後であるが、金具こそ出土していないものの軸摺穴Ⅰ－1類は平城京や水城跡で広く用いられており、7世紀後葉までには列島で出現していて、その後9世紀以降にまで広く採用された類型と考えられる。

Ⅰ－2類、山田寺跡北面回廊例であるが、山田寺跡は蘇我倉山田石川麻呂（生年不詳—649）の発願により飲明13年（641）に建立が開始され、天武14年（685）には本尊の開眼供養がおこなわれていることから、このころまでには大半の施設が建設されていたものとみられる。したがって7世紀中葉～後葉に位置付けられる。この類型に対応する軸摺穴Ⅰ－2類をみると、川原寺講堂前濠中出土唐居敷（奈良文化財研究所1960）が川原寺の下層遺構である推定川原宮（斉明元年（655））に用いられたものと考えられている。川原宮は1年ほどの仮住まいであり唐居敷が専用に作られたものかは疑問もあるが、以前のものを転用したにしても、少なくとも655年以前のものであることは間違いない。一方存続幅であるが、神護景雲元年（766）に称徳天皇の発願により建立が開始された西

隆寺でも用いられている（西隆寺調査委員会 1976）ことから、少なくとも 8 世紀中葉以降までは存続したことが知られる。

よって、軸摺金具Ⅰ類は 7 世紀中葉に列島で出現し、建物の規模や構造などに応じて大型の 1 類と小型の 2 類が選択されつつ、9 世紀代以降まで用いられた類型であることが知られる。

次にⅡ類について検討する。Ⅱ類の軸摺金具は列島では 1 類のみが出土しており、Ⅱ－2a・b 類は半島のみで確認されているが、軸摺穴の形状から列島でも使用されたとみられる。各類型ごとに軸摺穴を参考にしつつみていこう。

Ⅱ－1 類は大野城跡北石垣城門で出土している。大野城跡は日本書紀に天地 3 年（665）の築城が記されているが、本例をそのまま築城時のものと考えるにはやや躊躇される状況がある。大野城跡太宰府口城門においてはⅡ期城門（8 世紀初頭、礎石建物）の円形柱座を伴う唐居敷軸摺穴にⅡ－1 類が採用されている一方、同じくⅡ期城門の蹴放しに用いられている石材のうち中央のものは、半円形の主柱刳り込みとⅠ－1 類の軸摺穴、方立穴が掘り込まれており、掘立柱構造の太宰府口城門Ⅰ期建物に伴う唐居敷と考えられている（図 10－1）。すなわち、ここにおいて軸摺穴Ⅰ－1 類が同Ⅱ－1 類に先行する関係を持つことが示されているからである。

問題は、軸摺穴Ⅰ－1 類とⅡ－1 類の先後関係がこの例に限ったことなのかどうか、すなわちⅠ－1 類の初現が 7 世紀中葉なのに対し、Ⅱ－1 類の初現がいつ頃になるのかという点にある。両者がしばらくの間併行的に採用されているならば、太宰府口城門ではたまたまⅠ－1 類が先に、Ⅱ－1 類がのちに採用されたのであり、ほかでは逆もありうるという可能性も考えられるからである。そこで、両形式の軸摺穴が併用される唯一の例である大野城跡において、その在り方を具体的に見てみよう。

まず北石垣城門における理化学的な年代測定の結果を見よう。門道床面盛土中より出土した炭化物を年代測定した結果、2σ（95.4％）の確率で西暦 662 ～ 778 年、1σ（68.2％）の確率で 675 ～ 728・735 ～ 772 年となった（図 25）。築城期は 2σの確率ではぎりぎり含まれるが、1σでは完全に範囲外となり、北石垣城門の構築は築城時よりも新しい可能性が高い（小澤 2014）。

もう一つの手がかりがある。大野城跡の 9 つの城門のうち、軸摺穴の形状が判明している 7 つのそれぞれにおいて、軸摺穴Ⅰ－1 類とⅡ－1 類のどちらが採用されているかを図 26 に示した[6]。一見して、Ⅰ類が南側に、Ⅱ類が北側に多いことがわかる。築城期の城門において北と南で異なる軸摺金具を採用したと考えるよりは、北の城門と南の城門で構築時期が違い、それに応じて採用された軸摺金具の形式が異なると理解する方がより合理的であろう（小澤 2015）。

さて、Ⅰ類軸摺金具・軸摺穴とそれに採用されている「出枘構造」の軸摺部形式が、7 世紀中葉から 9 世紀以降にまで数多く採用される列島における主たる軸摺部構造であるのに対し、Ⅱ－1 類軸摺金具とそれに対応する軸摺穴は列島において大野城跡と鬼ノ城跡でのみ確認される特異な存在である。特に重要なのは、本類がⅠ類と異なり、「入り枘構造」という特殊な構造を持つ点である。数は少ないが、縄文時代～古代の木製扉の出土例を見るとその多くが出枘構造を持つのに対し、入り枘構造のものはほぼみられない。一方、韓国で出土している軸摺金具Ⅱ（－2a・b）類はすべて入り枘構造であり、これが半

島三国時代における一つの典型的な軸摺部構造であったと考えられる。さらに、古代山城自体が半島の築城技術を移入して構築されたもの出ることを踏まえれば、Ⅱ類軸摺金具・軸摺穴で採用された入り枘構造は、列島における内在的な発展ではなく、半島より渡来したものであり、その祖型がⅡ－2類にあることは疑う余地がなかろう。ここで一度、Ⅱ－2類についてみておこう。

Ⅱ－2類の出土例を見ると（表1）、忠州北道に3遺跡が集中するほか、京畿道に1遺跡、慶州北道に1遺跡があり、いずれも韓国中部から中西部にかけての地域で見つかっている[7]。この範囲は時代にもよるがおおよそ新羅が主に領有した地域に含まれる。すなわち、Ⅱ－2類は現状では新羅地域において採用されていた軸摺金具である可能性が高い。入り枘構造の城門扉回転部は新羅の系譜に連なる技術と考えられる[8]。

さらに、Ⅱ－2b類のうち時期がわかるものは今のところ統一新羅期以降の城門に付属する。列島でもⅡ－2b類に対応する軸摺穴Ⅱ－2類に属する平城宮東面大垣例・大宰府政庁Ⅱ期南門例の2例はいずれも8世紀初頭に属し、Ⅱ－2b類が統一新羅成立後の出現である可能性を補強する。

Ⅱ－1類とⅡ－2a・b類の関係であるが、Ⅱ－2a類の基部が平面円形で突帯を持つこと

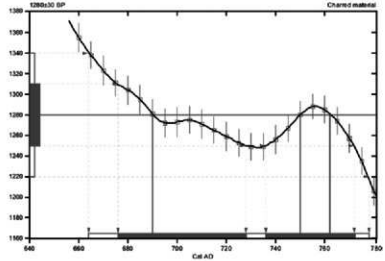


図25　北石垣城門門道床面盛土中出土炭化物の
C14 年代測定結果（小澤2014b より転載）

図26　大野城跡における軸摺穴Ⅰ－1類・Ⅱ－1類
の分布（小澤2015 より転載）

からおそらく木製の部材に掘り込まれた軸摺穴に挿入された可能性が高いのに対し、Ⅱ－1類とⅡ－2b類はともに基部の平面形状が方形で、また双方とも石製唐居敷に掘り込まれた軸摺穴に挿入された状態で出土した事例が見つかっていることから、Ⅱ—1類の祖型はやはりⅡ—2b類に求めるべきであろう。かつ、Ⅱ－1類軸摺金具・軸摺穴の双方が列島でしか見つかっていないことから、この類型は列島で生み出された可能性が極めて高い。事実、大野城跡北石垣出土例は、理化学的分析により、国産の砂鉄原料を用いて作られた可能性が高いことが指摘されている（大澤・小澤2008）。おそらく、Ⅱ－1類はⅡ－2b類を祖型として、列島における鉄鋳造技術の黎明期における未熟な技術的制限の下で、円盤状鐏部という構造上複雑な部分を省略する形で成立し、省略された鐏部の機能－金具のがたつきを抑え安定性を増す－を補うため、基部を太く、長い形状に改変したのではあるまいか。その後8世紀初頭前後になって列島においてもⅡ－2b類が生産されるようになるか、あるいはⅡ—2b類そのものが持ち込まれて、平城宮跡や大宰府跡で使用されたのであろう。

なお、Ⅱ－Ⅰ類軸摺金具やこれに対応するⅡ－1類軸摺穴は、大野城跡北側城門群などのほかは鬼ノ城跡で採用されるのみである。このことから、本類型は極めて短命に終わった可能性が高い。同様に、Ⅱ－2類軸摺穴も8世紀初頭のごく一時期のみにみられるものであり、Ⅱ－2b類軸摺金具も列島での使用はごく短期間であったものとみられる。

6．おわりに

以上、列島古代山城出土の2例の軸摺金具について、半島出土例や金具を嵌めるための軸摺穴などを補足資料として用いつつ、検討を行ってきた。その結果、基肄城跡東北門で発見されたⅠ－1類軸摺金具は、現在のところ系譜は不明ながら[9]、7世紀中葉前後に列島で出現し、大野城などの朝鮮式山城で広く用いられるとともに、その小型版であるⅠ－2類とともに目的に応じて使い分けされながら9世紀以降まで継続的に寺院や官衙・都城で採用されたこと、その一方で大野城跡北石垣城門で出土したⅡ－1類軸摺金具は、7世紀後葉～末のごく短期間に用いられたもので、その系譜は統一新羅の軸摺金具Ⅱ—2b類に求められることを指摘してきた。

以上の結論より、いくつかの興味深い推論が可能になる。ひとつは文中にも述べたように、大野城跡で最近次々と発見された北側の城門群が7世紀後葉～末前後（統一新羅成立以降、8世紀初頭以前）の城の大規模な改築の中で増設されたものである可能性が高いことである。その意義については別稿を発表しておりそちらを参照されたい（小澤2015）。

もうひとつは、Ⅱ－1類が採用されたもうひとつの古代山城である鬼ノ城跡（総社市教委2005・2006）の位置づけについてである。Ⅱ－1類軸摺金具が7世紀後葉～末、少なくとも白村江の戦以後新羅との関係が改善し、新羅からの山城築城に関する情報が流入して以降、列島内で成立した形式であると考える以上、本類型を採用する鬼ノ城跡の4つの城門で出土した方形の軸摺穴は、いずれも朝鮮式山城の築造以後、8世紀初頭までの間に作られたと理解せざるを得ない。もちろん、この点をもって直ちに鬼ノ城跡の築城の時期を語ることができるものではない。城門の改築の可能性を考慮に入れる必要があるからである。しかし、大野城の改築時に用いられた技術が鬼ノ城でも用いられていることから、（改築時における）両古代山城の関係の一端がうかがえるように思う。今後、朝鮮式

山城と神籠石式山城の総合的な比較研究を進めるうえで、本論が一つの手がかりを提供することができるのであれば幸いである。

今回の発表内容については、大野城跡北石垣城門で鉄製軸摺金具を発見したことが一つの大きなきっかけになった。平成15年豪雨災害の復旧にかかる大野城跡の発掘調査では、大変多くの方々に現場に足をお運びいただき、様々な助言をいただいた。紙幅の都合もあり個別にお名前を示すことは控えるが、この場を借りて御礼申し上げたい。

また、鬼ノ城跡東北門における軸摺金具の発見は、熊本県教育委員会により平成25年度鞠智城跡特別研究に採用されたことがきっかけとなった。採用された一連の研究を通じて軸摺穴と軸摺金具の調査研究が大きく進展した。また、研究の期間中あるいはその成果について各所で発表を行うことを通じて、やはり多くの方々にご批判・ご助言をいただいた。あわせて御礼申し上げる。

日頃より大宰府研究・古代山城研究について意見を交わし、本論を練り上げる際にも多くの示唆をいただいた、福岡県教育委員会文化財保護課・九州歴史資料館の各氏に御礼を申し上げたい。

最後に、このような機会を与えていただいた熊本県教育委員会・歴史公園鞠智城温故創生館のみなさまに、御礼申し上げます。

註

(1) 山田氏は前者を雌金具、後者を雄金具としたが、この呼称にはやや違和感があり、本稿では外金具・内金具としたい。なお、以後上部金具についてもこの呼称を用いたい。ほか、一部の部位名称を変更している。

(2) 磁性反応は、磁石を近づけて確認した。大野城跡小石垣城門出土唐居敷軸摺穴にも同様の鉄錆が観察できるが、唐居敷に用いられた石材自体が磁性を持っていて上述の確認方法ではこれが磁性反応を持つかどうか確認できなかった。

なお、こうした厚みを持つ鉄錆のほかに、軸摺穴内壁にはしばしば上部に帯状の錆色変色帯が観察される。時にはこれらが金具の装着痕跡であると理解されることもあったようであるが、今回の観察の結果これらには磁性反応は認められず、また携帯型蛍光X線分析装置による簡易的な分析でも鉄分の含有量は石材自身と同程度かやや多い程度であって、これを金具の装着痕跡とはみなしがたい。これらが、唐居敷が置かれた状態で水平に帯状に付着する（斜めに長期間置かれていたものは斜めに帯状に付着する）こと、軸摺穴の上位に付着することから、唐居敷の石材中に含まれていた（あるいは軸摺金具によって残された鉄錆などから）鉄イオンが軸摺穴内部にたまった水に溶けだし、空気と接触する付近で酸化して石材の表面に付着して錆色を呈したものである可能性が高い。

(3) なお、検討に先立ち、可能なものについては軸摺穴に再加工が施されていないか実物を観察して検討し、再加工がおこなわれていたとみられる場合には再加工前の形状を復元するか、不可能な場合には計測値から外している。軸摺穴の再加工については一部を拙稿（小澤 2014a）で指摘している。併せて参照されたい。

(4) また、平城京東南隅溝出土の対となる形状を持つ2例（図16－3・4は、軸摺穴の縁に1対の小さな耳状の彫り込みを持つ。円形軸摺金具Ⅰ類が軸摺穴の内部で動かないようにするための工夫と考えられる。基本的な形状はⅠ類を大きく逸脱するものではないので、本稿ではこれもⅠ類に含めて取り扱いたい。

(5) なお、これらのうち古大内遺跡出土の2例については長方形の軸摺穴の底部に楕円形の浅いくぼみが観察されている。軸が回転することによる摩耗と考えられ、この軸摺穴には軸摺金具がはめられない状態のまま出納構造の回転軸が機能した状態があることを示す。ただし、軸摺穴が極めて浅くそのままでは軸が極めて外れやすい構造であること、また平面形状が長方形であることから、本来はこの軸摺穴に嵌る基部形状を持ち、上部に何らかの回転軸部分の形成された軸摺金具など（形式不詳）が嵌装されていたものと推測される。

(6) 原口城門例はⅠ－3類としており、例外的な存在と考えてここでは除外する。また観世音寺口城門では唐居敷がいまだ見つかっていない。

(7) このほか、最近全羅道でⅡ—2b類軸摺金具1例の発見があったと聞く。詳細は不明ながら統一新羅期のものとも聞き及んでいる。

(8) 本論では例外的な存在として扱ってこなかったが、Ⅰ－3類軸摺穴もまた独特の形状を持ち、これが高句麗山城に特徴的にみられることを合わせて考慮すると、半島では軸摺金具・軸摺穴が旧三国単位で異なる形状をしていた可能性もあろう。

(9) 朝鮮式山城築造時の状況、本類型が7世紀中葉には寺院で用いられており、仏教の列島への伝播と百済との関係が深いこと、また新羅や高句麗にはこれとは異なる類型の軸摺金具・軸摺穴が存在することなどを踏まえれば、この類型が百済地域で用いられていたものである可能性は極めて高い。しかし、残念ながら現在までのところ百済支配下の山城から軸摺金具は出土していないし、軸摺穴は数例あるが所属時期がはっきりしない。したがって、現状では百済地域における扉回転軸部構造は不明とせざるを得ず、Ⅰ－1類の系譜についても今後の検討課題とせざるを得ない。

参考文献

太宰府市教育委員会 2015『大野城跡－第40・45・45-2・48次調査報告書－』太宰府市の文化財125集

大澤正己・小澤佳憲 2008「大野城跡第46次調査（北石垣地区）C区域門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査」『大宰府史跡発掘調査報告書』Ⅴ（平成18･19年度）、九州歴史資料館

小澤佳憲 2007「特別史跡大野城跡を襲った平成15年豪雨災害と災害復旧事業について」『遺跡学研究』第4号

小澤佳憲 2008「北石垣城門と鉄製軸受金具について」『大野城と四王寺』（九州国立博物館トピック展図録）、九州国立博物館

小澤佳憲 2010「大野城跡における最近の調査成果」『古代文化』第62巻第2号

小澤佳憲 2014a「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第2号、熊本県教育委員会

小澤佳憲 2014b「大野城跡第40次・46次・49次調査出土炭化物の年代測定－土塁中出土炭化物の年代－」『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ』平成24・25年度、九州歴史資料館

小澤佳憲 2014c「基肄城跡東北門の唐居敷軸穴中に残された軸摺金具について」『九州考古学』89

小澤佳憲 2015「大野城の城門」『四王寺山の1350年－大野城から祈りの山へ－』九州歴史資料館

小澤佳憲・入佐友一郎 2009「山城と土木技術」『古代の福岡』（アクロス福岡文化史3）、海鳥社

鏡山猛 1968『大宰府都城の研究』、風間書房

上郡町教育委員会 2006『古代山陽道野磨駅家跡－落地遺跡飯坂地区ほか発掘調査報告書－』上郡町文化財調査報告4

韓林大学校博物館編 1990『揚州大母山城発掘報告書』韓林大学校博物館研究叢書Ⅱ(韓文)
キム ビョンヒ・ペク ヨンジョン 2006「清州父母山城」『韓国城郭学報』9(韓文)
九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』
九州歴史資料館 2009『水城跡』
熊本県教育委員会 1983『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第 59 集
西隆寺調査委員会 1976『西隆寺発掘調査報告』
沈陽市文物考古工作隊 2001「遼寧沈陽市石台子高句麗山城第一次発掘簡報」『考古』1998 年第 10 期(中文)
ソ スンフム・チョ ロクジュ 2006a「忠州山城北門址発掘調査概報」『韓国城郭学報』7(韓文)
ソ スンフム・チョ ロクジュ 2006b「忠州山城北門址発掘調査」『湖西地域文化遺跡発掘調査』(韓文)
総社市教育委員会 2005『古代山城　鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18
総社市教育委員会 2006『古代山城　鬼ノ城 2』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19
成周鐸・車勇杰 1993「韓日古代城門礎石初端」『古文化談叢』第 30 集
忠北大学校・中原文化研究院 2003『報恩三年山城　発掘調査報告書』中原文化研究叢書第 46 冊(韓文)
中原文化財研究院 2008『忠州山城北門址発掘調査報告書』中原文化財研究院調査報告叢書第 54 冊(韓文)
対馬市教育委員会 2008『古代山城特別史跡金田城跡Ⅲ－特別史跡金田城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書概報(南門)－』対馬市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
東亜考古学会 1953『対馬－玄海における絶島、対馬の考古学的調査－』
奈良文化財研究所 1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 9 冊
奈良文化財研究所 1965「昭和 39 年度平城宮発掘調査概報(第 19･21 次調査)」『奈良国立文化財研究所年報 1965』
奈良文化財研究所 1984「藤原宮西面中門地域の調査(第 37 次)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 14』
奈良文化財研究所 1992「東面大垣西方の調査(第 223-16 次調査)」『1991 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』創立 50 周年記念奈良国立文化財研究所学報第 63 冊
奈良文化財研究所 2010『第 13 回古代官衙・集落研究会報告書　官衙と門』奈良文化財研究所研究報告第 4 冊
兵庫県立考古博物館 2009「古大内遺跡発掘調査説明会資料」
福岡県教育委員会 1991『特別史跡大野城跡』Ⅶ(太宰府口城門跡発掘調査概報)
福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第 225 集
美津島町教育委員会 2000『金田城跡』美津島町文化財調査報告書第 9 集
美津島町教育委員会 2003『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』美津島町文化財調査報告書第 10 集
向井一雄 1999「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第 27 号
大和郡山市教育委員会 1972『平城京羅城門跡発掘調査報告(第一次～第三次発掘調査)』
山田隆文 2011「鉄製の門扉軸摺金具について」『勝部明生先生喜寿記念論文集』同刊行会
遼寧省文物考古研究所・沈陽市文物考古工作隊 1998「遼寧沈陽市石台子高句麗山城第一次発掘簡報」『考古』1998 年第 10 期(中文)

石材・石積・石垣からみた古代山城の築造工程と選地論

平尾 和久（糸島市教育委員会）

1．はじめに

大野城跡は平成15年の豪雨災害により、380か所を超える地点の被害を受け（重藤2006）、復旧や修理・復元工事に伴う事前の発掘調査が行われた。それらの成果は非常に大きく各報告書で公開されている（入佐・小沢編2010他）。

その後、鬼ノ城、基肄城跡や屋嶋城跡等でも石垣や城門の解体修理・復元工事が行われており、石垣そのものや石積みに関する新知見が出てきている。そこで本稿では、いくつかの事例を概観したのち、石材加工等いくつかの項目について検討していく。

2．石垣の解体修理・発掘調査事例

①酒船石遺跡（奈良県明日香村）

酒船石遺跡は平成4（1992）年に酒船石から飛鳥民俗資料館に至る散策道設置工事に伴い発見された遺跡で、以後、25次の確認調査を行い、平成16（2004）年に国史跡に指定された（第2・3図）。本遺跡の調査では出土遺物が少なく、時期の特定が難しいものの、遺跡の立地や石垣を構築していること、石垣石材に天理市豊田山附近で出土する砂岩を用いていることから、『日本書紀』斉明2（655）年の「宮の東の山の石垣」に相当する遺跡と想定される（相原編2006）。本稿の検討対象となる石垣は1A調査区等で良好に確認されている（第4図）。報告書の考察でも石垣構築過程について述べてあり（第5図）、以下、要約すると

【第1段階】丘陵の尾根頂部を平らに削平し、丘陵の斜面をテラス状に削り出す。

【第2段階】一層の単位が2～10㎝で、高さ4.5mまで版築盛土を行う。

【第3段階】石垣構築ラインの1.5m後ろまで、版築をL字状にカットする。

【第4段階】石英閃緑岩の基礎石（一辺60～80㎝、厚さ35㎝の加工石）を据え、裏込土を充填する。

【第5段階】砂岩切石（表面のみ削り上げ、裏面は打ち欠いた痕跡を残す）を積み上げ（第6図）、1段ごとに裏込土を充填。遺跡では4段目まで確認（垂直に立ちあがる）。以降、15段まで内傾しながら積み上げられたと想定。

となる（相原編2006）。石垣は標高130m付近を約700mの範囲で存在したと想定されている。なお、遺跡の性格としては、周辺の柵や溝、寺院と関連付けて飛鳥を守る羅城的施設のひとつとする見解もあったが（相原2004）、報告書では古代山城の類似点と相違点を以下のようにあげている。

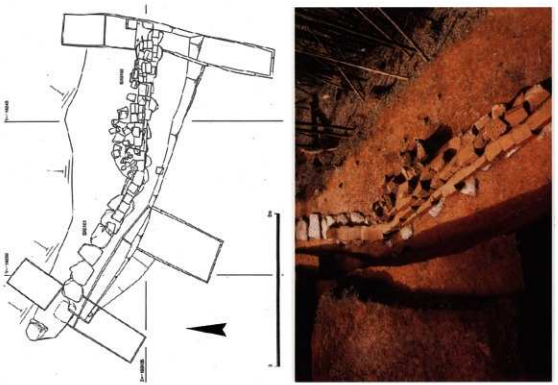
【類似点】

・版築積土の内托法。
・基礎石の加工法や並べ方。
・石垣が直線と折れの連続によって構成（鬼ノ城）
・石垣の前面がテラス状

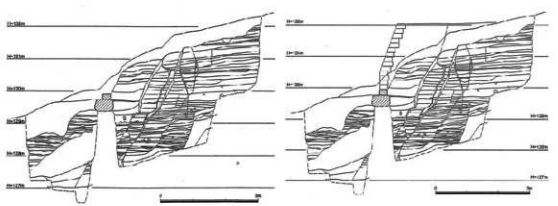
第１図　古代山城の分布

第２図　飛鳥地域遺跡分布図

第３図　酒船石調査区配置図



第４図　酒船石Ａ１調査区全体図



第５図　酒船石 A1 調査区土層断面図と復元図

第６図　石垣石材（砂岩切石）

・区画施設の外側に柱穴（17B 調査区のみ）
【相違点】
・内郭と外郭を明瞭に区別できる。
・石英閃緑岩の基礎石と砂岩切石の石垣（視覚的効果を狙う）。
・基礎石列は版築盛土の後に設置。

その結果、酒船石遺跡の性格として、「斉明～天武・持統朝における天皇祭祀を実践した巨大な祭祀遺跡」（相原編 2006）と判断されているが、後続する古代山城に繋がる技術的類似点も多く、築造時期が 7 世紀中葉に特定できることから、古代山城研究に欠かせない遺跡といえる。

②大野城跡（福岡県太宰府市・大野城市・宇美町）

大野城跡は先述のとおり、豪雨災害を契機として大規模な復旧工事等に伴う発掘調査が行われたが、少し前の平成 11（1999）年にも集中豪雨により尾花地区土塁と百間石垣に被害を与え、後者の石垣の一部が崩壊した。それを受けて翌平成 12 ～ 17（2000 ～ 2005）年にかけて百間石垣の整備事業が実施された（田上編 2006）。

百間石垣はこれまでに確認されている石垣 7 か所（百間石垣・北石垣・小石垣・大石垣・水ノ手石垣・屯水石垣・原石垣）のひとつで、糟屋郡宇美町の南西部に所在し、標高 200 ～ 280 m の四王寺山（標高 410 m。大城山、乙金山、大原山からなる小山塊）の北東部に築造され、宇美口城門に接続するものと考えられる。

石垣自体は平らなテラス面を設けた岩盤の上に、70 ～ 80 度の勾配で積み上げている。高さは谷部で 4 ～ 6 m、尾根部で 2 ～ 5 m を測る。用いられた石材は花崗岩で、その状態から①青みのある硬質の花崗岩、②表面にやや風化がみられる花崗岩の 2 種類がみられる。

百間石垣の断面は今日でも内野川に接する南端部で観察することができ、個々の石材の奥行きが 30 ～ 80cm あることが観察できる（第 8 図）。

解体修理前には個々の石材へのナンバリングと写真測量を行い、孕みの大きい箇所の解体、積み直しを実施した（第 13・14 図）。この中に 211 個の石材が用いられるが、その表面積及び奥行の組み合わせで下記の 8 類に区分される（平尾 2010）。

石材Ⅰ類；表面積が 500㎠未満で奥行が 30cm までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅠA 類と幅広長方形のⅠB 類に分類される。

石材Ⅱ類；表面積が 500㎠未満で奥行が 31cm 以上 60cm までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅡA 類と幅広長方形のⅡB 類に分類される。

石材Ⅲ類；表面積が 500 ～ 1200㎠未満で奥行が 30cm までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅢA 類と幅広長方形のⅢB 類に分類される。

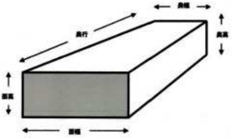
石材Ⅳ類；表面積が 500 ～ 1200㎠未満で奥行が 31cm 以上 60cm までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅣA 類と幅広長方形のⅣB 類に分類される。

石材Ⅴ類；表面積が 500 ～ 1200㎠未満で奥行が 61cm 以上の石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅤA 類と幅広長方形のⅤB 類に分類される。

石材Ⅵ類；表面積が 1200 ～ 2000㎠未満で奥行が 31 ～ 60cm までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅥA 類と幅広長方形のⅥB 類に分類される。

第7図　大野城跡遺構配置図

第8図　百間石垣



第9図　石材計測部位

面高	面幅	奥行	大きさ
a	A	い	~10cm
b	B	ろ	11~20cm
c	C	は	21~30cm
d	D	に	31~40cm
e	E	ほ	41~50cm
f	F	へ	51~60cm
g	G	と	61~70cm
h	H	ち	71~80cm
i	I	り	81cm~

第10図　石材分類表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計	
a	10	24	7	3						44	0.20
b	5	26	36	26	15	4	2		1	119	0.54
c	1	6	13	11	9	3	1			44	0.20
d		2		3	5			1	1	12	0.05
e										0	0.00
f										0	0.00
g										0	0.00
h					1					1	0.00
i										0	0.00
合計	20	58	56	43	30	7	3	1	2	220	1.00
	0.09	0.25	0.25	0.20	0.14	0.03	0.01	0.00	0.01		

第11図　面高と面幅の組み合わせ

分類	組合せ	表面積	い	ろ	は	に	ほ	へ	と	ち	り	合計	割合
			~10	~20	~30	~40	~50	~50	~70	~80	80~		
aA	10×10	100		5	4	1						10	0.05
bB	20×20	400	2	3	9	4	6	2				26	0.12
aB・bA	10×20	200		6	10	11	6					33	0.15
aC・cA	10×30	300			1	2	5					8	0.04
aD	10×40	400			1		2					3	0.01
cB・bC	20×30	600		2	4	5	12	13	3	2	1	47	0.19
cC	30×30	900			1	1	3	4	3			12	0.05
cD	30×40	1200			1	4	4				1	10	0.05
bD・dB	20×40	800		1	3	5	5	11	2	1		28	0.13
bE	20×50	1000			1	3	3	5	3			15	0.07
bF	20×60	1200				1		1		1	1	4	0.02
dD	40×40	1600				1	1	1				3	0.01
dE	40×50	2000		1		1	1	1	1			5	0.02
bG	20×70	1400						2				2	0.01
bH	20×80	1600					1					1	0.00
bI	20×80~	1600						1				1	0.00
cE	30×50	1500				2	1	3	2		1	9	0.04
cF	30×60	1800					1		2			3	0.01
eE	50×50	2500										0	0.00
cG	30×70	2100					1					1	0.00
dH	40×80	3200				1						1	0.00
dI	40×80+	3200				1						1	0.00
hE	80×50	4000										0	0.00
合計			2	18	35	43	52	44	16	4	4	218	1.00
割合			0.01	0.08	0.16	0.20	0.24	0.20	0.07	0.02	0.02	1.00	

石材2個は奥行不明

第12図　石材表面積と奥行きの組み合わせ

石材Ⅶ類；表面積が 1200 ～ 2000㎡未満で奥行が 61㎝以上の石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅦA類と幅広長方形のⅦB類に分類される。
石材Ⅷ類；表面積が 2000㎡以上で奥行が 31 ～ 60㎝までの石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅧA類と幅広長方形のⅧB類に分類される。
その他；表面積が 2000㎡以上で奥行が 30㎝までのもの。表面積が大きく奥行が短い石材は石垣の中で不安定な存在となるため、奥の部分が割れている可能性がある。特に百間石垣の場合、石垣のはらみが著しい箇所の解体修理を行っているため、石材そのものの破損の可能性も否定できない。

それぞれの個数はⅠ類 41 個、Ⅱ類 39 個、Ⅲ類 13 個、Ⅳ類 80 個、Ⅴ類 18 個、Ⅵ類 17 個、Ⅶ類 6 個、Ⅷ類 3 個、その他 1 個である。

また、表面積は 500㎡以下の石材で奥行が 60㎝を越えるものはなく、表面積が 2000㎡を超える石材で奥行が 30㎝未満のものはほとんどない。また、表面積が 500 ～ 1200㎡のものが 111 個と全体の約半分を占め、奥行も 31 ～ 60㎝のものを中心としつつバラエティに富むことから、石垣の主体となる石材は石材Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類であり、石垣石材の切出しや採集時にも大きさを選別していたことがわかる。

これら分類された石材の配置から石垣の構築過程は以下のとおりとなる。

【第 1 段階】石垣を構築する場所を選定し、急な斜面である岩盤を階段状に整形する。なお最下段の平坦面はやや広めに設定する。

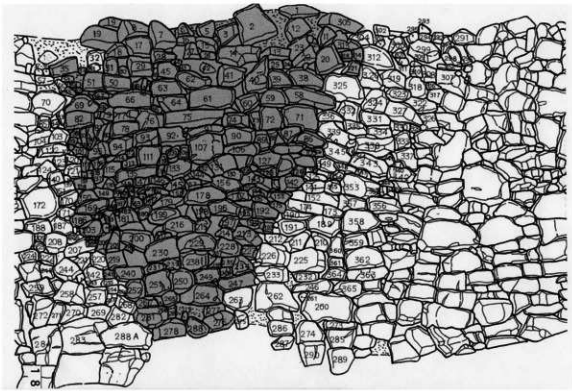
【第 2 段階】最下段の平坦面に奥行が 61㎝以上のⅤ類・Ⅶ類とともに表面積が 1200㎡以上のⅥ～Ⅷ類からなり、解体部分で満遍なく見られるⅣ類と、奥行きがなく表面積が小さいⅠ類を高さ調整用に配置している。

【第 3 段階】石垣の中段になると石材Ⅳ類の比率が増える。特に修理部分の 2 段目はほとんど石材Ⅰ類とⅣ類で構成されている。このことは 1 段目に大型石材を用い、石垣の安定性が高まっているため、2 段目に奥行がない石材を配したといえるだろう。その上の 3・4 段目になると石材Ⅳ類を基本的に用いながらも、アンカー的な役割を果たす奥行が長い石材を要所に配置することで、重心を山側に傾け、石垣が谷部に倒れこまないように工夫している。

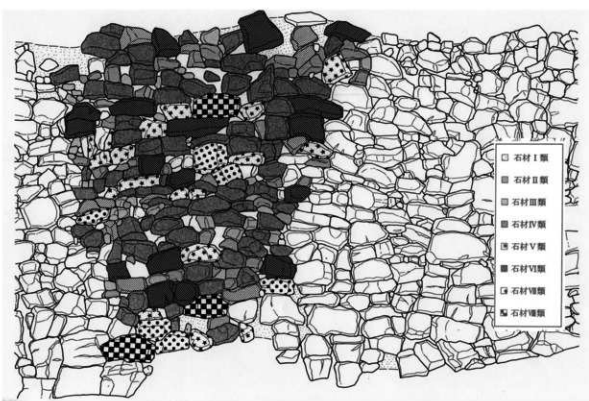
【第 4 段階】最上段は土砂等の流入により欠落している石材が多く、全体の様相は不明であるが、ここでも石材Ⅳ類を主体としながらも石垣の上端ということで見栄えのよい大型の石材Ⅵ類も配している。石材分類でその他とした石材 1 も石垣上端に配した化粧石と考えると奥行の短さも理解できる。

【第 5 段階】現地では確認できなかったが、石垣上端面を土で整地し、雨水が上面を流れるように加工する工程が必要となるだろう。

ちなみにこの範囲の積み直し作業は石垣の勾配や選別を行う棟梁的石工 1 名、石を動かしたりする作業員 2 名（重機含む）で行った。また、作業に際しては石垣の前面に作業用足場を設け、石垣の面と石材番号を確認しながら行ったが、棟梁的石工から「この石はここに入るようになっているが、本当にこの場所でいいのか？」と何度も尋ねられたことを記憶している。このことは修理箇所石積みが現代の石工が考える安定した石垣のイメージと異なるものであることを示す。反対に、崩壊箇所の復元時にはそういう質問もなく積み上がったが、完成後やや離れた箇所から見ると、築造当初の石垣と比べると、大分石垣の



第 13 図　百間石垣解体部分



第 14 図　修理部分の石材分類

雰囲気が異なる印象を受けた。

なお、復元の際には高さを調整する石材は裏込めの石材を適当に取り出し、打ち割って挟み込んだり、石垣の表に使うために持ち込んだ石材も、裏込めに転用されることもあった。そういう目で修理個所の裏込め石をみると、実際に石垣表面で使えそうな石材も散在しており、そのあたりは飛鳥時代と現代の石工に共通する施工法といえる。百間石垣の修理から復元される石材の流れは第31図のとおりである。

大野城跡では百間石垣のほかに、小石垣も解体修理が行われている。調査担当者によると「施行工程は、まず谷底に露出した岩盤に段切り造成を施し、次に大きさの不揃いな石を谷底の中央部に乱雑に配置してから、それを基礎に石垣を積み上げ」ると復元された（小澤 2010）。なお、谷に集まる水は最下層の乱雑に摘んだ部分を抜けたと判断されている。また、層状単位積とする高さ 0.8 ～ 1.0 mごとに石垣の上面を整え、そこを足場に積み上げる方法や凭せ掛けブロック積とする斜めに重箱積みを行う方法も取られたことも指摘されている（小澤 2010）。

③鬼ノ城跡（岡山県総社市）

鬼ノ城跡は1971年に高橋護氏により学会に報告された古代山城で、1978年に鬼ノ城学術調査委員会の範囲確認調査の結果、土塁や水門、土塁の切れ目（のちの城門）等が確認され、その後、総社市教育委員会、岡山県古代吉備文化財センターによる調査を経て、2001年より整備事業が開始され、今日に至る。これまで、調査成果は様々な形で報告されており（松尾編 2005、2006）、論点も多いが、本稿では、解体修理・復元が行われた第三塁状区間の高石垣の成果を中心に検討したい（第16図）。

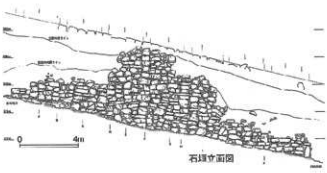
鬼ノ城の城壁は全長2,800 mを測るが、石垣の区間は約250 mである。第三塁状間では約21 mの石垣が残されているが、すでに落石等で消失している部分が多く、現状では立面形が凸状に残されている。石垣の残りの良い箇所で、石垣の断面図が作成されており、それをもとに工程を復元する。

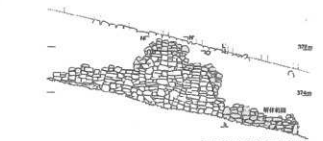
まず、地山を階段状に整形する。石垣構築部分の最下段は1 mほどしかないが、石垣前面の城外側敷石の範囲（約1 m）も含めると、約2 mの平坦地となり、石垣構築のための前面足場の設置も可能と考えられる。その後、内側から版築盛土を施し、石垣との関係がややわかりにくいが、石垣にみられる傾斜変換1と階段状地山整形の一段目、傾斜変換2と版築盛土上端がおおよそ対応することが確認できる。そのため、まず、石垣の最下段から4段目までを84°の傾斜で積み上げ、地山整形1段目とあわせる。その後、傾斜変換2まで版築と対応させるようにやや内側に傾けて石垣を積み上げる（傾斜73°）。その上には79°の傾斜で石材を積み上げる。傾斜変換2までは内側の裏込石が石垣表面から1.40 m程度内側まで確認されていたが、ここからは裏込石を2.4 m程度入れ込み、版築盛土の上にかぶせている。ただ、裏込石の上部に掘方が確認されているため、酒船石遺跡のように版築盛土をL字形にカットしたのち、裏込石を入れた可能性もある。

また、石垣では重箱積が約3 mごとに確認され、横目地もいくつか通ることから、作業単位と関わると想定されている（谷山 2011）。そういう面でみると、石垣の端にある石材160は工区を示す関係で、本来は横置きするべきものを縦置きした可能性も考えられる。

なお、解体された石材は個別に計測され、報告書に数値が記載されている（松尾編

第 15 図　鬼ノ城跡高石垣





第 16 図　鬼ノ城高石垣実測図、石垣断面図

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	合計	
a	**3**	**5**	**2**	1		1				12	0.08
b	**1**	**6**	**20**	9	7	6		3		52	0.34
c	**1**	**7**	**9**	13	8	16	2		2	58	0.38
d		1	3	1	11	3	1	2	1	23	0.15
e		1			2	2	1			6	0.04
f				2						2	0.01
g										0	0.00
h										0	0.00
i										0	0.00
合計	5	20	34	26	28	28	4	5	3	153	1.00
	0.03	0.13	0.22	0.17	0.18	0.18	0.03	0.03	0.02		

第 17 図　面高と面幅の組み合わせ

分類	組合せ	表面積	い ～10	ろ ～20	は ～30	に ～40	ほ ～50	へ ～60	と ～70	ち ～80	り 80～	合計	割合
aA	10×10	100		1	1							2	0.01
bB	20×20	400		1	1		1	1	1			5	0.03
aB・bA	10×20	200		1	2	2		1				6	0.04
aC・cA	10×30	300		1			2					3	0.02
aD	10×40	400				1						1	0.01
cB・bC	20×30	600	1	3	3	7	7	2		1	2	26	0.18
cC	30×30	900		1		2	2	1	1		2	9	0.06
cD・dC	30×40	1200		1			4	4	5	1		15	0.10
bD・dB	20×40	800			1		2	2	2	2	1	10	0.07
bE・eB	20×50	1000			1	2	1	1	1	2		8	0.05
bF	20×60	1200		1			3		1	1		6	0.04
dD	40×40	1600							1			1	0.01
dE	40×50	2000				1	2	2	4		1	10	0.07
bH	20×80	1600					1	1		1		3	0.02
cE	30×50	1500			1		2		1	1	3	8	0.05
cF	30×60	1800				1	2	3	5	1	3	15	0.10
eE	50×50	2500							1		1	2	0.01
dF・fD	40×60	2400				1		2	2			5	0.03
dG	40×70	2800								1		1	0.01
cG	30×70	2100			1	1						2	0.01
cI	30×80↑	2400				1	1					2	0.01
eF	50×60	3000						1		1		2	0.01
eG	50×70	3500							1			1	0.01
dH	40×80	3200					2					2	0.01
dI	40×80↑	3200						1				1	0.01
hE	80×50	4000										0	0.00
合計			1	10	11	19	32	22	26	12	13	146	1.00
割合			0.01	0.07	0.07	0.13	0.22	0.15	0.18	0.08	0.09	1.00	

石材7個は奥行不明

第 18 図　石材表面積と奥行きの組み合わせ

第 19 図　基肄城水門部復元

2005)。総数 153 個計測されており、奥行きまで計測されたものは 146 個である。これらを百間石垣の石材を分類した方法でみていく。第 17 図は石垣の面の高さと幅の組み合わせである。百間石垣の石材と同様に基本的に横長の石材を用いているが、高さが 30㎝を越えるものが 20%であり（百間石垣 5%）、横幅が 60㎝を越えるものが 8%（百間石垣 2%）と基本的に百間石垣のものより大型の石材を多用する傾向が読み取れる。第 18 図は面の面積と奥行きの関係を示したものである。まず、鬼ノ城の場合は 60㎝を越える奥行をもつものが 35%（51 個）で、百間石垣の 11%（24 個）とは様相を異にする。これは面の大きさとも関係するものである。また、百間石垣では面の表面積が 2,000㎠を越えるもので、奥行が 60㎝以上のものは確認されていないが、鬼ノ城では 7 点確認されており、この範囲の石材を新たに石材Ⅸ類として設定しておく。

石材Ⅸ類；表面積が 2000㎠以上で奥行が 60㎝以上の石材。将来的には表面形態が正方形に近いⅧA 類と幅広長方形のⅧB 類に分類される。

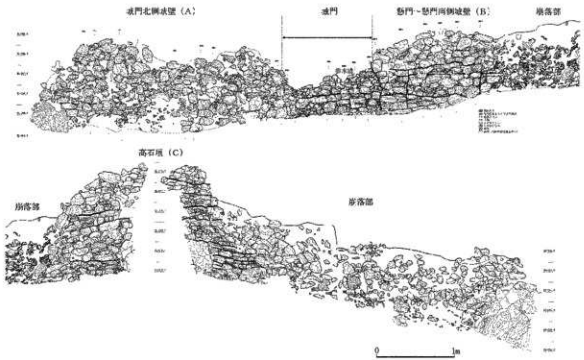
もちろん、百間石垣はある程度の面的に広い範囲の解体修理で、鬼ノ城は石垣の外縁部の解体修理なので、そこが石材の形状に差が出てくる原因かもしれないが、地域性や築城の時期的問題にも関わると考えられる。

なお、鬼ノ城が存在する鬼山城は花崗岩からなり、風化が進んでいるところも多い。鬼ノ城では石垣だけではなく、城門や城壁の内外に通路として敷石を並べるなど、多量の石材を用いているが、このような環境から基本的には石材の供給には問題はなかったものと考えられる。

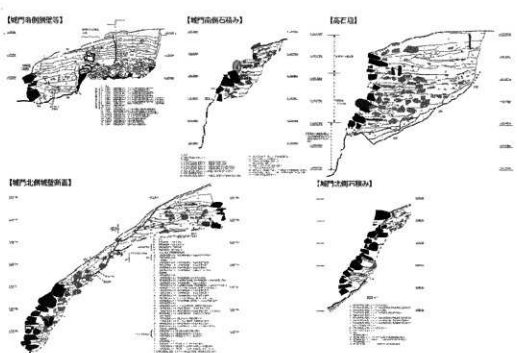
④基肄城跡（佐賀県基山町・福岡県筑紫野市）

基肄城跡は基山町と筑紫野市にまたがる基山（標高 404.5 m）とその東峰に全長 3.9㎞の土塁線を巡らせる古代山城で『日本書紀』によると 665 年 8 月に大野城跡、長門城とともに築かれたいわゆる朝鮮式山城のひとつである。これまでに確認された主な遺構として、土塁、石塁、門跡（4 か所）、礎石建物（約 40 棟）がある。近年、東北門の唐居敷軸摺穴から軸摺金具が報告され（小澤 2014）、南門にあたる水門部の解体修理が行われている（田中 2015）。

南門は城内で最も低い標高 165 mほどの地点に築かれている。ここには城内の谷水が集約された住吉川が流れており、花崗岩の野面積みによって夾築型の石塁が築かれている。その東端部には高さ 1.4 m、幅 1.0 mという大型の排水口をもつ。ただ、経年変化により東西端部など崩壊が進んだため、平成 21 年度より保存修理事業が実施され、現在、完成をみている（田中 2015）。解体修理の報告はこれからであるが、写真を見る限り、大野城跡百間石垣と同じように似通った面の石材でも、奥行きに長短の差があることが分かる。石塁の内部には栗石が詰まっているが、栗石にも大小があり、百間石垣でみられるような表面石材でうまく使えないものを栗石として用いたのかもしれない。また、表面部分も場所によって大ぶりの石材と小ぶりの石材を使い分けているようだ。この水門は解体修理・復元した範囲も広いため、今後の報告に期待したい。なお、解体修理、復元整備の事前調査で、これまで存在が知られていた大型の水門のほかに、新たに小ぶりの水門が 3 か所確認された[註1]（第 19 図）。



第 20 図　屋嶋城跡城門周辺石積み立面図



第 21 図　屋嶋城跡石垣断面図

⑤屋嶋城跡（香川県高松市）

屋嶋城跡は高松市の北東部に位置し、瀬戸内海に向かって鋭角に突き出た半島状を呈する屋島の山頂部分に位置する。平成 10（1998）年に平岡岩夫氏による石塁を中心とする外郭線の確認、平成 13 年には南西斜面外郭線の北端で城門が確認されたことにより、『日本書紀』天智 6（667）年 11 月条に記される屋嶋城の所在地が確定された。その後、平成 15 年には城門の調査、翌 16 年には南水門の調査が行われ、その性格や特徴が明らかにされつつある（山元 2008）。

平成 20 年からは整備工事が行われ、平成 27 年に城門部分の整備が完了し、一般に公開された。整備に関する報告はこれからであるが、渡辺誠氏によって城門整備時の所見等が示されているが、石垣の裏込めが土と礫混じり層であること、地山である岩盤を階段状に加工しようとする意図はあるが、スロープ状の整形に留まっていることなどが指摘された（第 20・21 図）（渡邊 2015）[註2]。

なお、屋島は「溶岩の周囲とその上部が開析されて形成された開析溶岩台地で、基盤が花崗岩、中腹から上部が凝灰岩、最上部に讃岐岩質安山岩が水平にの」る構造であり（山元編 2008）、屋嶋城が築かれた場所は安山石の部分に該当する。そのため、地山である岩盤の加工が難しく、大野城跡百間石垣で確認されたような地山の階段状加工が甘く、極端に言えば緩いスロープ状の加工に留まっている。このことは、古代山城築城に際し、城を築きやすい場所か否かという点は、必ずしも重視されたわけではないことを示すといえる。このことは、赤司善彦氏が指摘するマスタープランの問題にも関わるもので（赤司 2010）、項を改めて検討する。

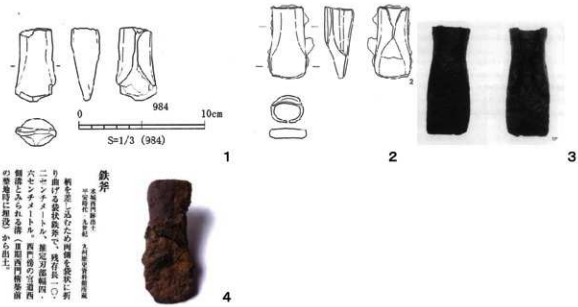
3．工具と運搬具

大野城跡百間石垣の復原・修理工事の際には第 22 図の道具を用いた。左側は金挺、上は金槌、下は鏨である。石垣の解体修理は、番号通りにそのまま石材を積み上げるイメージがあるかもしれないが、石材のすわりをよくするためには、上・下面を中心に鏨を用いた調整が必要であった。

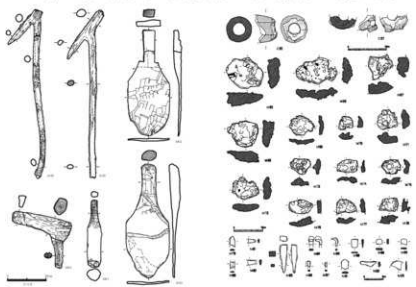
金槌と鏨は古墳の副葬品として確認され、鍛冶具として扱われる場合が多いが、松井和幸氏は鏨や金槌が単独で出土する場合は石材の加工具の可能性も視野に入れる必要性を指摘する（松井 1991）。また、時期は異なるが、北垣聰一郎氏は奈良県香芝市穴虫石切場遺跡から出土した袋状鉄斧をチョウナとして用いたと想定している（北垣 2003）。

実際に古代山城から出土したものとして、袋状鉄斧がある（第 23 図）。1 は鞠智城の貯水池跡から出土したもので、全長 5.8㎝、刃部幅 3.2㎝を測る。貯水池という性格からか、木製品とともに出土している（西住・矢野・木村編 2012）。2 は大野城跡竜水地区の土塁の埋土から出土したものである。刃部幅 4.5㎝を測る（入佐・小沢編 2010）。3 は鬼ノ城跡から出土したもので、第 1 水門と第 2 水門の間に設定した T 38 の埋土から出土した。全長 12.6㎝、刃部幅 4.6㎝を測る（松尾編 2006）。時期を特定できないが、北垣氏が想定するチョウナとしての利用も考えられる。また、水城西門傍の官道西側溝からも鉄斧が出土している（第 23 図 4）。時期はⅢ期西門構築前の整地時に埋没したとされるので 8 世紀代に位置付けられる。天平神護元（765）年に水城の修理を担当する修理水城専知官が置かれ、実際に東門付近で土塁の修理が行われ、丸瓦と平瓦を組み合わせた排水溝も新設

第 22 図　百間石垣修理・復元で用いた加工具



第 23 図　鉄斧（1：鞠智城、2：大野城、3：鬼ノ城、4：水城）



第 24 図　鞠智城出土木器　　第 25 図　鬼ノ城出土鍛冶関連遺物

されており、その際に用いられた可能性もあるだろう。

ただ、土塁や貯水池跡という出土地点を重視するならば、石材とともに大量に使用されたと想定される工事用木材や柱材の加工に用いられたことも多いと考えられ、両者の用途の違いは現段階では明瞭にできない。そのほか、水城からは斧柄と杭が多く出土し（杉原編 2009）、鞠智城跡の貯水池からは斧柄、鋤等が出土している（第 24 図）（西住・矢野・木村編 2012）。

また、鬼ノ城では城内に鍛冶関連遺構も確認され、羽口、鉄滓の他に、石切りの矢に類似するものや、小形の鑿の類が出土している（第 25 図）。すでに報告書でも指摘されているが、これらの工具製作のほかに工具の修理も行われた可能性がある（金田・岡本編 2013）。なお、古代山城で鍛冶関連資料（遺構・遺物）が確認されたのは鬼ノ城の他に大廻小廻山城（鉄滓）、永納山城（鍛冶炉＋羽口＋鉄滓）、怡土城（羽口）、鹿毛馬神籠石（鉄滓）、大野城（羽口＋鉄滓）、金田城（羽口＋鉄滓）、鞠智城（羽口＋鉄滓）がある（尾上・上椿 2013）。特に永納山城では金床石や炭置場の確認事例は注目される。このように古代山城と鍛冶の関連性は深く、古代山城築城・修理時にそれぞれ工具類の生産・修理が行われたと判断される。なお、金挺の出土例はないようで、おそらく堅くて粘りのある木の棒を用いたのだろう。

太宰府市を調査主体とする大野城跡 45 次調査は大石垣の原状復旧と里道、排水処理に関する確認を目的としたもので、土器、瓦のほかに木製品が出土している（井上編 2015）。第 26 図は明茶灰色砂層から出土したくびきである。角材を「へ」字状に屈曲させたような形状を示す。全面にケズリを施し、屈曲部の天地方向には断面長方形のほぞ穴を設ける。復元幅が 75.4㎝、高さ 35.3㎝を測る。くびきは牛や馬の背に取り付けるもので、耕運作業や荷物を牽引させるために用いる。時期は奈良時代を下限とするため、大野城築城、修理時、もしくは倉庫群への物資の搬入・搬出に用いた可能性が想定されるが、出土地点が大石垣の前面であることから石材の運搬等に利用したことも考えられる。ただ、百間石垣の場合は 1・2 人で動かせる石材を用いることが多い。

そのほか、出土例ではないが、水城の完成を聞いた動員された人々がもっこ共々へたり込んでしまい、その土が小高い丘になったとされる「父子嶋」「ひともっこやま」の伝説があるが、縄、竹、蔓などを網状に編んだ運搬用具であるもっこは水城だけでなく古代山城築城に際し大量に用いられたと考えられ、各遺跡からしばしば出土する長い棒状木製品はもっこ棒の可能性を検討する必要もあるだろう。ちなみに、現段階では確認できないが、鞠智城跡貯水池から丸められた蔓が出土しているが、これらともっこの関係性も興味深い。なお、棒状木製品は版築の為のつき棒に用いられた可能性もある（第 27 図）[註3]。

4．石材加工技術の画期と対象範囲の拡大

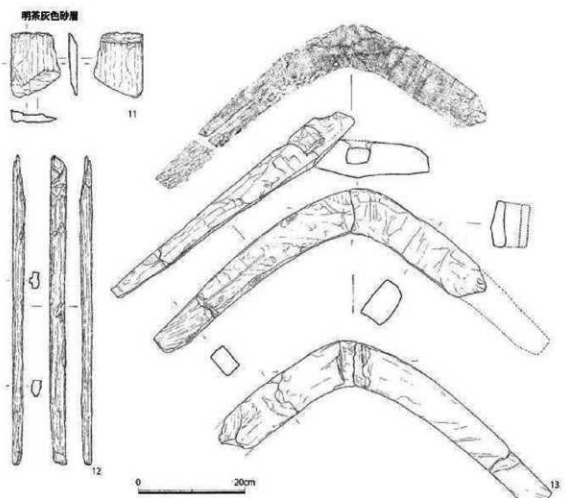
和田晴吾氏は古墳時代以降の通史的な石工技術について、土木、測量、石工技術（石棺）など古墳時代初頭にみられる第 1 次波及の技術、寺院造営、庭園造成技術に伴う花崗岩等の硬質石材加工技術などの飛鳥時代初頭にみられる第 2 次波及の技術、矢穴技法を主とする鎌倉時代初頭前後にみられる第 3 次波及の技術という、大きく 3 段階を想定した（和田 2006）。

本稿で検討した古代山城の石垣築造は第 2 次波及の技術を用いて構築されているが、大

大石垣
太宰府市教育委員会提供

大石垣木部材出土状況

石塁背後の堆積層中より出土した木製部材片である。加工材や自然木を使用して面的に置かれたような状態であった。石塁築造後のある時期に敷かれたことは確かだが、由来は不明である。



第 26 図　大野城跡大石垣出土木器

野城百間石垣では、石垣を積み上げる過程で加工された痕跡をもつ花崗岩も確認されている（第32図）。また、前段階の技術と比較すると、個々の古墳から寺院・庭園・城柵などへと、技術を投入する対象面積が増大することも特徴として挙げられる。

その契機となるものが飛鳥寺の造営であるが、城柵関係でみるならば、酒船石遺跡が挙げられる。酒船石遺跡に城柵としての性格を否定的にとらえる研究者も多く、報告書でも祭祀遺跡とされるが、相原嘉之氏が報告書刊行前に指摘したように周辺の丘陵にみられる柵などと関連付けると飛鳥を守る羅城的性格も考えられる（相原2004）。もちろん、酒船石遺跡と大野城跡等を直接比較すると、石垣に用いる石材等、相違点も多く存在する。しかし、地山を階段状に造成すること、その前面に版築を施すこと、版築の外側に石垣を構築することなどは、共通点と言えよう。

なお、酒船石遺跡の石垣の石材は基礎石に石英閃緑岩、石垣に砂岩切石を用いているが、この砂岩は『日本書紀』斉明天皇2（655）年「香山の西より石上山に至る。舟二百隻を以て、石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の東の山に石を累ねて垣とす。」にでてくる石上山（現天理市豊田山）から取り出した砂岩とされる。ちなみにこの築造に伴う民の怨嗟の声として「狂心の渠。功夫を損し費すこと、三萬餘。垣造る功夫を費し損すこと、七萬餘。」とあり、やや誇張された数字かもしれないが、膨大な人数が動員されたことわかる。動員という面からすると、人数は示されていないが、飛鳥板蓋宮の造営に東は遠江、西は安芸に至る広汎な地域から人を動員したことも注目され（654年）、7世紀中葉段階で広範囲の人を動員できる体制が整ってきたことが分かる。

山城造営に関しては、赤司善彦氏が指摘するように、より広域の北部九州から近畿に至る範囲で国土防衛のマスタープランともいえる山城の配置計画が策定された可能性が高い（赤司2010）。しかし、地山が安山岩という成形加工がしにくい場所に築かれた屋嶋城跡の事例が示すように、配置計画は現地踏査に基づいて山城の築き易さ等で判断されたものではなく、地形や交通路、最終的にどこを守るのか等々を考慮した上での選地であると考えられ、その後の造営に関しては、酒船石遺跡や飛鳥板蓋宮の事例でみたように大量の人員を動員するものであったであろう。

なお、『日本書紀』には百済の亡命官人とされる達率答体春初を長門国に派遣して城を築かせ（長門城）、達率憶禮福留・達率四比福夫を筑紫国に遣わして大野及び椽二城を築かせるとあるが、一つの城の築城に一人（もしくは1グループ）の亡命百済官人が派遣されたようにも読みとれる。そうすると、マスタープランによって選地されたのち、縄張り等の具体的な築城の指揮は亡命百済官人が行ったといえる。その指揮のもと石垣の裏側には栗石を入れるとか、版築の施し方等の半島系技法が導入されたものの、急を要するため個々の石材の積み上げ方等については石工の裁量も大きく、在来系の石工技術も多く用いられたと考えられる。このように古代山城は半島系技術と在来系技術を双輪として築かれたが、その用いられ方等については今後の検討課題であり、半島側の事例との比較も必要である。

このように、古代山城が築かれた7世紀中葉～後葉は事業計画の規模、動員する人員、調達する物資の量が飛躍的に増大した時代であることがいえる。

5．山城と後方支援

大野城や基肄城が築かれた665年から約一世紀後の756年から13年間かけて福岡市の西接する糸島市に怡土城が築かれる。その担当（専知官）は当初、吉備真備で、完成時には佐伯今毛人であったが、吉備真備が遣唐使として中国で兵学を学んだことから、怡土城跡はその学識の元に築かれたとされ、中国式山城ともよばれる。これまで、礎石建物の確認や土塁の崩壊等に伴う復旧に伴う調査が実施され、その成果は報告されているが（瓜生編2006）、他の古代山城のように計画的に実施した発掘調査とは異なるため、全容解明にはまだ時間を要する状況である。

しかし、糸島平野から早良平野へと抜ける日向峠を東に下った場所に位置する金武青木遺跡（標高約80m）の調査では、山裾斜面に2間×3間の両面庇付掘立柱建物を中心とする建物群、溜井、焼土坑、旧河道を利用した水場遺構が確認されている（第28図）。遺物は土師器（墨書含む）、須恵器（刻書・墨書土器・円面硯・転用硯含む）、木製品（木簡含む）のほかに、羽口、移動式竈、焼塩壺等があり官衙的性格を持つ遺跡からの出土品に似た傾向を示す（第29図）。また、9点の木簡の一つに「怡土城擬大領」「専当其事」「別六」等の字句の見えるものが含まれ、怡土城長官クラスから大宰府に向けて出された上申文書であると判断される。これらが金武青木遺跡で廃棄されていることから、性格が不明確だった官衙的建物群を含めて、当時の金武地区が「前時代からつづく鉄関連施設の中心地のひとつとしての役割を担いつつも、早良平野側からの通行の利便性から、国家防衛の最前線施設である怡土城の築城やその運営などを含め、糸島平野側への人や物資を供給する後方支援基地としての役割」を担った地域であると性格づけられている（加藤2012）。

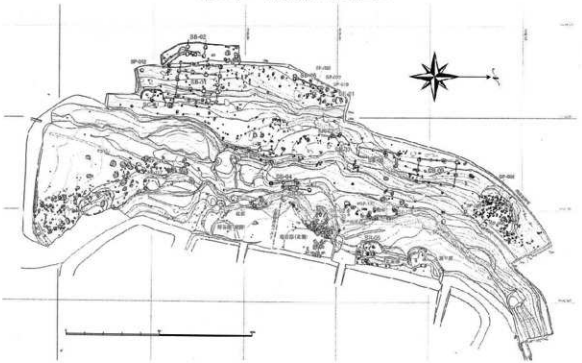
なお、大野城や基肄城、鞠智城のように築城以後、長期間にわたって維持・運営された山城には、怡土城における金武青木遺跡のような後方支援に当たる公的施設が必ず存在すると思われ、これらの解明も山城そのものの研究と同様に重要である。

6．古代山城築造に至るまでの段階設定

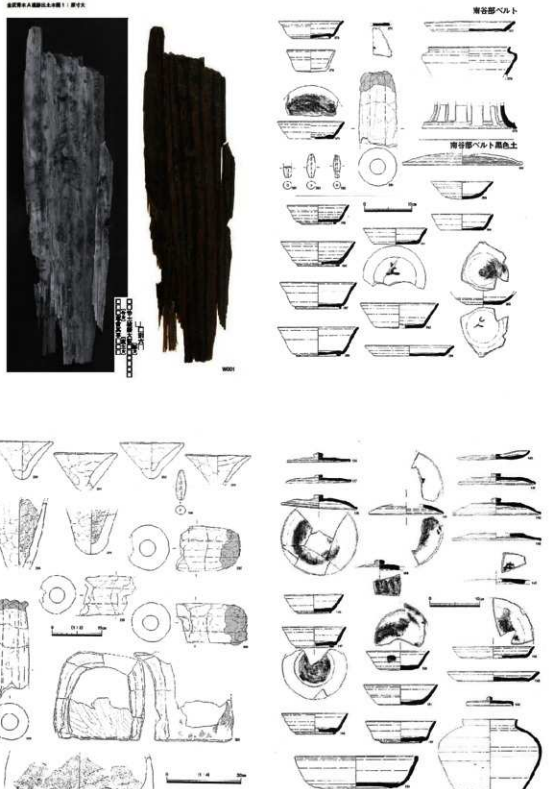
古代山城築造に至る過程は以下のように大きく5段階に分かれ、完成後は維持管理・修理が施されるものがある。

【第1段階】マスタープランに基づく選地（西日本全域）
【第2段階】北部九州における選地
（大宰府Ⅰ期、水城、大野城跡、基肄城跡、阿志岐山城等）
【第3段階】人員動員・資材調達計画（木材・石材・畜力？・足場等工具類）
◎人員…広範囲から大量の人員を動員
飛鳥板蓋宮642年9月　遠江～安芸の人員を動員　4月移動
両槻宮　漆3万人、石垣7万人
怡土城跡　756年～768年（13年間）
◎物資←資材置き場・現地調達（石材）
【第4段階】担当者（担当グループ）を決めて設計・縄張り
（土塁・石垣のライン設定、城門の配置等）
←長門城、大野城、基肄城の場合は亡命百済官人
【第5段階】個々の土塁・石垣構築、城門設置等
←在地系技術＋半島系技術

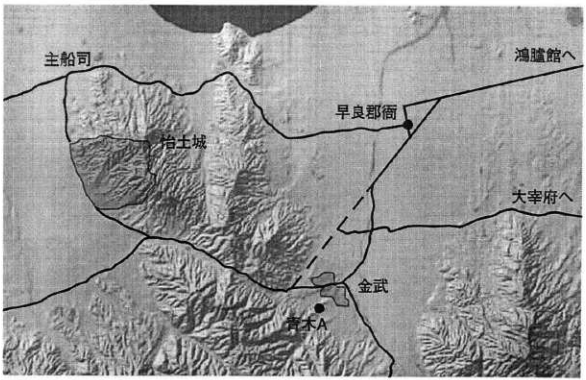
第 27 図　鞠智城貯水池出土蔓



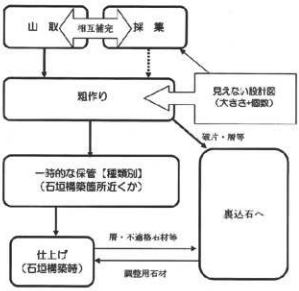
第 28 図　金武青木 A 遺跡全体図



第 29 図　金武青木 A 遺跡出土遺物



第 30 図　金武青木遺跡と怡土城の位置関係



第 31 図　石垣構築時における石材の流れ

第 32 図　解体された石材（百間石垣）

【完成後】維持管理・修理
　水城・基肄城・大野城と一緒…一体としての意識
　後方支援の必要性

7．おわりに

15年ほど前に縁があって大野城跡百間石垣の解体修理・復元に関わり、所見をまとめる機会を得たが、その後、各地で解体修理や復元整備事業が進み、情報量が格段に増えている。古代山城に関しては様々な論点があるが、石垣に関しては、小澤氏も指摘するように表面観察から得られる情報に加え、解体時の情報の組み合わせが重要である（小澤2010）。現在、整備が進んでいるところも、これから報告書をまとめることになると思うが、解体時に得られた情報を多く盛り込むことで、個々の山城の所見段階から、山城の相互比較、技術論、選地論等へ、研究の裾野を広げることにつながるのではないかと考えている。

また、本稿をまとめるにあたり、下記の方にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

赤司善彦・小澤佳憲・小田富士雄・亀田修一・木村龍生・主税英徳・南健太郎・渡邊誠

【註】

1）基肄城跡水門の解体修理については基山町教育委員会主税英徳氏にご教示いただいた。

2）屋嶋城跡の城門整備については高松市教育委員会渡邊誠氏にご教示いただいた。

3）鞠智城貯水池から出土した甃については、熊本県教育委員会木村龍生氏にご教示いただいた。

【参考文献】

相原嘉之 2004「倭京の守り」『明日香村文化財調査研究紀要』 4

相原嘉之編 2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第4集

赤司善彦 2010「筑紫の古代山城と大宰府の成立について」『古代文化』61-4

赤司善彦 2015「古代山城の石積みについての覚え書き」『考古学研究会岡山9月例会』（レジュメ）

赤司善彦・光谷拓実 2012「大野城の築城年代再考」『東風西声』7

井上信正編 2015『大野城跡1』太宰府市文化財調査報告書第125集

入佐友一郎・小澤佳憲編 2010『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県文化財調査報告書第225集

瓜生秀文編 2006『怡土城跡』前原市文化財調査報告書第90集

小澤佳憲 2010「石垣の築造方法について」『特別史跡大野城跡整備事業V』福岡県文化財調査報告書第225集

小澤佳憲 2014「基肄城跡東北門の唐居敷軸摺穴中に残された軸摺金具について」『九州考古学』89

尾上元規・上椙武 2013「鍛冶工房について」『史跡　鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

加藤隆也 2012「元岡・桑原遺跡と金武青木遺跡」『一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会研究発表資料集』

加藤隆也編 2012『金武青木』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集

金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡　鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

北垣聰一郎 2003「石材加工技術とその用具」『古代近畿と物流の考古学』

重藤輝行 2006「特別史跡大野城跡の平成15年豪雨災害とその災害復旧事業」『都府楼』37

杉原敏之編 2009『水城跡』九州歴史資料館
田中正弘 2015「特別史跡基肄城跡」『基肄城を考える－基肄城とは何か－』基山町教育委員会
谷山雅彦 2011『鬼ノ城』日本の遺跡 42　同成社
田上稔編 2006『特別史跡大野象跡整備事業』福岡県文化財調査報告書第 210 集
西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第 276 集
平尾和久 2010「古代山城石積考」『古文化談叢』65（1）
松井和幸 1991「古代の鍛冶具」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論文集
松尾洋平編 2005『古代山城鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18
松尾洋平編 2006『古代山城鬼ノ城２』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19
松川博一編 2014『特別史跡水城跡』大宰府史跡ガイドブック１　九州歴史資料館
松川博一編 2015『特別史跡大野城跡』大宰府史跡ガイドブック２　九州歴史資料館
山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第 113 集
渡邊　誠 2015「屋島城の城壁構築技術」『考古学研究会岡山９月例会資料』（レジュメ）

【図の出典】

第１・７・８図　松川編 2015 より転載、第２～６図　相原編 2006 より転載、一部改編、第９～ 14・22・31・32 図　平尾 2010 より転載、第 15・19 図　平尾撮影　第 16 図　谷山 2011 より転載、第 17・18 図　平尾作成、第 20・21 図　渡辺 2015 より転載、第 23 図１　西住他編 2012 より転載、２　入佐・小澤編 2010 より転載、３　松尾編 2006 より転載、４　松川編 2014 より転載、第 24 図 西住他編 2012 より転載、第 25 図　金田・岡本編 2013 より転載、第 26 図上　松川編 2015 より転載、下　井上編 2015 より転載、第 27 図左　松川編 2014 より転載、右　西住他編 2012 より転載、第 28 ～ 30 図　加藤編 2012 より転載

~MEMO~

古代山城における土塁構造の検討

渡邊 芳貴（西条市教育委員会）

1　はじめに

九州・瀬戸内を中心とした西日本には、現在20数か所の古代山城が確認されている。これらは研究史上、『日本書紀』等の文献に記載のある山城を中心とした「朝鮮式山城」と、文献に名のない「神籠石山城」に分類されてきた[1]。後者については、神籠石論争の名で知られるように聖域説と山城説が激しく議論を繰り広げていたが、佐賀県おつぼ山神籠石等に対する発掘調査の結果、山城であることが明らかにされた[2]。ただし、これにより神籠石に対するすべての謎が解決された訳ではなく、築城の年代や目的についての議論は現在まで続いている。

その要因の一つであり最も大きな問題は、遺跡の規模が大きく全面的な調査を実施できないため、全体像を把握しづらいという点に集約できるのではないだろうか。しかしこのような問題についても、近年は各地の山城で史跡の整備・活用を前提とした発掘調査が活発に実施されており、新たな事実の確認や資料の蓄積が進んできている。そして、これらの成果に基づく山城の編年的研究や技術論、さらには周辺遺跡との関係に着目した幅広い検討もなされる等、研究内容も多様化している。

このような中、愛媛県西条市に所在する永納山城では、平成14年度から23年度にかけ実施した発掘調査により、多くの事実が明らかとなってきた[3]。特に城壁については、約40か所のトレンチ調査を行い、さまざまな情報が得られている。

本論ではまずこれらの成果から、永納山城の土塁を検討する。つづいて、その内容に沿いつつ各山城の土塁構造を比較することにより、土塁の共通点や相違点を明らかにし、それらがどのような要因に基づいているのかを検討していく。

2　城壁研究の現状

古代山城の城壁構造に関する研究をみると、列石の露出・非露出の問題や列石前面の柱穴に関する研究、土塁構造の主要な技術である版築工法についての議論等がこれまでにも活発になされている[4]。

一方、土塁の形態や構築手順についての研究は、各調査報告書等でその特徴について検討される場合が多く、その中には城壁の特徴を非常に詳細に分析したものもみられる[5]。しかし、山城全体を見渡した上での土塁の検討は、ほとんどなされていないのが現状である。

このような中、城壁構造を類型化した研究として、向井一雄氏の研究をあげることができる（向井2001）。向井氏は城壁の分類を内托・夾築、高さ、幅等の違いに加え、城壁の取り回し方といった戦術的な違い、そして列石の特徴等も踏まえた総合的な検討から城壁を3類型に分類している（図1）。この分類は、複数の要素を整理した結果であり、山城の特徴を捉えやすく、その後の研究に影響を与えた。一方でこの分類は、土塁以外の要素も踏まえた類型であったため、土塁そのものに対する説明はやや省略されている。また、

外郭A類：夾築法による部分が多く、城壁は地形と相まって屈曲し、城壁は高く（3～5m）塁そのものによる遮断性が高い。城壁幅は6～9mで塁背後に車道状の通路を設ける。

外郭B類：内托法の低い（1～1.5m）土段状土塁を持ち、城壁の屈曲は少ないが、尾根先端部などでは、多段塁となり縦深性を増すことで遮断性を補っている。急崖など自然障壁では城壁を省略している。城壁幅は2～6mと狭く、城壁天部が通路を兼ねる。

外郭C類：内托法の比較的高い（約3m）土塁の基底部に列石を配する。A・B類と異なり切石列石は露出される。城壁は緩やかな曲線を描き、列石前面に柱列を持つ。城壁幅は9mと広いが通路部分は明確でない。

図1　向井氏による城壁分類

その後の各山城の調査では、この分類に当てはまらないと思われる例もみられる。

そこで、各山城により城壁に対する調査の進展状況に違いはあるものの、今一度土塁の構造を整理していく必要がある。

なお、今回の検討は、完成時の土塁の形態（高さ、幅、位置等）という表面的な構造から、土塁の類型化を試みるものである。したがって、版築の工法や土塁の積み上げ工程といった技術論は対象としていない[6]。

3　永納山城概略

（1）地理的環境

永納山城は、瀬戸内海によって分断される本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」の四国側の出発点となる高縄半島の西側付け根に位置し、瀬戸内海を眼下に望む独立丘陵上に築城されている（図2）。また、当地は現在の西条市・今治市の市境に位置し、これは古代の越智郡・桑村郡との郡境、今治平野と道前平野の境とも一致する。さらに遺跡の西側ふもとは、伊予国府の所在した今治平野へ通じる南海道が通過していたと推定されている。

（2）遺跡の規模・地形的特徴

遺跡の規模をみると、城壁外郭線は推定部分を含め全周約2.5kmに及び、標高は東部の山頂で132 mを測る。地形的な特徴としては、「永納山」と呼ばれる城の主体をなす丘陵と、その北西側に位置する「医王山」と呼ばれる山塊を城域として取り込む。また、これらの丘陵・城壁は、南北に伸びる谷を取り込むように巡っており、包谷式山城に含まれる。

4　永納山城の城壁構造

永納山城の主たる城壁構造としては、以下の3種類が確認されている。

①列石と土塁による城壁構造

②石積みによる城壁構造

③自然地形を利用した城壁構造

これらのうち、今回主に検討を加えるのは、①列石と土塁による城壁構造である。しかし、土塁の高さや幅を復元想定する過程で、②、③の城壁も参考としていく。

（1）地形から想定される永納山城の土塁の特徴

永納山城の尾根は、中央の谷を取り囲むように馬蹄形に延びるため、尾根の大半は断面かまぼこ形を呈する。城壁はこの尾根斜面に築かれ、これまでの調査では、城内側に人工

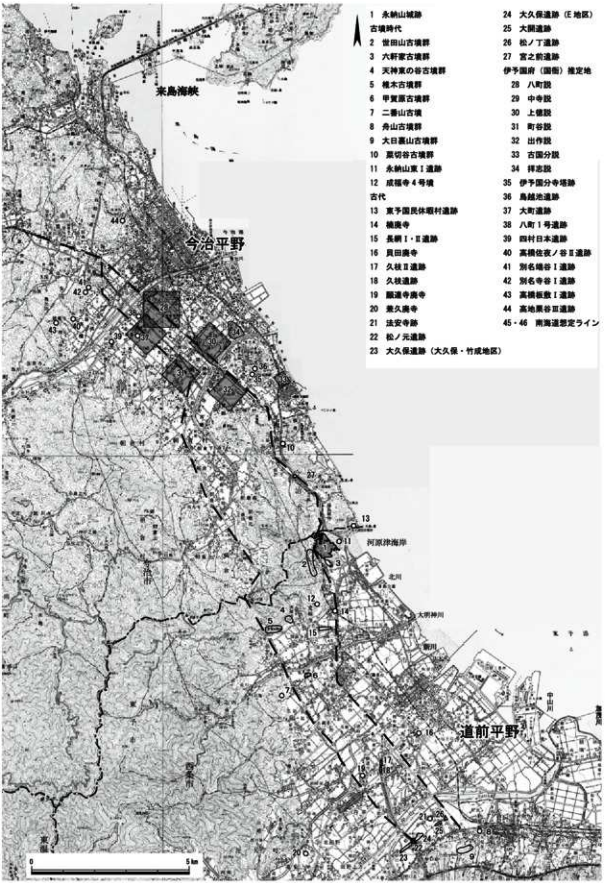


図２　永納山城跡位置図（S=1/120000）

的な盛土は確認されていない。このような状況から、永納山城の城壁は基本的に尾根外側斜面を利用して築かれる内托土塁であった可能性が高い。

（2）尾根筋と列石との距離

次に尾根筋と土塁との関係をみていきたい。これは、城壁を築く際には、尾根筋が一つの基準であったと想定できるからである。土塁は現地の地形に依拠するところが大きく、この点に着目することにより、城壁構造の違いを見出せる可能性がある。そこでまず、城壁の基礎となる列石から尾根筋までの関係をみると、次のように２種類に分類が可能である。

Ⅰ類：列石と尾根筋との距離が短く、すぐ背後に尾根筋が迫るもの
　列石と尾根との水平距離は５m程度、列石上面から尾根筋までの高さは３m未満。

Ⅱ類：列石から尾根筋までの距離が長く、尾根筋が緩やかに延びるもの
　列石と尾根との水平距離は10m程度、列石上面から尾根筋までの高さは３～４m程度。

では、このⅠ類とⅡ類の違いは何を反映しているのだろうか。図３に各トレンチの位置を示している。

これをみると、この違いには城壁の位置する地形が影響しているものと思われる。すなわち、Ⅰ類は尾根の鞍部付近に位置し、Ⅱ類は各頂部と鞍部とを結ぶ比較的直線的に伸びる尾根の斜面に位置するという特徴を見出すことができる。永納山城の場合は頂部から鞍部に向かうに従い尾根幅は狭まっていき、必然的に列石（城壁前面）と尾根筋との距離は縮まる。このことから、列石の据え付け場所は、単純に「尾根筋から何m」といったのではなく、地形に規制されていることを読み取れる。

次にそれぞれのタイプに築かれた土塁をみていくと、Ⅰ類（図４-①・②）では、土塁が尾根筋まで築かれ、Ⅱ類（図４-③～⑦）では、土塁はいずれも斜面の途中で収束する。

それでは、Ⅱ類の土塁は築造当初から尾根斜面で収束していたのか、あるいは本来は尾根筋まで築かれていたのであろうか。この点を明らかにするために、他の城壁を含め永納山城の土塁の高さや幅を検討し、Ⅱ類における土塁の状況を復元してみたい。

①Ⅰ類における土塁の状況：土塁の高さは、1.4 ～ 2.6 mである。後世の若干の流失は想定できるが、土塁が尾根筋まで残存していることから、ほぼ築城時の高さを示していると考えられる。

②自然地形を利用した城壁の状況：人工物としては列石のみを据え、その背後は自然地形を利用して土塁を築かなかったと考えられる城壁がある（図５-⑧・⑨）。これらの城壁は、列石から尾根筋までの水平距離が約8.4m、9.3mとⅡ類に近い。また、列石と尾根筋との比高差は４m程度である。この斜面のどこまでを城壁とするかは判断に迷うところであるが、地山の変換点を土塁の上端部に相当すると積極的に評価するならば、城壁高は2.5 m前後に復元できる。

③石積みによる城壁の状況：石積みは３か所にみられる。

③-１　西部頂上付近の石積み（図５-⑩）：尾根筋との水平距離は約7.4m、石積み下端と尾根筋との比高差は4.5mとⅡ類に近い。石積みの高さは1.8 mと低く、石は尾根筋と同じ高さまでは積まれていない。

③-２　東部石積み（図５-⑪）：尾根筋との最短での距離は約17 mである。石積みは、

最大４段に石が積まれ、幅は約５m、高さは現存約１mを測る。

③-３　北東部石積み（図5-⑫）：⑤の土塁に接して積み上げられた石積みで、高さは現存で1.5 mを測る。

以上のような状況をみると、永納山城の城壁の高さはその構造や尾根筋との距離にかかわらず、低いところで１m程度、高くとも３m未満であったと想定できる。このような理解が可能であれば、Ⅱ類において復元される土塁の高さは、最大に見積もったとしても３mまでに納まっていた可能性が高い。さらに、この数値に基づき土塁を復元すると、土

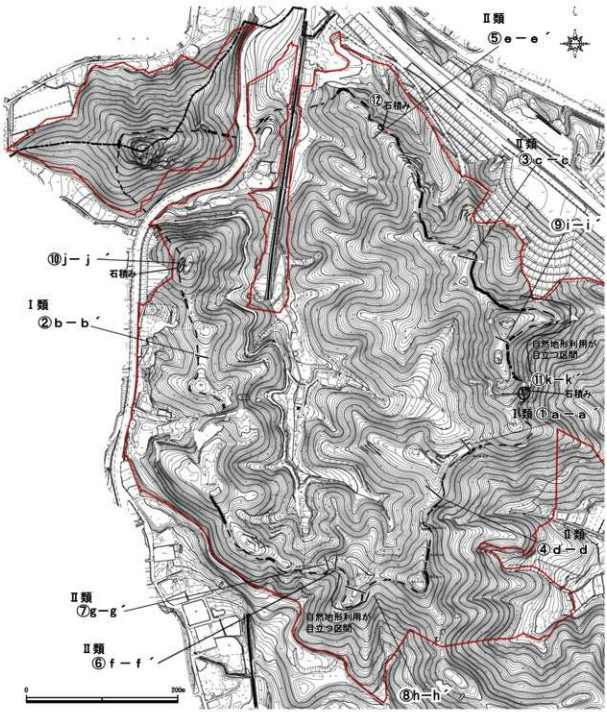


図３　永納山城跡地形図（S=1/5000）

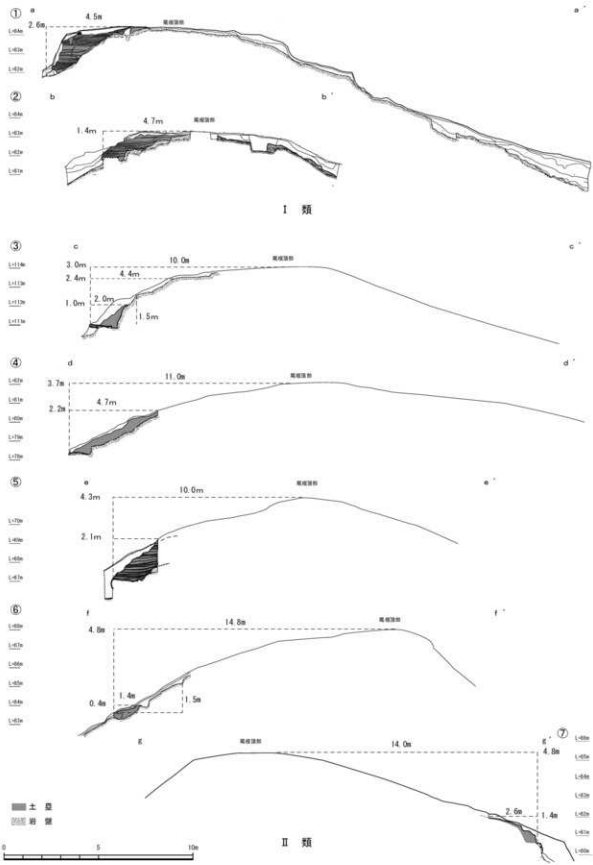


図4　永納山城跡の城壁（1）（S=1/200）

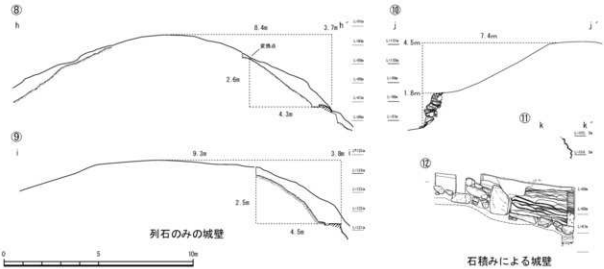


図５　永納山城跡の城壁（２）（S=1/200）

塁上部の幅は約４～５ｍとなり、この数値はⅠ類における土塁幅とほぼ一致する。そしてⅡ類における土塁は、尾根筋までは築かれなかったものと考えられる。

このように永納山城の土塁に関しては、先に述べた高さ２～３ｍという共通性に加え、幅５ｍ前後という一定の基準が存在したことを想定できる。

（３）土塁・石積み・自然地形利用の使い分け

永納山城では、城壁はほぼ全周することが確認されており、少なくとも城壁は完成していたと理解できる。しかし、既述のとおり城壁には、土塁を中心としながらも石積みや自然地形利用のものが認められる。それでは、この使い分けはどのように行われていたのであろうか。

まず、土塁と石積みに関しては、素材は異なるものの人工的に城壁を築くという点で共通する。石積みは３か所でしか確認されておらず、構築基準は明らかでない。しかし、西部頂上や東部鞍部の石積みは、それぞれふもとの南海道、燧灘を見下ろす場所にあり、このような立地が関係しているのかもしれない。

一方で自然地形利用の城壁は、山中に露出する岩盤や急傾斜地にみられる。これらには自然地形のみを城壁として利用している場合と、列石を据えたり部分的に人為的な手を加えている場所とがある。ここで問題となるのは、当初から土塁が築かれていなかったのかという点である。それを検討するために、周辺の地形との比較を行いたい。列石のみを据えた城壁とした⑨地点の周辺は、特

写真１　自然地形を利用した城壁

写真２　列石と背後の岩盤

に自然地形利用の目立つ区間である（写真１）。現地には今も岩盤が露出しており、それらの露岩をつなぐように列石が並べられる。この露岩にはテラス状の加工といったような、その上に土塁を築いた痕跡は認められない。そこで露岩とその間に並べられた列石背後の斜面の傾斜をみると、それらはほぼ一致している。また、列石背後には通常、列石に比べやや小ぶりの石が置かれるが、この辺りの城壁では岩盤をカットした後、列石のみを据える例もみられる（写真２）。これはあたかも列石を据えるためにだけに、岩盤を整形したように思われる。以上のような状況から、この周辺では築城当初から列石の上に土塁は積まれていなかったものと判断できる。

列石のみが現存する場合、城壁の本来の姿を復元することは難しいが、このように周辺地形との比較により、本来の土塁の存否を判断できる場合もある。

5　古代山城における土塁構造

つづいて、他の古代山城の土塁がどのような状況を示しているのかを見ていきたい。永納山城において、土塁の規模に一定の規格性を認めることができたが、同様の特徴を他の山城にも当てはめることは可能であるのか、またそれらの特徴を基に山城を分類することができるのかを検討していく。なお、本来であれば、すべての古代山城の土塁を比較検討すべきであるが、土塁の状況のはっきりとしない山城については、対象から除いた。

（１）土塁の分類（図６）

①尾根と土塁の位置

先にみた永納山城の土塁の位置を参考にして、さらに永納山城では明らかでない谷部をⅢ類として加えた。

Ⅰ類：尾根筋（付近）まで築かれるもの

Ⅱ類：尾根斜面途中で収束するもの

Ⅲ類：谷部に築かれるもの

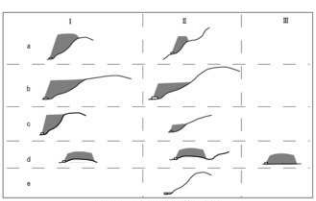


図６　土塁断面模式図

②土塁の高さ

各山城の土塁の高さをグラフに示したも

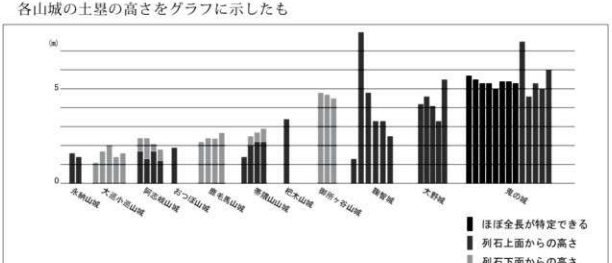


図７　各山城における土塁の高さ

のが、図７である。現存する土塁は必ずしも築城当時の高さを示しておらず、さらに土塁の高さには明確な境界を引けないものの、相対的に高い土塁を築く山城と低い土塁を築く山城とがあることを読み取れる。

そこで、土塁の高さに基づき、２分類する。

A：低い（おおよそ 3m 程度までのもの）

B：高い（おおよそ 3m 以上のもの。4m を超えるものが多い）

③土塁の形状（図６）

土塁の断面形状を基に以下のように、５分類する。

a：下部は内托であるが、上部が夾築状になるもの（半夾築）

b：内托土塁で、上部がほぼ水平となり、幅の広いもの

c：内托土塁で、上部の水平部がほとんどないもの。あるいは幅狭のもの。ただし、本来はｂ類であったものが、後世の崩落等によりこのようになったものも存在する可能性がある。

d：夾築部が大半となるもの

e：列石の裏にのみ、盛土がみられるもの

これらの基準により分類したものが、図８・９である。

（２）各山城の状況

次に、上記分類を基に各山城の状況をみていくこととする。

・大廻小廻山城

城壁は、内托土塁による下段部と主に地山削り出しによる上段部との２段構造となることが指摘されている（図 8-12 ～ 14）。土塁の高さは２m前後と規格性がみられる一方で、土塁幅は５～ 10 mと明確な規格性は読み取れない。しかし、上段部を含めた城壁幅は、約 12 mと規格性の存在が指摘されている。また、一ノ木戸周辺や尾根先端部では、夾築状の土塁となる（図 9-11）。

・帯隈山神籠石

土塁の高さは、列石下面から 1.4 ～ 2.9 mである。そのうち 1.4 mと低い土塁（1990 年調査地）では、列石背後にほとんど盛土が確認されていない（図 9-17）。その他の土塁は内托土塁（ｂ類）で、高さ２m以上、幅８m以上となり、土塁上面にしっかりとした平坦面がみられる（図 8-10・11）。

・阿志岐城

土塁の基礎に並べられる列石が他の山城に比べ複雑であるため、列石上面からの土塁の高さをみると 1.3 ～ 1.7m である（図 8-17）。参考までに列石下面からの高さは 2.1 ～ 3m 程度となる。土塁幅は不明である。

・鹿毛馬神籠石

しっかりと土塁を築く場所と、列石背後に部分的に盛土を確認できる場所とがある。土塁をしっかり築いている場所では、その高さは列石上面から 2.2 ～ 2.7m となる（図 8-4・5）。土塁は基本的に内托土塁であり、土塁幅は７～ 8m 前後で上面にはしっかりとした平坦面が残る（ｂ類）。なお、谷部に築かれた土塁（図 9-13）は、夾築（ｄ類）である。

さらに、列石背後に部分的に土塁を築くものが、1998 年度調査Ｅ・Ｊ・Ｉ地点で確認できる（図 9-18）。

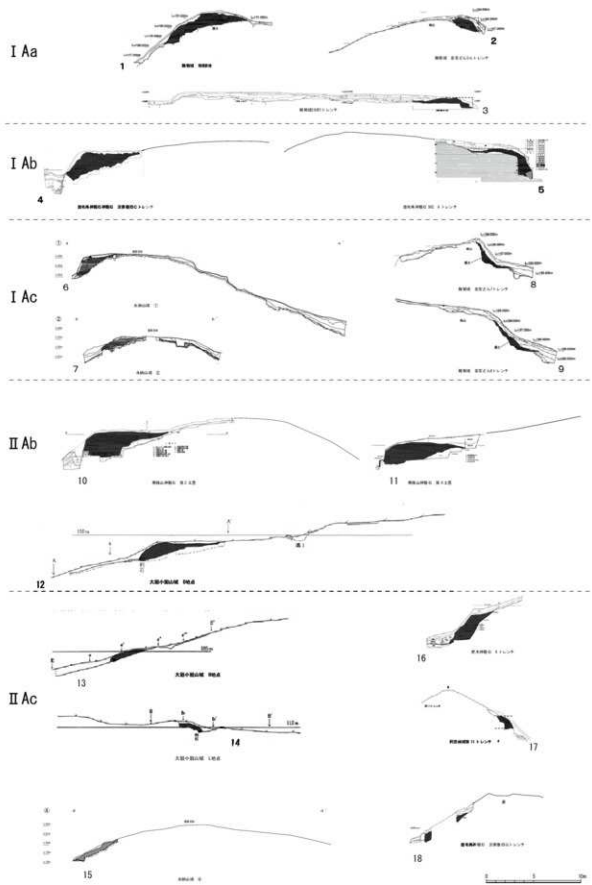


図８　各山城の土塁（１）(S=1/250)

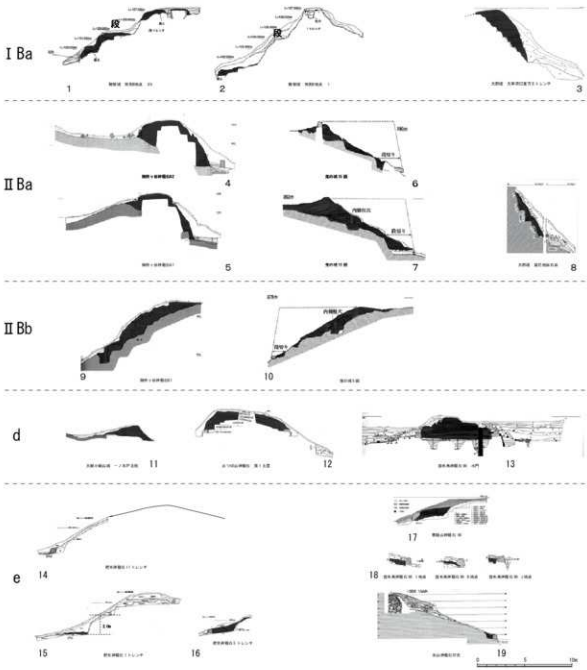


図９　各山城の土塁（２）(S=1/250)

・女山神籠石

土塁の規模は不明であるが、しっかりと土塁を築く地点と、列石背後にわずかに盛土を確認できる地点（図 9-19）とがある。

・杷木神籠石

しっかりと土塁を築く地点（図 8-16）と列石背後にわずかに盛土を確認できる地点（図 9-14 ～ 16）とがある。土塁の高さは、4 トレンチで列石上面から 3.4m を測る。

・おつぼ山神籠石

鞍部に築かれる土塁（第 1 土塁）は夾築土塁で、列石上面からの高さ 1.9m を測る（図 9-12）。一方で第 2 土塁は列石のみを並べ、背後の土塁は確認されていない。

・鬼の城

背面列石の存在等から土塁本来の高さが復元されている鬼ノ城では、高さ５～6m、幅7m 前後の土塁がほぼ統一的な規格であったことが明らかにされている。土塁の断面形は内托、もしくは上部が夾築状となる半夾築土塁である（図 9-6・7・10）。

・大野城

土塁の高さは 3.3 ～ 5.5m 前後であり、その中でも 4 m 以上のものが主体となる。太宰府口東方土塁地区、尾花土塁地区 B 地点や水ノ手口西方土塁地区等で半夾築の土塁がみられる（図 9-3・8）。一方で尾花土塁地区 A 地点では、内托土塁が確認されている。なお、報告書では「山頂から一段低い斜面を掘り切りそのすぐ下方に夾築構造の土塁を作るという工法は、城内各所で見られ、大野城跡の土塁を施工する際の一つのパターンとなっており」と述べられており、夾築土塁は内托土塁と共に一定量みられるものと考えられる。また、土塁と尾根との位置関係については、「土塁は尾根のピークを走っているわけではなく、ピークが高いところではそのやや下方の城外側法面の途中を内托式の土塁が斜面に張り付くようにして伸び、また尾根の低いところでは夾築の土塁自身が尾根のピークとなって盛り上げられるように作られている」とその特徴が述べられている。

・御所ヶ谷神籠石

土塁の高さは、緩やかな尾根斜面、谷に向かうやや急斜面の土塁で、列石下面から 4.5 ～ 4.8m、土塁幅は 7 ～ 8m を測る（図 9-4・5・9）。土塁の断面形は内托土塁と、上部のみ夾築となる半夾築土塁とがある。

・鞠智城

南側土塁線 B 地点 1 トレンチ・ 2b トレンチ（図 9-1・2）や堀切門跡の土塁は、残高５～８ｍで、削り出しによる２段構造となる。一方で、西側土塁線（図 8-8・9）では段を有さない 4 m弱の土塁が確認されている。さらに、南側土塁線東端 A 地点（図 8-3）や南側土塁線西端部 B 地点 6 トレンチ（図 8-1）では半夾築の土塁が検出されており、土塁構造にはいくつかのバリエーションが認められる。

表１　土塁の特徴

	土塁の高さ	土塁の幅の規格性	谷・鞍部以外の半夾築土塁	備　考
御所ヶ谷神籠石	高い	○	○	
鬼の城	高い	○	○	
大野城	高い	○	○	
鞠智城	高い	？	○	削り出しによる２段構造あり
石城山神籠石	高い	？	？	
永納山城	低い	○		
唐毛馬神籠石	低い	○		
帯隈山神籠石	低い	○		
大廻小廻山城	低い	△		削り出しによる２段構造あり
おつぼ山神籠石	低い	？		
杷木神籠石	低い	？		
阿志岐城	低い	？		
山城分類の基準	◎		○	
各山城内での規格性	○	○	○	
地形の影響	△	○	△	

（3）土塁の特徴

以上のように各山城の土塁を概観した結果、土塁の特徴には地形により左右される要素、地形にかかわらず一定の規格性・統一性が存在していた可能性のある要素とに分けて考える必要性が浮かび上がる。後者については、さらに個々の山城内での規格性・統一性と捉えられるものと、複数の山城間に共通するものとが存在する可能性を指摘できる。

そこでまず、各特徴を再整理していきたい。これらの特徴を表に示したものが、表1である。

・山城にみられる各特徴

①土塁の高さ：山城間を区分できる第一の特徴は、土塁の高さである。すなわち、高い城壁を築く山城と低い城壁を築く山城が存在する。

まず、御所ヶ谷神籠石、大野城、鬼ノ城、鞠智城のように、高さ4m以上の土塁をもつ山城群がある。なお、図面は示されていないが、石城山神籠石も高い土塁が構築されるようである[7]。

一方、永納山城や大廻小廻山城、阿志岐山城、鹿毛馬神籠石等、高さ2m前後の低い土塁を築く山城が存在する。

なお、高い土塁を築く山城においてもすべての土塁が高いわけではなく、低い土塁も存在する。これは、土塁の高さに関しても地形による影響を完全に排除しているわけではないことを示していると考えられる。

②土塁の幅：永納山城の土塁幅は、復元推定で約5m程度という共通性が認められた。また、九州の一部の山城（鹿毛馬神籠石や帯隈山神籠石等）では、幅9m前後の土塁が目立ち、共通した特徴といえるのかもしれない[8]。

一方で阿志岐山城では、地形により土塁幅に倍近くの違いのあることが指摘されている。また、大廻小廻山城でも、土塁幅は5～10m程度とさまざまである。ただし、大廻小廻山城では地山削り出しを基本とする上段部と合わせると、約12mという規格性の存在が指摘されている。

このように土塁幅に関しては、山城を分類できる可能性はあるものの、個々の地形的特徴に左右される場合も認められる。さらに土塁幅の把握できる資料数の問題もあり、現段階では、その可能性を指摘するにとどめておきたい。

③内托、半夾築、夾築といった土塁の断面形態：谷に向かう尾根斜面（大廻小廻山城）や城門周辺（御所ヶ谷神籠石）、尾根鞍部（おつぼ山神籠石）等、尾根幅の狭まる地形では夾築・半夾築の土塁が築かれる場合が多い。また、鞠智城では尾根先端部付近の土塁に半夾築のものが数か所で認められ、これも地形的な特徴となるかもしれない。

一方で、半夾築の土塁に関しては、一定の山城に共通した手法であった可能性もある。鞍部や谷に向かう急斜面を除いた地形での半夾築土塁については、鬼ノ城や大野城、鞠智城等に例がある。これらは、大きくまとめると、主に高い土塁を持つ山城に特徴的にみられる。

④完成時の形態の多様性：土塁表面は後世の掘削や崩落等による改変を受けやすく、仮にテラス等による段が造られていたとしても現存していない可能性もあり、本来の姿の復元は難しい。このような中、鞠智城では削り出しと盛土を併用して形成された、2段構造の土塁が確認されている。鞠智城の土塁構造を検討した矢野裕介氏は、これらの土塁は防

御正面に位置し、城壁高を高くすることにより視覚的効果を狙ったものと想定している[9]。また、大廻小廻山城においても、内托土塁と削り出しによる２段構造の土塁が存在する。この２つの城の土塁では、高さや幅に違いがあり、そのまま同等に評価することはできないが、これらの事例は完成時の土塁の形態に多様性があったことを示している。

⑤明確な土塁を構築しない城壁：列石の背後にわずかに土塁（盛土）がなされるもの、列石のみが据えられるものがある。

土塁の築かれていない部分に対する説明については、山城が未完成であったとする説と重要な部分のみ土塁を築いたという説があり、いまだ意見の分かれるところである[10]。しかし、いずれにしても土塁の築かれていなかった部分が存在したことは間違いのない事実である。永納山城でも列石のみが据えられて、その背後に土塁を確認できない城壁が存在する。これについては、すでに検討したとおり、築城当初から土塁を築いていなかったものと判断できる箇所が存在する。そして、それは周囲の地形に影響されることを確認した。

このように理解すると、列石背後の土塁の存否については、地形等に影響された設計の中で当初から決まっていた場合もあるのではないだろうか。すなわち、列石と土塁による城壁と石積みによる城壁を築く場所が、おそらく当初設計の中で決められていたように、①列石＋土塁、②列石＋列石裏の盛土、③列石のみ、④列石も据えない自然地形利用、といった区分が存在していた可能性を想定したい。

城壁の有無は、山城の完成・未完成を議論する際にも有効な手段として用いられるが、土塁が存在しないという事実は、当初から予定されていた結果なのか、本来必要な場所でも何らかの理由で急きょ生じたものなのか、周囲の地形や地理的環境を考慮しながら判断する必要がある[11]。

6　まとめ

山城は多くの構造物から成り立っており、城壁はその一つである。そして今回検討を加えた土塁は、さらにその一形態である。検討ではその土塁について、前半で永納山城における土塁の特徴を明らかにした。すなわち永納山城の土塁には、地形からみて２タイプに分類が可能という点である。そして、他の城壁構造との比較を通じ、城壁の規模に規格性の存在した可能性を指摘した。

後半では、永納山城での分類視点を基準に、他の古代山城の土塁を概観した。その結果、土塁そのものにはバリエーションが多く存在し、その背景にはいくつかの要因が存在することを指摘した。

その中で最も大きな要因は、それぞれの土塁が築かれる地形であり、土塁の幅や土塁の構築の有無といった要素は地形に規制されていた、あるいは地形を利用していた可能性を示した。そして、その影響を卓越して、山城を分類可能な要素が土塁の高さであるとした。これは非常に大まかなものかもしれないが、山城を築く上での共通認識が存在していたことを示すと考えられる。一方で、この高さの違いが何を示すのか、山城の時期差、地域差、あるいは目的等の違いを示しているのかは判断できない。それを明らかにしていくには、山城を構成する土塁以外の要素を踏まえた総合的な検討が必要である。

また、土塁はその構成物が「土」である点や、調査されている事例が山城の規模からみ

るとまだごく一部である点などから、その構造を検討することには限界がある。繰り返しとなるが、城壁は地形に規制される要素が強く、地形の複雑さに合わせて個性も複雑化するであろう。今回検討したものは、各山城の一部の特徴しか捉えられていない可能性も十分考えられる。どこまでを個性として捉え、どこからが山城を類型化していくことのできる要素であるのか、今後はさらなる資料の蓄積と詳細な検討が必要である。

【註】

（1）宮小路賀宏・亀田修一氏によりに簡潔にまとめられている〔宮小路・亀田 1987〕。また、近年では向井一雄氏が精力的に研究史を見直し、古代山城研究における問題提起を行っている〔向井 2009・2010b 等〕。

（2）鏡山猛編 1965『おつぼ山神籠石』佐賀県教育委員会

（3）西条市教育委員会編 2005、2008、2012 にまとめられている。

（4）列石の露出・非露出や切石・割石の違いは山城の編年指標としてよく用いられるが、研究者によってその序列は全く逆となる場合もある〔葛原 1994・乗岡 1992 等〕。列石前面の柱穴についてはおつぼ山神籠石で、柵列に伴うものとの考えが提示されたが、その後、版築支柱とする説、また両者の折衷的な説もみられる。版築支柱説が優勢な観はあるが、これに対しては、高正龍氏による問題提起がなされている〔高 1992〕。土塁の版築工法については、古代山城研究会で活発に議論されている〔古代山城研究会編 1999〕。

（5）大野城跡や鬼ノ城、鞠智城の報告書等において、土塁に関する詳細な考察が行われている〔小澤編 2010、松尾編 2005。西住他編 2012 他〕。

（6）上記のような詳細な検討は、古代の土木技術を復元していく上でも重要である。しかし、このような技術を基に、山城を分類できる程にはまだ資料が少ない。そこで、詳細な検討の進む土塁の研究とは逆行するかもしれないが、まずは大きな視点で土塁を再検討してみたい。

（7）概報によると、高さ 7m 前後の土塁の存在が想定されている〔光市教育委員会編 2007〕。

（8）これらの特徴のうち、高さや幅については、向井一雄氏によりこのような傾向の存在することが示されている〔向井 2001〕。

（9）矢野裕介〔2014〕

（10）未完成説の代表的なものとしては阿部義平氏〔阿部 2002〕等があり、これに対し駅路や官衙のような施設からの視角を利用した「見せる山城」として抑止力的な城郭として評価する考えもみられる〔向井 2010a 等〕。

（11）亀田修一氏は未完成の山城について、「未完成」の意味を検討していくことの必要性を指摘している〔亀田 2014〕。

【主要参考文献】

阿部義平 2002「古代山城と対外関係」『人類にとって戦いとは』 4
岡山市教育委員会編 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告書』
小川秀樹 2010「豊前・御所ヶ谷神籠石」『古代文化』第 62 巻第 2 号
小川秀樹編 2006『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市教育委員会
小澤佳憲編 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』下巻　福岡県教育委員会
亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第 42 巻第 3 号

亀田修一 2011「対馬金田城跡のいろいろな特徴」『対馬市文化財シンポジウム　対馬の古代を探る』
亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ - 論考編 1 -』熊本県教育委員会
川述昭人編 1982『女山・山内古墳群』瀬高町教育委員会
嶺田町教育員会編 1998『国史跡　鹿毛馬神籠石』
鏡山猛 1967「帯隈山神籠石とその周辺」『佐賀県埋蔵文化財報告書』第 16 集
葛原克人 1994「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』
高正龍 1992「「神籠石」の土塁構造（上）」『溝濮』第 2 号
古代山城研究会編 1999「古代山城の土塁構造」『溝濮』第 8 号
児玉真一他編 2001『史跡　杷木神籠石』杷木町教育委員会
西条市教育委員会編 2005『永納山城跡 － 平成 14 年度～ 16 年度調査報告書 － 』
西条市教育委員会編 2008『史跡永納山城跡Ⅰ』
西条市教育委員会編 2012『史跡永納山城跡Ⅱ』
筑紫野市教育委員会編 2008『阿志岐城跡　阿志岐城跡確認調査報告書』
西住欣一郎他編 2012『鞠智城跡Ⅱ』熊本県教育委員会
乗岡実 1992「古代山城」『吉備の考古学的研究』下
光市教育委員会 2007『石城山神籠石第一次・第二次調査概要書』
松尾洋平他編 2005『古代山城　鬼ノ城』
宮小路賀宏他編 1970『杷木神籠石』杷木町教育員会
宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説　日本の考古学』6
向井一雄 2001「古代山城研究の動向と課題」『溝濮』第 9・10 合併号
向井一雄 2009「日本の古代山城研究の成果と課題」『溝濮』第 14 号
向井一雄 2010a「駅路からみた古代山城　見せる山城論序説」『月刊　地図中心』453
向井一雄 2010b「古代山城論 - 学史と展望 -」
向井一雄 2010c「古代山城研究の最前線 － 近年の調査成果からみた新古代山城像 － 」
矢野裕介 2014「鞠智城跡・土塁の構築とその特徴」『鞠智城跡Ⅱ - 論考編 1 -』熊本県教育委員会

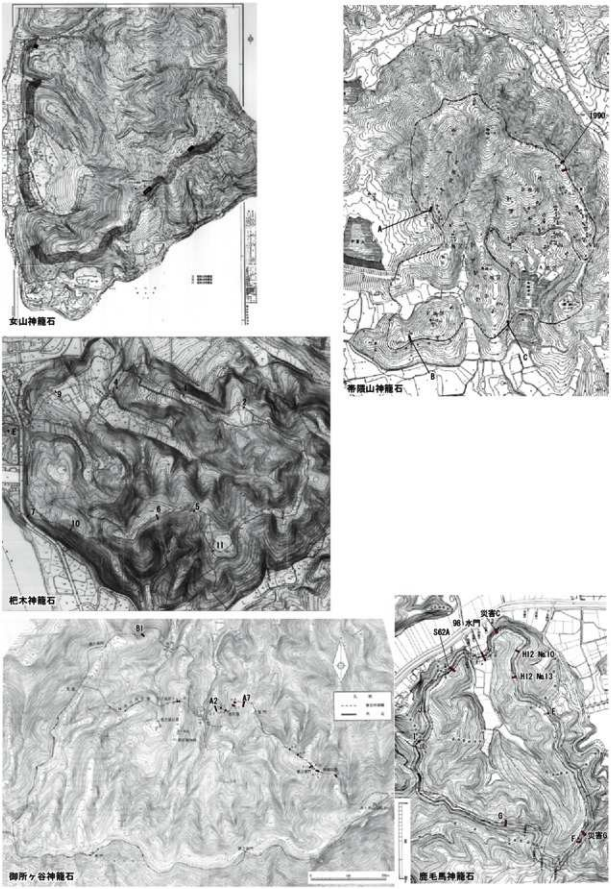
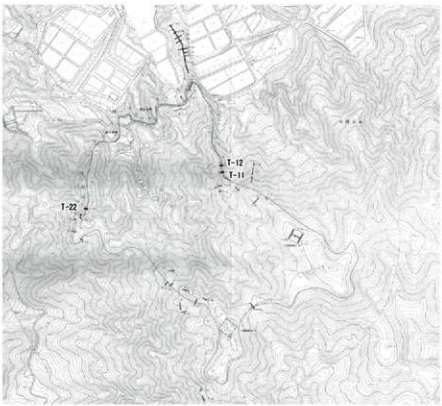
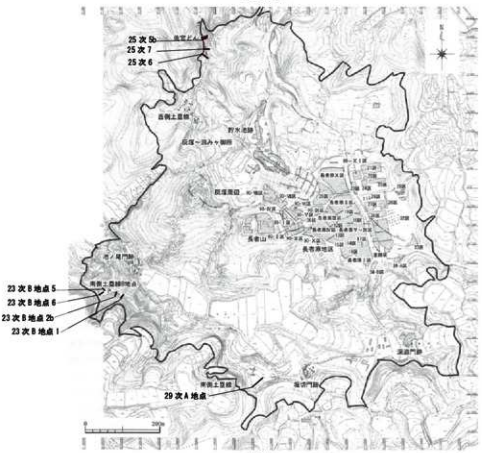


図 10　山城地形図（１）（S=1/10000）

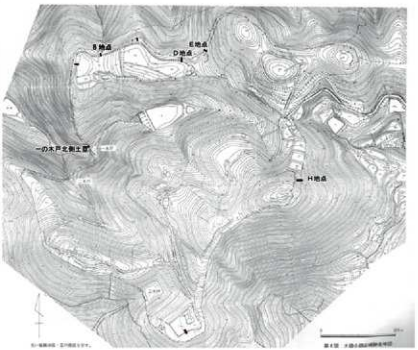


阿志岐山城

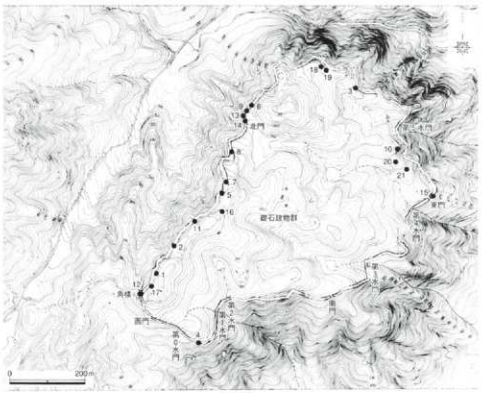


鞠智城

図 11　山城地形図（２）(S=1/10000)



大廻小廻山城



鬼の城

図 12　山城地形図（３）(S=1/10000)

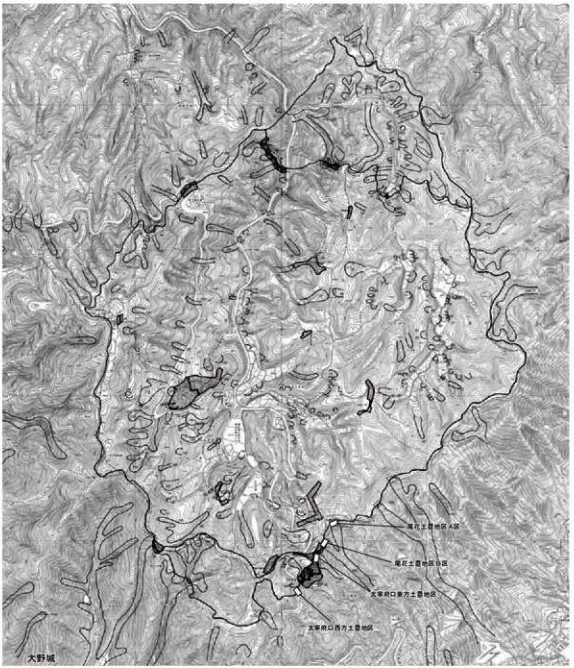


図 13　山城地形図（４）（S=1/20000）

石積遺構から見た古代山城の築城技術

南 健太郎（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）

はじめに

日本列島では28ヶ所の古代山城が知られている。これらは『日本書紀』や『続日本紀』などの文献に記載されている朝鮮式山城とそれ以外の神籠石系山城に分けられている。前者は12ヶ所が知られるが、このうち所在が判明しているのは7ヶ所（うち1ヶ所は怡土城）である。後者は16ヶ所で、九州で10ヶ所、瀬戸内海沿岸で6ヶ所が確認されている。

文献には665年に大野城、基肄城、長門城（未確認）、667年に金田城、屋嶋城、高安城の築城が記されており、古代山城の年代の定点といえる。665年の山城築城記録には百済から亡命した貴族らの名前が並ぶことから、百済をはじめとした半島や高句麗で培われた技術が用いられたものと考えられる。朝鮮式山城と呼ばれる所以でもあるが、神籠石系山城の中にもこういった半島の技術を取り入れた遺構が確認されていることがすでに指摘されている（亀田1995・2009・2012）。文献に記載されていないのにはなんらかの理由があったのだろうが、残された遺構からはどれほどの差異を見出すことができるだろうか。またこのことは神籠石系山城を文献に記載されていないものとして一つにまとめることが難しいことを示している。

本論ではこのような視点に立ち、それぞれの古代山城の築城技術にどのような関係性があるのかについて考えていく。

1．本論の視点と目的

古代山城の主要な構成要素として城郭線を構成する土塁・石塁、列石、城門、水門、石垣、城内施設として建物、鍛冶遺構、貯水施設などを挙げることができる。これまでの研究では立地なども含めて城郭構造に注意が払われてきた（出宮1984、乗岡1992、葛原1994など）。そしてどのような立地にどのような山城を築くのかにも注目されてきた。古代山城の築城技術を考えるにあたってはこれらを総合的に捉えることが必要だが、特に石材を用いて構成される遺構には様々な角度からの分析がなされてきた。どのような石材が用いられているか（石材加工）、石を積む場合どのような原理・単位で行われているか（石積方法）などは築城技術者集団間の関係を考える上で重要な指標となろう（亀田1995、小澤2012）。そこで本論では石積遺構の構築方法に着目し、古代山城築城技術の系譜関係について検討を行うことを目的とする。

具体的には朝鮮式山城と神籠石系山城の間、また神籠石系山城間における築城技術の比較を行っていく。そこで本論ではこれまで朝鮮式山城との共通性が度々指摘されている鬼城山城を中心に論をすすめる。鬼城山城については667年に築城記事のある金田城や屋嶋城との構造上の共通点が指摘されている（亀田2009・2012）。神籠石系山城の中では異質の存在として注目される（小澤2012）。本論では城門や水門の構造を朝鮮式山城と比較することによって、その位置づけを探りたい。神籠石系山城については北部九州型と瀬戸内海型と分けて論じられることが多いが、本論ではそれらと朝鮮式山城との技術的な

関連性について検討を行う。そこから編年的な位置付けや技術系譜の問題についても考えてみたい。

2．朝鮮式山城と鬼城山城の城門構造

神籠石系山城である鬼城山城は４ヶ所で門が確認されている。このうち北門だけが門道が城外側の地面よりも高い位置にある懸門構造になっており、かねてから注目されてきた。懸門構造は他の神籠石系山城には見られない特徴で、朝鮮式山城である大野城、屋嶋城で確認され、金田城もその可能性が指摘されている（亀田 2012）。またこれらの４城の懸門は通水溝・排水口とセットになっていることも興味深い。そこで懸門構造の城門と通水溝についてみてみよう。

①鬼城山城（図１）

懸門構造が確認されたのは北門である（総社市教育委員会編 2005）。方形の柱がとりつく石製唐居敷を備え、柱穴も確認されている。床面の構造は城内側から約 3.2 mまでが小型の石が敷き詰められており、それより先は１mを超える大型の花崗岩が敷かれる。両者の境は板状の石材を立て並べることによって画されている。門道の前端は懸門になるため崖状に落ち、平坦面をはさんで、さらに前面に石垣がある（門道部前面の石垣 A）。調査時の前面石垣は高さが２m前後あり、前面石垣下面から門道までの高さは約 3.3 mとなる。

門道床面には通水溝が設けられている。上記の門道床面の使用石材が切り替わるところで、明渠から暗渠になる。明渠部は蓋石が１石残存しており、元は全体に架けられていたものと思われる。暗渠部は後世の攪乱により門道床面の大型石材が移動されており、開渠状態であったようだが、前端部に近いところでは蓋石があり、その上に門道床面の石材が敷かれている。通水溝部分の床面は暗渠部分で掘り込みが確認されており、地山を溝状に掘った後に底石を敷き、その上に側壁となる石材が列状に並べられている。

石垣Ａにはさらにもう一ヶ所排水口が設けられている。こちらは上記の通水溝のような側壁は見られなかったとされており詳細はわからないが、前面石垣の最下面近くに位置している点は注意すべきである。排水口は成層積みの一石が向けたような状況であったとみられ、明確な側壁や底石の存在は実測図からは読み取れない。流水は石材間を自然排水していたものと考えられている。石垣Ａは北門と一体的な構築であったようで、この場合は１つの門で２種類の排水方法が採られているということになる。

②大野城（図２）

大野城北石垣地区Ｃ区城門がこれにあたる（福岡県教育委員会編 2010）。石製唐居敷を据える門で、掘建柱の柱痕も確認されている。門道の幅は石垣間で約 4.68 m、掘立柱の柱間距離は芯－芯で約 4.10 mとされている。城門の前面は石積がなされており、城外側地面からの高さは約 1.4 m程度である。門道の床面の敷石はないようだが、50 ～ 60cm大の石材は散見されるようである。未掘部分があるが、門道床面では通水溝は確認されていない。排水口が確認されたのは門の前面で、懸門部分からは約２m ほど南側にある。版築土塁の下位に作られている。蓋となる天井石は通水口の中に落ち込んでいるが、これは版築土塁築城中にすでに発生していたものと考えられている。底石・両側壁・蓋石を有する点は鬼城山城門道通水溝と共通しているが、底石は地山にのせられており、石を据える

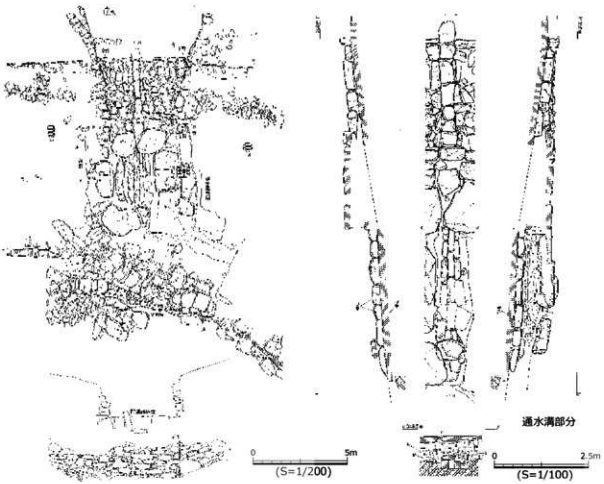


図１　鬼城山城北門（総社市教育委員会 2005 より）

ための溝状の掘り込みはなされていない。

③屋嶋城（図３）

門道幅 4.5 ～ 5.4 ｍを測る（高松市教育委員会編 2003・2008）。城門を構成する石材の崩落は著しいが、床面は鬼城山城南門などと同様の階段状を呈していたと考えられている。城門の前面は大野城と同様に石積がなされており、高さは前面の地山から 1.2 ｍの高さまで確認されている。本来はさらに上部まで石積があり、門道へと連なっていたものと思われる。

通水溝は門道の床面で確認されている。床面が大きく３段になっており、上・中・下段に分けられている。上段は床面に通水溝の蓋石が露出するような状態である。南側は岩盤が高いため側壁として利用されており、岩盤が低い北側には盛土がなされている。中段は板石を立てた側壁が認められるが、蓋石は残存していない。床面は岩盤がそのまま利用されているようである。中段から下段へと移行する位置には蓋石が残存しているが、下段では確認されていない。通水溝の下部の北側は再び岩盤が利用されているようである。このような状況からは自然地形である岩盤の形状を利用して通水溝が構築されていると考えられ、これに伴う溝の掘削などは行われていないと考えられる。

④金田城（亀田 2012）

懸門構造は三の城戸で確認されている。崩落が著しいが、城壁外面のＬ字形の石積状況から懸門の可能性が提起されている。城外側からの高さは約 1.6 ｍとされる。

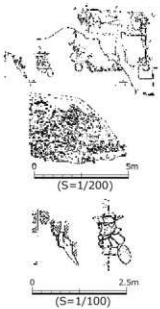


図２　大野城北石垣地区Ｃ区城門
（福岡県教育委員会編 2010 より）

図３　屋嶋城城門（高松市教育委員会編 2008 より）

排水口は門道から離れた位置にあり、その位置は現状の地面に接するところである。

ここまで懸門構造で通水溝・排水口を有する４城の構造をみてきた。懸門構造という点で神籠石系山城である鬼城山城が朝鮮式山城との強い共通性を有するということはすでに指摘されているが、ここでは通水溝・排水口の位置・構造からさらに神籠石系山城と朝鮮式山城の関係について考えたい。まず位置関係からみると、門道の床面に設けられる屋嶋城、前面石垣の門道から外れたところの下位に設けられる大野城と金田城、そして両者を併設した鬼城山城に分けることができる。朝鮮式山城である鞠智城の池ノ尾門も大野城や金田城のような構造である可能性がある（歴史公園鞠智城・温故創生館編 2011、図４）。この点から鬼城山城の構造は極めて異例と言わなければならないだろう。通水口を複数ヶ所設けることは城門や城壁の脆弱性を高める可能性も否定できず、城の管理面から考えるとデメリットの方が大きいように思える。北門と石垣Ａが一体のものだとしたら下方にある石垣Ａの通水口が先に作られた可能性があるだろう（城門の下を通って城内まで空間が保たれていたのかは不明だが）。そう考えると通水溝・排水口の構築順序は石垣Ａ下位→門道床面となる。これは大野城・金田城で用いられた構築技術に、屋嶋城での工法がミックスされた状況と考えることも可能である。構築状況からは大野城北石垣城門の構造に屋嶋城の構造が加えられた姿を描いておきたい。ただしここで問題となるのは大野城北石垣城門の編年的位置である。唐居敷の編年からみると大野城北石垣城門（大野城Ⅱ型）は初築からやや遅れた７世紀第３四半期後半から第４四半期に作られたことが示されており、鬼城山城北門の唐居敷はそこからの派生型式とされている（小澤 2014）。そこでは鬼城山城東門が大野城Ⅱ型とされ、西門・南門・北門はそれに続くということになる。一方、城門の構造からは西門・南門→北門→東門へと変遷したことが指摘されている（稲田 2012）。屋嶋城の階段構造が鬼城山城南門と共通していることから、北門と南門の構築は

鞠智城池ノ尾門（熊本県立装飾古墳館分館編 2011 より）

御所ヶ谷神籠石中門（行橋市教育委員会編 2006 より）

図4　通水溝を有する城門

近接していた可能性がある。このことから東門の位置づけが問題になるが、ここでは鬼城山城の構築技術に朝鮮式山城の技術が取り入れられていることを確認するにとどめたい。

また鬼城山城では懸門の前面と石垣Aの前面の間には2m以上の平坦面が形成される（これは石垣Aの上面の幅ということになる）。これは上記の朝鮮式山城には認められないが、このような構造は御所ヶ谷神籠石中門に通じるところがある可能性が考えられる（行橋市教育委員会編2006、図4）。神籠石系山城である両者ではあるが、完成した山城としては神籠石系山城の中では稀な存在である（亀田2014）。御所ヶ谷神籠石については今後朝鮮式山城との関係性をあらためて考える必要があるかもしれない。

これに対し、通水溝・排水口の構造からは鬼城山城の独自性も見出すことができる。構造は底石・側壁・蓋石材が使用された鬼城山城門道床面・大野城、石材以外にも岩盤や盛土が側壁に利用される屋嶋城に分けることができ、鬼城山城石垣部分の排水口が側壁などを有しないのであれば、一類型が加わることになる。ここで注目されるのは鬼城山城では門道床面通水溝の構築に際し事前の溝状の掘り込みがなされていることで、そこに底石が設けられる点は他ではみられない構築方法である。このような構築技術の独自性については後で評価したい。

3．水門からみた朝鮮式山城と神籠石系山城

次に水門構造についてみていきたい。水門構造についても鬼城山城の特異性が度々指摘されており、筆者も瀬戸内型神籠石系山城の中でも異彩を放っていることを確認している（南2015）。鬼城山城では6ヶ所で水門が確認されている（図5）。このうち詳細が明らかなのは5ヶ所（第0～3水門・第5水門）だが、第2・3・5水門は高所に排水口を有するもので、これは列島の古代山城の中でも異彩を放っている（鬼ノ城学術調査委員会編1980、総社市教育委員会編2005・2006）。類例は半島に見いだせることから、渡来系技術が用いられていることは動かないものと思われる。さらに第1水門は地面に接する位置から排水するが、石垣基底石の一つを城外側にせりださせて天井石とし、その下に据え置かれた石材に溝状の加工を行うことで水の通り道を作るという極めて異例なものである。これに対し第0水門は明確な排水口をもたないもので、城内側から石垣の下端を通って流れ出る水を城外に流す施設であったと考えられる。このような排水方法は水門が少ない古代山城ではむしろ一般的であったものと思われる。このように考えると鬼城山城では通有の排水方法が見られる一方、特殊な構造の水門も備えている山城とみることができるだろう。ここでは朝鮮式山城と他の神籠石系山城の水門構造を確認し、比較していくことで両者の関係についても考えたい。

（1）朝鮮式山城

①大野城（図6）

大野城では屯水地区で水門が確認されている（福岡県教育委員会編2010）。水門は傾斜の変換点に作られており、現状では2つの排水口が縦に並んで配置されている。下段はしっかりとした底石を有し、通水部分は奥側まで底石が敷かれている。底石は地形にあわせて低い階段状を呈しながら排水部へと至る。底石は天井石の架かっていない側壁部分よりも城外側まで続いており、端部は下方にむかってゆるやかに湾曲している。側壁の構造は各所で一致しておらず、城外側から見て右列は城外側から城内側に向かって1石→3石

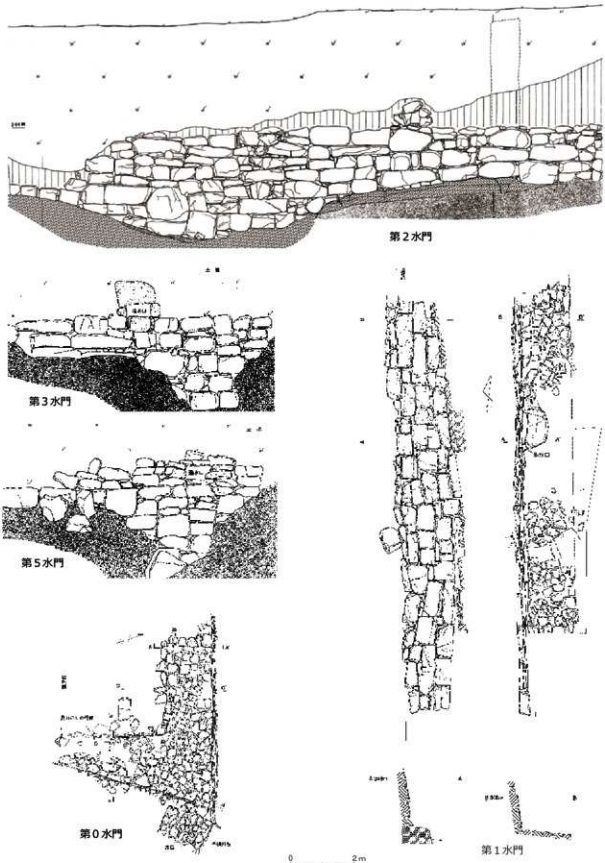


図５　鬼城山城の水門（鬼ノ城学術調査委員会編 1980、総社市教育委員会編 2006 より）

図６　大野城屯水土塁地区Ｃ区暗渠水門
（福岡県教育委員会編 2010 より）

で構成されており、前者は底石にのせられているが、後者は底石をはさむようによこに積まれる。左側は２石→１石で、こちらは逆に前者は底石にのせられないが、後者は底石の上にのせられる。このような構造は城門構造で見た鬼城山城北門床面通水溝とは対照的である。

上段の排水口は石組背後の谷の埋没が生じたため、後世に作られたものと判断されている。作りの簡易さもその判断理由とされている。落石が著しく内部まで構造を確認できないが、現状で確認できる城外側に面する部分は、側壁右列は１石が立てられた状態、左列は３石が積まれている。底石ははっきり確認できなかった。上段と下段の間は石材が隙間なく散乱しており、両者の関係をうかがい知ることはできない。

②基肄城

近年は既知の大水門の横で３つの排水口がみつかっている。構造は上部に２つが横に並び、これらの中間の下部にもう１つの排水口が設けられている。このような構造は他に例をみないものであるが、上部から排水する際は下方に水がそのまま落とされるであろうから、地面よりも上部に排水口を有する点では鬼城山城第２・３・５水門と同様の原理であると思われる。詳細は報告書の刊行をまたなければならないが、上部の２つは石垣の積み方からは独立しているようである。

長谷水門

横尾谷水門

図７　女山神籠石の水門（筆者撮影）

（２）神籠石系山城

神籠石系山城の水門は地面に排水口を有する点が特徴だが、これは百済地域にみられる特徴である点が指摘されている（亀田 1995）。上記の大野城北石垣城門や金田城、そして鬼城山城石垣Ａでも地面に排水口を有するためこれらを含めて半島系の技術と考えることができようか。ここでは北部九州型と瀬戸内海型神籠石系山城にわけて検討する。

①北部九州型神籠石系山城

ここでは女山神籠石の長谷水門と横尾谷（粥餅谷）水門に着目したい（瀬高町

教育委員会編 1982、図７）。長谷水門は保存状態が非常によく、構築に関する様々な情報が得られる。開口部は石垣の下端にある。底石を有し、そこに天井石をのせるための両側の側壁となる石材がのせられる。ここで注目したいのはその外側の石材で、下端が側壁石材に揃えられている。地山は排水部が最も深くなるＶ字状を呈するため側壁の横の石材と地山の間にはスペースができるが、そこには拳大の石材が配されている。底石は露岩（岩盤？）と思われる大きな石の上に乗っており、水門の構築にあたってまず底石の上面にあわせて拳大の石が敷かれたものと思われる。通水部の奥は整然とした石の並びが確認でき、底石はほぼ平坦に並べられている。側壁は確認できるところでは両側とも１段であり、その高さは一定に保たれているようである。石の積み方も特徴的で、すべての石は確認できなかったが、開口部の天井石の周囲を囲む石材には切り欠き加工がなされている。一方、横尾谷水門は長谷水門よりもかなり大型の石材が使用されていることが特徴的である。開口部は東寄りに設けられている。底石は厚みのある大型の石材が用いられており、側壁がこれにのせられる。その上部には天井石が置かれているが、現状では本水門最大級の石材である。底石は奥まで続いている。横尾谷水門も切り欠き加工が用いられているが、長谷水門とは異なり開口部に関わる場所以外のところでみられる。

このように女山神籠石では、使用石材のサイズや切り欠き加工を用いる部位に差があるものの、底石に側壁をのせるという構造は共通しているといえる。

②瀬戸内型神籠石系山城

筆者は瀬戸内海を挟んだ大廻小廻山城（岡山市教育委員会編 1989）と讃岐城山城（古代山城研究会 1996）の水門構造の類似性を指摘していたが、両者の共通点としては天井石をうける側壁に大型の石材を使用していること、天井石の上に特に大きな石材を積んでいることを挙げた（南 2015）。ここでは両者の構造をさらに詳しく見てみよう（図８）。両者とも地山に接する位置に排水口を設ける構造は共通している。大廻小廻山城の一の木

大廻小廻山城　　讃岐城山城

図８　瀬戸内型神籠石系山城の水門（筆者撮影）

戸は地山となる岩盤に排水口を有するが、底石が用いられていないことには注意を払う必要がある。構築に際しては地山に側壁が置かれ、その上に天井石をのせている。讃岐城山城については側壁の下には石が存在するが、これらが上記の朝鮮式山城や女山神籠石でみられたような底石として置かれたものかは発掘調査が行われていない現状では明確にはし難い。ただし排水口にあわせた底石の使用方法とは異なっていると捉えることはできそうである。水門構築において底石を使用しないという点は両者に共通した技術的特徴と考えられるだろう。

このようにみてくると底石の使用状況で構築技術におけるまとまりについて考えることができそうである。つまり水門構築において底石が重要な位置を占める朝鮮式山城・北部九州型神籠石系山城と、明瞭に底石が意識されない瀬戸内型神籠石系山城というように分けられる可能性がある。

ここに鬼城山城はどのように位置づけられるだろうか。鬼城山城第２水門では石垣を構成する大型石材にそのまま排水溝を設けるのではなく、下面は板状の小型石材で整えられているようである。第３水門は石垣の天端が水平になされているため、底石が独立で設けられていないが、内部は両側に１石が秩序正しく並べられている様子が窺われる。北門床面通水口の側壁構造が想起される。第５水門の底は第３水門と同様であるが、排水口の下部の石積は面が垂直ではなく、排水口からやや湾曲しながら下方へと向かっている。排水部分のわずかな加工であると思われる。このように通水口の底面には一定の注意が払われていることが見受けられ、第５水門の状況は大野城毛水地区の床石端部の状況との共通性を見出すことができる。水門構造からは鬼城山城は同じ瀬戸内型神籠石系山城とは一線を画すことがあらためて確認され、朝鮮式山城との親密性がより高いように思われる。

４．まとめ

本論では石積遺構に着目し、朝鮮式山城と神籠石系山城の築城技術の関係性について検討してきた。神籠石系山城の中には鬼城山城のような朝鮮式山城の築城技術と密接に関わりをもつものがあること、そして北部九州型神籠石系山城の中にも、朝鮮式山城に通ずる技術的な特徴が内在している可能性について指摘した。また瀬戸内型神籠石系山城については、鬼城山城の非共通性と独特な技術的特徴を有することについても示した。今後は他の山城の技術的特徴と比較していくことによって、さらに立体的な古代山城の展開過程を復元していきたい。

本論を奏するにあたっては多くの方々に示唆に富むご助言をいただきました。記して感謝申し上げます（敬称略）。
赤司善彦、網田龍生、稲田孝司、大久保徹也、亀田修一、木村龍生、甲元眞之、能登原孝道、平尾和久、渡邊　誠

参考文献

稲田孝司 2012「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第 34 号　日本考古学協会
岡山県教育委員会編 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』
小澤佳憲 2012「朝鮮式山城と神籠石系山城」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』

日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行
小澤佳憲 2014「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第二号　熊本県教育委員会
亀田修一 1995「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第 42 巻第 3 号　考古学研究会
亀田修一 2009「鬼ノ城と朝鮮半島」『鬼ノ城と吉備津神社－「桃太郎の舞台」を科学する』シリーズ『岡山学』7　吉備人出版
亀田修一 2012「対馬金田城小考」『百済と周辺世界』 成周鐸教授追慕論叢刊行委員会
亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ　－論考編 1－』 熊本県教育委員会
鬼ノ城学術調査委員会編 1980『鬼ノ城』
葛原克人 1994「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』 新人物往来社
熊本県立装飾古墳館分館　歴史公園鞠智城・温故創生館編 2011『鞠智城跡－第 32 次調査報告－』
古代山城研究会 1996『溝濕』第 6 号　讃岐城山城跡の研究
瀬高町教育委員会編 1982『女山・山内古墳群』瀬高町文化財調査報告書第 2 集
総社市教育委員会編 2005『古代山城　鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 18
総社市教育委員会編 2006『古代山城　鬼ノ城 2』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19
高松市教育委員会編 2003『史跡天然記念物屋島』高松市埋蔵文化財調査報告書第 62 集
高松市教育委員会編 2008『屋嶋城跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告書第 113 集
出宮徳尚 1984「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』 小野忠凞博士退官記念出版事業会
乗岡　実 1992「古代山城」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社
福岡県教育委員会編 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第 225 集
南健太郎 2015「石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論」『鞠智城と古代社会』第三号　熊本県教育委員会
行橋市教育委員会編 2006『史跡　御所ケ谷神籠石Ⅰ』行橋市文化財調査報告書第 33 集

~MEMO~

兵器の様相から見た古代山城

小嶋　篤（九州国立博物館）

はじめに

日本列島で古代山城が相次いで築造された７世紀後半は、百済復興運動や壬申の乱をはじめとした軍事的衝突が頻発した律令国家形成期にあたる。古代山城の性格については、近年では地域支配の拠点機能も想定されるなど、研究の盛行に伴って多様な見解が提示されている。ただし、第一義の築造目的は交通の要衝に配された防衛施設という見解が主流であり、発表者も同じ立場をとる。

では、「日本列島に築かれた古代山城は、どのように兵器を貯え、どのような兵器を用い、どのような戦闘を想定していたのだろうか？」

この問いを追及するために、本研究では二つのアプローチを試みる。まず、考古資料として現存する兵器の検討に基づいて、物質的側面から古代の戦闘に用いられた兵器を明らかにする。その後、文献史料の記述から古代山城を運用していた時代の戦闘の実像に迫りたい。戦闘の記録は幾人もの人物を介した主観的情報である。また、現代人の合理的思考と古代人の合理的思考は乖離する。これらの点を認識しつつ、『歴史学』の立場から「兵器」を基点に古代山城を検討する。

１．古代山城で用いられた兵器

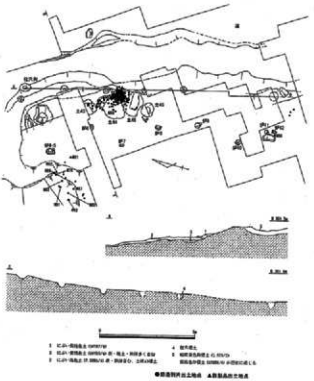
（１）鬼ノ城跡の鉄器生産

古代山城では、どのように兵器を貯えていたのだろうか。まずは、城内での鉄器生産の様相が判明している鬼ノ城跡の発掘調査成果を検討する（図１）。

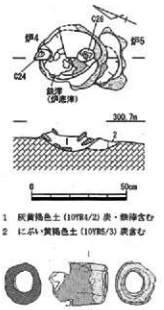
鬼ノ城跡は吉備高原の南端に位置する古代山城で、眼下には総社平野が広がる。城内確認調査に伴う発掘調査が計画的に実施され、城内の様相を具体的に把握できる。とくに、調査区Ⅲ区で発見された鍛冶工房は、古代山城城内で操業された工房の実態が分かる貴重な事例である。以下では、発掘調査報告書『史跡 鬼城山２』を基に鍛冶工房の概要を説明する（岡山県 2013）。

鍛冶工房（調査区Ⅲ区）は鬼ノ城跡城内の東側で確認された。検出地点は３地点（Ⅲ－１・２・３区）に分かれ、いずれも東門に続く尾根線上に立地し、第４水門へとつながる谷筋に面している。３地点のうち、Ⅲ－３区の鍛冶工房では、桁行（南北）６間以上（13m以上）の長大な建物の屋内に、７ヶ所以上の鍛冶炉が列状に配された状況にある。列状配置の大型鍛冶工房は官衙や有力寺院に類例が求められ、「官営」の事業として操業されたと把握されている（岡山県 2013）。また、鍛冶炉の一部（鍛冶炉４等）は、使用後に放置された状態で検出されており、操業時の様相を残す。

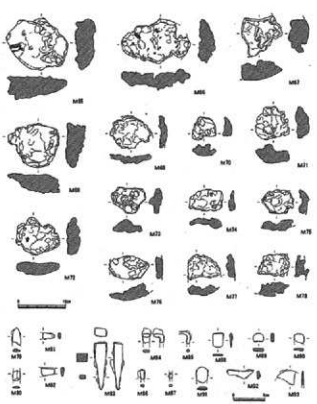
操業実態については、尾上元規氏・上栫武氏による考古学的検討、大澤正巳氏による金属学的検討から、鍛冶原料鉄として磁鉄鉱由来の半製品（棒・板状）が大量に用いられた可能性が高く、一部では精製鉄塊の搬入が想定されている（岡山県 2013）。また、折り曲げられた鎚や刀子・鉄釘の残欠から、廃鉄器を素材として転用する状況も伺える。本工



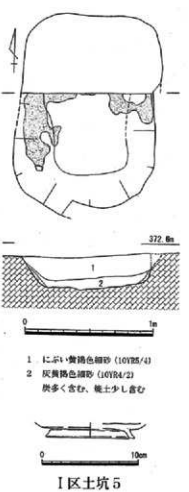
Ⅲ－３区鍛冶工房



鍛冶炉４



Ⅲ区出土鍛冶関連遺物



Ⅰ区土坑５

図１　鬼ノ城の鍛冶工房

房で製作された確実な「製品（未製品）」の出土品はないが、鬼ノ城築城期に操業されていることから、①袋状鉄斧などの伐採具・木材加工具、②鏨などの鍛冶具・石工具、③鉄釘などの建築具が主体であったと推測されている。城内全体の出土品を見渡しても確実な武器類の出土品はなく、状況証拠から見ても工具・建築具が主要な製品であったことが認められる。

本研究では、報告書で述べられている「官営工房」や「工具・建築具製作」の仮説を補強するものとして、土坑として報告されている「製炭土坑」に注目したい（小嶋 2012a・2013）。

総社平野周辺の製炭遺構は、古墳時代以来の伝統を引き継ぐ「横口付炭窯」と飛鳥時代以降に列島規模で拡散する「方形製炭土坑」で構成される（図２）。７世紀後半以前に操業された方形製炭土坑の類例は、東北地方の製鉄遺跡（武井・金沢地区）や大宰府周辺の製鉄遺跡（佐野地区）で見られ、日本列島の東西で確認できる。製鉄技術・築窯製炭技術とともに非築窯製炭技術（坑内製炭技術）についても国家主導の技術移植の存在を認めてよい。鬼ノ城城内で操業された方形製炭土坑も、国家主導の技術移植に連なるものと評価でき、「官営工房」の構成要素の一つと把握できる。

鬼ノ城跡で検出された方形製炭土坑は、城内の各所で散発的に操業される状況にある。層位的検出から平安時代以降の操業事例（Ⅴ区土坑 59 等）も含むが、飛鳥時代に操業された事例（Ⅳ区土坑 49 等）も確実に認められる。７世紀後半に築造されたⅣ区土手状遺構２の地山直上で炭層（最下層）が確認できる点も、当該期の木炭生産の存在を傍証する。築城時の山林（未開発の山林）で操業された飛鳥時代の製炭土坑は、山林の伐採・下草刈りの一環で操業されたと見るのが自然であり、鬼ノ城の整備と連動する木炭生産は、城内の官営工房の燃料供給を担ったと考えられる。つまり、木炭の主要な消費対象である鍛冶工房は築城作業と併行して操業されたと見られ、目下の消費対象となる「工具・建築具」を主要な製品とした可能性が高い。

以上のように、鬼ノ城跡で確認された鍛冶工房で兵器生産が主体的になされた可能性は低く、城内に存在したと見られる兵庫に蓄えられた兵器は、基本的に城外から「製品」の状態で搬入されたと判断できる。

（２）古代山城と大宰

次に問題となるのが、城外から持ち込まれた「製品」としての兵器の実態である。この検討に先立ち、まずは古代山城の築城・管理組織について整理したい。上記で検討した鬼ノ城は、その築城責任者を吉備大宰とみる説が有力視されているが、現状では文字史料を欠くために論証に限界がある。これに対し、同じ大宰である筑紫大宰については、奈良時代以降も「大宰府」として存続しており、水城・大野城・基肄城を核とする大宰府都城の管理組織は文字史料から検証できる。

大野城・基肄城は、『続日本紀』文武天皇２年（698）５月 25 日条に「令大宰府繕治大野。基肄。鞠智三城。」と記され、肥後の鞠智城とともに大宰府による繕治対象であったことが分かる。また、８世紀第２四半期以前に埋没した大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区）SD2340 出土木簡の「為班給筑前筑後肥等國遣基肄城稲穀随大監正六上田中朝臣□」の墨書からは、大宰府による大野城・基肄城の運営実態がうかがえる（九歴 2014b）。天平神

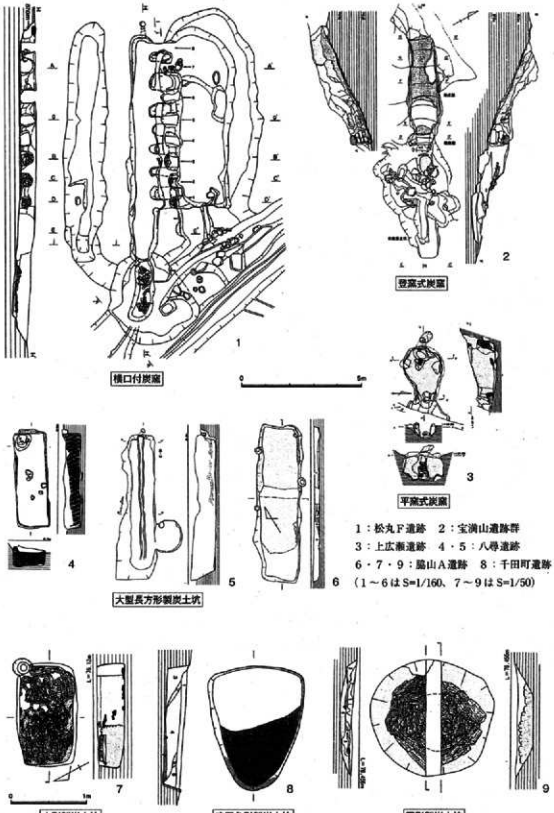

横口付炭窯
登窯式炭窯
平窯式炭窯
大型長方形製炭土坑
方形製炭土坑
略三角形製炭土坑
円形製炭土坑
1：松丸F遺跡　2：宝満山遺跡群
3：上広瀬遺跡　4・5：八尋遺跡
6・7・9：脇山A遺跡　8：千田町遺跡
（1～6はS=1/160、7～9はS=1/50）

図2　製炭遺構の分類

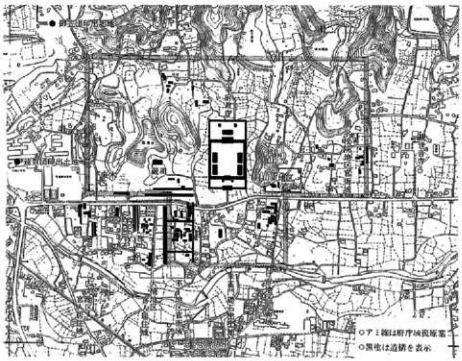


図３　大宰府政庁周辺官衙跡

護元年（756 年）段階では怡土城築城と水城修理は、大宰大弐や少弐の指揮の下で大宰府上番の軍団兵士が動員されたと考えられている（松川 2012）。このように、平時における大宰府都城は大宰府の管理下にあり、大宰府都城の兵庫には大宰府保有兵器が備蓄（管理）されていたと考えられる。また、戦時の律令軍団は朝廷からの「勅」を経て編成されるが、当然、大宰府都城の防衛に際しては大宰府保有兵器の使用を構想していただろう。

近年の大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区・蔵司地区）の発掘調査により、大宰府跡出土兵器の数量は急激に増加した（九歴 2012・2013）（図３）。発掘調査での出土量もすでに膨大な量となっているが、いまだ地中に眠る埋蔵量も含めると、まさに「桁違い」の量の兵器が大宰府政庁の隣接地に集積されていたことは紛れもない事実である。つまり、豊富な資料数に基づいて、大宰府都城に備蓄された兵器（城内に持ち込まれた兵器）の実態に迫ることが可能である。

（３）大宰府保有兵器の検討

大宰府政庁周辺官衙跡（不丁地区・蔵司地区）で出土した鉄製品は、高温度の被熱痕跡があり、製品としてのおおよその形状を残しつつも、大半が半溶解のような形態で出土する（小嶋 2014b）（図４・５）。被熱原因の特定は現在も継続中であるが、鉄鏃が軸を揃えた状態で束のまま（保管形態のまま）被熱すること等から、遺物観察の所見では「兵庫火災」が有力な仮説となる。被熱時期は鉄製品と同時に被熱した瓦（被熱瓦）や鉄製品含有瓦の存在、被熱鉄製品包含層・遺構の検討から８世紀後半～ 10 世紀の期間に絞られる。また、後述するように被熱鉄製品は７世紀後半～８世紀前半の時期に製作されたものを多量に含んでおり、長期間におよぶ兵器の備蓄が認められる。７世紀後半～８世紀前半は古代山城の築城・整備が頻発した時期と重複しており、同時代資料としても注目できる。以下では、大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄製品のうち、兵器に限定して種類毎に様相を整

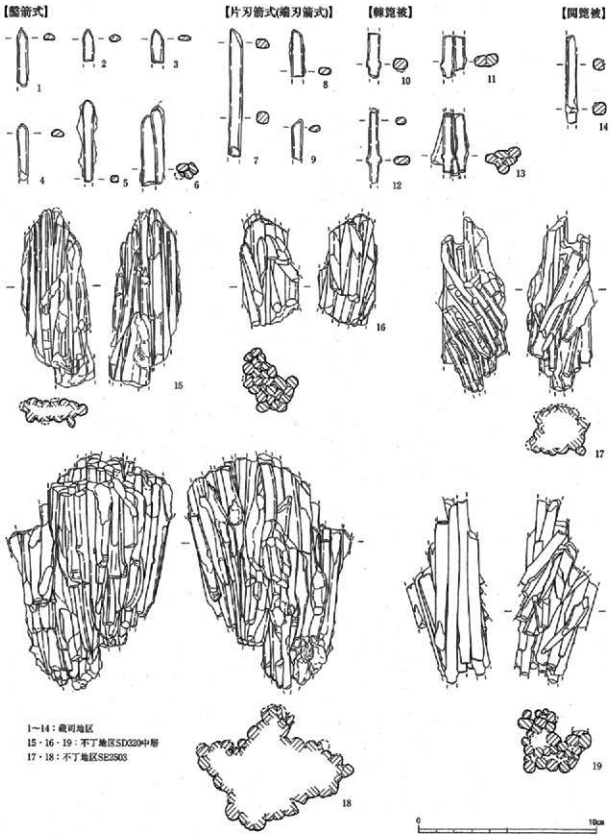


図4　大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄鏃

理する（小嶋 2014b）。

【矢（鉄鏃）】 鉄鏃は小片も含めて出土量が最も多い。鉄鏃は尖根系長頸鏃が主体であり、平根系鉄鏃はごく少量が確認できる。刃部形式を列挙すると、尖根系長頸鏃は柳葉式・三角形式・鏃箭式・鏃根式・片刃箭式・端刃箭式の6種類がある。平根系鉄鏃は三角形式と思われる資料が断片的に見られるのみで、方頭式や飛燕式等は現状で確認できていない。

鉄鏃組成の主体となるのは鏃箭式長頸鏃であるが、片刃箭式・端刃箭式長頸鏃の数量も多い。片刃箭式長頸鏃は刃部にわずかに刃関を有する。完形品の出土事例はなく、現状で最も残りの良い資料は溝ＳＤ320中層（大宰府史跡第14次調査）出土の被熱鉄鏃束である（九歴 2013）。本資料は約30個体の鉄鏃が溶着した資料であるが、1個体の鏃箭式長頸鏃が刃部先端から篦被（棘篦被）まで残る。これを見ると、刃部先端から篦被までの長さは9.4㎝で、茎部も含めた鉄鏃全長はおおよそ12.5㎝に復元できる。篦被形態は大半が棘篦被で構成されており、わずかに関篦被を含む。

鉄鏃以外の矢の部材は、被熱により大半が焼失している。矢柄は溶解した鉄鏃に取り込まれる形で、断片的に確認でき、いずれも軸を揃えた状態で束ねられていた痕跡が認められる。燃焼しやすい矢羽根は、現状で未確認である。

【弓（弓金具）】 弓金具は、弓の弭に近い部分に取り付けられる「両頭金具」が複数確認できる。出土した両頭金具は全長2.4～2.8㎝で総じて小型品が多い（小嶋 2012b）。花弁状に開く皮金具の折り返し部分は切り込みが密で6～12枚に開く資料が目立つ。

両頭金具は「矢を射る」際に負荷がかかる弓の弭付近に取り付けられており、弓の本質的機能を支える耐久性や弾力性に悪影響を与える付属部品である。このような構造から、両頭金具は「矢を射る」という弓本来の役割とは無関係で、弓の装飾部品の一つとして認知されている。また、芯金具は完全に固定されておらず、「矢を射る」際に振動する構造となる。両頭金具付属弓を用いた人々は、振動による音響に何等かの意義を見出していたのだろう[註1]。

両頭金具は古墳時代後期（6～7世紀前半）の横穴式石室から数多く出土する。古墳副葬品という特殊性はあるが、古墳に副葬された兵器は基本的に実用品で構成されるため、両頭金具付属弓は古墳時代後期の実用弓（儀礼的行為を含む）の一角を担っていたと考えられる。しかし、古墳の薄葬化が進んだ7世紀後半になると出土数は急激に減少する。飛鳥時代以降の兵器を大量に含む東大寺正倉院宝物の「弓・梓弓」にも、両頭金具は確認できない。つまり、時系列で見れば、大宰府政庁周辺官衙跡出土両頭金具は最新相（旧式兵器）に位置づけられる資料群となる。

両頭金具が取り付けられていた弓本体は焼失しており、両頭金具付属弓の個体数は不明である。当然、金属部材を付属しない弓は部材がすべて焼失し、痕跡すら残さない個体が存在する。奈良時代の武装全体から見れば、両頭金具付属弓は旧式兵器に属し、その数量も少量であったと見られる。

【鉄刀・刀子】 鉄刀・刀子は、刀身や茎部の一部と思われる破片を数点確認している。鉄刀・刀子は刀身をはじめとした金属製部材が主体となるにも関わらず、破片数は限定的である。大宰府保有兵器に占める数量は少なかったと判断できる。

【甲冑（鉄製小札甲）】 現在確認している甲冑は「鉄製小札甲」のみで、その構成部材で

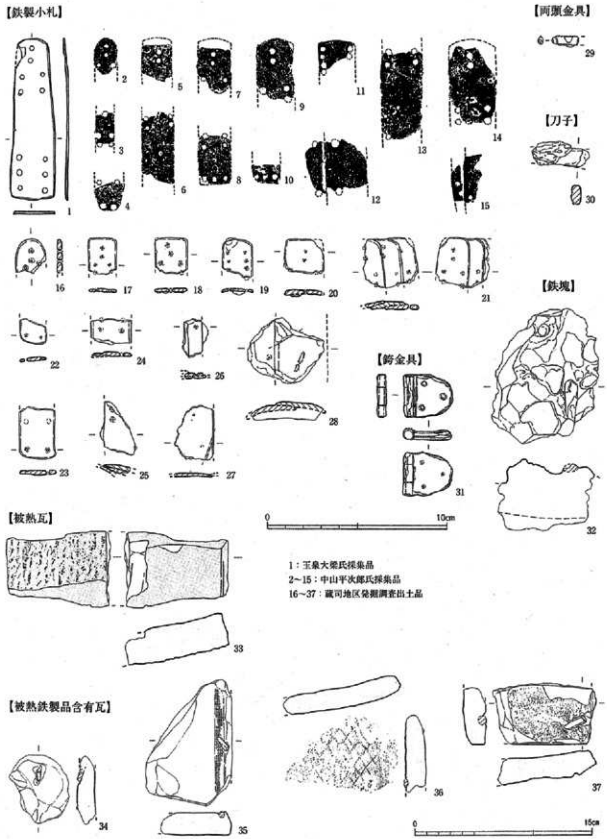


図５　大宰府政庁周辺官衙跡出土被熱鉄製品・被熱瓦・被熱鉄製品含有瓦

ある鉄製小札の破片が膨大に出土している。蔵司地区の発掘調査で出土した小札はすべて小片であり、全体が残る資料はない。唯一の完形品は、玉泉大梁氏が昭和８年９月に蔵司で採取した資料（九州大学玉泉館蔵「玉泉館 4104 第９之 70」）で、非円頭の小札で縅孔一列配置のものである。小札の組成識別や時期判別に有効な属性の一つである札幅に注目すると、出土した小札は札幅を基準に小型（1.0 ～ 1.3㎝）、中型（1.6 ～ 2.1㎝）、大型（2.3 ～ 2.9㎝）に大別できる。中山平次郎氏や玉泉大梁氏の採集資料を含め、縅孔と綴孔配置で細分すると、小型小札は縅孔一列配置１種類と縅孔二列配置１種類、中型小札は縅孔一列配置５種類と縅孔二列配置１種類、大型小札は縅孔一列配置１種類と縅孔二列配置１種類の計 10 種類を確認している。このうち、中型小札には第三縅孔や札端に綴孔が寄る資料が見られる。

小札も被熱の程度に個体差が認められ、ほぼ本来の形状を保つ資料から、著しく歪んだ資料まである。鉄鏃と同様に、型式差による被熱の程度の違いは認められない。また、小札が他個体と溶着する場合は、綴孔同士が重なった状態で軸を合わせている。綴紐で綴じられた状態を残す資料は複数確認できるため、小札は一度製品（甲冑）に組み上げられた後に被熱したと判断できる。ただし、綴紐や縅紐などの有機質部材はすべて焼失している。

【馬具】 引手の断片と思われる資料をわずかに確認している。いずれも半溶解状態で遺存しており、一部の資料の表面に緑錆が見られる。鉄刀・刀子と同様に出土数量は少ない。

（４）大宰府保有兵器の実態

出土資料から兵器の備蓄の裏付けがとれるのは、弓矢である。矢（鉄鏃）は軸を揃えて、かつ同一部位付近で溶着していることから、束ねられた状態で被熱したと判断できる。資料の遺存状態は、まさしく「兵器の備蓄」に相応しい。矢と対となる弓は、両頭金具の存在から備蓄対象であったことが確認できる。ただし、両頭金具付属弓が大宰府保有弓の主体であったとみるのは早計であり、両頭金具を付属しない弓の数量の方が多かったと見る方が妥当であろう。無論、弓の全長は不明だが、東大寺正倉院に納められた弓の全長から２m前後の「上長下短の長弓」が用いられたと考えられる。甲冑も複数種類の鉄製小札の存在から、出土資料から兵器の備蓄を認めてよい。鉄製小札は希少価値の高い武具であり、その備蓄主体が大宰府であるのを示す状況証拠の一つでもある。弓と同様に甲冑についても、有機質素材（木製・革製）の甲冑の存在を想定する必要がある。同じく、旗や鼓などの指揮具についても、有機質素材が主体であったと想定でき、備蓄されていたものが焼失した可能性は十分にある。

以上のように、有機質素材の焼失という資料的制約があるものの、弓矢・甲冑は考古資料から兵器の備蓄が実証できる。戦闘時の消耗品である「矢」の備蓄数が最も多く、長距離戦闘用の兵器である「弓矢」が大宰府保有兵器の主力であったと認めてよい。近距離戦闘用の兵器には、鉄矛等の長柄武器、鉄刀・鉄剣があるが、出土品は少ない。近距離戦闘用の兵器の備蓄場所（兵庫）が異なっていた可能性を残すが、現状の出土数では備蓄を肯定することはできない。とくに、『軍防令』で兵庫での保管が義務づけられている長柄武器の備蓄実態は、古代山城の守衛を考える上でも重要な研究課題である。同じく『軍防令』では、兵士各自が使用する基本装備（弓一張、弓弦袋一口、副弦二条、征箭五十隻、胡籙一具、太刀一口等）は「自備」することも規定されており、鉄刀・鉄剣は兵士個人の装備

に依存していたのだろうか。

結論を述べると、大宰府では遠距離戦闘を想定した兵器（弓矢）の備蓄を行っており、とくに消耗品である「矢」の備蓄に重きを置いていたことが分かる[註2]。当然、大野城をはじめとした大宰府都城の防衛では、遠距離戦闘を基本戦術としていたと判断でき、古代山城の兵庫に搬入されていた兵器も「弓矢」が主体であった可能性が極めて高い。なお、韓半島の古代山城では、弓用の鉄鏃に混じって、弩用（携行型・設置型）の鉄鏃も出土するが、大宰府都城周辺の出土品にはその類似品は認められない[註3]。律令国家形成期以降は弩や綿襖甲をはじめとする新式武装の導入が図られる一方で、基本装備は古墳時代の武装を継承していることが指摘されている（津野2011）。大宰府保有兵器の主力である弓矢も、古墳時代に流行した両頭金具付属弓や棘篦被の長頸鏃（7世紀）を多量に含んでおり、様式継承だけでなく備蓄兵器自体も継承する実態が伺える。

古代山城は韓半島での軍事活動を通じて、7世紀にはじめて日本列島に導入された防衛施設である。古墳時代の戦略では恒常的な防御施設の設置概念は希薄で、古代山城の出現には従来の戦略との断絶面を認めることができる。その一方で、実際の戦闘では古墳時代以来の武装を用いた遠距離戦闘を継続しており、古墳時代の戦術との連続面も評価しなければならない。考古資料として確認できる兵器から古代山城を眺めたとき、戦闘面での「日本化」という視点が見出せるのである。そこで、以下では『日本書紀』記載の戦争記事を基に、戦時下における古代山城の戦略・戦術について検討する。

2．古代山城と戦争

（1）『日本書紀』から読み取る内容

『日本書紀』を取り扱うにあたり、発表者の認識を改めて明らかにしておきたい。

『日本書紀』は神代より持統天皇11年（698年）8月にいたる歴史書である。天武朝から編纂が開始され、『続日本紀』の養老4年（720年）5月21日の「日本紀」奏上の記事で完成日時が確認できる。本書は編纂時における社会的習慣・合理的解釈・文章表現が、意識的・無意識的に反映されている。本研究で対象としている戦略・戦術についても例外ではなく、奈良時代以前（720年以前）の合理的思考を反映した記述であることをふまえる必要があろう。また、当然であるが、考古資料と異なり文献史料は、執筆者をはじめとした恣意的編纂が想定される。古代山城の戦略・戦術を探る上で、巻28「壬申紀」の記事は大いに参考となるが、天武朝の正統性を語るという点で壬申紀の記述は一貫しており、編纂側の政治的意図は確実視できる（早川2009）。ただし、「多数の関係者が想定されるようなケース（戦いなど）においては、文飾・潤色はあっても、争乱のなかの事件そのものの「造作」は不可能に近い」と把握できる（早川2009）。いずれにせよ、古代山城が運用されていた時代に編纂された同時代の歴史書である点は重要であり、同時代人の戦略・戦術に対する合理的思考を探る上での基本文献となる。

（2）『日本書紀』記載の戦略と戦術

以下では、『日本書紀』に記載された集団戦闘（暗殺・決闘を除く）を網羅的に整理し、種類ごとに概要を記す（表1～4）。本文中に記した『日本書紀』の引用記事は、宇治谷猛氏による現代語訳に依った（宇治谷1988）。集団戦闘の分類にあたっては、原則的に

記載単語を反映しているが、文面に対する解釈が加わっていることを明記しておく。

【防御施設の包囲（焼き討ち）】『日本書紀』記載の集団戦闘の大半が「皇位継承」に関わることもあり、皇子や大臣の館・寺院の包囲が中心となる。代表的な事例は、安康天皇没後の雄略天皇の挙兵記事で、円大臣の家を包囲した後に焼き討ちを行っている。また、戦端は開かれなかったが、用明２年４月２日の記事では、物部守屋大連と蘇我馬子大臣がそれぞれの館に兵を集める様が記されている。館を防御施設とした最たる記事は、皇極３年11月の蘇我大臣蝦夷と入鹿の館が挙げられる。甘橿岡では「家の外にとりでの柵を囲い、門のわきに武器庫を設けた。家ごとに用水桶を配置し、木の先にかぎをつけたもの数十を置き、火災に備えた。力のある者に武器をもたせ常に守らせた」と記し、畝傍山の東の家では「池を掘ってとりでとし、武器庫をたてて矢を貯えた。常に50人の兵士を率いて護衛させ家を出入りした」と記す。本記載は蘇我氏の専横を記述する内容であるが、館の軍事的拠点化に対する認識が読み取れる。また、皇極４年６月12日の蘇我入鹿殺害に際しては、中大兄皇子は法興寺に入り、とりでとしたとの記載がある。

このように、古墳時代から飛鳥時代の集団戦闘に際しては、本質的には生活空間や儀礼・宗教空間となる宮・館・家・寺を短期的な軍事施設として利用していたことが伺える。とくに古墳時代では徴兵に当たり、血縁集団・部民集団が核となっていることからも、館が兵の集結場所として利用される基本構造があったと見られる。館の軍事拠点化に伴って、自ずと集団戦闘の最終局面が館の包囲となる事例が多いようだ。また、包囲に続いて、焼き討ちの記載記事が目立つ。

【交通路の封鎖】 天武元年の「壬申の乱」や神武即位以前の「神武東征」を中心に記載が多い（図６）。壬申の乱の戦局を左右したとされる不破道の封鎖が代表的な事例となる。不破道の封鎖は、６月22日の大海人皇子の命に基づいて実施され、６月26日に村国連男依より美濃の軍勢3,000人で封鎖したとの報告が上がっている。その狙いについての明確な記述はないが、①行軍阻止、②物流掌握に対する戦略と解釈する。また、不破道の封鎖により近江朝の使者（駅使）である書直薬、忍坂直大麻呂の捕縛を果たしていることから、③情報掌握（情報封鎖）も狙いの一つであったと見られる。

なお、継体８年３月の記事では韓半島南部での戦乱において、伴跛が「城を子呑と帯沙に築いて、満奚と結び、のろし台・武器庫を設け、日本との戦いに備えた。また城を爾列比と麻須比に築いて、麻且奚・推鷹封につながるようにした」との記載がある。城を基点に周辺地域の交通路を掌握したかのような記載内容で注目できる。なお、同年４月の記載では物部連率いる水軍500が帯沙江に進軍するが、伴跛の襲撃を受けて敗走している。

【会戦・陣地戦】 軍勢同士が特定地域を戦場として対峙した事例では、継体22年11月11日の筑紫三井郡の戦い（筑紫国造磐井の乱）や天武元年７月22日の瀬田の戦い（壬申の乱）等が著名である。海上での会戦は、天智２年８月28・29日の白村江の戦いが唯一の事例となる。『日本書紀』記載の集団戦闘は、原則的に戦局を左右するような大規模戦闘を軸に記述されていることもあり、偶発的な遭遇戦の記載は乏しく、両陣営が河川（渡河地点）を挟んで対峙する陣地戦が記載の中心となる。先に挙げた瀬田の戦いでは、瀬田橋の西岸に近江軍が陣営を構えており、渡河地点となる瀬田橋が最大の激戦地として描写されている。

河川（渡河地点）が戦場となる頻度が高い要因には、①交通の要所であること、②進軍

速度が遅くなること、③行軍路（渡河地点）が限定されること等が挙げられ、迎撃地点としての利点を多く有するためと考えられる。また、河のほとりや港での陣営・兵の集結記事も散見され、④集結・屯営が容易な平地が確保できること、⑤守衛に適していること、⑥飲料水を確保できること等が挙げられる。以上の点から、古代山城が運用された時点においても、河川（渡河地点）や港に対する戦略・戦術面での合理的思考が存在したと判断する。なお、『続日本紀』に記された「藤原広嗣の乱」においても、天平12年10月9日の大野朝臣東人の言上で、「逆賊の藤和広嗣が一万騎ばかりの衆を率いて、板櫂川に到着しました。広嗣は自ら隼人軍を率いて先鋒となり、木を編んで船をつくり、まさに河を渡ろうとしました。そのとき官軍の佐伯宿禰常人と安倍朝臣虫麻呂とは、弩を放ってこれを射たので、広嗣の衆は却いて河の西に引きあげました。常人らは軍士六千余人を率いて河の東に陣をしき、・・・（後略）（宇治谷 1992）」と記述されており、渡河を狙った迎撃と河川を挟んだ陣地戦が展開されている。

では、陣地戦の具体像はどのようなものだったのか。その様相を探れる記述として、天武元年7月2日の古京守衛記事が注目できる。荒田尾直赤麻呂は古京の防衛に際し、「道路の橋の板をはいで楯に造り、京の街のあちこちに立てて守り」としている。この楯は古墳時代の楯形埴輪等に表現される「置盾」の代替品と解釈できる。置盾を用いた陣地戦については、岡安光彦氏の研究成果が大いに参考となる。壬申の乱における兵器と兵士の検

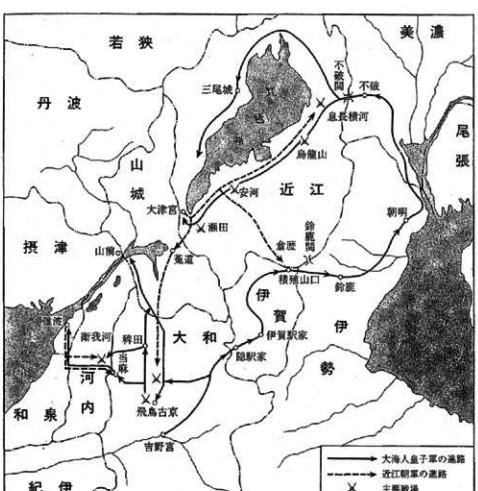


図6　壬申の乱関係地図（篠川2013より引用）

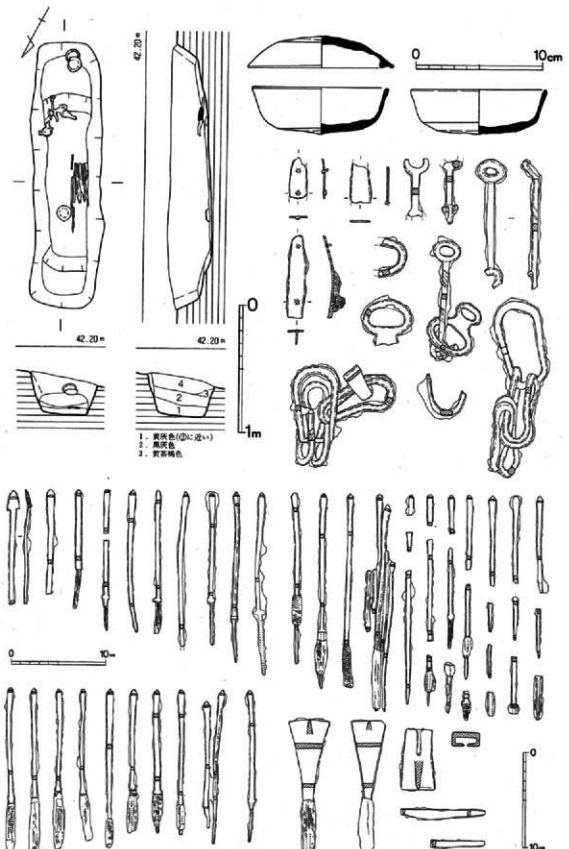


図7　津古生掛2号土坑墓

討から、乱に動員された主力兵士を軽装弓兵と識別し、「一つの置盾を数名が共有する陣地戦」が主体的な戦闘形式との見解を示した（岡安 2013）。天武元年７月 22 日の瀬田の戦いにおける近江軍陣地の描写は詩的表現が強いが、「打ちならす鉦鼓の音は数十里にひびき、弓の列からは矢が雨の降るように放たれた」と記載され、陣地戦における遠距離戦闘の光景が思い浮かぶ。

【突撃・追撃】　戦局を左右する突撃については、歩兵による突撃と騎兵による突撃の２種類が確認できる。歩兵による突撃は、天武元年７月 22 日の瀬田の戦いにおける大分君稚臣の活躍が筆頭に挙げられる。壬申の乱における最大の激戦地である瀬田橋において、大分君稚臣は「矛を捨て鎧を重ね着して、刀を抜いて一気に板を踏んで渡った。板につけられていた綱を切り、射られながらも敵陣に突入した。」と記述され、渡河地点である瀬田橋の突破により近江軍は総崩れとなった。

騎兵による突撃では、天武元年７月２日の記事に「当麻の村で、壱伎史韓国の軍と、葦池のほとりで戦った。このとき勇士来目という者があって、刀を抜き、馬を駆け、軍の中に突入した。騎士が後から後から進んだ。近江軍はことごとく逃げ、追っかけて大いに斬った。」と記されており、騎兵による突撃により戦局を決している。なお、壬申の乱で活躍した騎兵は東国騎兵を中心に、軽装弓騎兵が主力であったと考えられている（岡安 2013）[註４]。

追撃に関する記述では、上記の記事の他に壬申の乱勃発直後の近江朝の対応記事が注目できる。群臣の一人が「速やかに騎馬隊を集めて、急追すべき」と進言しており、騎兵の用兵方法に対する認識が伺える。この進言は実行されなかったが、天武元年７月４日の奈良山の戦いでは、大伴吹負を敗走させた大野君果安の追撃記事も見られる。

【奇襲（夜襲）・伏兵】　奇襲（夜襲）の記述で最も詳細なのは、天武元年７月５日の近江軍の田辺小隅による奇襲である。「鹿深山を越え、人に知られぬよう、旗を巻き鼓を抱いて倉歴についた。夜中、枚を含み、城柵をくずし、にわかに田中臣足麻呂の陣営の中に入った」と記述され、奇襲（夜襲）を描写する意図が明確に読み取れる。同じく、天武元年７月の廬井造鯨率いる 200 の精兵による大伴吹負陣営の襲撃も奇襲の範疇に含まれようか。

伏兵については、上述した不破道の山中での書直薬、忍坂直大麻侶の捕縛がある。この際には、山中に伏兵を配して、退路を遮断する様子が記されている。また、古くは安康３年 10 月の三輪皇子の捕縛時に「不意に途中に伏兵があり、三輪の磐井のほとりで合戦となった」との記述が見られる。

（３）『日本書紀』に記された古代山城の戦闘

『日本書紀』には壬申の乱の際に利用された古代山城として、三尾城と高安城の二つの城の記述がある。三尾城の遺構は未発見の状況にあり、比定地として大津京北方の湖東地域（高島郡三尾）が挙げられる。壬申の乱では、羽田公矢国・出雲臣狛によって攻め落とされたとの記述があるが、記載が簡素なために戦闘の詳細は不明である。なお、同日に瀬田の戦いの勝敗が決しており、大友皇子を中心とする近江軍の主力は瀬田橋西岸に着陣する状況にあった。

高安城は、奈良盆地と大阪平野に挟まれた高安山に築かれた古代山城である。壬申の乱における大和・河内の戦場は、奈良山や飛鳥上道・中道・下道等で展開しており、三尾城

と同様に主戦場として利用されていない。以下に高安城に関わる記述を記す。

「これよりさき将軍吹負は奈良に向かって、稗田にいたったとき、ある人が「河内の方から軍勢が沢山やって来ます」といった。吹負は坂本臣財・長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂に、三百の兵士を率いて、竜田を守らせた。また佐味君少麻呂に数百人を率いて、大坂に駐屯させた。鴨君蝦夷に、数百人を率いて石手道を守らせた。この日、坂本臣財らは平石野にやどったが、近江軍が高安城にいると聞いて山に登った。近江軍は財らがくると知って、税倉をことごとく焼いて、皆散り逃げた。それで財らは城の中で夜をあかした。明方西の方を望見すると、大津・丹比二つの道から、軍勢がたくさんやってくる旗が見えた。だれかが「近江の将壱伎史韓国の軍である」といった。財は高安城から下って、衛我河を渡り、韓国と河の西で戦った。財らは兵が少なくて防ぐことができなかった。」

大伴吹負が河内からの近江軍の侵攻を防ぐにあたり、重要視しているのは交通路の封鎖であり、大和への進入路に各軍勢を配している。高安城は竜田の封鎖に向かった坂本臣財らにより攻略されているが、同員数は最大でも 300 名と少ない。また、近江軍は坂本臣財らと交戦する前に逃散しており、不確実ながら守衛していた近江軍の兵数も少数であったことが想定できる。税倉を燃やしている点を評価すれば、戦略面での兵糧に対する認識が伺える。重要なのは、高安城を占拠した坂本臣財の対応であり、城内からの眺望により河内方面の近江軍の動向を把握し、近江軍の迎撃へと向かっている点である。高所からの軍勢の把握は、古代山城を利用した基本戦術であったことが伺える。高所からの軍勢の把握は、大和の主戦場の一つであった奈良山の戦いでも認識でき、大伴吹負を敗走させた大野君果安は高所から古京を眺めて伏兵の有無を探っている。

また、直接的に古代山城と関係しないが、百済復興運動における朴市田来津の進言も注目でき、「避城と敵のいるところは、一夜で行ける道のりです。たいへん近い。もし不意の攻撃を受けたら悔いても遅い。飢えは第二です。存亡は第一です。今敵がたやすく攻めてこないのは、ここが山険を控え、防御に適し、山高く谷狭く守り易く攻めにくいためです。もし低いところにいれば、どうしてかたく守り動かないで、今日に至ることができたでしょうか。」と記述されている。敵軍勢（拠点）との距離や防衛面での自然地形に対する認識が伺える。

おわりに

前半部では、考古資料を軸に古代山城にどのように兵器を貯え、どのような兵器を用いたのかを検討した。後半部では、文献史料（『日本書紀』）を軸に古墳時代との連続性を意識しつつ、古代山城を運用していた時代の戦略・戦術に対する合理的思考を探った。最後に双方の検討結果を統合して、日本列島に築かれた古代山城がどのような戦闘を想定していたのかについて仮説を提示したい。

戦時下における古代山城は、開戦当初から「戦場（防御施設）」としての利用を想定しておらず、まずは①兵士の集結場所（派兵）、②兵糧・兵器の守衛（供給）、③高所からの敵軍把握としての機能を想定していたと考えられる。主戦場は軍勢の進軍速度が速い交通路（官道）であり、峠（関）や河川（渡河地点）、港（上陸地点）を基本的な迎撃地点としていたことが伺える。迎撃に際しては、置盾を基点とした陣地を構築し、弓矢を用いた

長距離戦闘を主体としていた。戦局は弓矢・弩矢をかいくぐった歩兵・騎兵の突撃に左右され、追撃では騎兵が主体的に用いられたと考えられる。基本装備は兵士各人の自備を原則とするが、消耗品である矢は公的に備蓄が図られていたことは確実である。この備蓄は長期間に及び、飛鳥時代に備蓄を開始した兵器が奈良時代にも運用されていたことが考古資料から裏付けられる。指揮具や長柄武器がどの程度運用されていたかについては、今後も検証が必要である。

迎撃に失敗した際に、はじめて古代山城が防御施設としての運用が本格化する。日本列島における古代山城の具体的な戦闘描写の記録がなく、その運用の実像は依然として論拠に乏しい。現代の合理的思考に基づけば、③高所からの敵軍把握を基に襲撃地点の城門・城壁（土塁）に兵士を集結させることを基本戦術にしていたと推測できる。敵軍は進軍速度が遅くなる傾斜地を登るため、敵軍の視認を経た対処的戦闘を想定していただろう。そして、当然ながら④高所からの長距離戦闘が主体であったことは容易に考えられる。

以上、日本列島における古代山城を運用した戦闘を公約数的に描写した。古代山城の研究は、広域的な立地や政治的な戦略面での検討が多く認められるが、各古代山城でどのような戦闘を想定していたのかについては十分な検討がなされていない。考古資料・文献史料・自然地理等を駆使しつつ、具体的な論拠に基づいた研究の深化が求められる。

【註】

註1：『日本書紀』雄略23年の記事に「鳴弦の術を用いて邪気を払い、浜辺の上で踊り伏しして矢を避けていた者二隊を射殺した」とある（宇治谷1988）。両頭金具付属弓と直結する記事ではないが、古代の戦闘における音響を用いた儀礼行為の存在が伺える。

註2：大宰府南方に位置する小郡官衙遺跡でも、大宰府政庁周辺官衙跡と同一型式で組成も類似した鉄鏃群が216点以上確認できる（小嶋2014a）。また、これらの鉄鏃群は東大寺正倉院に納められた鉄鏃群とも類似する（小嶋2014b）。

註3：古代日本の弩の運用を検討した五十嵐基善氏は、携行型の弩は7世紀には積極的に使用された形跡はないとの見解を示す（五十嵐2012）。また、設置型の弩についても、8世紀の天平期以降に重視されるようになったと想定している。

註4：筑紫における軽装弓騎兵の実態は、津古生掛2号土坑墓から伺える（図7）。副葬品は馬具・鉄鏃に加えて、鉄斧や刀子も含み、あたかも兵士自備の基本装備をうかがわせるような内容である。

【参考文献】

五十嵐基善 2012「古代日本の弩に関する基礎的考察－その構造と運用を中心として－」『文学研究論集』第37号　明治大学大学院

宇治谷孟 1988『日本書紀（上）（下）』講談社学術文庫

宇治谷孟 1992『続日本紀（上）』講談社学術文庫

篠川賢 2013『飛鳥と古代国家』日本古代の歴史2 吉川弘文館

岡安光彦 2013「壬申の乱における兵器と兵士－考古学的検討－」『土曜考古』第35号 土曜考古学会

岡山県教育委員会 2013『史跡 鬼城山2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告236

九州歴史資料館 2012『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅶ　平成22・23年度』

九州歴史資料館 2013『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅳ―不丁地区 遺物編1―』

九州歴史資料館 2014a『大宰府史跡発掘調査報告書Ⅷ　平成 24・25 年度』
九州歴史資料館 2014b『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅴ―不丁地区 遺物編２―』
小嶋篤 2012 a「大宰府成立前後の鉄生産―製炭・製鉄・鍛冶・鉄器―」『生産と流通』九州考古学会・嶺南考古学会第 10 回合同考古学大会 九州考古学会・嶺南考古学会
小嶋篤 2012 b「大宰府の弓金具―大宰府史跡・蔵司地区出土の両頭金具―」『都府楼』44 号 古都大宰府保存協会
小嶋篤 2013「九州北部の木炭生産―製炭土坑の研究―」『福岡大学考古学論集２』福岡大学考古学研究室
小嶋篤 2014a「小部官衙遺跡出土鉄鏃の研究」『九州歴史資料館研究論集』39　九州歴史資料館
小嶋篤 2014b「大宰府保有兵器の蓄積過程」『古代武器研究』vol.10 古代武器研究会
津野仁 2011『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館
早川万年 2009『壬申の乱を読み解く』歴史文化ライブラリー 284 吉川弘文館
松川博一 2012「大宰府軍制の特質と展開－大宰府常備軍を中心に－」『九州歴史資料館研究論集 37』九州歴史資料館

表1 『日本書紀』記載の集団戦闘1

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術（勝者側）	山城（防御施設）	備考
神武即位前	4月	9日	孔舎衛坂	長髄彦	神武天皇	—	矢	迎撃	—	生駒山越え
神武即位前	6月	23日	名草邑	神武天皇	名草戸喜（女賊）	—	—	—	—	
神武即位前	6月	23日以後	熊野の荒坂の津	神武天皇	丹敷戸畔（女賊）	—	—	—	—	
神武即位前	9月	5日	国見丘（女坂・男坂・皇坂）	八十梟帥		女軍・男軍	—	交通路の遮断	（悪害の地）	おこし炭
神武即位前	9月	5日	磐舟呂	兄磯城		—	—	交通路の遮断	（悪害の地）	
神武即位前	10月	1日	国見丘	神武天皇	八十梟帥	—	—	誘撃→だまし討ち	—	
神武即位前	11月	7日	忍坂・墨坂	神武天皇	梟雄兄磯城	女軍・男軍	甲冑	隠動→挟撃	—	炭の火
神武即位前	12月	4日	長髄彦辺り？	神武天皇	饒速日命・長髄彦	—	弓矢・歩戦	—	—	
神武即位前	2月	20日	そほの県の波咩の丘岬	神武天皇	新城戸畔	一部の軍	—	誘撃	—	
神武即位前	2月	20日	和珥の坂下	神武天皇	居勢祝	一部の軍	—	誘撃	—	
神武即位前	2月	20日	臍見の長柄の丘岬	神武天皇	猪祝	一部の軍	—	誘撃	—	
崇神10年	9月	27日以降	大坂	五十狭芹彦命	吾田媛	—	—	迎撃	—	三道から進軍
崇神10年	9月	27日以降	荒見山	大彦・屋国葛	武埴安彦	—	—	会戦	—	三道から進軍
崇神10年	9月	27日以降	鞆淵河	大彦・屋国葛	武埴安彦	—	弓矢・甲	陣地戦→渡河・追撃	—	河を挟んだ陣地戦
垂仁5年	10月	1日以降	—	八綱田	狭穂彦王	—	—	包囲→火計	（稲城）	稲を積んだ城塞で籠城
景行12年	10月	—	稲葉の川上	景行天皇	土蜘蛛（青・白）	—	稚	会戦	—	
景行12年	10月	—	禰疑山	土蜘蛛（打猿）	景行天皇	—	—	迎撃（伏兵）	—	撤退後、川の辺に陣
景行12年	10月	—	禰疑山	景行天皇	土蜘蛛（八田・打猿）	—	—	誘撃	—	
景行18年	4月	3日	熊県	景行天皇	弟熊	—	—	誘撃	—	
景行27年	12月	—	熊襲の国	日本武尊・弟彦	魁帥	—	—	だまし討ち→誘撃	—	
景行40年	—	—	焼津	日本武尊	賊	—	—	焼き討ち	—	
景行40年	—	—	陸奥国・竹水門	日本武尊	蝦夷	—	弓矢	交戦なし	—	竹水門に屯して防戦
景行56年	8月	—	東国	御諸別王	蝮蛇	—	—	誘撃	—	
仲恭元年	11月	4日	—	仲哀天皇	蒲見別王	—	—	誘撃	—	
仲哀8年	—	—	筑紫	熊襲	仲哀天皇	—	—	—	—	
神功皇后元年	3月	—	熊襲の国	熊襲	熊襲	—	—	—	—	
神功皇后元年	3月	20日	層増岐野	神功皇后	羽白熊鷲	—	—	会戦	—	
神功皇后元年	3月	25日	山門県	神功皇后	土蜘蛛（田油津媛・夏羽）	—	—	誘撃	—	兵を構えて迎える
神功皇后元年	10月	3日	新羅国	神功皇后	新羅王	—	鼓・旗・矛	交戦なし	—	
神功皇后2年	2月	—	播磨・宍路	磐坂王・忍熊王		—	—	迎撃→撤退	—	陵をつくるまね
神功皇后2年	2月	—	住吉	忍熊王		—	—	撤退→迎撃→撤退	—	
神功皇后2年	3月	5日	宇治	武内宿禰・武振熊	忍熊王・麛之凝	—	楯弓・鏑矢・真刀	陣地戦→だまし討ち	—	宇治川を挟んで対峙
神功皇后2年	3月	—	近江の逢坂・狭狭波・瀬田	武内宿禰	忍熊王	—	—	追撃	—	
神功皇后5年	3月	—	多大浦・草羅城	葛城襲津彦	新羅	—	—	誘撃	—	多大浦に陣
神功皇后49年	3月	—	卓淳国等	荒田別・鹿我別	新羅	—	—	—	—	
神功皇后49年	3月	—	欧鹿	荒田別・鹿我別	欧鹿	—	—	—	—	
神功皇后49年	3月	—	比利等	百済王 肖古・貴須	比利等	—	—	交戦なし	—	
神功皇后62年	—	—	新羅国	襲津彦	新羅	—	—	—	—	
応神16年	8月	—	新羅	木菟宿禰	新羅	—	—	示威	—	
応神41年	2月	—	筑紫	大鷦鷯尊	大山守皇子	数百	—	渡河誘撃→伏兵	—	
仁徳53年	5月	—	新羅	田道	新羅（百衝）	数百人	—	陣地戦→突撃→追撃	—	左右の軍
仁徳55年	—	—	水門	蝮蛇	田道	—	—	—	—	
仁徳87年	1月	—	難波・飛鳥山・竜田山	仲皇子	大兄去来穂別尊	—	—	包囲→焼き討ち→伏兵・追撃	—	
允恭5年	7月	—	玉田の家	允恭天皇	玉田宿禰	—	甲	包囲	—	
允恭42年	10月	—	物部大前宿禰の家	穴穂皇子	軽太子	—	穴穂矢・軽矢	包囲	—	
安康元年	2月	—	大草香皇子の家	安康天皇	大草香皇子	—	—	包囲	—	
安康3年	8月	—	—	雄略天皇	八釣白彦皇子	—	甲・刀	誘撃	—	
安康3年	8月	—	円大臣の家	雄略天皇	坂合黒彦皇子・眉輪王・円大臣・坂合部連贄宿禰	—	—	包囲→焼き討ち	—	
安康3年	10月	—	三輪の磐井のほとり	雄略天皇	三輪皇子	—	—	伏兵→会戦	—	
雄略7年	8月	—	—	雄略天皇	吉備弓削部虚空	物部兵士30人	—	誘撃	—	
雄略8年	2月	—	葛足流城	任那王ら	高麗王	—	—	陣地戦→奇襲→挟撃	—	

表2 『日本書記』記載の集団戦闘2

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術(勝者側)	山城(防御施設)	備考
雄略9年	3月	—	新羅	紀小弓宿禰	新羅王	数百の騎兵	—	包囲→追撃	—	
雄略13年	8月	—	播磨国御井隈	春日小野臣大樹	文石小麻呂	100人の兵士	—	包囲→焼き討ち	—	
雄略14年	4月	—	日根	雄略天皇	根使主	—	—	—	(稲をつんだ城)	家を城と表現
雄略18年	8月	10日	伊賀の青墓	物部菟代宿禰・物部目連 物部大斧手	朝日郎	—	弓・楯・ 二重の甲	陣地戦	—	
雄略20年	冬	—	百済	高麗	百済	—	—	—	—	
雄略23年	4月	—	高麗	筑紫の安到臣・馬飼臣	高麗王	船軍	—	—	—	
雄略23年	8月?	—	娑婆湊・丹波国浦明の湊	吉備臣尾代	蝦夷	—	—	会戦→追撃	—	鳴弦の術
雄略23年	8月	—	大蔵の役所	白髪皇子	星川皇子・吉備稚媛・兄君・ 城丘前来目	—	—	包囲→焼き討ち	—	吉備上道臣の船軍
顕宗3年	—	—	帯山城・東道・港	百済王・古爾解・内頭莫古解	紀生磐宿禰	—	—	—	帯山城	帯山城による交通路の掌握
仁賢11年	—	—	奈良山	武烈天皇・大伴金村連	鮪臣	数千の兵	—	道路封鎖→包囲	—	
仁賢11年	11月	11日	平群真鳥臣の家	武烈天皇・大伴金村連	平群真鳥臣	—	—	包囲→焼き討ち	—	
継体8年	3月	—	子呑・帯沙・爾列比・麻須比	伴跛	新羅	—	—	交通路の掌握→襲撃	子呑・帯沙・ 爾列比・ 麻須比に城	のろし台・武器庫を設け、 日本との戦いに備えた
継体8年	4月	—	帯沙江	伴跛	物部連	—	帷幕	襲撃	—	
継体21年	6月	3日	肥前・肥後・豊前・豊後	筑紫国造磐井	毛野臣	60,000	—	海路の遮断	—	
継体22年	11月	11日	筑紫の三井郡	物部麁鹿火	筑紫国造磐井	—	旗・鼓	会戦	—	
継体23年	3月	—	刀伽・古跛・布那牟羅	新羅	加羅	—	—	—	刀伽・古跛・ 布那牟羅・ 北の境の5つの城	
継体23年	4月	—	己叱己利・多々良の原	上臣伊叱夫礼智干岐	近江毛野臣	3,000	—	陣地戦	—	
継体24年	9月	—	背評	任那(阿利斯等)・百済	近江毛野臣	—	—	会戦	—	
継体24年	9月	—	城	任那(阿利斯等)・百済・新羅	近江毛野臣	—	—	包囲→撤退	久礼牟羅城など	1ヶ月の籠城
欽明6年	12月	甲午	宮廷	雋群	細群	—	鼓	包囲	—	
欽明7年	1月	丙午	—	雋群	細群	—	—	—	—	1と重複記事
欽明12年	—	—	漢城・平壌	百済(聖明王)・新羅・任那	高麗	—	—	—	—	百済領の拡大
欽明13年	—	—	漢城・平壌	新羅	百済	—	—	—	—	新羅領の拡大
欽明14年	10月	20日	東聖山付近	余昌(威徳王)	高麗(王)	—	鼓笛、旗、 頸鎧、鉾	—	百合野の塞	
欽明15年	12月	9日	函山城	筑紫物部莫奇委沙奇	新羅	—	火箭	火計・攻城戦	函山城	
欽明15年	—	—	久陀牟羅の塞付近	新羅(苦都)	百済(聖明王)	—	佩刀	道の遮断	久陀牟羅の塞	聖明王戦死
欽明15年	—	—	久陀牟羅の塞	筑紫国造	新羅	—	弓矢、鞍、鎧	挟撃、間道の使用	久陀牟羅の塞	余昌(威徳王)脱出
欽明23年	1月	—	伽耶地域	新羅	日本・任那	—	—	—	—	欽明天皇21年か?
欽明23年	7月	—	旧伽耶地域	紀男麻呂宿禰・河辺臣瓊缶・ 薦集部首登弭	新羅	—	弓矢	—	—	大将軍・副将・封書 新羅戦略的後退
欽明23年	7月	—	旧伽耶地域	新羅(闘将)	河辺臣瓊缶・倭国造手彦・ 調吉士伊企儺	—	白旗、矛、刀	後退→陣中突撃	城・堀	前鋒・日本軍惨敗
欽明23年	8月	—	高麗	大伴連狭手彦・百済	高麗(王)	数万	—	百済の計?	—	宮中に侵攻
敏達10年	2月	—	本州北方?	蝦夷	日本	数千	—	—	—	蝦夷首領の綾糟を招集
用明1年	5月	—	磐余・三輪山・後宮	穴穂部皇子・物部守屋	三輪君逆	—	—	—	—	
用明2年	4月	—	河内・大和	物部守屋・蘇我馬子等		—	弓矢・皮盾	館の守衛	館	戦端開かれず
用明2年	5月	—	穴穂部皇子の宮	炊屋姫尊・蘇我馬子・ 佐伯連丹経手等	穴穂部皇子・宅部皇子	—	弓矢	宮の包囲	宮・楼	5月、物部守屋の離反
用明2年	7月	—	渋河・衣摺	蘇我馬子・厩戸皇子等	物部守屋	—	弓矢	館の包囲	館・稲積・樹木	高位置からの射撃、 簡易防御施設の設営
用明2年	7月	—	難波・守屋宅、餌香の川原	蘇我馬子	捕鳥部万	数百	弓矢、剣、 小刀	包囲	館	川原の死体多数、忠犬伝承

表3 『日本書紀』記載の集団戦闘3

年	月	日	戦場	勝者	敗者	勤員人数	兵器	戦術（勝者側）	山城（防御施設）	備考
推古8年	—	—	新羅（旧伽耶地域か？）	境部臣・穂積臣	新羅	10,000余	旗	攻城戦	多多羅・素奈羅・弗知鬼・委陀・南加羅・阿羅羅	倭国撤退後、新羅侵攻
推古26年	8月	1日	高麗	高麗	隋（煬帝）	300,000	鼓吹、弩、石弓	—	—	
推古36年	9月	—	館・寺・畝傍山	蘇我蝦夷	境部摩理勢・毛津	—	—	包囲	館・寺	泊瀬王病死
舒明9年	—	—	関東？	上毛野君形名	蝦夷	—	剣、弓矢	進撃→守衛→進撃	砦	
皇極3年	11月	1日	斑鳩宮・生駒山・斑鳩寺	蘇我入鹿・巨勢徳太臣 土師娑婆連	山背大兄王	数十人	弓矢	包囲・焼き打ち	宮	
皇極4年	6月	12・13日	宮・法興寺	中大兄皇子・中臣鎌足・倉山田麻呂臣等	蘇我入鹿・蝦夷、漢直等	—	長槍、弓矢、剣、甲	暗殺→守衛	寺	甘樫岡の家（柵・武器庫・用水桶・守衛兵）、畝傍山東の家（池（濠）・武器庫（矢備蓄）・守衛兵）
大化元年	9月	12日	吉野山？	中大兄皇子・菟田朴室古・高麗宮知	古人大兄皇子	若干	—	—	—	
大化3年	3月	24～26日	大臣の家・山田寺	中大兄皇子・大伴狛連・蘇我日向臣	蘇我倉山田麻呂	—	—	包囲	山田寺	山田寺を防衛拠点化
斉明4年	4月	—	秋田浦	阿倍臣	秋田・能代二郡の蝦夷	舟軍180艘	弓矢	威嚇	—	戦闘前に降伏
斉明4年	11月	5日	有馬皇子の家	蘇我赤兄・物部朴井連鮪	有馬皇子	造営工事人夫	—	包囲	家	計画では「大宮を焼いて、500人で一日二夜、牟婁津（田辺市の港）に迎え撃ち、急ぎ舟軍で、淡路国をさえぎり、牢屋に囲んだようにすれば、計画は成り易い」
斉明4年	—	—	粛慎	越国守阿倍引田臣比羅夫	粛慎	—	—	—	—	
斉明6年	3月	—	大河のほとり	阿倍臣・陸奥の蝦夷・渡島の蝦夷	粛慎	船軍200隻	—	示威	柵	1,000余人が河に面して屯営
斉明6年	7月	10～13日	尾資の津、怒受利山等	唐（蘇定方）・新羅王（春秋智）	百済王・義慈王	—	—	急襲・（戦略・情報封鎖→挟撃）	王城	3日で王城が陥落→百済復興運動
斉明7年	7月	—	高麗の城下	蘇将軍・安麻王子（契芯加力）		—	—	水陸両路からの進撃	城	
天智元年	3月	—	ソ留城（都々岐留山）	日本・高麗	唐・新羅	—	—	城の守衛	ソ留城（都々岐留山）	
天智2年	2月	—	百済南部4州	新羅	百済	—	—	焼き討ち	—	
天智2年	6月	—	沙鼻・岐奴山	上毛野君雅子	新羅	—	—	—	沙鼻・岐奴山	
天智2年	8月	17日	州柔	新羅	百済	—	—	包囲	州柔	
天智2年	8月	28・29日	白村江	日本・百済	唐・新羅	唐・軍船170艘	軍船	竪陣→挟撃	—	
天智7年	10月	—	高麗	唐（英公）	高麗	—	—	—	—	
天武元年	6月	22日	美濃国安八磨郡	天武天皇		—	—	兵（部曲の招集）	—	東宮の食封
天武元年	6月	22～26日	不破道	天武天皇・村国連男依	近江軍	美濃軍勢3,000人	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	24日	飛鳥	天武天皇		—	—	駅鈴の確保→失敗	—	
天武元年	6月	24日	隠郡	天武天皇	近江軍	—	—	焼き討ち	—	
天武元年	6月	24日	伊賀郡	天武天皇	近江軍	—	—	焼き討ち	—	
天武元年	6月	25日	鈴鹿郡の山道	天武天皇	近江軍	500	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	—	—	近江朝		—	—	騎馬隊による追撃（横禁のみ）	—	
天武元年	6月	27日以前	不破の山中	天武天皇	韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大麻侶	—	—	伏兵	—	書直薬・忍坂直大麻侶を捕縛
天武元年	6月	27日	方々の道	天武天皇		20,000	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	6月	29日	飛鳥	大伴連吹負・坂上直熊毛・秦造熊	高坂王・穂積臣百足	数十騎	騎兵・弓・刀	奇襲	—	小墾田の武器庫→近江輸送

表4『日本書紀』記載の集団戦闘4

年	月	日	戦場	勝者	敗者	動員人数	兵器	戦術(勝者側)	山城(防御施設)	備考
天武元年	7月	1日	竜田	坂本臣財ら		300	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	大坂	佐味君少麻呂		数百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	石手道	鴨君蝮奥		数百人	—	交通路の封鎖	—	河内からの軍勢対策
天武元年	7月	1日	高安城	坂本臣財	近江軍	—	—	交戦なし	高安城	秋倉を使いて、逃亡
天武元年	7月	2日	高安城・衡我河	壱伎史韓国	坂本臣財	—	旗	会戦	高安城	明け方西の方を望見、高安城から下って、衡我河を渡り、韓国と河の西で戦った。
天武元年	7月	2日以前	僧坂道	配臣大音		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	2日	伊勢一大和	配臣阿閉麻呂ら		数万	—	増援	—	
天武元年	7月	2日	不破一近江	村国連男依ら		数万	—	遮軍	—	
天武元年	7月	2日	前萩野	多臣品治		3,000	—	駐屯	—	
天武元年	7月	2日	倉歴道	田中臣足麻呂		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	2日以前	犬上川のほとり	山部王ら		数万	—	集結→内紛	—	
天武元年	7月	2日以前	玉倉部村	出雲臣狛	近江軍	精兵	—	迎撃	—	
天武元年	7月	3日	奈良山	大伴連吹負		—	—	高所に駐屯	—	奈良山の上に駐屯
天武元年	7月	3日	古京	荒田尾直赤麻呂・息部百子人		—	置盾	置盾による守衛	—	楯の板をはいで楯につくり、京のまちのあちこちに立てて守り
天武元年	7月	4日	**当麻・竜池のほとり**	大伴連吹負・来目	壱伎史韓国	—	刀・馬	会戦	—	騎兵による突入
天武元年	7月	4日	**飛鳥上道・中道・下道**	大伴連吹負		—	—	交通路の封鎖	—	
天武元年	7月	4日	**中道・村屋**	犬養連五十君・置始連菟	大伴連吹負	2000の精兵	—	本陣の奇襲	—	
天武元年	7月	4日	**上道・墨俣**	三輪君高市麻呂・置始連菟	置井連鯛	—	—	後続の分断	—	
天武元年	7月	4日	奈良山	近江側(大野君果安)	大伴連吹負	—	—	駐屯地の襲撃→追撃→敗退	—	高所から京をうかがう→伏兵の想定
天武元年	7月	5日	倉歴	近江軍(田辺小隅)	田中臣足麻呂	—	旗・鼓・枚	夜襲	城楯	城楯を崩す
天武元年	7月	6日	前萩野	多臣品治	田辺小隅	—	—	防衛→追撃	—	
天武元年	7月	7日	息長の横河	村国連男依	猪部連網手	—	—	—	—	
天武元年	7月	9日	鳥籠山	村国連男依	秦友足	—	—	—	—	
天武元年	7月	9日	大和京	配臣阿閉麻呂ら・置始連菟		千余騎	—	援軍	—	軍勢を分ける
天武元年	7月	13日	安河のほとり	村国連男依	社戸臣大口・土師連千島	—	—	—	—	大勝
天武元年	7月	17日	近江国？	村国連男依	栗太の軍	—	—	追撃	—	
天武元年	7月	22日	瀬田	村国連男依・大分君稚臣	大友皇子・智尊ら	—	旗幟・鉦鼓・弓・矛・鏡・刀	渡河地点の掌握	—	弓の列
天武元年	7月	22日	三尾城	羽田公矢国・出雲臣狛	近江軍	—	—	攻城戦	三尾城	城が主戦場
天武元年	7月	22日	山崎・河の南	別将		—	—	—	—	三道から進んで、河の南に集結
天武元年	7月	23日	栗津市	村国連男依	犬養連五十君・谷直塩手	—	—	—	—	

兵器の種類から見た古代山城

~MEMO~

瓦の様相から見た古代山城

中山　圭（天草市観光文化部）

はじめに

現在、我が国における古代山城は、文献に記載のある朝鮮式山城と記録に見られない神籠石系山城に大きく峻別されるが、それらを合計しても30遺跡に満たない数しかない。さらに、その中でも神籠石系山城は、列石・土塁線や門跡等防御遺構は見られるが、城内の削平がなされず生活痕跡がほとんど判明していないものが大多数を占める。また、朝鮮式山城でも、城内での生活遺構が顕著に見られないもの、外郭線中心の調査が主体で城内区画に調査が及んでいないものが見られる。古代山城は、多くが国指定史跡以上の文化財指定を受け、保護の対象になっていることから、短期間に広範な発掘調査が実施されることも皆無に近い。このため、各城跡からの出土遺物は限定的で、現在も個別の城郭の築城・存続年代に多様な見解が見られている。

このような与条件の中で、本稿に課せられた役割は「古代山城出土瓦の分析から、遺跡の姿の一端を明らかにすること」であろうかと思う。現在、古代山城どころか、一片の古代布目瓦すら出土したことがない自治体に奉職し、瓦研究から遠ざかっている筆者にはいささか荷の勝ちすぎる課題であるが、若干の検討を行ってみたい。

我が国における屋瓦の導入は、周知のとおり、崇峻天皇元年（588）に百済から4人の瓦博士が来日したことに端を発する。大和飛鳥寺等の初期寺院に国産瓦が葺かれたが、そ

図1　瓦出土古代山城と関連遺跡分布図

れらの屋瓦の軒丸瓦の文様と、ほぼ同じものが百済でも出土していることから、記録の正確性が証明され、朝鮮半島と我が国の文化交流を示す遺物として認識されている。以後、瓦は主に寺院建築で利用され、畿内地方を中心に次第に地方へ拡散していった。

一方、朝鮮半島と海を挟んで対峙し、文化流入の窓口であった九州では、畿内への瓦導入とは別ルートで、直接6世紀後半から瓦作りが伝わっている。しかし、本格的な屋瓦利用までは、なお時間を要し、7世紀中葉の寺院建立まで待たねばならなかった。ほどなく九州は対外緊張関係の渦中におかれ、白村江の役を経て、防人・烽・大宰府・山城が急速に整備されることとなった。これに伴って、瓦生産が本格化されたと見られる（齋部1999）。国土防衛のために相次いで築城された古代山城の中で、屋瓦を利用した山城は限られており、中心は大宰府を取り巻く、筑前大野城や基肄城、南へ約70km隔たった鞠智城等である。これらの城郭は、継続的に城内に建物が構築され、それに付随して瓦類も使用されている。

山城から量的には数多く出土する瓦類の中で、主に研究に供される軒瓦や道具瓦のバリエーションは決して豊富とはいえない。瓦からの立論は限定された資料によらざるを得ないため脆弱な考察となり、今後の数点の新資料の発見により大きく結論が変容する危うさを内包していることをご了知願いたい。反面、出土資料の通覧には適しているといえようか。まずは、古代山城出土の瓦類を整理することから始めたい。

図2 北部九州3城 史跡範囲図

1 古代山城から出土した瓦

（1）大野城跡出土瓦

大野城跡は、福岡平野南端の四王寺山塊に立地する古代山城で、大宰府政庁の北後背を防衛する役割を担っていた。『日本書紀』天智4年（665）の記録から、基肄城・長門城と共に築城され、その普請には、百済高官であった憶礼福留・四比福夫が関わっていることが知られる。城域の総延長は約6.5kmで、古代山城の中でも最大級の規模を誇り、内部施設も70余棟を誇る建物跡など数多く存在する。これまで九州歴史資料館を主体として50次以上に及ぶ発掘調査が行われ、古代山城普請の特性を示す様々な調査成果が得られている。

古代瓦は、城内に散在する建物跡各所から出土が見られ、各城門からも出土する。昭和50年の八ッ並地区礎石群の調査で1点（福岡県教委1976）、昭和53年の主城原地区礎石群での発掘調査で複数、軒瓦が出土している。図3－1～3－6に図示した瓦群は主城原地区の調査で出土した瓦で、素弁軒丸瓦4種類14点、複弁軒丸瓦2種類5点の他、瓦当と接合するための刻みを有する丸瓦片なども報告されている（福岡県教委1979）。

4種類の素弁軒丸瓦瓦当は、蓮華内に一筋の稜軸を持ち、大きな中房とその中房まで達する間弁が特徴的な素弁八葉のⅠ類（図3－1）、隅丸三角形の弁形で中房と弁が未接続で、離隔している点が特徴的で、周縁は二重圏線を呈するⅡ類（図3－2）、Ⅱ類に似るがより間弁が大きく弁に立体感があるⅢ類（図3－3）、文様は不明瞭ながら中房径が小さく高く突出するⅣ類（図3－4）、であり、このうちⅠ類は大宰府033型式、Ⅱ・Ⅲ類は大宰府020Aと型式設定され、日吉地区などの大宰府史跡での出土が見られる。八ッ並地区での出土例もⅢ類と見られる。Ⅳ類は文様が定かでないものの、高く小さい中房・1＋4の蓮子配置・粘土紐成形によるいびつな周縁などから素弁八葉有軸の大宰府032型式と考えられる（栗原1998）。複弁の2種は、いわゆる老司式と鴻臚館式と見られるようであり、明らかに老司Ⅰ式とわかるものが1点ある（図3－5）。

瓦当と接合する刻みを持つ丸瓦（図3－6）は、Ⅰ類瓦当（033型式）の上半部に被されるように使用されたと考えられる。図版から、ヘラによる斜線キズが丸瓦凹面だけでなく、丸瓦側端部にも施されていることが窺え、下半部のみ周縁を有する瓦当と組み合わさったことが想定される。

昭和60年から63年までの4年間で実施された大宰府口城門の調査では、老司式風で、大宰府290Ａ型式とされる図3－7、鴻臚館式軒丸瓦である図3－8、さらに大宰府式鬼瓦（図3－9）5個体以上が出土しており、城門が8世紀前半頃に瓦葺構造に整備されたことが判明している（福岡県教委1991）。迫力ある憤怒相の鬼面文が遍く知られるこの大宰府式鬼瓦は、統一新羅の鬼瓦の影響を受けて成立し、大宰府政庁跡や水城などの大宰府史跡の他、怡土城跡などでも出土が見られること、主に鴻臚館式軒丸瓦とともに甍を荘厳したことなどが知られる。城門における瓦出土は、城門建築物の堅牢性強化、防火能力の向上などを目的とした城郭整備の実状を如実に示しているが、大宰府式鬼瓦の採用からはさらに、軍事拠点としての来城者への威厳誇示（井形2003）や辟邪概念の重視等の意図が推量されよう。

平成15年7月には集中豪雨により、城内多数地点で災害が発生した。近年は、この災害に伴う復旧事業により発掘調査が進み、数多くの知見が得られている（福岡県教委2010）。土塁や石垣など外郭線の被害箇所が多く、調査により新たな城門が4か所発見され、従来の城門数から倍増している。一連の調査の中で瓦類も数多く出土が見られるが、特徴ある軒瓦は平成19年に実施された主城原地区礎石の東側斜面崩落箇所において、素弁軒丸瓦、いわゆる百済系単弁の系統とされる軒丸瓦が3点報告されている（福岡県教委2010）。災害復旧に伴う発掘調査で出土した瓦類を整理した齋部麻矢氏は、この3点を、それぞれ020Aa型式、020Ab型式、020C型式と分類し、軟質で黄灰色であることを示している（齋部2010）。図版では比較的残りの良い020Ab型式を図3－10として図示した。また、主城原地区の調査で出土した、広端部に粘土板を重ね付けして厚く作る平瓦を紹介し、020型式や033型式などの軒丸瓦とセットとなる軒平瓦であった可能性を指摘して

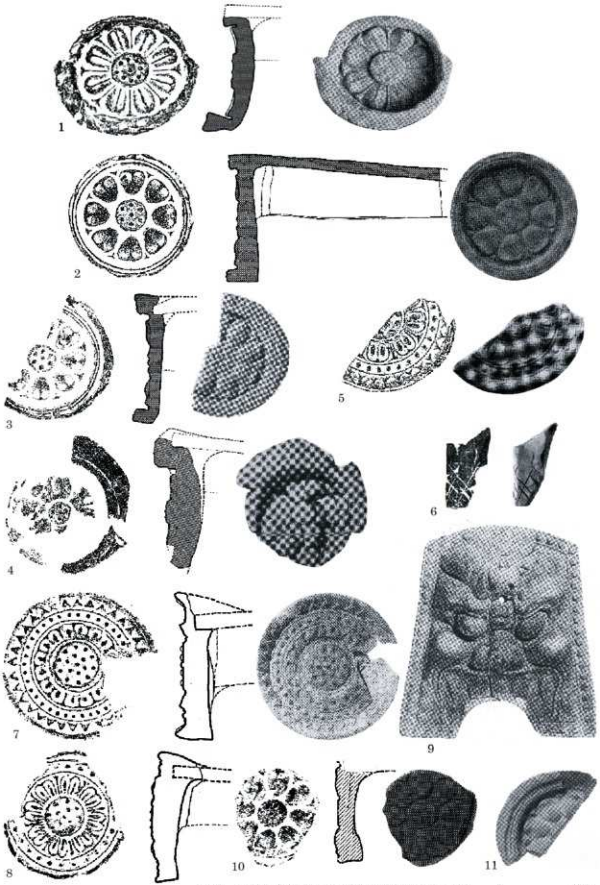


図３　大野城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真任意縮尺）

いる。

さらに城域北部の西側で発見されたクロガネ岩城門からも020型式軒丸瓦（図3－11）が出土している（九州歴史資料館編2015）。図録写真から、この種の瓦では珍しく灰色の焼成色を呈し、周縁の二重圏線のさらに外側に素文の周縁が見られる。あたかも周縁が、内区の二重圏線・外区の素文帯に区分されているように看取されるが、032型式・033型式など大宰府史跡の初期瓦は概して周縁の手作り感が強く、粗放な製作例が多い。それと同様に捉えられるものであろうか。出土状況、城門瓦葺きの有無も含めて、正式な報告が待たれる。

以上のように、大野城跡では主城原地区を中心に、020型式に代表される「かえり弁」軒丸瓦瓦当と033型式に代表される「鎬弁（有稜）」軒丸瓦瓦当が出土しているのが特徴で、この2系統の瓦当文様はそのまま、大宰府史跡全体の初期瓦の文様構成と適合する。いずれの系統も大宰府史跡で最古級の瓦であることは概ね認知されているところであるが、栗原和彦氏は百済系文様であるかえり弁軒丸瓦を最も古いとした上で、鎬弁軒丸瓦は新羅瓦を模倣して製作され、大宰府導入時期を天武・持統期として、両者に若干の時期差を想定している（栗原2001）。

（2）基肄城跡出土瓦

基肄城跡は、佐賀県三養基郡基山町に所在する朝鮮式山城で、天智4年に大野城とともに築城されている。大宰府の北を守護する大野城に対し、南側の守備を受け持つと考えられる城郭である。

大野城跡や鞠智城跡に比べ、発掘調査が進んでいないため、未解明の点も多いが、建物跡は40棟を数え、その付近には多量の瓦が散布している。昭和52年の調査報告書に採集瓦を含めた報告がなされており、それに基づいて概要を記す（基山町教委1977）。

図4－1は、「大礎石群」（北帝地区Ⅲ群1号建物）付近で採集され、広く周知されているかえり弁八葉軒丸瓦である。蓮華文は弁端付近で反転し、反転部のみ稜が入る。このため、弁端部は碇状の線形に見える。中房は大きく、1＋6の蓮子を配している。中房周囲は凹線が彫られ、弁と中房は隔絶している。小田富士雄氏が設定した「百済系単弁軒丸瓦」の最古例であり、基肄城創建段階の瓦と考えられている。図4－2は、城内採集の三重弧文軒平瓦で、凸面側には、平瓦部から顎部まで密な斜格子叩文が施されている。図4－3は昭和51年の発掘調査により全面発掘された第9地点の礎石建物跡付近で出土した軒丸瓦で、図4－1と同文様である。周縁が残存しており、二重圏線であることが判明する。図4－4は同じく第9地点で出土した三重弧文軒平瓦。やはり、顎部には格子叩きがなされている。図4－5は伝城内出土の複弁蓮華文軒丸瓦で、外区内縁に珠文、外区外縁には外向鋸歯文が見られる。大野城跡でも出土している大宰府290A型式に該当すると思われる。図4－6は、素弁二十葉軒丸瓦で、外区内縁は23個の珠文、外区外縁は外向鋸歯文で飾られる。基肄城に供給した高崖瓦窯跡で出土したものとされる。

その後、平成15～18年にかけて基山町教育委員会により、建物跡所在確認調査が実施された。15箱に及ぶ瓦類が出土・採集され、この成果品も近年公表されている（小田2011a）。出土地点を明記していない資料は、採集品と思われる。図4－7は平成18年の調査で大久保地区のNo.1トレンチから出土した百済系単弁軒丸瓦である。図4－1など

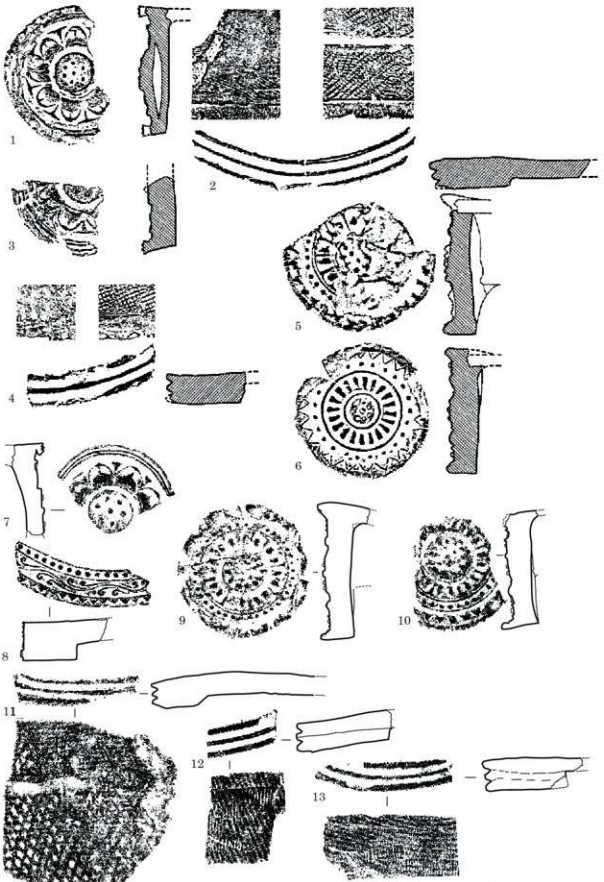


図４　基肄城跡出土の瓦（実測図 1/5）

と同文。図４－８は、平成15年に東北門跡南側のNo.7Aトレンチで出土した老司Ⅱ式軒平瓦である。扁行する蕨手文の巻き方から、大宰府560Bb型式の可能性が高い。基山町立歴史民俗資料館収蔵品に、同型の老司Ⅱ式軒平瓦で、昭和57年に城内南側の「米倉」から出土したことが注記されたものもある。図４－９、４－10は複弁の軒丸瓦で、図４－５と同じく大宰府290A型式である。図４－11～13は、三重弧文軒平瓦で、それぞれ顎部の叩き文が異なり、４－11は斜格子、４－12は平行、４－13は長方形叩きである。

基肄城跡から出土している瓦から、築城後の７世紀段階では、百済系単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットが使用され、８世紀前半には複弁の290A軒丸瓦と偏向蕨手文の560B軒平瓦のセットが主流となったものと想定される。現時点までの出土・採集瓦からは、軒瓦のバリエーションは比較的単純であった可能性が指摘できよう。後者のセットは、小田富士雄氏が「政庁Ⅲ式」とした組み合わせで（小田2011b）、大宰府政庁で普遍的に見られる軒丸瓦と軒平瓦のセットと考えられている。

（３）鞠智城跡出土瓦

鞠智城跡は、熊本県北部の山鹿市・菊池市にまたがって立地する古代山城で、この種の遺跡としては最南にある点が特徴である。とはいえ、広大な熊本平野においては最北部にあたる丘陵に位置するため、南側の懐は深いといえる。鞠智城は築城記事は見られないものの、『続日本紀』文武天皇２年（698）に大野城・基肄城とともに「繕治」された記録があることから、両城からやや遅れて築城されたと考えられている。古代山城の中で数少ない「長く維持管理が続けられた城郭」であり、そのために遺構・遺物の出土量は豊富である。城内中央の長者原地区・長者山地区を中心に72棟の建物跡がこれまで検出されている。熊本県教育委員会により継続的に発掘調査が行われ、その焦点が外郭線の防御施設より、内部の建物跡の検出に置かれたため、大野城跡や基肄城跡に比べ、掘立柱建物跡の検出数が多い。

鞠智城跡における古瓦は、黎明期の発掘調査以後、各所で出土している。従来の出土状況としては、平瓦の出土が多く、その凸面二次調整に個性的な特徴が見られる資料が多い。特に、平瓦成形用桶の回転を利用して二次調整を行った太形凹線文平瓦は、国内他遺跡での出土例があまり知られない。

軒丸瓦は、まず第５次調査と第13次調査において、瓦当小片資料が出土し（図５－１・５－２）、八葉蓮華文で百済系の瓦であろうことが確認された。平成８年の第18次調査、平成９年の19次調査で、長者原地区北側を中心とした発掘が進展し、56・59・64号建物跡の周辺からそれぞれ軒丸瓦と接合丸瓦が出土している。このうち、64号建物跡の周溝からは文様全容が窺える八葉蓮華文瓦当が出土している（図５－３）。この瓦当は、蓮弁中央に丸くやや幅のある稜を持ち、稜を境に弁左右が各々匙状に凹む。蓮弁断面はw字状となる。全体的に弁は湾曲しており、弁端は強く反転する。高く作られる中房には１＋６の蓮子を配し、中房と蓮弁は断面凹形の圏溝で区画されており連続していない。間弁は楔形で、中房に向かって蓮弁の中程で途切れている。胎土には砂粒が多く含まれ、原材料粘土に意図的に混和剤として砂が配合されたことがうかがえる。中房部分で4.4cmと厚みを持って作られている。

この長者原地区での一連の調査では、丸瓦の凹面広端側に接合キズや補強粘土が見られ

る資料も数多く発見されたことから（図５－４～６）、鞠智城跡の軒丸瓦が、原則、瓦当の上部に丸瓦を被せるように接合する技法を採用していたことが判明している。

その後、長者原地区北側の貯水池跡の発掘調査が進められ、様々な遺物が出土することとなった。瓦類も貯水池跡から良好な残存状況のものが出土している。貯水池跡の第28トレンチからは、８層から完形の軒丸瓦瓦当（図５－７）、９層から完形の接合丸瓦（図６－１）、11層から斜格子目の接合刻みを持った接合丸瓦（図６－２）が出土している。図６－３、６－４も貯水池跡から出土した軒丸瓦瓦当である。

第22次調査において完形瓦当図５－７が出土したことは、図５－３出土段階で不明瞭であった部分を補完することとなった。すなわち周縁が、下半部のみ成形されている様子が明瞭になったのである。この周縁は、素文で平坦であり、一般的な軒丸瓦の周縁のように突出していない点に、独自性が認められる。文様は、図５－３と同笵であるが、厚みは比較してやや薄く、胎土も精選され、大きな砂粒は見られない点などに相違がある。

鞠智城跡で出土する軒丸瓦瓦当はすべて同類の文様である。瓦当には小破片もあって厳密には証明できないが、各資料を検討した結果、基本的には同笵であると確認している（中山2005）。丸瓦も、凹面側に接合キズを有するもの以外には、瓦当との接点を残す資料がないので、接合技法も全て同じ様式である（中山2008）。瓦当文様は、詳細は後述するが、大宰府史跡032型式・033型式に類似していることから、７世紀後半と考えられる古風なモチーフといえよう。また、接合技法は、その033型式、あるいは古新羅系六葉素弁軒丸瓦である大宰府030型式（図７－８）の技法と近しい。この接合方式は、朝鮮半島（百済・新羅）では、比較的普遍的な接合技法であるが、国内では類例が乏しい技法と言える（亀田2000・戸田2004）。このことから、鞠智城において使用された瓦に関する製作体制は、築城段階に近い時期から、単一瓦笵と単一接合技法を有する小規模な瓦工グループが生産し、継続的に供給を続けたのではないかと想定している。

ただし、長者山地区礎石群では、鞠智城ではあまりポピュラーでない縄目叩きや有段式丸瓦が出土しているため、この地区では８世紀以降に新式の瓦類を導入していた可能性がある。

（４）その他の山城の出土瓦

福岡県太宰府市・大野城市にまたがる水城跡は、天智３年（664）、朝鮮式山城に先んじて築造された防御施設である。福岡平野と筑紫平野の結節部となる二日市地峡帯に構築された平野部関門で、大宰府への侵入を遮断する防壁とするため、巨大な濠と土塁によって形成されている。土塁に穿たれた東西両門を中心に、多様な瓦が出土しており、軒瓦の種類は軒丸瓦10型式14種類・軒平瓦13型式16種類にも及んでいる（九州歴史資料館2009）。主要な瓦は、鴻臚館Ⅰ式軒丸瓦（大宰府223型式）と均整唐草文軒平瓦（635型式）の組み合わせであり、８世紀前半における大宰府政庁の本格的な屋瓦導入と時を同じくして、水城も瓦葺建築物が採用されたと考えられている。軒丸瓦の出土数は、西門出土数が６割を超えており、門の重要性がうかがえる。また、大宰府式鬼瓦も出土し、大宰府の玄関口として威容を誇っていたのであろう。現在のところ、他の大宰府史跡のように、初期瓦（かえり弁軒丸瓦・鎬弁軒丸瓦）は出土していないようである。

香川県高松市の屋島城は天智６年（667）に、高安城・金田城とともに築城された記録

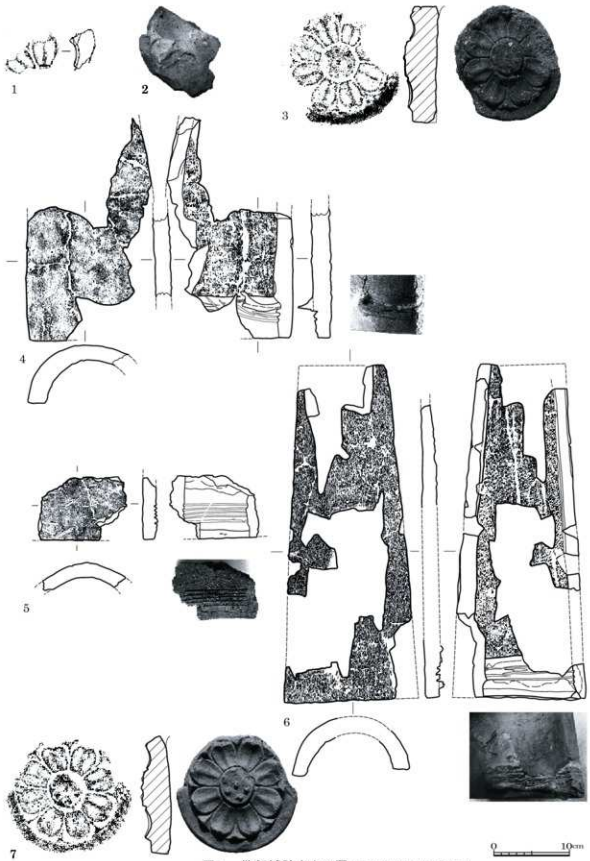


図５　鞠智城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真縮尺任意）

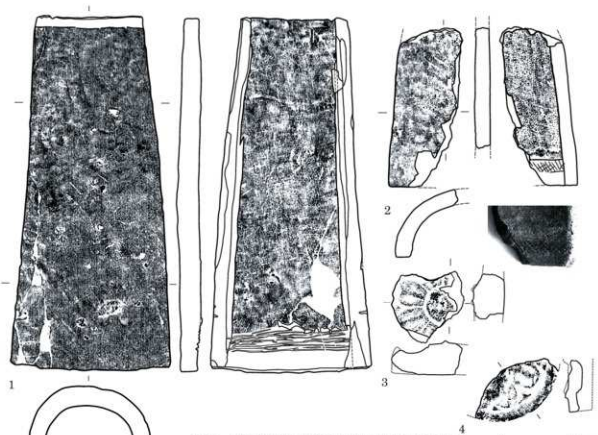


図6　鞠智城跡出土の瓦（実測図 1/5 写真縮尺任意）

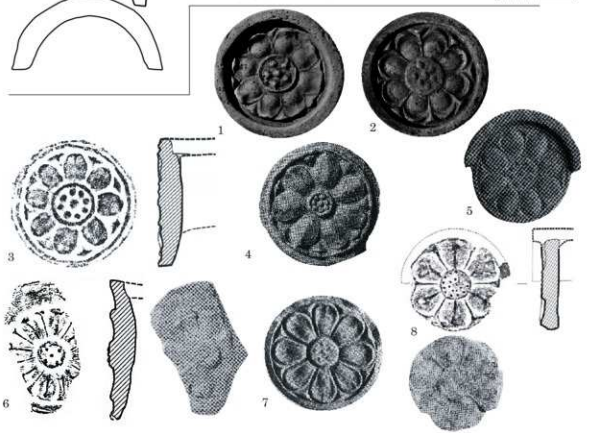


図7　各地遺跡の関連瓦（縮尺任意）

の残る朝鮮式山城である。高松市教育委員会による調査では、礎石建物跡西の集石遺構から縄目叩きの平瓦が出土しているようである。また、貯水池推定地のトレンチ6層からは、複弁八葉蓮華文軒丸瓦の瓦当と縄目叩きの丸瓦・平瓦が出土しているが、13世紀代の屋島寺に関する瓦類と報告されている（高松市教委 2003）。

岡山県総社市の鬼城山では、城内中央で建物跡が集中するⅡ区から縄目叩き平瓦や玉縁式丸瓦などが出土しており（岡山県文化財保護協会 2013）、建物が瓦葺きであった可能性は高い。軒瓦などは出土していないようで、屋瓦の詳細は不明という他はないが、今後の調査による出土の期待がかかる。

福岡県糸島市に所在する怡土城は、『続日本紀』によると天平勝宝8年（756）から神護景雲2年（768）までの12年の歳月を費やして築城された。普請を司った吉備真備は、遣唐使を務めるなど唐に精通し、その縄張りは高祖山の山頂から麓の平野部まで取り込み、国内山城としては前例のないプランであったことから中国式山城と呼ばれている。瓦類は、城内各所から多量に出土しているが、軒瓦の出土例は多くなく、昭和12年に鏡山猛氏が報告している鴻臚館系軒丸瓦などに限られているようである（鏡山 1937）。大宰府式鬼瓦の出土は広く知られ、鏡山報文にも完形の資料が掲載されている他、数例の伝世品があり、また破片資料ながら実際の発掘調査でも出土している（前原市教委 2006）。大宰府式鬼瓦は、8世紀前半～中葉にかけて大宰府管轄下の城郭に相次いで導入された。城郭における瓦導入が、単に建物建材としての目的でなかったことが読み取れよう。

2　古代山城出土の初期古瓦の系譜について

古代山城の瓦出土量は、概ね城内に存在する建物跡の数によって左右され、現在までのところ、大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡の北部九州三城で比較的多く出土している状況を前章において確認した。大野城跡・基肄城跡では、8世紀以降大宰府系の瓦を採用していることも歴然としている。本来なら、それら全てを網羅した上で、古代山城出土瓦の様相に言及すべきであるが、筆者にはその力量が不足している。遺憾ながら、本章では、各山城の初期古瓦に関する系譜・特徴等について、他遺跡の出土例との比較から考察を加えることとしたい。

これまでの出土状況から、大野城跡では主城原地区を中心に、かえり弁軒丸瓦（020A型式）と鏑弁軒丸瓦（032、033型式）、そしてそのいずれかと組み合う無文軒平瓦と想定される厚手の軒平瓦が出土し、基肄城跡では大野城跡とは別種のかえり弁軒丸瓦、いわゆる百済系単弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が出土している。鞠智城跡では、大野城跡の鏑弁軒丸瓦に類似する文様の有稜素弁軒丸瓦と、その上部に被され、広端部が周縁を成す丸瓦が出土しているが、明確な軒平瓦の存在は確認されていない。いずれの城跡の資料も数量が限定的で、且つ、建物からの落下状況を如実に示す資料には恵まれていないため、建物における瓦葺の様相は判然としていないと言えよう。

大野城・基肄城は、憶礼福留、四比福夫という百済達率の指導によって築かれたことが明らかである。土塁線・石垣線による縄張りの特徴、土塁の版築や石垣の積み方、門の構造など、国内のそれ以前に相当する遺跡と隔絶したこれらの技術が、その記録の証左となっている。鞠智城もまた、築城記録こそないものの、類似する縄張り、土塁構造の他、八角形建物跡や貯水池跡の検出、朝鮮半島系銅製菩薩の出土から同様の体制下で築城されたと

考えられる。屋瓦についても、朝鮮半島からの影響が想定されよう。

（1）かえり弁軒丸瓦

基肄城跡で見られるかえり弁軒丸瓦は、その瓦当文様の系譜について、小田富士雄氏による詳細な研究により（小田 1966・1975）、百済の瓦当に祖型が求められることが広く周知されている。いわゆる百済系単弁軒丸瓦である。祖型となる百済の瓦は益山王宮里から出土した図７－１で、蓮弁の中房側が丸く膨らむ一方、弁端方向へ向かっては一度凹みながら端部で反転隆起している。反転する弁端は、中央に稜線が入りその両側が凹む形状で、その特徴が九州の百済系単弁の弁形と共通することから、モデルとして考えられているものである。類似する文様として、蓮子の数こそ違うが百済金剛寺跡から出土した瓦当もあり（図７－２）、基肄城跡出土瓦の祖型を百済系文様に置くことは、多くの研究者が支持するところである。

また小田氏は、この瓦が、直接朝鮮半島からもたらされたわけではなく、軒丸瓦周縁に多重圏線を採用すること、組み合う軒平瓦が三重弧文軒平瓦であることの特性から、我が国の畿内地方を経由し、日本流の変容をした上で、九州へ伝わったものと論じている。周縁の圏線は大和坂田寺跡、三重弧文軒平瓦は大和川原寺跡の瓦より影響を受けたものと示唆している（小田 1995）。瓦当文様的にも、坂田寺跡の単弁軒丸瓦の中でも、中房の大きな 5D 型式八葉蓮華文軒丸瓦（図７－３）からの影響が想定される（亀田 2006）。百済系単弁軒丸瓦は、肥前や豊前の古代寺院に広く拡散・普及するが、その起点となる存在が基肄城の瓦で、天智４年の築城記事を年代根拠としている。出土状況からの証明はされていないが、築城期の屋瓦である可能性は極めて高いものと思われる。

一方、大野城跡で出土するⅡ類・Ⅲ類という２種のかえり弁軒丸瓦については、やはり弁端の部分的な反転から、百済系の要素を持つと考えられているが、その祖型と言える瓦については明らかになっていない。小田氏は「やや異種の百済系」で「祖型についても複数の資料をたどらねばならない」としている（小田 1995）。Ⅱ・Ⅲ類ともに、基肄城タイプの百済系単弁瓦と比べて、弁端の反転様相や周縁重圏線は類似するが、中房は大型ではない。さらに、最大の特徴として、蓮弁一枚一枚が独立し、中房と接していない点が挙げられる。蓮弁幅の広いⅡ類は、弁形状が隅丸三角形となり、幅の狭いⅢ類は楕円形の弁形状を呈している。

蓮弁と中房の未接続である例を検討してみると、国内における例では、やはり大和坂田寺跡の 5B 型式とされる七葉素弁蓮華文軒丸瓦が挙げられよう（図７－４）。蓮弁の中房側端部が沈降して、小型の中房から独立している。弁端は反転隆起し、そのスタイルもやや狭長ながら大野城跡で出土したⅢ類（図３－３）との共通性を感じさせる。周縁は単圏線により装飾されている。

一方で、大野城Ⅱ類（図３－２）に見られる幅広の、ギターピック風の蓮弁形は、坂田寺跡例とは若干様相を異にしているともとれる。視点を朝鮮半島の瓦当文様に転じ推察してみると、蓮弁と中房の遊離という点からは、まず高句麗の蓮蕾文瓦当文様が想起されるが、アーモンド様の隆起や半球状の中房などの特徴から、文様としての類似性は希薄に思える。そこで百済の軒丸瓦を通覧すると、千房遺跡出土の八葉素弁蓮華文軒丸瓦（図７－５）が、中房から独立した蓮弁を有する瓦当文様として、注視される（韓国水資源公社・

公州大学校博物館 1996)。平坦な中房は1＋8の蓮子を持ち、卵型の蓮弁の周囲を断面三角の間弁が区画線として変形しつつ取り巻き、中房と蓮弁を隔離している。弁端は反転突起で、凹みつつ反転するⅡ・Ⅲ類とは異なっている点である。千房遺跡は、忠清南道保寧市に立地する遺跡で、瓦窯跡及び寺院跡とされる。百済の都であった公州や扶余の西にあり、そう遠くない位置関係にあることから、百済中枢との関係性もあったと考えられよう。大野城跡のかえり弁軒丸瓦の祖型をいずれに求めるかは、簡単には解答が出せる問いではないが、特異な蓮弁形状を手掛かりに、可能性を有する一つの実例としてこの軒丸瓦瓦当を提示しておきたい。

（2）鏑弁軒丸瓦

蓮弁中央に一筋の鏑を持つ軒丸瓦で、大野城跡出土のⅠ類（033型式）及び鞠智城跡出土の軒丸瓦が該当する。両者は、瓦当文様の類似や同じ古代山城での出土という共通点から、以前より関連性が指摘され（島津 1983・金田 1997 他）、主に大野城跡033型式が先行、鞠智城跡が後出するものと見做されている。大宰府032型式も同系統の文様を持つ軒丸瓦である（図2－4）。大野城跡出土の032型式では、ほぼ文様判別ができないが、大宰府政庁跡で出土が見られるものからすると（図7－6）、蓮弁の有軸・弁端反転・T字状間弁の中房到達などの特徴から033型式とよく類似するが、1＋4の蓮子を持つ小径中房にやや違いが見られる。周縁は瓦笵を外した後に、粘土紐で形成されている（栗原 1998）。

これらの瓦当文様については、その祖型を百済に求める見解（小田 1987 他）、新羅に求める見解（金誠亀 1995・栗原 1998 他）の双方が見られている。

小田富士雄氏は、鞠智城跡出土の瓦当に関して、「高句麗に起源して百済を経由したタイプ」で、国内での類例を大和豊浦寺跡出土の2類軒丸瓦（図7－7）に求め、飛鳥地方の瓦を経由しているとした（小田 2012）。基肄城跡出土の瓦同様に、中央政権の関与を想定している。

日本における古新羅系軒丸瓦を分析した金誠亀氏は、三国時代新羅の素弁形軒丸瓦の特徴を、①素文尖形型式、②稜角円形型式、③稜線円形型式、④稜線反転型式、⑤内曲稜線反転型式の5種に型式化し、新羅と日本における出土例を通観した。その中で、032型式・033型式は④稜線反転型式にグルーピングされている（金誠亀 1995）。金誠亀氏の論考発表時には、鞠智城跡の軒丸瓦は小片出土の状況であったが、⑤内曲稜線反転型式に包含される形で言及されている。なお、蓮弁の有軸・稜線が古新羅系の特徴であることから、豊浦寺跡の瓦を焼成した隼上がり窯跡の瓦（豊浦寺1類）も、④に分類され新羅系とされている。

大宰府史跡出土屋瓦の新羅的要素を研究した栗原和彦氏は、大宰府030・032・033型式について、新羅において親縁性を有する軒丸瓦が出土していることを根拠に、新羅系として位置づけた。大宰府への導入は、統一新羅となり我が国との外交関係が好転した天武・持統朝と推測している（栗原 2001）。大宰府030型式は、大野城跡からの出土こそ見られないが、栗原氏が033型式などと同様に「鏑弁」として位置付ける有稜六葉素弁軒丸瓦である（図7－8）。幅広の六葉素弁文様は、新羅瓦の典型的なモチーフで、百済・高句麗には見られないタイプと言えよう。蓮子が1＋7＋12と3重配置になることから、

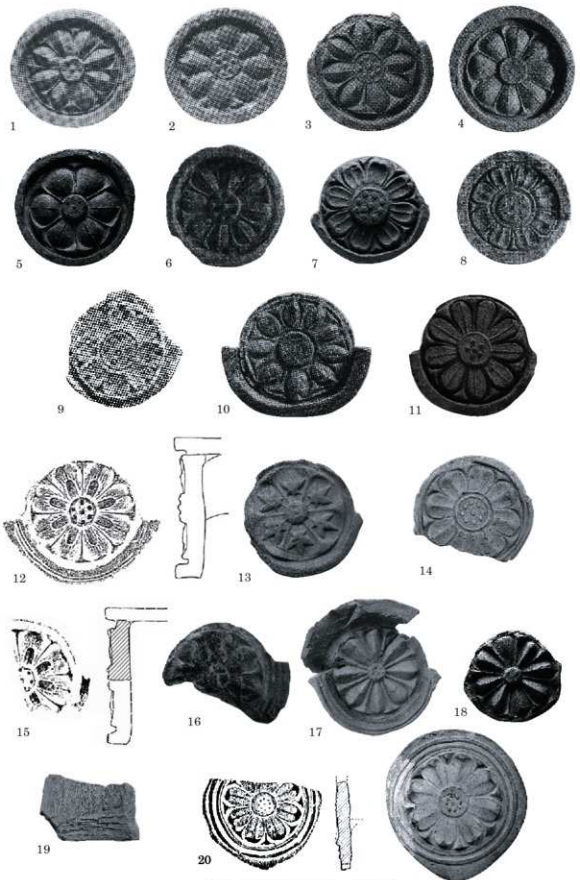


図８　各地遺跡の関連瓦（縮尺任意）

大宰府初期屋瓦の中でも、やや新しい要素が感じられる。この瓦は接合技法が特徴的であり、周縁を持たない瓦当に、丸瓦を被せる形で接合し、上半部周縁を丸瓦広端面が担う。033 型式や鞠智城軒丸瓦とも共通性のある接合技法であり、上述千房遺跡の接合がこの方式である。030 型式と 033 型式の技法的差異は下半部周縁の有無のみである。

筆者もまた、鞠智城跡の瓦当文様に新羅系の要素があることを述べたことがあるが（中山 2005・2008）、果たして、これらの鏑弁軒丸瓦の祖型はどこに求められるか、筆者なりに検討してみたい。

新羅において蓮弁に鏑を施す軒丸瓦が、6 世紀後半に盛行したことは、金誠亀氏の研究以外に、新羅系屋瓦を集成した国立慶州博物館による『新羅瓦塼』の内容からも理解される（慶州博物館 2000）。近年、その盛行の遡源を辿った清水昭博氏の研究により、高句麗よりむしろ中国南朝の屋瓦を源流とすることが判明してきた（清水 2007）。図 8 － 1、8 － 2 が南朝の八葉素弁軒丸瓦で、蓮弁の鏑や中房まで達する間弁などの表現からは、確かに新羅瓦（図 8 － 3、8 － 4）への影響が見てとれよう。その基本スタイルは新羅で成立した六葉蓮華文軒丸瓦（図 8 － 5）にも適用され、大宰府 030 型式のごとく我が国へ伝わった。このような南朝系の系譜に乗る皇龍寺跡出土の図 8 － 6 等が大野城跡出土の 032・033 型式の直接のモデルになるように思われる。032・033 型式は、このような観点から、中国南朝から新羅へ伝わった文様が、我が国に招来したものと見たい。

また、鞠智城跡出土例は、大野城跡 033 型式が文様的に祖型になると見てきたが、中房まで貫通しない間弁や蓮弁の匙面風の反転等に差異も見られる。この手の蓮弁の凹みを有する軒丸瓦は、金誠亀氏による分類では内曲稜線反転型式とされ、新羅の王宮に関わる月城出土の図 8 － 7、殿廊跡出土の図 8 － 8 などが見られる。033 型式からの文様変化の可能性もあるが、鞠智城例の祖型として、このような新羅瓦の影響が強くあったのかもしれない。後述するが、この種の軒丸瓦は安芸備後地方周辺の寺院で見られている。

鏑弁軒丸瓦の祖型に関わる今一つ重要な視点は、百済系軒丸瓦同様に畿内を経由して九州の古代山城に伝播したか、あるいは朝鮮半島からの直伝か、という問題である。

3　瓦当周縁と軒丸瓦接合技法から見られる半島直伝の可能性

本稿で対象とした瓦のうち、基肄城跡出土のかえり弁軒丸瓦と三重弧文軒平瓦のセットは、畿内を経由してもたらされたと考えられ、筆者も異論はない。しかし、鏑弁軒丸瓦の一群については、朝鮮半島から直接的に伝えられた可能性があると考えている。大野城跡 032 型式、同 033 型式、鞠智城跡軒丸瓦は、それぞれ特異な瓦当周縁と接合技法を有しており、畿内の造瓦体制との接点が見出し難いからである。

（1）　周縁部の形成と接合技法

032 型式（図 3 － 4・7 － 6）の周縁は、粘土紐成形によるため、著しく均整さを欠く。033 型式（図 3 － 1）は下半部のみ突出する周縁を持つが、これも粘土紐によるため幅が不均等で、軒丸瓦の正面観も左右非対称となり、いびつである。以上の状況から、周縁まで含まない笵型であることがわかる。周縁の圏線まで笵型に含まれて成形される、かえり弁軒丸瓦群と好対照といえる。洗練された製作法とは言えず、造瓦技術への習熟不足がうかがえよう。接合技法は 032 型式は、周縁背後で丸瓦と接合されるようであるが、033

型式は上半部に丸瓦が被される方式となる。この接合方法は、鞠智城跡の接合技法と共通し、図３－６の接合キズを持つ丸瓦が接合される。しかし、丸瓦の接合キズが凹面広端部ギリギリに見られることから、実際に組み合わさった際に軒丸瓦の周縁は下半分のみが突出してしまうことになる。その本質的な姿は、瓦当に付属した下半部の周縁と丸瓦の広端面が担う上半部がピッタリ合わさり、軒丸瓦の円形周縁となるはずであるが（図８－12断面参照）、033 型式の形状では、不格好にならざるを得ない。鞠智城跡の軒丸瓦は、同様の接合技法であるが、丸瓦の接合キズは、丸瓦広端面から数cmほど狭端側に奥まる場所に配されるものが多く、瓦当上半部は瓦当より突出することになる。一方、瓦当に付属する周縁下半部は、033 型式のように突出せず瓦当面より引いて作られる。手づくねによる突出周縁の成形を断念したかのような印象を受ける。033 型式、鞠智城瓦ともに、本来のあるべき姿に到達できなかったと理解できる。

以上のような観察状況から見ると、032 型式や 033 型式を手掛けたのはあまり瓦作りに精通していない工人ということになろう。瓦笵の提供と特定接合技法の教示を受けた工人が、見様見真似で製作した可能性が高い。畿内を経由することで、笵型成形による装飾周縁や安定した接合技法を会得しているかえり弁造瓦工人とは別の、素人に近い集団が担当したものと推測される。

（２） 接合技法の類例

筆者はかつて鞠智城跡の軒丸瓦接合技法を「丸瓦被せ式技法」と表現したことがあるが（中山 2005）、百済の軒丸瓦の接合技法を検討した戸田有二氏はこの種の接合技法を「公山城技法Ⅰ」と設定している（戸田 2004・2006）。曰く「瓦当下半部のみ周縁部をつけた瓦当円板に男瓦（筆者註：丸瓦）を接合する方法で、男瓦先端部がそのまま瓦当上半部の周縁となるもの」で、百済公山城の他、扶余の寺院である金剛寺跡や軍守里寺跡や窺岩面外里遺跡（図８－９）等の出土瓦に採用されていることが知られる。一方で、百済のみならず、新羅においても見られる接合技法であることは、慶州月城出土瓦から判明する（図８－10・８－11）。朝鮮半島の三国時代屋瓦においては、主流とは言えないまでも、通有に存在する技法であったと考えられよう。なお、図８－11は豊浦寺跡・隼上がり窯跡の高句麗百済系軒丸瓦と、周縁にこそ差があるが、瓦当面は同文様である。

この技法を採用した瓦は、国内では、畿内よりも安芸地方の７世紀中葉の古代寺院に多く類例がある。安芸国では、広島県三原市の横見廃寺、安芸高田市の明官地廃寺、正敷殿廃寺などの瓦が知られている（妹尾 1999）。横見廃寺では、図８－12の山田寺式単子葉軒丸瓦、図８－13の忍冬文軒丸瓦が、公山城技法Ⅰによって作られている。山田寺式軒丸瓦は、横見廃寺の創建瓦とされ、奈良県明日香村の檜隈寺・呉原寺の瓦と同笵関係にあり、笵傷の進行状況から、大和から安芸に笵が持ち込まれた可能性が指摘されている（妹尾 2005）。檜隈寺などの大和の瓦は瓦当裏面上部に、弧状の接合段を設けて丸瓦を接合する手法で公山城技法Ⅰではない。このため、笵の移動のみが行われ、技術的な伝播はなかったとされている。接合技法は、朝鮮半島からの渡来系技術と考えられる。なお横見廃寺では図８－14の八葉素弁蓮華文軒丸瓦が出土しており、接合技法は異なるが、鞠智城跡の瓦当と文様の相似がつとに指摘されているものである（鶴嶋 1981・中山 2005）。

明官地廃寺の出土例は、横見廃寺・檜隈寺と同笵の図８－15、同タイプで子葉に綾杉

文を彫り加えた図８－16、小さな中房と狭長な有稜蓮弁が特徴的な八葉素弁軒丸瓦などがある。この八葉素弁軒丸瓦の４弁分に山田寺式風の子葉を付加した図８－17のような素弁単弁混成軒丸瓦も出土している。これらの素弁系軒丸瓦は図８－18の月城出土八葉素弁軒丸瓦に瓜二つで、新羅瓦がモデルと判断できよう。明官地廃寺の軒丸瓦は全て公山城技法Ⅰで接合されており、図８－19等の瓦当が脱落した丸瓦も出土しており、鞠智城跡の状況とよく似ている。周縁は、図８－17で見られるように下半部のみ重圏線で、上半部には圏線が見られない素文縁となる事例が多く見られる。これは、下半部周縁分のみを彫出している瓦笵であったか、丸瓦の広端部が接合時には乾燥していて、瓦笵の周縁圏線が笵出できなかったか、いずれかの可能性があろう。丸瓦側端部と瓦当下半周縁端部の接着部は、補強粘土を多く撫で付け、着脱しにくいような工夫が施されている。

これらの寺院で、朝鮮半島系接合技術が利用されている理由について、妹尾周三氏は明官地廃寺の創建に新羅系瓦工が関与したと想定している（妹尾1999）。明官地廃寺から東へ約15㎞離れた三次市には、白村江の役への参加者が百済僧弘済を連れ帰って、創建したという寺町廃寺があり、百済系瓦当や鞠智城例に極めてよく似た新羅系の八葉素弁軒丸瓦（図８－20）が出土している。接合技術が公山城技法Ⅰでないことから、直接の繋がりは見い出せないが、安芸備後に、渡来人が集住する契機となったのかもしれない。朝鮮式山城と同じく、百済との相関を示す記録がある遺跡に、新羅系文様の軒丸瓦が出土する点は興味深い。

畿内の瓦笵を利用しつつも、接合技法は朝鮮半島系技法を用いた横見廃寺や明官地廃寺など安芸の白鳳期寺院の造瓦体制は、大野城跡や鞠智城跡の造瓦体制と親近性を有している。安芸と北部九州に直接的な交流があったことは証明できないが、同時期に類似する系統の渡来系瓦工が関与して、在地の瓦造りが展開されたものと理解できる。工人の有する技術的特徴は、仏師等単独工人が製作する瓦笵の様相以上に、集団全体の技術工程に関わる接合技法に色濃く見られるはずだからである。

これらの事例から瓦工集団は、貴重な瓦笵を大事にしつつ、固有の造瓦技術を駆使して、その周囲に造瓦法を伝達するケースが往々にしてあると見られる。その視点からすると、大野城跡の２つの鎬蓮弁のうち、033型式を製作したグループが、鞠智城跡の軒丸瓦製作に異動あるいは指導等の形で関与したことが想定される。接合技法のうち、公山城技法Ⅰのみの単独継承が最大の根拠であるが、鞠智城では、丸瓦接合位置の狭端側への移動や瓦当周縁形成の簡素化（放棄？）という一定の工夫を行っている点で後出要素が見られるからである。

４　まとめ

主に検討対象とした大野城跡・基肄城跡・鞠智城跡の初期瓦を整理し、①基肄城跡のかえり弁軒丸瓦は従来どおりに、畿内を経由した百済系であること、②大野城跡の020型式のかえり弁軒丸瓦は基肄城とは別系統の百済系の可能性があること、③032・033型式の鎬弁軒丸瓦は新羅系（稜線反転型）で、畿内を経由しない朝鮮半島直伝の可能性が高いこと、④鞠智城の鎬弁軒丸瓦は、文様がやはり新羅系（内曲稜線反転型）で、接合技法から大野城跡033型式を製作した瓦工集団が二次的に関与した可能性が高いこと、などの点について考察した。

古代山城の築城には、百済高官の指導が注視されるのは当然ながら、事業進捗に当たっては膨大な人的リソースが投入され、様々なテクノクラートが関与したと思われる。不適切な表現であることを承知の上で、現代風に換言すれば「前例のない国発注の公共事業で、受注者は外資系も含む JV」というイメージであろうか。各部門の請負者には、ノウハウのある者が方々から集められ、特に渡来系の技術者は重宝されたであろう。また、築城後の維持管理・改修の中で、新たな渡来人を工事に充てることもあったかもしれない。

瓦の様相から見る古代山城は、必ずしも「百済一色」には彩られていないように思われる。本稿は、山城を構成する要素の全てが百済方式であるわけではなく、広大な山城が多様性の集合体であることを再認識する一助にはなったであろうか。

冒頭で示したように、少数のごく限られた資料によったため、脆弱な論旨であることは否めない。数点の資料の出土によって、古代山城の瓦の様相は劇的に変化する可能性も大いにあり、その際には、本稿は的外れな内容になるであろう。今後の古代山城調査の進展と関連諸学の研究深化により、そうなることを期待したい。

最後になるが、本稿の発表機会を与えていただき、数々の教示をいただいた歴史公園鞠智城・温故創生館の木村龍生氏はじめ、九州歴史資料館の小澤佳憲氏、広島県埋蔵文化財センターの伊藤実氏、安芸高田市歴史博物館の古川恵子氏・秋元哲治氏にご教示ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

挿図出典：

図 2 －左・中＝温故創生館 2015、右＝熊本県教委 2012

図 3 － 1・2・3（写真共）・4（写真共）・5（写真共）・6（写真共）＝福岡県教委 1979、
1 写真・2 写真＝九州歴史資料館編 2015、7（写真共）・8・9＝福岡県教委 1991、
10（写真共）＝福岡県教委 2010、11＝九州歴史資料館編 2015

図 4 － 1 ～ 6 ＝基山町教委 1977、7 ～ 13 ＝小田 2011a（実測図筆者トレース）

図 5・図 6 ＝中山 2008（鞠智城跡各報告書図面をトレース・接合部は筆者実測・写真筆者撮影）

図 7 － 1・2 ＝忠南大学校百済研究所編 1976、3 ＝京都国立博物館 1990、4 ＝奈文研飛鳥藤原宮発掘調査部 1992、5 ＝韓国水資源公社・公州大学校博物館 1996、6（写真共）＝栗原和彦 1998、
7 ＝国立慶州博物館 2000、8 ＝高橋 1983、8 写真＝栗原 1998

図 8 － 1・2 ＝清水・奥野 2007、3 ～ 8・10・11・18 ＝国立慶州博物館 2000、
9 ＝忠南大学校百済研究所編 1976、12 ＝妹尾 1999、13・14・16・17・19 ＝筆者撮影、
15 ＝吉田町教委 1985、20 ＝三次市 1982、20 写真＝広島県立歴史民俗資料館 1998

参考・引用文献：

赤司善彦 2014「古代山城の倉庫群の形成について　－大野城を中心に－」『東アジア古文化論攷 2』高倉洋彰編　中国書店

井形進 2003「大宰府式鬼瓦小考」『九州歴史資料館 研究論集』28 九州歴史資料館

瓜生秀文 2001「伝怡土城の出土の鬼瓦」『講濠』第 9・10 合併号　古代山城研究会

岡山県文化財保護協会 2013『史跡　鬼城山 2』

小田富士雄 1966「百済系単弁軒丸瓦考・その 1 」『史淵』第 95 輯（1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社　所収）

小田富士雄 1975「百済系単弁軒丸瓦考・その 2」『九州文化史研究紀要』第 20 号（1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社　所収）
小田富士雄 1987「西海道の新羅・百済系古瓦塼」『大宰府と新羅・百済の文化』（1990『九州考古学研究 文化交渉篇』学生社　所収）
小田富士雄 1993「熊本県鞠智城をめぐる諸問題」『潮見浩先生退官記念論文集　考古論集』（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社　所収）
小田富士雄 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（二）　三 北部九州の朝鮮系古瓦塼」『青丘学術論集』第 7 集　韓国文化研究振興財団
小田富士雄　2006「豊前の古代瓦の諸問題」『行橋市史・資料編（原始・古代）』（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社　所収）
小田富士雄 2011a「一二 基肄城跡（古代・中世）」『基山町史　資料編』基山町史編さん委員会・基山町史編集委員会編　基山町
小田富士雄 2011b「老司式軒瓦の再検討」『古文化談叢』第 66 集（2013『古代九州と東アジアⅡ』同成社　所収）
小田富士雄　2012「第 1 節 鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡Ⅱ　－鞠智城跡第 8 ～第 32 次調査報告－』熊本県教育委員会
鏡山猛 1937「怡土城阯の調査」『日本古文化研究所報告』6　日本古文化研究所
金田一精 1997「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』第 10 号　肥後考古学会
亀田修一 1981「百済瓦当考」『百済研究』12　忠南大学校百済研究所
亀田修一 1983「古代瓦塼より見た大宰府と朝鮮」『大宰府古文化論叢』下巻　吉川弘文館
亀田修一 1993「百済の瓦・新羅の瓦」『佛教藝術』209 号　毎日新聞社
亀田修一 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（二）　二 吉備の朝鮮系瓦」『青丘学術論集』第 7 集　韓国文化研究振興財団
亀田修一 2000「百済系軒丸瓦の製作技法」『古代瓦研究Ⅰ －飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
亀田修一 2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
韓国水資源公社・公州大学校博物館 1996『保寧市水没地域発掘調査報告書① 千房遺蹟』
基肄城築造 1350 年事業実行委員会 2015『基肄城築造 1350 年記念シンポジウム　基肄城を考える －基肄城とは何か－ 発表資料集』
基山町教育委員会 1977『特別史跡　基肄城』
九州歴史資料館 2009『水城跡　－下巻－』
九州歴史資料館 2011『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅱ －日吉地区－』
九州歴史資料館編 1981『九州古瓦図録』
九州歴史資料館編 2002『大宰府政庁跡』吉川弘文館
九州歴史資料館編 2015『大野城築造一三五〇年記念 九州歴史資料館移転開館五周年記念 特別展「四王寺山の一三五〇年　－大野城から祈りの山へ」』
京都国立博物館 1990『畿内と東国の瓦』真陽社
金誠亀 1995「日韓古瓦塼文化の交渉研究（一）　一 古代日本の新羅系軒丸瓦について」『青丘学術論集』第 6 集　韓国文化研究振興財団
熊本県教育委員会 2012『鞠智城跡Ⅱ　－鞠智城跡第 8 ～第 32 次調査報告－』

熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館 2015『古代山城紹介パンフレット 発見☆古代山城』
栗原和彦 1998「大宰府史跡出土の軒丸瓦 －編年試案への模索－」『九州歴史資料館 研究論集』23 九州歴史資料館
栗原和彦 2001「大宰府出土瓦に見られる朝鮮半島統一新羅時代文化の影響」『九州歴史資料館 研究論集』26 九州歴史資料館
栗原和彦編 2000「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦 型式一覧」九州歴史資料館
国立慶州博物館 2000『新羅瓦塼』
古代瓦研究会編 2000『古代瓦研究Ⅰ －飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
古代瓦研究会編 2005『古代瓦研究Ⅱ －山田寺式軒瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
齋部麻矢 1999「北部九州の飛鳥・白鳳時代の瓦」『飛鳥・白鳳の瓦と土器 －年代論－』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
齋部麻矢 2010「11－5 出土瓦について」『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県教育委員会
島津義昭 1983「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上巻 吉川弘文館
清水昭博 2007「古新羅瓦の遡源に関する検討 －有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として－」『王権と武器と信仰』同成社
清水昭博・奥田尚 2007「中国南朝の屋瓦」『朝鮮古代研究』第8号 朝鮮古代研究刊行会
妹尾周三 1999「六 広島の古瓦」『考古学から見た地域文化 －瀬戸内の歴史復元－』渓水社
妹尾周三 2005「安芸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ －山田寺式軒瓦の成立と展開－』奈良文化財研究所
総社市教育委員会 2005『古代山城鬼ノ城』
総社市教育委員会 2006『古代山城鬼ノ城2』
高橋章 1983「大宰府の小型瓦」『古代研究』25・26 元興寺文化財研究所
高橋章 2007「附1「大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧の追加資料について」『観世音寺 －遺物編2－』九州歴史資料館
高松市教育委員会 2003『史跡天然記念物屋島 －史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ－』
忠南大学校百済研究所編 1976『百済の古瓦』学生社
鶴嶋俊彦 1981「72. 鞠智城跡」『九州古瓦図録』九州歴史資料館編
天理大学附属天理参考館 2004『古代新羅の屋瓦』天理大学出版部
戸田有二 2004「百済の鐙瓦製作技法について（Ⅱ）－熊津・泗ヒ時代における公山城技法・西穴寺技法・千房技法の鐙瓦－」『百済研究』40 忠南大学校百済研究所
戸田有二 2006a「百済における鐙瓦の三技法について」『国士舘大学文学部人文学会紀要』第36号 国士舘大学文学部人文学会
戸田有二 2006b「百済泗沘時代における造瓦集団の一端 －鐙瓦製作技法から見た造瓦集団の一端－」『百済 泗沘時期文化の再照明』国立扶餘文化財研究所
中山圭 2005「鞠智城出土の軒丸瓦 －朝鮮式山城の一様相－」『九州考古学』第80号 九州考古学会
中山圭 2008「鞠智城の瓦」『古代東アジアの瓦』韓国瓦学会
奈良文化財研究所 2010『古代東アジアの造瓦技術』
奈良文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部 1992『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』

西住欣一郎 1999「発掘から見た鞠智城」『先史学・考古学論究Ⅲ』龍田考古会
花谷浩 1993「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第 40 巻 2 号
比嘉えりか 2007「統一新羅と日本の蓮華唐草文軒丸瓦　－いわゆる新羅系古瓦の再検討にむけて－」『七隈史学』第 8 号　七隈史学会
比嘉えりか 2008a「初期瓦研究の現状と課題　－筑前地域を中心に－」『七隈史学』第 9 号　七隈史学会
比嘉えりか 2008b「新羅の瓦」『考古学ジャーナル』№ 576　ニュー・サイエンス社
広島県教育委員会 1972『安芸横見廃寺の調査Ⅰ』
広島県教育委員会 1973『安芸横見廃寺の調査Ⅱ』
広島県教育委員会 1974『安芸横見廃寺の調査Ⅲ』
広島県埋蔵文化財センター 1987『明官地廃寺跡　－第 1 次発掘調査概報－』
広島県埋蔵文化財センター 1988『明官地廃寺跡　－第 2 次発掘調査概報－』
広島県埋蔵文化財センター 1989『明官地廃寺跡　－第 3 次発掘調査概報－』
広島県埋蔵文化財調査センター 1990『明官地廃寺跡　－第 4 次発掘調査概報－』
広島県埋蔵文化財調査センター 1991『明官地廃寺跡　－第 5 次発掘調査概報－』
広島県立歴史民俗資料館 1998『平成 10 年度考古企画展　ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』
福岡県教育委員会 1976『特別史跡　大野城』
福岡県教育委員会 1977『特別史跡　大野城Ⅱ』
福岡県教育委員会 1979『特別史跡　大野城Ⅲ』
福岡県教育委員会 1980『特別史跡　大野城Ⅳ』
福岡県教育委員会 1982『特別史跡　大野城Ⅴ』
福岡県教育委員会 1983『特別史跡　大野城Ⅵ』
福岡県教育委員会 1991『特別史跡　大野城Ⅶ』
福岡県教育委員会 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』
藤澤和夫 1961「日鮮古代屋瓦の系譜」『世界美術全集』第 2 巻（2004『朝鮮古代研究』第 5 号 朝鮮古代研究刊行会 所収）
前原市教育委員会 2006『国指定史跡　怡土城跡』
三次市教育委員会 1980『備後寺町廃寺 －推定三谷寺跡第 1 次発掘調査概報－』
三次市教育委員会 1981『備後寺町廃寺 －推定三谷寺跡第 2 次発掘調査概報－』
三次市教育委員会 1982『備後寺町廃寺 －推定三谷寺跡第 3 次発掘調査概報－』
向井一雄 2014「鞠智城の変遷」『鞠智城跡Ⅱ　－論考編 2 －』熊本県教育委員会編
森郁夫 1990「瓦当文様に見る古新羅の要素」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
矢野裕介 2012「(3) 瓦について」『鞠智城跡Ⅱ －鞠智城跡第 8 ～第 32 次調査報告―』熊本県教育委員会
吉田町教育委員会　1985『明官地廃寺跡　試掘調査概要』

~MEMO~

土器の様相からみた古代山城

木村 龍生（熊本県教育委員会）

1．はじめに

古代山城の分析は、これまで遺構中心に行われてきた。これは調査例が少ないこと、出土遺物数が少ないことに加え、遺構は調査されていなくてもすでに露出しているものがあることなどが理由に挙げられる。ただ、最近では鞠智城や鬼ノ城など、調査が進展し遺物などの検討が詳細に行われる城跡も増えてきた。

今回取り上げる土器についても、これまでは古代山城の時期を決める根拠の一つとしての利用はされていたが、それ以上の分析は行われていなかった。しかし、先述したように、鞠智城跡や鬼ノ城跡で土器自体の分析が行われたことにより、土器の様相から古代山城の性格などについて、その一端を語ることができるようになってきたように思われる。

そこで、ここでは各古代山城の土器の様相を示し、そこからどのようなことがいえるのかについて検討してみた。分析の手法としては、筆者が分析を担当した鞠智城跡の土器の様相をまず提示し、それと他の山城の様相とを比較することで類似点、差異を検出し、そこから検討を行うという方法をとった。

2．鞠智城跡出土土器の様相

（1）鞠智城跡出土の土器について

昭和 44 年から 32 次にわたって発掘調査が実施された鞠智城跡では、他の古代山城と比べ土器の出土量がはるかに多い。

鞠智城跡出土土器は、遺構に伴うものは少ない。そのため、個別の遺構の時期を土器から特定することは、極めて難しい。

しかし、土器の変遷や出土量を検討することから、鞠智城の存続期間、各段階の様相を推測することができると考え、分析を行った。

（2）出土土器の器種組成

土器は、須恵器と土師器が存在する。須恵器は蓋坏、高坏、𤭯、壷、甕、平瓶、高台付坏、円面硯などが出土し、土師器は坏、高台付坏、皿、椀、高坏、甑、壷、甕などが出土している。

須恵器、土師器それぞれについて、器種組成の割合を検討してみた。この検討は、これまでの調査で出土した土器のうち、一個体と確実に判断できる資料のみを用いて行った。なお、本来ならば時期ごとに器種組成の割合を検討すべきだが、甕や壷などの小破片では時期を特定できないため、時期ごとの器種組成の割合を正確に出すことは困難と思われた。そのため、あくまで鞠智城跡出土土器全体の特徴として把握することを目的とし、時期を検討せずに器種組成の割合を提示することとした。

図 1 は、鞠智城跡における須恵器と土師器の器種組成の割合である。これをみると須恵器、土師器共に日常生活で使用される坏類、甕類が圧倒的に多いことがわかる。須恵器で

は、瓶類や壷類も比較的多くみとめられるが、これらも日用品であったといえる。また土師器では、坏類・甕類に次いで甑、皿が多くなっていることに注目したい。甑は調理器具であり、それ以外に使用されることはまずない。皿も坏と共に日用什器として使用されたものである。

このように、鞠智城跡で出土している土器は、そのほとんどが日用什器であり、この地での人々の生活用品として使用されていたものであったといえる。そうであるならば、土器がどの程度の期間存在するのか、その各時期の土器の量はどのようであったのかということは、鞠智城における人々の生活の実態を如実に示しているといえる。

（3）出土土器の変遷

鞠智城跡出土の土器は、同一の層からいくつかの時期の土器が混在して出土し、単一時期と考えられる層の堆積が存在しないため、出土層位の上下で遺物の新旧を確認することは難しい。また、須恵器は複数の生産地の製品が鞠智城へ供給されていることが肉眼観察で確認できる。この時期の須恵器は、6世紀後半からの地方窯の増加とそれに伴う地域性の現出により、同時期の須恵器でも産地が違えば異なる様相をもっている場合が多い。そのため、単一生産地からの連続した製品供給であれば消費地遺跡でも須恵器の型式変化を容易に検討することはできるが、複数の生産地から供給されている場合、イレギュラーな要素をもつ須恵器が存在すると、いろいろと誤った解釈をする危険性がある。

当初は鞠智城跡における土器の型式変化を検討して土器編年案を作成しようと考えていたが、上述の理由からそれは困難であると判断した。そこで、既存の編年案（小田富士雄氏、網田龍生氏）を基に土器を時系列にならべることで、鞠智城跡の土器がどの程度の期間存在するのかをみることとした。

鞠智城跡の土器を時系列にならべたものが図2である。

これをみると、6世紀第3四半期から10世紀第3四半期まで400年近い時期の土器が出土していることがわかる。これを基に時期的な土器の変遷をみていきたい。

6世紀第3四半期から7世紀第2四半期では、古墳時代後期後半～終末期に相当する。長者原地区に古墳時代の集落跡が存在することが明らかとなっており、この時期の土器はこれらの集落跡に関連する土器であったと考えられる。

7世紀第3四半期は、須恵器の坏蓋と坏身が逆転する段階で、古墳時代的な坏蓋（坏H）は存在しなくなる。なお、この時期は大野城など古代山城の築城記事がみとめられる665年を包括する時期にあたる。鞠智城が665年に近い時期に築城されたということであれば、この段階の土器は鞠智城築城期の土器ということになる。

7世紀第4四半期から8世紀第1四半期は、様々な器種の須恵器がみとめられる。本来ならば、この段階も他の段階と同じく四半世紀ごとに分けるべきかもしれないが、土器をみると2時期に分けるのは難しく、無理に分けずに一つの段階として捉えた方がよさそうであった。そのため、ここでは7世紀第4四半期から8世紀第1四半期で一つの段階として取り扱っている。ただし、この段階の土器は8世紀第1四半期の中でも、さらに早い段階までのものである（8世紀初頭とするのが妥当と思われる）。この段階の特徴は、そのほとんどが須恵器であるということ、畿内系の土師器が存在することである。なお、この時期は日本書紀にみる798年の鞠智城の繕治期の前後に相当する。

8世紀第2、3四半期になると、土器はみとめられない。土器の空白期というべき時期である。

8世紀第4四半期になると、再び土器が出現する。須恵器と土師器の割合は、須恵器の方が圧倒的に多い。土師器はこの時期の熊本の特徴である回転ヘラミガキが施されるものなど在地的な様相をもつものがみられるようになる。

9世紀第1、2四半期になると、土師器のみとなる。土師器は在地的要素をもったものが多く存在する。

9世紀第3、4四半期になると、土師器の坏、高台付坏が多くみとめられる。形態は近隣の木柑子西原遺跡や上鶴頭遺跡などから出土するものに酷似し、完全に在地の土器が使用されていると考えられる。

10世紀第1、2四半期の土器は確認できない。

10世紀第3四半期頃になると、若干の土師器が確認できる。

そして、これ以降は中世の土師器や青磁がまばらながら存在する。これらは鞠智城が廃絶した後にこの地がなんらかの土地利用されていたことを物語っているのであろう。

（4）出土土器の量的検討

出土土器の時期別出土量についてみてみる。これにより、日用什器中心の鞠智城において、土器量から人が最も活発に活動していた時期を想定できると考えたためである。

図3は、鞠智城跡出土土器の時期別出土量を示したものである。これをみると、出土量のピークがいくつかあることがわかる。

1つめのピークは7世紀第4四半期から8世紀第1四半期である。この時期は他の時期に比べ圧倒的に多くの土器が存在する。そしてそのほとんどが須恵器であるということは注目すべきである。また、土師器は若干数存在するが、これは先述したように在地の土師器ではなく畿内系の土師器等、在地的な様相を持たないものである。

2つめのピークは9世紀第3、4四半期である。この時期には土器は土師器のみになっており、すべて在地的なものになっている。

3つめのピークとして敢えて挙げるならば、8世紀第4四半期が挙げられる。直前の空白期から一気に増加する時期である。

ピークとは反対に、二つの空白期が存在することも注目すべきである。1つが8世紀第2、3四半期、もう一つが10世紀第1、2四半期である。この二つの空白期は、共に土器の使用量ピークの直後に位置する。これがどういう意味をもつのかについては土器のみならず、鞠智城全体をとおして検証する必要があろう。

（5）土器の生産地分析

鞠智城跡出土土器の一部資料について、考古学的手法（肉眼観察）及び理化学的手法（蛍光X線分析）による胎土分析を実施した（木村編 2015）。

考古学的手法では生産地を推定できる資料は少なかったが、検討できる資料については、福岡県牛頸窯跡群、福岡県八女窯跡群、熊本県荒尾窯跡群、宇城市宇城窯跡群などの製品が鞠智城にもたらされていると推定できた。なお、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期は、これら様々な生産地の製品が鞠智城にもたらされているが、8世紀第4四半

期は荒尾窯跡群の製品がそのほとんどを占めるようになっていることがわかった。

理化学的手法でも、肉眼観察とほぼ同様の結果が出た。理化学的手法では、畿内系と考えられる暗文の施された土師器椀と特徴が似ている資料の分析を行ったが、これに関しては生産地不明という結果であった。そのため、畿内かその周辺でつくられたものが鞠智城に持ち込まれたものと考えられる。

考古学的手法、理化学的手法を総合して鞠智城跡出土土器の生産地を考えてみる。鞠智城が築城される以前から牛頸、八女の製品がもたらされており、鞠智城築城後８世紀第１四半期まではそれに加え荒尾や宇城の製品ももたらされるようになっている。なお、考古学的手法でみるとはこれらの生産地とは全く異なる特徴を持つ製品も存在することから、他にも様々な生産地の製品が鞠智城に供給されていたことが想定できる。これは、鞠智城の運営のために、様々な生産地から必要な食器を集めて供給されていたからと考えることができよう。

８世紀第４四半期になると荒尾の製品がそのほとんどを占めるが、これは牛頸窯跡群の須恵器生産量が減少しているのに対し、荒尾窯跡群の操業が本格化し生産量が増加したことと関連するものと思われる。

（６）土器からみた鞠智城

これまでの検討からわかった土器の様相から、鞠智城について述べてみたい。

６世紀後半から７世紀第２四半期　鞠智城の中心域に古墳時代の集落が存在し、この時期の土器はそこで使用されたものである。この集落は鞠智城築城直前まで存在しており、ここに住んでいた人々は鞠智城の築城ともなんらかの関係があったとも考えられる。須恵器は牛頸窯跡群や八女窯跡群で製作されたものが多く存在する。これはこの時期の山鹿・菊池地域の古墳、集落でみられる普遍的な状況であり、鞠智城集落でも同じ状況であったといえる。

７世紀第３四半期　白村江の戦いの時期にあたり、古代山城が築城された時期である。この時期の土器はそれ以前と比べると数が少し増加している。しかし、土器の種類、生産地などの様相は７世紀第２四半期までとほぼ変わらず、土器だけをみて、この時期になにか特別な画期を設定することはできない。

７世紀第４四半期から８世紀第１四半期　土器の量が最も多くなる段階である。土器は基本的に須恵器のみで、一部に畿内系の土師器など在地的ではない土器が存在する（図４）。須恵器は牛頸窯跡群や八女窯跡群など以前から供給されていた生産地のものに加え、さらに宇城窯跡群などその他何カ所もの生産地から供給されていたようである。この段階は『続日本紀』にいう繕治の時期（698 年）にあたる。古代山城は、国家プロジェクトとして築城されたものであり、この時期も中央政権の管理下に置かれていた。だからこそ土器などの必要物資は、様々な生産地などからかき集められて供給されていただろうし、土師器ではなくより貴重な須恵器が多く供給されていたのであろう。また、土器の出土量からみると、この段階が最も多くの人々が鞠智城に駐留した時期だったと考えられる。畿内から来た人もいたのであろう。この時期の人々が、城の繕治に携わった人々なのか、それとも単に駐留者が増えたのかは土器のみでは判断できない。しかし、鞠智城の全盛期ということは確実にいえる。鞠智城跡の土器からみる最大の画期に位置づけられる。

8世紀第2、3四半期　土器が存在しない空白期といえる。この直前が土器からみると鞠智城のピークともいうべき時期であったのに対し、この急激な土器の減少は何を意味するのであろうか。土器が存在しないということは、鞠智城に人がいなかったとも捉えられる。生活域が城内から城外に移転したのだろうか。また、ここでいったん鞠智城が廃城となったことも考えられる。大野城・基肄城をのぞく他の古代山城が8世紀前半で廃城となっているのと同じように、鞠智城も古代山城としての役割を一度この段階で終了したということも考えられるのではないか。

8世紀第4四半期　再び土器が使用されはじめる。須恵器が主体で、特に荒尾産須恵器が多い。これは、この時期に牛頸窯跡群の操業規模が縮小するのに対し、荒尾窯跡群が最盛期を迎えるということにも関係すると思われる。また土師器は在地的なものがほとんどである。このようなことから考えると、この時期からは鞠智城へ供給される土器はすべて肥後国内あるいは鞠智城の近隣で生産されたものになったといえる。これについては、8世紀後半に鞠智城の管轄が大宰府から肥後国に移り、そのため使用される土器は肥後国内のものが供給されるようになったというような解釈が成り立つかもしれない。

9世紀の第1四半期以降　土師器のみが使用される。9世紀の第3、4四半期は土器使用量第2のピークである。この時期の土器は周辺遺跡で出土する土器とまったく同じ様相を呈していることから、すべて在地でつくられたものになっている。なお、858年に菊池城院の不動倉11棟が火災に遭うとの記事があるが、土器からみると不動倉の火災後にも多くの人々が鞠智城において活動をしていたということがいえる。

10世紀以降　10世紀第1四半期に、再度、空白期が訪れる。10世紀第3四半期には土器が再び使用されているが、量は少ない。おそらくこの時期に鞠智城は最終的に廃絶し、その後は別の目的でこの地は使用されたと考えられる。

土器の様相からみた鞠智城は以上のようになる。

これを踏まえて、最後に鞠智城の存続期間について考えておきたい。土器でみると2回の空白期が存在する。この空白期を「鞠智城の変遷に伴うなんらかの理由で土器が存在しない時期」ととらえるか、「異なる施設がつくられ廃絶したその中間の時期」としてとらえるかでその意味合いが大きく変わってくる。前者だと、鞠智城が300年続く中で土器が存在しない時期として空白期があるという説明ができる。後者だと、古代山城としての鞠智城築城・廃絶（7世紀第3四半期から8世紀第1四半期）→空白→菊池城院成立・廃絶（8世紀第4四半期から9世紀第4四半期）→空白→別の施設等（10世紀第2、3四半期）という考え方もできる。現在は前者で考えられることが多い鞠智城だが、後者のような推移があった可能性も考えられる。

3．その他の古代山城出土土器の様相

同じような視点で、他の古代山城についても同様の分析を試みた。ただし、城によっては土器出土数が少なく分析に耐えうるものではないものも存在するが、あえて同様の分析を行った。今回は報告書等掲載遺物しか分析の対象としていないため、城によっては実際の様相を反映していない可能性があることを述べておく。なお、報告書掲載遺物のうち時期の判断ができるもののみを対象としている。そのため、表1、2では坏など偏った器種のみが対象となっている。また、鞠智城跡の土器と同様に、7世紀第4四半期と8世紀第

1四半期の土器を区分するのが非常に難しかった（正確にいうと7世紀末から8世紀初に位置付けるべき資料が多かった）。よって、鞠智城跡での土器と同じように、この時期については7世紀第4四半期から8世紀第1四半期という時期区分とした。

対象としたのは、報告書などにおいて土器の報告がされている12城である。

（1）大野城跡の土器の様相（図5）

大野城跡からは、坏、皿、甕、壺などの日用什器が出土している。大野城跡については地区ごとに報告されているため、地区ごとに分析を行った。これらの時期は、7世紀第3四半期のものがもっとも古く、その後も継続して10世紀までの土器が出土している。土器の数量でみると、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に急増する。698年の繕治に関係するものであろうか。この時期のものには、畿内系と思われる暗文の施された皿もある。8世紀代はやや減少するが、9世紀第3四半期ごろに再び増加する。築城から8世紀前半までは須恵器主体であるが、それ以降土師器のみとなる。これらのことは、鞠智城での土器の様相とも一致する。地区ごとにみると、7世紀第3四半期の土器は石垣などの地区でみられ、7世紀第4四半期以降は城門や倉庫等が立ち並ぶ各地区でしか土器は出土していないような傾向がみとめられる。7世紀第3四半期に外郭施設、7世紀第4四半期以降に城内施設の拡充が図られたことを表しているのかもしれない。また、猫坂、主城原、村上地区では7世紀第4四半期から8世紀第1四半期の土器が主体、八ツ並地区では9世紀後半代以降の土器が主体ということから、時期による地区の使い分けなどが行われていたかもしれない。

（2）基肄城跡の土器の様相（図6）

基肄城跡からは、坏が多く、他に高坏や甕も出土している。こちらも日用什器主体といえる。土器の時期は、7世紀第3四半期のものがもっとも古く、9世紀初頭のものまである。7世紀第4四半期に若干量が増えるがこれは繕治に関係があるものだろうか。なお、8世紀代4四半期から9世紀初頭のものが最も多い。文献では9世紀までの存続が確認されているため、土器の様相と一致する。なお、須恵器が主体である。

（3）金田城跡の土器の様相（図7）

金田城跡からは、坏、高坏、瓶などの須恵器、土師器が出土している。また、新羅系の陶質土器、玄界灘式製塩土器も出土している。基本的に日用什器主体である。金田城跡で最も古い土器は7世紀第3四半期のものである。そして、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期までのものしか存在しない。このような土器の様相からみると、金田城は667年に築城され、8世紀の第1四半期には廃城となったと考えてよいと思われる。なお、報告書では掲載されていない小破片が多数存在するとの記載がある。それらを実見して再度検討してみたい。

（4）屋嶋城跡の土器の様相（図8）

屋嶋城跡からは、須恵器の坏、壺、瓶などが出土している。日用什器である。もっとも古いものは7世紀第2四半期と考えられる坏がある。しかし、屋嶋自体が古代山城以前・

以降に何度も利用されており、様々な時代の遺物が存在する。そのため、この坏もどこかから紛れ込んだ可能性もある。古代山城に関係するものは７世紀第３四半期～８世紀第１四半期のものがある。このころは667年に築城されたという記事とも一致する。また、金田城と同じく、８世紀第１四半期には廃城となったことも考えられる。

（５）鬼ノ城跡の土器の様相（図９）

鬼ノ城跡からは、坏、皿、壺、瓶、甕などの日用什器が主体的に出土している。このほか、硯が出土している点は注目すべきである。なお、坏の一部にも硯に転用しているものが存在するとのことである。このことから、役人が在城していたことも考えられる。土器の時期を見てみると、７世紀第３四半期のものが若干数存在するが、その中心は７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものとなる。須恵器の量が圧倒的に多いが、土師器も存在する。なお、土師器には畿内系のものが存在する。この様相は、大野城跡、鞠智城跡での土器の在り方と非常によく似ている。８世紀、９世紀は土器が激減するが、９世紀終わりごろに土器が再び登場する。これは再利用されてつくられた宗教施設に関係するものとされる。鬼ノ城は築城記事などのない城であるが、土器の様相からみると７世紀第３か第４四半期に築城され８世紀第１四半期まで古代山城として存続したものと考えられる。岡山県が刊行した報告書では７世紀第４四半期ごろに築城されたと結論付けられたが（金田・岡本編2013）、土器の様相からみると、例えば７世紀の第３四半期にいったん築城され、大野城、基肄城、鞠智城で行われた繕治のようなもの（鬼ノ城の場合は、中央政権による地方支配の強化のためか）で７世紀第４四半期ごろに土器の量が急増したということも考えられるかもしれない。

（６）大廻小廻山城跡の土器の様相（図10）

大廻小廻山城跡からは、須恵器の坏、壺などが出土している。日用什器が主体的である。時期は７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものである。点数が少ないため何ともいえないが、築城あるいは運営されていた時期の一端を示す資料であると思われる。つまり、この時期のみの短期間の城であったことも想定できる。なお、９世紀第３四半期ごろの土師器も出土しており、この時期に再利用されたようである。

（７）讃岐城山城跡の土器の様相（図11）

讃岐城山城からは、須恵器の坏、平瓶が出土している。日用什器が主体的である。時期はすべて７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものである。こちらも点数が少ないため何ともいえないが、これらは築城あるいは運営されていた時期の一端を示しており、この時期のみの短期間の城であったことが想定できる。

（８）永納山城跡の土器の様相（図12）

永納山城跡からは、須恵器の坏、土師器の坏が出土している。日用什器が主体的である。須恵器はもっとも古いものは７世紀第２四半期のものが１点存在する。７世紀第３四半期のものも１点存在するが、７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものが中心となる。土師器は畿内系のものである。７世紀第４四半期から８世紀第１四半期に土器が集中

し、畿内系の土師器が存在するという点は、大野城跡、鞠智城跡、鬼ノ城跡と同様である。これらのことから考えると、永納山城跡も、７世紀第３か第４四半期に築城され８世紀第１四半期まで存在した城と考えるのが妥当と思われる。

（９）御所ヶ谷城跡の土器の様相（図 13）

御所ヶ谷城跡からは、須恵器の坏、壺、土師器の坏、甕などが出土している。日用什器が主体的である。須恵器壺、土師器甕は７世紀第３四半期のものとされる。その後、７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものがあり、しばらく時期を置いて、８世紀後半から９世紀前半の土器が存在する。このことから７世紀第３四半期ごろに築城され、８世紀第１四半期ごろまで古代山城として機能していたものと考えられる。そして、８世紀後半ごろに何らかの形で再利用されたのではないだろうか。

（10）唐原城跡の土器の様相（図 14）

唐原城跡からは、須恵器坏が出土している。特徴的なのは、７世紀第１～２四半期のものが存在することである。そのほかに７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のものが出土している。これだけでは点数も少なく何ともいえないが、７世紀前半代も何かの施設として使用され、７世紀第４四半期から８世紀第１四半期に古代山城として整備されたということができるのではないだろうか。

（11）鹿毛馬城跡の土器の様相（図 15）

鹿毛馬城跡からは、７世紀第１四半期とされる須恵器甕が出土している。これだけでは何ともいえないが、この時期からこの地が何らかの形で利用されていたということができるかもしれない。

（12）阿志岐城跡の土器の様相（図 16）

阿志岐城跡からは須恵器坏４点が出土している。これらは７世紀第４四半期から８世紀第１四半期のもので、阿志岐城の築城・運営時期を示しているものと考えられる。

４．土器の様相からみた古代山城（予察）

（１）築城・存続時期について

各古代山城の土器の消長からみると、今回検討の対象とした山城の築城・存続時期はいくつかのグループに分けることができるように思われた。そこで、それをもとに以下のように分類してみた。

Ａ－１．７世紀第３四半期～長期継続　　大野城、基肄城、鞠智城、御所ヶ谷城
Ａ－２．７世紀第３四半期～８世紀第１四半期　　金田城、屋嶋城
Ｂ．７世紀第３・４四半期～８世紀第１四半期　　鬼ノ城、永納山城
Ｃ．７世紀第４四半期～８世紀第１四半期　　大廻小廻山城、讃岐城山城、阿志岐城
Ｄ．不明　　唐原城、鹿毛馬城

Aは白村江の戦い直後から土器が存在するグループで、その中でも長期間継続するもの（A－1）と、8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなるもの（A－2）に分けられる。A－1は他の遺物や文献などでも長期間の存続がみとめられるもので、土器からもこれが実証できたということがいえる。なお、御所ヶ谷城は8～9世紀の土器が数点あるためA－1に分類しているが、大野城、基肄城、鞠智城と同じような長期にわたる継続であったかどうかはわからない。鬼ノ城のような山城以外の施設としての再利用であれば、A－2に含む方が適当となる。A－2は8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなる。

Bは白村江の戦い直後ではなく若干下った時期からの土器が出土するグループである。古い土器はあるが、数量の割合などからみるとAよりも若干時期を下げた方が良いと考えた。これらも8世紀第1四半期までで土器が出土しなくなるが、鬼ノ城はもう少し長く存続した可能性がある。また、鬼ノ城は9世紀に宗教関連施設として再利用されている。

Cは7世紀第4四半期～8世紀第1四半期からの土器が出土するグループである。これらはこの時期のみの短期的な利用だったかもしれない。ただし、大廻小廻山城は9世紀以降に再利用されている。

Dは不明とした。7世紀前半代の土器がいくつか出土しているだけなので時期の判断が難しい。この時期に築城されたともとらえられるし、これらは築城以前の施設のものであることも考えられるためである。

これからみると、朝鮮式山城と呼ばれるものは白村江の戦い直後に築城され、神籠石式山城と呼ばれるものはそれよりもやや遅れて築城されたような傾向がみとめられる。また、神籠石式山城でも、白村江の戦い直後か若干下がった時期に築城されたものと、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に築城されたとみて取れるような傾向がみとめられる。

なお、AもBも最も土器量が多いのは7世紀第4四半期～8世紀第1四半期である。『続日本紀』に記述のある大野城、基肄城、鞠智城の繕治の時期にあたるが、この時期は他の城も同様の改修等を行ったのかもしれない。それに加え、Cに分類されるような新たな城を築いているという状況である。つまり、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期が古代山城が最も整備・拡充され、機能した時期であったということができる。これは白村江の戦い以降の対外政策のためのものというよりも、中央政権による地域支配の強化をもくろんだ対内用の政策の一環であったと考えられる。

（2）須恵器から土師器へ

どの城でも、8世紀第1四半期までについては基本的に須恵器が主体である。土師器は若干数しかない。その若干数の中には畿内系土師器を含む城がいくつか見受けられる。

8世紀後半以降は須恵器よりも土師器が主体となる。

これについては古代山城周辺の遺跡の様相と比較する必要があるが、中央政権によって築造された古代山城には優先的に須恵器が供給されていたということがいえるかもしれない。

（3）畿内系土師器と鍛冶関連遺構・遺物（7世紀第4四半期～8世紀第1四半期）

今回土器を検討していて、畿内系土師器が出土している古代山城には、必ず鍛冶関連遺物・遺構が存在することにふと気づいた。しかも、時期的にはすべて7世紀第4四半期～

8世紀第1四半期に該当する。

○畿内系土師器＋鍛冶関連遺構・遺物のある城
大野城　畿内系土師器、鞴羽口、砥石、鉄製品
鞠智城　畿内系土師器、鉄滓、鞴羽口、砥石、漆塗りの土器（パレット）
鬼ノ城　畿内系土師器、鉄滓、鞴羽口、鍛冶遺構
永納山城　畿内系土師器、鉄滓、鞴羽口、鍛冶遺構
○鍛冶関連遺物・遺構のある城
基肄城　鉄滓
金田城　鉄滓、砥石、鍛冶遺構
大廻小廻山城　鉄滓
鹿毛馬城　鉄滓

鍛冶関連遺構・遺物の存在する基肄城跡や金田城跡でも、今後の調査によって畿内系土師器が出土する可能性があると思われる。大廻小廻山城、鹿毛馬城でも鉄滓が出土しているが、これらは時期等の詳細は不明であるため、古代山城に伴うものであるかどうかはわからない。

なお、畿内系土師器＋鍛冶関連遺構・遺物を持つ城はすべて亀田修一氏のいう“完成された城”である（亀田 2014）。そうであるならば、同じく“完成された城”とされる御所ヶ谷城でも今後、畿内系土師器＋鍛冶関連遺物・遺構が検出されるかもしれない。

畿内系土師器＋鍛冶関連遺物・遺構のある城とない城、これが古代山城を分類する一つのポイントになるかもしれないと考えている。

（4）7世紀第3四半期よりも古い遺物を持つ城

古代山城は白村江の戦い以降に築かれた城とされるが、鞠智城、唐原城、鹿毛馬城からは白村江の戦い以前の土器が出土している。鞠智城については古墳時代から続く集落の存在が確認されており、それに伴う遺物であることがわかっている。他の2城は遺構など不明であるが、築城以前に存在した施設等に伴うものであると考えられる。

この3城に共通することは、他の古代山城と比べて標高の低いところに築かれていることである。鞠智城は標高90～170m、唐原城は標高約70m、鹿毛馬城は標高30～80mと、他の古代山城に比べかなりの低地に立地する。このことから考えると、古代山城築城以前にも何らかの利用がされていたものと考えられる。つまり、このような低い立地に存在する古代山城は、前時代から利用された施設を引き継ぐ、あるいは撤去・改修・再整備して城として利用された可能性もあるといえる。このほか、今回は取り上げていないが、女山城も標高が低く、城内外に7世紀代の古墳が築造されており、城の築城以前から利用されていたことがわかっている。

このような築城以前の土地利用の類似する例として、大宰府があげられる。大宰府でも発掘調査で大宰府成立以前の遺物・遺構が多くみつかっており、大宰府が設置される以前から何らかの施設として利用されていたといえる。そして、おそらく白村江の戦い以降に九州を総括する役所として整備されたと考えられるが、その際、一から新たに作り上げた

のではなく、それ以前から存在した施設などを撤去・改修・再整備して利用したものと考えられる。大宰府が大野城や基肄城や都城などのように何年に築かれたと史書に記載がないのは、もともとあった何らかの施設を再整備したためではないだろうか。その後、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期にかけて、あらためて政庁として整備しなおしたのだろう。これと同じことが、鞠智城にもいえる。筆者は、鞠智城も白村江の戦い後にそれまであった施設に土塁、城門、貯水池などを急造し、倉庫や兵舎等の建物を建造することで、城として再整備したものと考えている。そして、698年の修繕で大規模な改修が行われたのだろう。そのため、史書に築城年代が記載されなかったのではないだろうか。

これに対し、大野城、基肄城等の7世紀第3四半期以降の土器しか出土しない城は、標高も高く、山の中腹より上部に築かれており、それ以前に別の施設等として使用されていた痕跡は認められないものが多い。これらは白村江の戦い以後に、当初から城として新たに築城するべく選地が行われ、築かれたものである。

つまり、古代山城には白村江の戦い以後に、十分な選地を行い新規に築城したもの（新規築城型）と、以前からあった施設のうち城として利用できそうな立地にあるものを再整備したもの（再整備型）の2つに分類できないかということである。城の立地の違い（高地・低地等）も、これで説明できそうな気がする。白村江の戦い以後にすべての城を新たに一から築くのは、人員・物資ともに確保することは困難といえる。そのため、白村江の戦い以前から存在する施設で利用できそうなものは、拠点として再整備したと考えられないだろうか。これに関してはほかの要素を踏まえて検討していく必要があるが、このような分類もできるかもしれないということを述べておく。

5．おわりに

以上、土器の様相からみた古代山城について述べてきたが、やはり資料数が少ない城が多く、今回の検討が的を射たものになっているのか正直不安である。しかし、土器の様相から城の築城時期や存続時期についてはある程度言及することができた。ただし、7世紀前半の土器が出土する山城については、あらためて資料数が増加した時に検証する必要がある。

畿内系土師器と鍛冶関連遺構・遺物の有無が“完成された城”とそうでない城との違いになる可能性も指摘した。これについても今後の古代山城調査の進展に伴い、あらためて検証していくべきことだと思っている。

現状の少ない資料数の中で検討してみたが、やはり今後の古代山城調査の進展と資料数の増加を待って、あらためて検討をしていくことが重要であると考える。

【参考・引用文献】

網田龍生 1994「奈良時代　肥後の土器」『先史学・考古学論究　熊本大学考古学研究室創設20周年記念論文集』 龍田考古学会

亀田修一 2014「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡Ⅱ－論考編1－』 熊本県教育委員会

亀田修一 2015「古代山城を考える－遺構と遺物－」『古代山城と城柵調査の現状』平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会発表要旨集　全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会

木村龍生編 2015『鞠智城跡出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』 熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

(大野城)

福岡県教育委員会編 1976『特別史跡 大野城跡 大石垣、八ツ並地区建物跡史跡環境整備に伴なう発掘調査概報』 福岡県教育委員会

高倉洋彰・横田賢次郎・高橋 章・沢田康夫編 1977『特別史跡 大野城跡Ⅱ 八ツ波、猫坂地区建物跡 史跡環境整備に伴う発掘調査概報』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・芳沢 要編 1979『特別史跡 大野城跡Ⅲ 主城原地区発掘調査概報・整備概要(1)』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・芳沢 要編 1980『特別史跡 大野城跡Ⅳ 主城原地区・北石垣発掘調査概報・整備概要(2)』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・高橋 章編 1982『特別史跡 大野城跡Ⅴ 主城原地区(第4次)・村上地区(第1次)発掘調査概況』 福岡県教育委員会

横田賢次郎・森田 勉・横田義章・倉住靖彦・石丸 洋編 1983『特別史跡 大野城跡Ⅵ 村上地区(第2次)・坂本口土塁発掘調査概報』 福岡県教育委員会

横田賢次郎編 1991『特別史跡 大野城跡Ⅶ 太宰府口城門跡発掘調査概報』 福岡県教育委員会

田上 稔編 2006『特別史跡大野城跡整備事業 太宰府口城門・尾花地区・百間石垣整備事業報告』福岡県文化財調査報告書第210集 福岡県教育委員会

小澤佳憲 2010『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ 平成15年7月豪雨災害復旧事業報告』福岡県文化財調査報告書第225集－下巻－ 福岡県教育委員会

(基肄城)

田平徳栄・亀田修一編 1977『特別史跡 基肄城跡 林道建設計画に伴う確認発掘調査報告書』基山町文化財調査報告書第2集 基山町教育委員会

(金田城)

古門雅高・本田秀樹・田中淳也編 2000『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』美津島町文化財調査報告書第9集 長崎県美津島町教育委員会

古門雅高・田中淳也編 2003『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』美津島町文化財調査報告書第10集 長崎県美津島町教育委員会

(鞠智城)

西住欣一郎・矢野裕介・木村龍生編 2012『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第8～32次調査報告－』熊本県文化財調査報告第276集 熊本県教育委員会

(屋嶋城)

山元敏裕編 2003『史跡天然記念物屋島 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ』高松市埋蔵文化財調査報告第62集 高松市教育委員会

山元敏裕編 2008『屋嶋城跡Ⅱ 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第113集 高松市教育委員会

(鬼ノ城)

村上幸雄・松尾洋平編 2005『古代山城 鬼ノ城 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告18 総社市教育委員会

松尾洋平・谷山雅彦編 2006『古代山城 鬼ノ城2 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 東門、第1

水門貯水池ほか』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 19　総社市教育委員会
金田善敬・岡本泰典編 2013『史跡　鬼城山２　「甦る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」城内確認調査』』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 236　岡山県教育委員会
（大廻小廻山城）
出宮徳尚・乗岡　実編 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会
（讃岐城山城）
渡邊　誠 2013「讃岐に築かれた二つの古代山城－「地方」の成立という視点から－」『シンポジウム讃岐国の幕開け－讃岐国府跡の発掘調査成果とその時代－』香川県埋蔵文化財センター・坂出市教育委員会
（永納山城）
渡辺芳貴・半沢直也編 2005『永納山城跡－平成 14 年度～ 16 年度調査報告書－』西条市埋蔵文化財調査報告書　西条市教育委員会
渡邊芳貴編 2012『史跡　永納山城跡Ⅱ－内部施設等確認調査報告書－（平成 21 ～ 23 年度調査）』西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第３集　西条市教育委員会
（御所ヶ谷城）
小川秀樹編 2006『史跡御所ヶ谷神籠石－福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城跡の第１次～第 11 次調査』行橋市文化財調査報告書第 33 集　行橋市教育委員会
山口裕平編 2014『史跡御所ヶ谷神籠石Ⅱ－福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城跡の第 12 次～第 16 次調査』行橋市文化財調査報告書第 53 集　行橋市教育委員会
（唐原城）
末永浩一編 2003『唐原神籠石Ⅰ　福岡県築上郡大平村大字下唐原・土佐井所在山城の調査報告』大平村文化財調査報告書第 13 集　大平村教育委員会
末永浩一編 2005『唐原神籠石Ⅱ　福岡県築上郡大平村大字下唐原・土佐井所在山城の調査報告』大平村文化財調査報告書第 16 集　大平村教育委員会
（鹿毛馬城）
井上裕弘編 1984『鹿毛馬神籠石　福岡県嘉穂郡嶺田町所在鹿毛馬神籠石の調査』嶺田町文化財調査報告書第１集　嶺田町教育委員会
（阿志岐城）
草場啓一編 2008『阿志岐城跡　阿志岐城跡確認調査報告書（旧称 宮地岳古代山城跡）』筑紫野市文化財調査報告書 第 92 集　筑紫野市教育委員会

【図出典】

図１～４：西住・矢野・木村編 2012　　図５：横田編 1991　　図６：田平・亀田編 1977
図７：古門・本田・田中編 2000、古門・田中編 2003　　図８：山元編 2003、山元編 2008
図９：金田・岡本編 2013　　図 10：出宮・乗岡編 1989　　図 11：渡邊 2013
図 12：渡邊編 2012　　図 13：小川編 2006、山口編 2014
図 14：末永編 2003、末永編 2005　　図 15：井上編 1984　　図 16：草場編 2008
※上記の文献から必要な土器実測図を転載している。

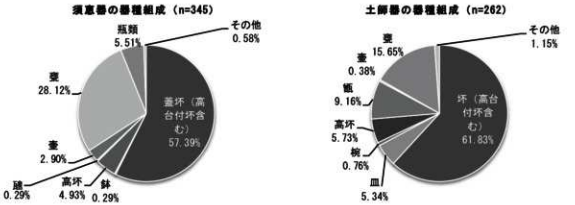
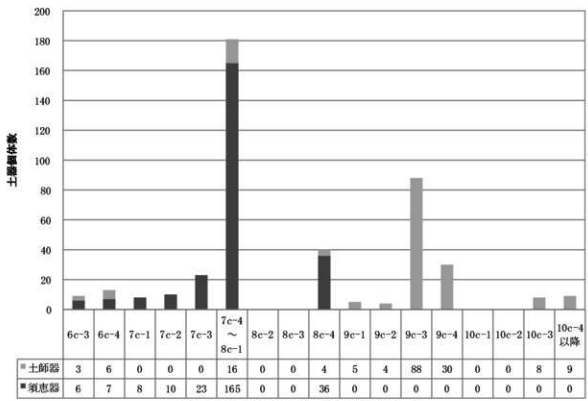


図１　鞠智城跡出土土器の器種組成



	6c−3	6c−4	7c−1	7c−2	7c−3	7c−4～8c−1	8c−2	8c−3	8c−4	9c−1	9c−2	9c−3	9c−4	10c−1	10c−2	10c−3	10c−4以降
■土師器	3	6	0	0	0	16	0	0	4	5	4	88	30	0	0	8	9
■須恵器	6	7	8	10	23	165	0	0	36	0	0	0	0	0	0	0	0

図３　鞠智城跡出土土器の時期別数量比較図

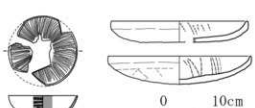


図４　鞠智城跡出土の畿内系土師器

図２　鞠智城跡長者原地区出土土器編年図

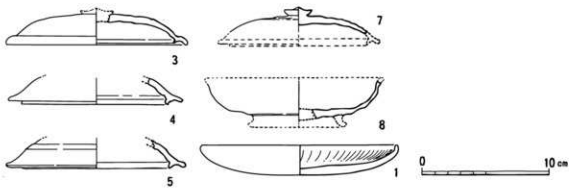


図５　大野城跡太宰府口城門出土土器

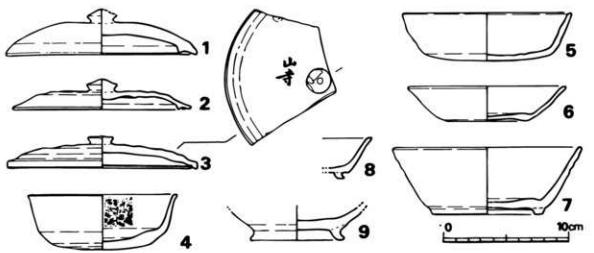


図６　基肄城跡出土土器

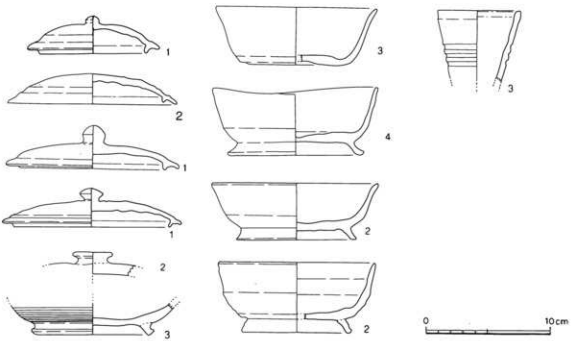


図７　金田城跡出土土器

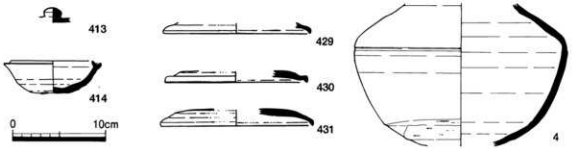


図８　屋嶋城跡出土土器

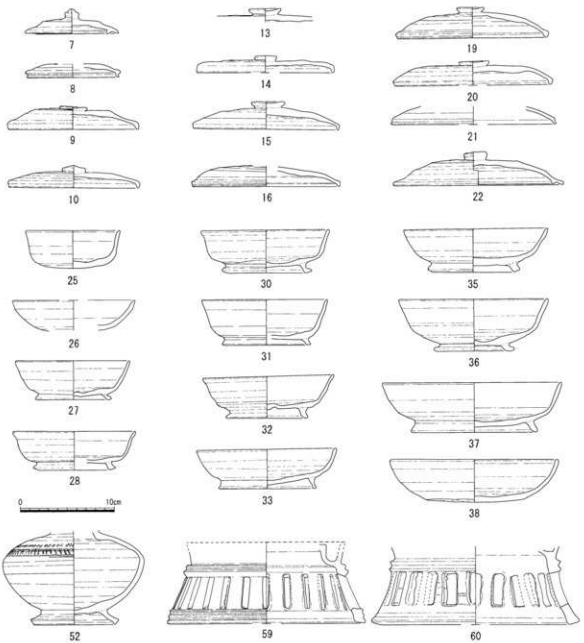


図９　鬼ノ城跡出土土器

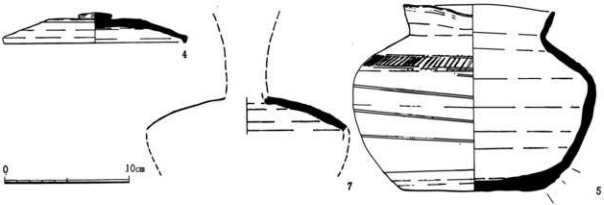


図 10　大廻小廻山城跡出土土器

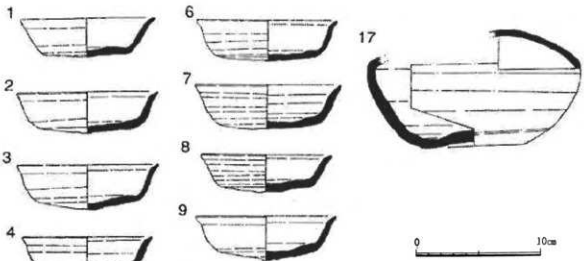


図 11　諸岐城山城跡出土土器

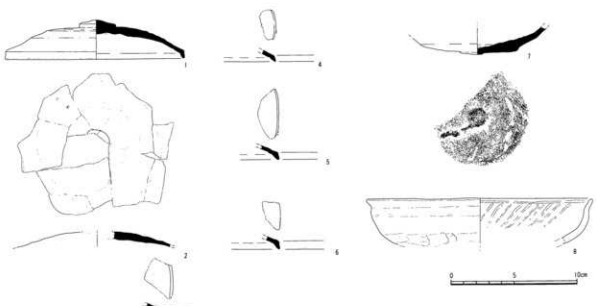


図 12　永納山城跡出土土器

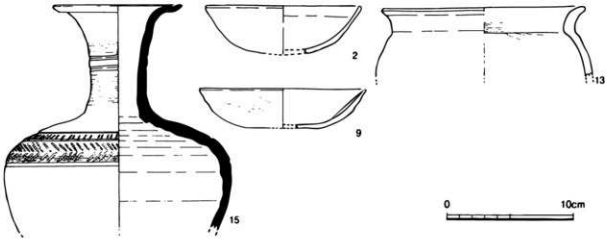


図 13　御所ヶ谷城跡出土土器

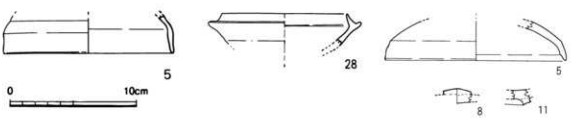


図 14　唐原城跡出土土器

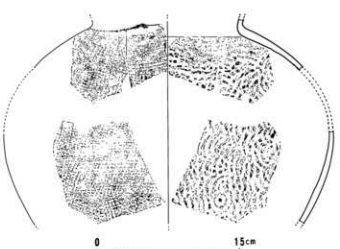


図 15　鹿毛馬城跡出土土器

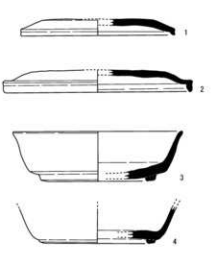


図 16　阿志岐城跡出土土器

表１　古代山城出土土器数比較表（１）

城名	地点	種類	器種	時期別土器数										
				7C 1/4	7C 2/4	7C 3/4	7C 4/4 ～ 8c 1/4	8C 2/4	8C 3/4	8C 4/4	9C 1/4	9C 2/4	9C 3/4	9C 4/4 以降
大野城跡	ハツ波地区	土師器	蓋坏										2	10
			椀											33
			壺										1	
	猫坂地区	須恵器	蓋坏				2							
		土師器	坏						1	1	1			
	主城原地区	須恵器	蓋坏				4							
			皿				1							
		土師器	坏				1						1	
	村上地区	須恵器	蓋坏				1							
			皿				1							
		土師器	皿											1
	太宰府口城門	須恵器	蓋坏				7							
		土師器	皿				1							
			坏							1			7	
	鉢返り地区	須恵器	蓋坏			1								
	大石垣上方内周土塁地区	須恵器	蓋坏			2								
	小石垣地区	須恵器	蓋坏			2								
		土師器	坏										1	
	その他地区	須恵器	蓋坏				4		1					
		土師器	坏									2	7	
	須恵器合計					5	20	0	1	0	0	0	0	0
	土師器合計					0	2	0	1	2	1	2	19	44
	合　計			0	0	5	22	0	2	2	1	2	19	44
基肄城跡	須恵器		蓋坏			10	20			32				
	土師器		坏				2			5				
			皿							8				
	合　計			0	0	10	22	0	0	45	0	0	0	0
金田城跡	須恵器		蓋坏			6	6							
			高坏			1								
			瓶			2	1							
	合　計			0	0	9	7	0	0	0	0	0	0	0
屋嶋城跡	須恵器		蓋坏			2	7							
			壺			1								
			瓶				1							
	合　計			0	0	3	8	0	0	0	0	0	0	0
鞠智城跡	須恵器			8	10	23	165			36				
	土師器						16			4	5	4	88	47
	合　計			8	10	23	181	0	0	40	5	4	88	47

表２　古代山城出土土器数比較表（２）

城名	地点	種類	器種	時期別土器数										
				7C 1/4	7C 2/4	7C 3/4	7C 4/4 ～ 8c 1/4	8C 2/4	8C 3/4	8C 4/4	9C 1/4	9C 2/4	9C 3/4	9C 4/4 以降
鬼ノ城跡	須恵器		蓋坏			7	104	1		2				
			高坏				15							
			皿				1							
			壺				20							1
			瓶				4							
			甕			1	8							
			硯				3							
	土師器		坏				2							40
			椀				3							23
			皿											13
			甕				7							5
			甑				5							
	合　計			0	0	8	172	1	0	2	0	0	0	82
大廻小廻山城跡	須恵器		蓋坏				1							
			壺				3							
	土師器		坏										11	
			皿										2	
	合　計			0	0	0	4	0	0	0	0	0	13	0
讃岐城跡	須恵器		蓋坏				11							
			平瓶				1							
	合　計			0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0
永納山城跡	須恵器		蓋坏		1	1	6							
	土師器		坏				2							
	合　計			0	1	1	8	0	0	0	0	0	0	0
御所ヶ谷城跡	須恵器		蓋坏				1							
			壺			1								
	土師器		坏				2				1			
			甕			1				1				
	合　計			0	0	2	3	0	0	1	1	0	0	0
唐原城跡	須恵器		蓋坏	2	1		1							
	合　計			2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
鹿毛馬城跡	須恵器		甕	1										
	合　計			1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
阿志岐城跡	須恵器		蓋坏				4							
	合　計			0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0

古代山城に関する研究会

築城技術と遺物から見た古代山城

発表資料集
平成 28 年 2 月 13 日発行

発行　熊本県教育委員会
〒862-8609
熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

編集　歴史公園鞠智城 温故創生館
〒861-0425
熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1

この電子書籍は、築城技術と遺物から見た古代山城 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：築城技術と遺物から見た古代山城
発表資料集
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2002 年 8 月 18 日